

紀要48号

研 究 報 告 書

平成23年3月

尼崎市立教育総合センター

は じ め に

少子高齢化や高度情報化の進展、共同性の低落など社会が急激に変化している中で、学力向上、特別支援教育の充実、保護者との関係づくり、いじめや不登校など子どもや学校を巡る問題は多様化、複雑化しています。

最近、「教師の学び」や「教師の学び合い」という言葉に出会うことが多くなりました。「学び続ける教師」や「学び続ける教師のみ教える資格がある」という言葉も耳にします。先に述べた社会の急激な変化や問題への対応、教員の急速な若年化の進行、求められる教師像の変化などが背景にあるのではないのでしょうか。

言うまでもなく、日々の教育活動において、教師には、教えようとする内容を子どもの実態をふまえて子どもが理解できるよう、目標を明確にした授業として構成することが求められます。それには、教科内容に関する専門性だけでなく、子ども理解を深めるとともに集団を指導する力も必要です。とりわけ、現代のように、子どもや学校を巡る問題が多様化、複雑化する時代にあっては、日々の教育活動を通して自ら課題を見出し、新たな方策を探り体系化することで理論と実践が統合され、資質・指導力が高められていくものだと考えます。

さて、今年度、当センターでは、国語科教育、社会科教育、算数・数学教育、理科教育、外国語活動、英語教育、小学校情報教育、教育相談の8研究部会において、専任講師の先生方に指導・助言いただき、実践研究に取り組んでまいりました。この度、平成22年度研究報告書としてまとめました。新学習指導要領に対応した授業研究や、9年間を見通した教育という観点から小中の連携や接続をテーマに取り上げたもの、学級集団におけるよりよい人間関係づくりを目指したものなど、現在の学校における課題を取り上げた内容となっています。学校・園をはじめ多くの方々に御高覧いただき、今後の各学校・園での取り組みの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本年度の研究を進めるにあたり、ご多忙にもかかわらず、指導・助言いただいた専任講師の先生方に深く感謝申し上げます。また、校長先生方はじめ、熱心に研究に取り組んでいただいた研究員の先生方、ご協力くださったすべての皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

尼崎市立教育総合センター
所長 西 本 由 美

目 次

1	算数・数学科教育	算数・数学の基礎学力向上をめざして……………1 —— アクション・リサーチを活用した授業改善手法 ——
2	外国語活動	外国語活動におけるコミュニケーションを図る 楽しさを味わう授業の研究 ……………17 —— 英語ノートを活用したプロジェクト型学習を通して ——
3	小学校情報教育	個別ドリルシステムの効果的な活用について ……………37
4	英語教育	小中の効果的な連携を図る ……………55 —— 小学校の外国語活動を土台にした中学校の英語科教育の 指導の方法 ——
5	教育相談	個や集団の質を高める要因に関する研究 ……………73
6	国語科教育	確かな言葉の力を育てる指導の研究 ……………97 —— 理解・評価しながら読む力の育成をめざして ——
7	理科教育	理科の基礎学力向上をめざして……………127 —— 小中連携をふまえた効果的な学習展開を支える関連図の作成 ——
8	社会科教育研究	デジタルコンテンツを活用した効果的な指導方法の研究 ……141 —— デジタルコンテンツの開発と評価 ——

算数・数学の基礎学力向上をめざして

－ アクション・リサーチを活用した授業改善手法 －

指導主事	魚 住 誠
研 究 員	藤 井 恵 子 (長 洲 小)
〃	鎌 田 啓 志 (浜 田 小)
〃	仁 科 良 久 (園 田 北 小)
〃	真 殿 康 正 (南武庫之荘中)

【内容の要約】

アクション・リサーチは、教員が日常の授業実践の中で課題を認識し、それに対処するために、自分の指導法について客観的に分析して授業改善に取り組む手法である。

本研究では、アクション・リサーチの実践を通して児童生徒がどのように変容したのかを検証することにより、授業改善手法としての効果を探るものである。

キーワード：授業改善 アクション・リサーチ 理論と実践

1	はじめに	1
2	研究の概要	1
3	実践	4
	(1) 実践事例 その1 (小学校1年)	4
	(2) 実践事例 その2 (小学校1年)	6
	(3) 実践事例 その3 (小学校4年)	8
	(4) 実践事例 その4 (中学校2年)	10
4	アクション・リサーチ (チャート)	12
5	研究のまとめ	16
6	おわりに	16

1 はじめに

子どもたちは分かる授業を切望している。それは子どもたちの可能性を引き出すことや夢の実現につながることである。学校においては定期的に授業研究を行い、教員の授業力向上や授業改善に向けた取組が活発に行われている。

一般的に授業研究は、授業公開後に教員同士で研究協議を行い、大学の研究者や教育委員会の指導主事から講評を得て、次への示唆を得るという研究スタイルで行われている場合が多い。しかし、教員個々の授業スタイル、学級の状態、学校の状況、学校を取り巻く環境など、個別の様々な要因が存在することから、万人に通ずる一般化された授業改善策を見出すことは難しい。

そのようなことから、授業改善におけるひとつの方法として、アクション・リサーチという手法を用い、授業改善に向けた実践を試みた。

2 研究の概要

アクション・リサーチは、1940年代に社会心理学者のレヴィン(Lewin, K.)によって考察された研究方法である。経営工学や社会心理学の分野で研究が進められてきたが、教育学においても学校の組織運営や授業研究、学習システムの開発などに関して研究が行われてきており、日本における教育研究においても注目されている。

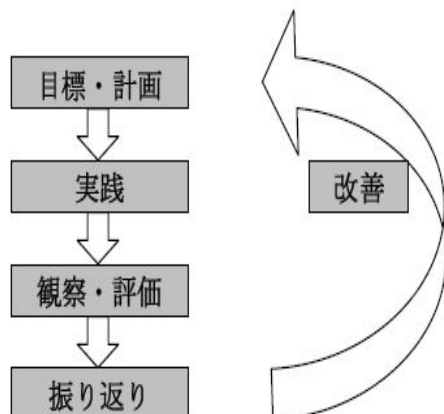
本論では授業者である研究員により行われたアクション・リサーチの実践過程を提示し、授業改善手法としての効果を探るものである。

(1) アクション・リサーチとは何か

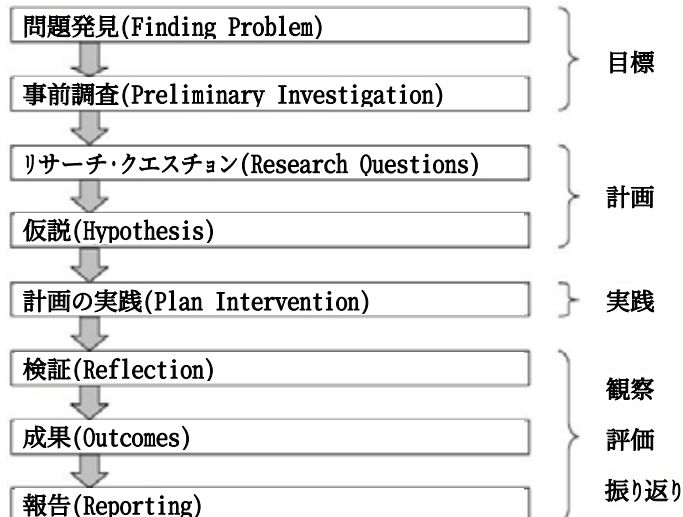
アクション・リサーチを一言で言う、「教員が自己成長をめざして行う自分サイズの調査研究」と言える。つまり「教員が自己成長のために自ら行動(action)を計画して実施し、その行動の結果を観察して、その結果に基づいて内省(reflection)するリサーチ(research)」ということである。自分の教え方の向上をめざして内省プロセスに従事するのは、自己成長を望む教員なら誰でも通常行っているが、アクション・リサーチはそれに枠組みを与え、よりシステマティックに変化させる機能がある。

授業改善のプロセス(図1)とアクション・リサーチの過程(図2)とを比較すると次のようになる。

<授業改善のプロセス> (図1)



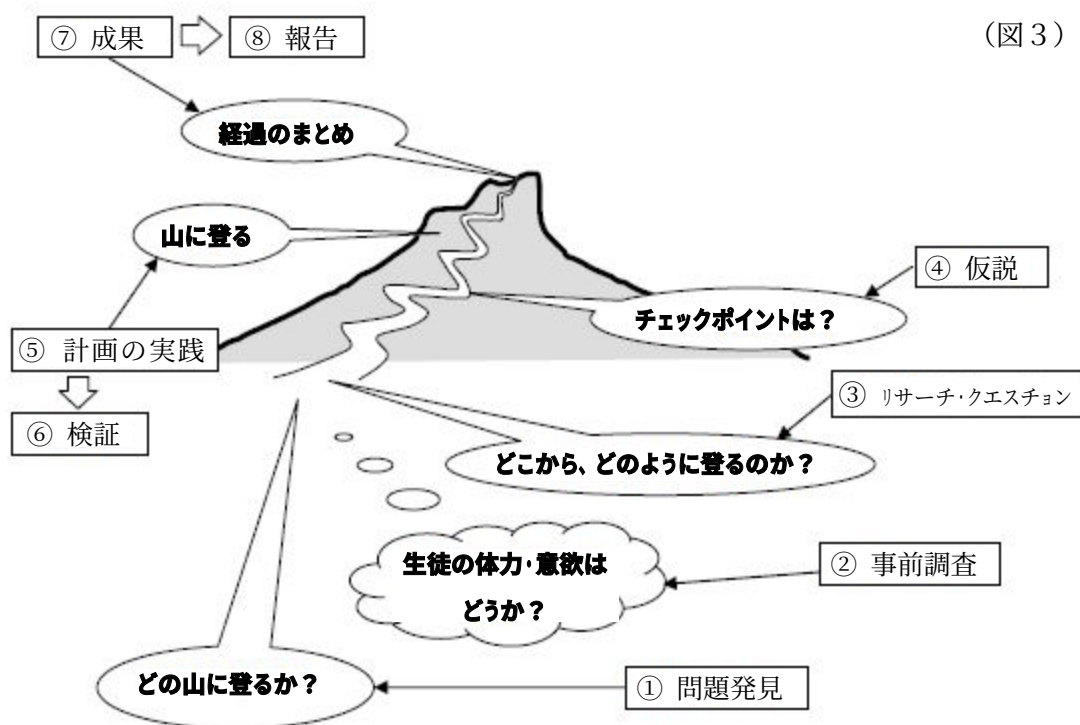
<一般的なアクション・リサーチの手順> (図2)



(2) アクション・リサーチの進め方

アクション・リサーチの進め方について、分かりやすくするために子どもたちを連れて登山をする場合に例えて説明する。(図3)

- ① 登山では、どの山に登るか、またどこまで登るのかを決めなければならない。これが第一段階の「問題発見」に相当する。
- ② 自分たちが今どの位置にいるのか、また子どもたちの体力や意欲のチェックも必要である。自分たちの置かれている実態を調べなければならない。これが「事前調査」に相当する。
- ③ 現状を踏まえた上で、目的地へと子どもたちを連れて登るには、どのルートが良いのかを決めなければならない。山の様子を調べ、最も安全に登れるルートを探る。これが「リサーチ・クエスチョン」に相当する。
- ④ リサーチ・クエスチョンに沿って、具体的なルートを考え、チェックポイントあるいはベースキャンプを設営する必要がある。これが「仮説」の設定に相当する。
- ⑤ 実際に山に登り始めたら、子どもたちの様子を観察し、足どりを記録していく。これが「計画の実践」に相当する。
- ⑥ 子どもたちの進みぐあいを仮説ごとに調査する。これが「検証」である。
- ⑦ 目的地に到着するか、あるいは途中で登山を中止したときの総括が「成果」に相当する。
- ⑧ 登山の記録をまとめたレポートが「報告」になる。



アクション・リサーチは自分の教授活動の中での問題点や関心事をリサーチ・クエスチョン（以下RQ）として、そのRQの何が気になっているのかをできるだけ具体的に明らかにするところから始まる。RQは教員が教えること・学習者が学ぶことに関するものであれば何でも構わない。例えば、「指名の仕方」「発音指導の仕方」「クラスルーム運営」「成績不良の学生への対処」「ほめ方」「誤りの直し方」「教室活動の工夫」「質問の内容」「学習者の動機づけ」「自律学習の援助法」など、教員が関心・興味を持ったものなら何でもRQとなる（図4）。

RQがはっきりしたら、そのRQについてクラスの中で実際に何が起きているのかを調べると共に、どのような主張が既になされているのかについての情報をできるだけ集める。このようなクラス内の調査と先行研究の調査によって得た知識を元に、問題の改善策や関心事の実施方法を考え、それを実行に移す計画を細かく立てて、実施する。実施した行動の成果（図5）を観察・分析し、行動の成果が望ましいものであったかどうかを評価し、望ましいものでなかった場合はその原因を考察する。この結果、更なる改善策を考えてそれにトライすることも可能である。リサーチが一段落ついたら、そのプロセスと結果を他の教員と共有する。

（図4）

リサーチ・クエスチョンの設定手順

- 1 複数回の授業を観察し、気になる点をリストする。
- 2 リスト項目を次の点からチェックする。
 - ①子どもの力を借りれば、教員が解決できる問題か
 - ②大部分の子どもが興味を持ち、解決が彼らの利益になる問題か
 - ③現在の学習環境を大きく変えずに、期間内に結果が出る問題か
 - ④解決のための具体的手段や方法が思いつく問題か
 - ⑤教員自身の関心が高く、解決に意欲的な問題か
 - ⑥調査結果が同僚にも利益をもたらす問題か
 - ⑦調査結果の一部は数値で示すことができる問題か
- 3 チェック事項がNOの問題は排除するか、YESとなるよう再定義する。
- 4 問題を次のような領域に分類する。
 - ①教員の指導技術に関わる問題
（教員の努力で解決できる問題）
 - ②与える練習やグループ活動等を工夫することで成果が期待できる問題
 - ③子どもの基礎的な知識・技能の不足から生じる問題
 - ④子どもの学習意欲や人間関係、クラスの雰囲気から生まれている問題

一般には①の問題ほど効果が早く現れ、④の問題ほど時間が必要である。
つまり、①の問題ほど取りかかりやすいといえる
- 5 どの問題から取り組むか絞り込む。
- 6 リサーチ・クエスチョンを設定する。

（図5）

リサーチでの振り返り項目例（子ども用）

- (1) 科目の目標を理解して学習に取り組んでいますか
 - (2) 授業の目標を理解して学習に取り組んでいますか
 - (3) 授業の流れは分かりやすいですか
 - (4) 授業の流れはスムーズに進んでいると思いますか
 - (5) 先生の説明や解説は分かりやすいですか
 - (6) 練習の内容、時間は十分だと思いますか
 - (7) 発表する場面や時間は設定されていますか
 - (8) 授業の進め方の速度はあなたにとって適切ですか
 - (9) 先生の指示は分かりやすく、指示通りに進めることができますか
 - (10) 授業中分からないことがあったとき、先生は気づいてくれていますか
 - (11) 教科書やその他のワークシートや教材は分かりやすいものですか
 - (12) 作業や活動の目標を理解していますか
 - (13) 課題解決や作業・活動を始める前に先生がモデルを示してくれていますか
 - (14) 先生からの質問が理解できていますか
 - (15) グループワークに積極的に取り組んでいますか
 - (16) アクティビティの内容は、時にはやりがいのあるものですか
 - (17) 疑問や質問があるとき、先生や友だちに聞くことができますか
 - (18) 授業中、プレッシャーや不安を感じることはなく取り組んでいますか
- ※ リサーチが進み、振り返るときに利用する。
毎授業後に振り返る場合は項目を限定する。

次の節では、研究部員によるアクション・リサーチの実践例を示す。このアクション・リサーチが模範的なものとはいえないかもしれないが、実践例を見ることで、よりアクション・リサーチに対する理解が深まるであろうし、算数・数学の授業改善にとって有益なことが多いと考える。

3 実践

(1) 実践事例 その1 (小学校1年)

1. リサーチ・クエスチョンの設定

本学級の児童は、学習には意欲的に取り組み、よく発表もする。言われたことには素直に取り組み、大きな声で音読をすることもできる。

算数の学習に対してアンケートを行ったところ、「算数の学習が好き」と答えた児童は学級全体の94%、「算数の学習が嫌い」と答えた児童は6%であった。しかし、皆の前で発表することが苦手な児童が学級全体の43%であり、計算の答えなど、単純な問いには積極的に発表するが、理由を問うと答えられる児童は非常に少ない。

このようなことから、次のリサーチ・クエスチョン（RQ）を設定した。

RQ	自分の考えを説明することが苦手な子どもの多いクラスで、自分の考えやその理由を伝える力をつけるには、どのような活動・指導法が効果的か。
----	--

2. 仮説と実践

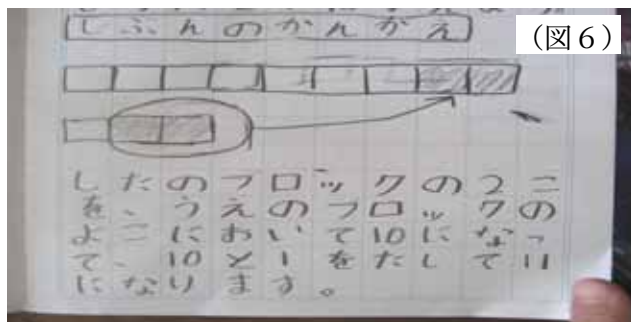
「話すことへの抵抗をなくすこと」「考えたことを整理すること」「話し方のスキルを身につけること」の3つの観点から仮説を立て、それぞれの仮説に対して以下のことに取り組んだ。

仮説1	2人組で話し合う活動を多く取り入れれば、話すことに抵抗がなくなるだろう。
-----	--------------------------------------

学習の流れとして、課題に対して自力解決の時間を5分程度とった後、隣同士で自分の考えを話す時間を取り入れた。自力解決の時間で答えまで到達しなかった児童は、自分がどこまで考えたかを話した。

仮説2	ノートに自分の考えを絵や図などを使って書けば、思考が整理されるだろう。
-----	-------------------------------------

半具体物である算数ブロックを使って操作した後、ワークシートを用意し、算数ブロックで操作したことを絵・図や文章で書いて表した（図6）。どの方法を使うかは児童が選び、自分が表現しやすい方法で書かせた。



(図6)

仮説3	「話し方」のスキルを身につければ、語彙が増え、考えを伝えることができるだろう。
-----	---

教室に「はなしかたのたからばこ」と題し、「同じで」や「似ていて」、「～だから～」などの、児童から引き出された話合いを構成する上で大切になる言葉を掲示（図7）した。また、話し方のスキルも掲示し（図8）、常に意識させるようにした。

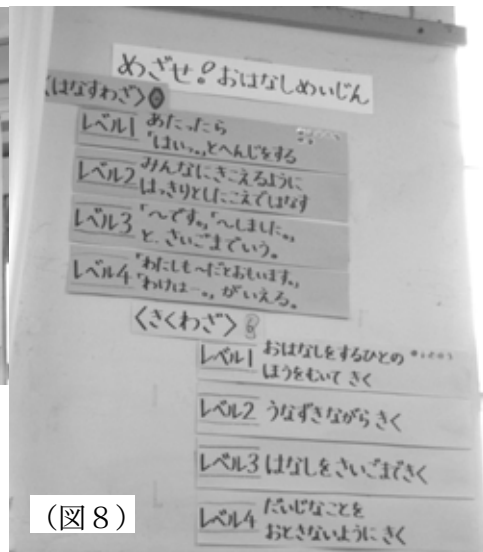
3. 検証と考察

① 検証

検証 1	「自分の考えを説明することが好き」という児童がアクション・リサーチ実施前は57%だったが、実施後は68%となり、自らの考えを話すことに抵抗がないという児童が増えた。
検証 2	図を書くことで、答えに対する理由が漠然としていた児童も、どのようにして自分が答えを導きだしたかはっきりと分かり、理解へとつながった。そして他の問題でも学んだことを生かして取り組むことができるようになった。
検証 3	掲示物の話し方を真似て、自分の発表の中に取り入れる児童が増えた。



(図 7)



(図 8)

② 考察

成果

- ・隣の児童に話すことにより、リサーチ・クエストアクション実施前と比べて自分の考えを発表する児童が増え、自信をもって話すことができるようになった。
- ・答えだけでなく自分の考えを話す児童が増え、子ども同士が教え合う姿も多く見られるようになった。
- ・始めは、自分の考えを図だけでしか表せない児童が多かったが、繰り返し取り組むことで、図だけでなく、文章で書くことのできる児童が増えた。また、文章の内容も算数ブロックを動かした過程を書くものから、筋道立てた考えを書けるようになってきた。
- ・話し方を真似ることにより、発表のスキルが身についた児童が増えた。また、新しい話し方を考えて話す児童も出てきた。

課題

- ・自分の考えを伝えることができる児童は増えてきたが、考えを聞いて共感したり、反論したり、他人の意見に対して自分の考えを持つことまでには至らなかった。絵・図や具体物の操作をもとに、友だちの考えを自分でイメージできるような発問や活動を設定していきたい。
- ・書くことの苦手な児童は、うまく自分の考えを表現することができなかった。自分の考えを表現させる手立てが必要である。
- ・自分の考えを書く時間がかかってしまうことがあり、時間内に終われないときがあった。活動の時間配分の改善が必要である。

(2) 実践事例 その2 (小学校1年)

1. リサーチ・クエスチョンの設定

本学級の児童は、算数の学習も含めて、全体的に学習への意欲が高く、積極的に学習に取り組む姿が見られる。しかし、計算問題は積極的に学習に取り組むが、文章問題になると様子が異なる。

小テストの結果では、式は正答であっても、図は誤答である傾向が見られる。この結果は、文章を理解するよりも、数字をただ並べて解答していることが推察される。また、算数に関するアンケートでは、約2割の児童が文章問題を「きらい」と回答している。

このようなことから、2つのリサーチ・クエスチョン(RQ)を設定した。

RQ1	文章問題への苦手意識をなくし、意欲を高めるにはどうすればよいか。
RQ2	文章の内容をイメージすることで意味を理解し、必要な情報を適切に選択できるようにするにはどうすればよいか。

2. 仮説と実践

文章問題を解くためには、既習の計算方法の習熟だけでなく、文章に書かれている内容を理解する力が必要である。このことから、文章の内容を理解し、正確に立式できるようにするため、次の3つの仮説を想定し以下のことに取り組んだ。

仮説1	絵から情報を抜き取ったり、絵の内容に合った文章を選ぶ活動を行うことで絵と言葉を結ぶ力がつくだろう。
-----	---

- ・異なった2枚の絵の間違い探し (図9)
- ・4つの絵と4つの文章を提示し、絵に合った文章を選ぶ活動
- ・絵を見て、その絵にあった文章を作る活動 (図10)

仮説2	文章を読んで、それに合う絵を選ぶ活動により、問題を解くための大切な言葉に着目する力がつくだろう。
-----	--

- ・文章に合う絵を3つの絵から選ぶ活動 (図11)

仮説3	文章からイメージした内容を図に表わすことで、正確に立式できるだろう。
-----	------------------------------------

- ・文章の意味に合った図を話し合いながら考えていく活動

3. 検証と考察

① 検証

検証1	Q. 文章問題は好きですか? (9月→11月) A. はい 78%→85%
検証2	文章に出てくる人や物の数だけでなく、それらがどのように変化するのか、言葉に着目して理解するようになった。
検証3	図の正答率 (9月→11月) 足し算 75%→87% 引き算 34%→79% 情報過多 47%→84%

② 考察

成果

- ・間違い探しを楽しんで活動していた。絵を詳しく見ることへの意欲を高めることができ、どのような点が違っているのか言葉で表現できていた。また、全体のイメージや様子や物の数量などの違いに注目するようになった。

文章問題を解くときに必要な文章を読んで内容を理解する力をつけるために、間違い探しなどの絵を

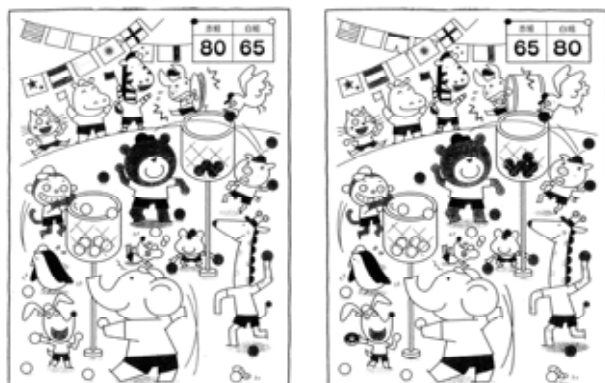
使って内容を理解する活動をステップとして行ったことが、1年生の児童にとって理解しやすく発達段階に合っていたようである。

- ・1枚の絵を提示しその絵の内容に合う文章を3つの中から選択する活動や、1枚の絵を提示しその絵からお話を作る活動を行ったことで、人や物の数量に着目し、それがどのように変化しているのか詳しく見るようになった。
- ・1つの文章を読んで内容に合う絵を3つの中から選ぶ活動を行ったことで、文章に出てくる人や物の数だけでなく、それらがどのように変化するか、言葉に着目して理解するようになった。
- ・文章を絵に表すことから始め、その後、絵で表していたものを図に表すようにしていった。そして、それぞれが考え出した図を発表し合い、正しく表現できている図はどれか、話し合った。この活動により、図を利用して簡潔に内容を表現できるようになってきた。
- ・文章を図に変換して表す活動も楽しみながら取り組み、図に表すことで内容を整理でき、式を立てるのに便利なこと気づかせることができた。

課題

- ・文章問題への意欲が高まり好きになる児童が増えたが、苦手意識を払拭しきれない児童も見られた。
- ・図の指導のとき、テープ図を使う学習につながるように、児童から出た図を統一するよう話し合いで絞っていったが、もっと多様性を認める方がよかったと考える。
- ・文章問題だけを取り上げて授業計画を行うのではなく、単元の計画の中で文章問題の学習をバランスよく取り入れて計画することが重要であると考ええる。

(図9)



(図10)

おはなしを つくってみよう



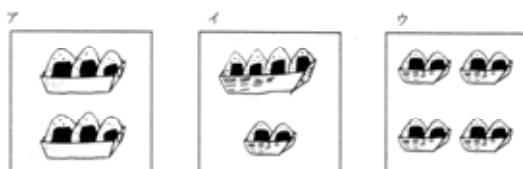
(図11)

おはなしと えを あわせよう

名まえ ()

☆おはなしに あう えを えらびましょう。

①かごに おにぎり が 4こ はいっています。
べつのかごに おにぎり が 2こ はいっています。
おにぎりは あわせて なんこ あるでしょう。



(3) 実践事例 その3 (小学校4年)

1. リサーチ・クエスチョンの設定

本学級の児童は、少人数学習による細やかな学習を続けてきた。そのため各自が発達段階に応じて自分のペースで学習を進めることができる。しかし、競争心や向上心が低く、緊張感に欠ける場面も見られる。その端的な例として、学習の理解度に比べて、テストの正解率が低いことがあげられる。これには、集中力の欠如、正解への欲求の淡泊さ等の原因が考えられる。9月に行った事前調査でも、立式のミスが32%、計算のミスが31.2%と目立った。また、答えを書くときの単位を書き忘れることや、筆算で得た答えを書き写し間違えるなどのケアレスミスも見られた。

これらのことから、次のリサーチ・クエスチョン（RQ）を設定した。

RQ	算数科の学習において、児童の正解への欲求を上げさせ得点率を上げるためには、どのような方策が効果的であるか。
----	---

2. 仮説と実践

「ノート指導」「正解への欲求を高めるための練習」「見直し方法の確立」の3つの観点から仮説を立て、それぞれの仮説に対して以下のようなことに取り組んだ。

仮説1	ノートを重要視し、「立式」「計算」「答え」を丁寧に書く習慣を身につければ、数学的思考力が上がるだろう。
-----	---

算数科の学習時、ノートを重視するため、次のような実践を行った。

- ・ノートで振り返りを行うことにより、丁寧にノートをとる意欲を喚起した。
- ・立式の際、「言葉の式」→「数字への置き換え」という手順を徹底した。
- ・筆算時「見やすく」「丁寧に」「書き残す」という約束を作り、習慣化を図った。

仮説2	100点練習を継続的に実施すれば、初めに問題に取り組むときの集中力が上がるだろう。
-----	---

文章題5問を「式、筆算、答え」全て正解することを練習終了の絶対条件とする練習方法を実践することにした。内容は、学習内容に応じた文章題（数量関係以外の学習時は、既習事項についての問題）を行い、提出時に100点であれば終了、誤答やミスがあったときには採点を行わずに返却という約束にした。これを継続的に実施することにより、初発の集中力を高めることを計画した。

仮説3	見直し方法をマニュアル化すれば実質的、効果的な確認ができるようになり、ミスが減るだろう
-----	---

学習や試験の際、正解していることを前提とした、注意力を欠いた見直しを行う児童が大半を占めていた。そこで、「設問と解答の整合性」「言葉の式を中心とした立式の確認」「検算」といった見直しのマニュアル化を図り、徹底させた。

3. 検証と考察

① 検証

検証 1	ノートを作成する過程で、「気づき」の記入など思考過程を重要視する児童が増えた。また、立式過程や、筆算を丁寧に書こうと意識する児童が増えた。
検証 2	数学的思考項目での平均点が1学期と比べて3.6ポイントアップした。技能表現項目では、14.2ポイントの向上が見られた。(表1)
検証 3	ミスは減少しているが、解答時に時間をかけて丁寧に進める児童が増えていることから、見直しによる効果かどうかは不明である。

② 考察

成果

- ・仮説1により試験をはじめとした算数におけるあらゆるフィードバック作業をノートで行うようにした結果、徐々に児童の中にノート(図12)を丁寧に作成する習慣が身についてきた。

また、板書を書き写す練習問題を解くといった作業以外に、気づきを記入したり、別の解法を考察したりといった活動を行う児童も現れた。

一方で、図形領域の学習においても、作図線などの細部に至るまで注意を払ってノートを作成する児童がみられるなどの、

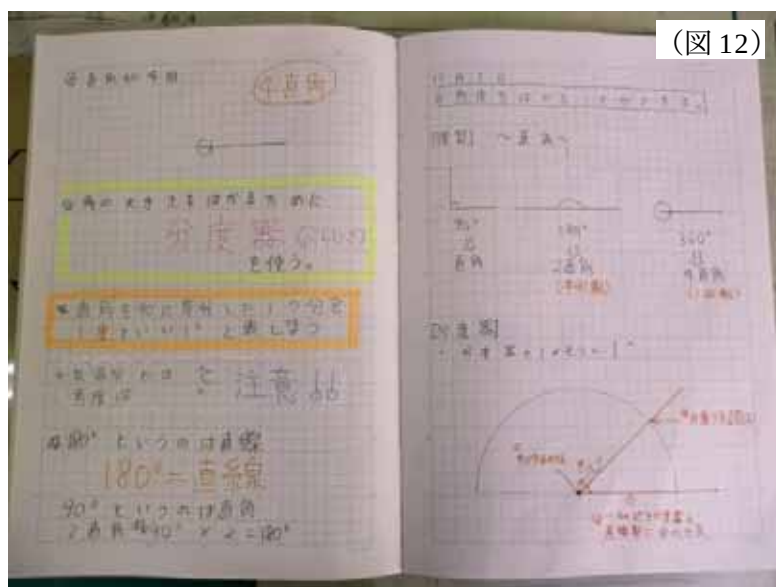
他の領域への波及効果もみられた。

- ・仮説2が最も顕著な効果(表1)が現れた。観点別評価項目、まとめのテスト共に1学期と比較して大幅な向上が見られ、「正解したい」「ケアレスミスは悔しい」という意識が育ってきている。

- ・仮説3に関しては、結果としてミスは減少しているが、主要因は仮説2の取組において、解答段階で時間を費やし、丁寧に解答する児童が増えたことと推察される。つまり、解答段階において時間を費やし正答率が上がったことにより、見直しを必要とする児童が減少し、仮説3の取組が効いていると考えにくいからである。

課題

- ・結果や効果の客観的な検証がむずかしい。
- ・美しいノートを作ることに没頭する子が見られた。
- ・解答時に時間をかける児童と、見直しに時間をかける児童の比較を行う必要がある。



(図12)

(表1)

	1学期	2学期
数学的思考	76.8%	80.4%
技能・表現	77.9%	92.1%
計算テスト	86.9%	92.4%

※すべてクラス平均正答率

(4) 実践事例 その4 (中学校2年)

1. リサーチ・クエスチョンの設定

本学級の生徒は、今年度9月の意識調査では、「数学が好き」が19%、「図形が得意」が13%であり、数学に対してマイナスイメージを持つ生徒が少なくない。また、これまでの既習事項が身につけていない場合が多く、積み上げを行う下地が十分形成されているとはいえない状況である。数学における言葉や記号の意味を理解し、積み上げの下地となる学習の基礎・基本の定着を図ることが課題と考える。

このようなことから、次のリサーチ・クエスチョン(RQ)を設定した。

RQ	図形領域において、言葉や記号を理解させ、学習の定着を図るにはどうすればよいか。
----	---

2. 仮説と実践

「以前に学習した内容を意識すること」「図形の理解促進を図ること」「図形学習の定着を図ること」の3つの観点から仮説を立て、それぞれの仮説に対して以下のことに取り組んだ。

仮説1	振り返りや繰り返しに重点を置き、言葉や記号の意味を何度も生徒に想起させることで、既習事項を意識するようになるだろう。
-----	--

中学2年生における図形学習内容は、中学1年生の内容だけでなく、小学校で習ったことをベースとして、その上に新しい内容を積み上げていくことが多い。三角形の内角の和、対頂角、平行線の錯角、同位角等については小学校で学習しており、//や $\angle$ の記号等は中学1年生で学習している。これらの図形や記号がでてくるたびに「いつ習ったか」「どのように習ったか」を確認し、生徒の振り返りや繰り返し想起させることに重点を置いた授業をすすめた。

仮説2	正確な図形を描かせることや作図等の操作活動を多く取り入れることで、図形に対するイメージがわかり理解の促進が図られるだろう。
-----	---

三角形や四角形、平行線等の単元において、フリーハンドではなく定規等を使用して正確な図を描かせるとともに、作図等の操作活動を多く取り入れ、内角・外角の関係や錯角・同位角の位置関係等を自らの操作活動で確認させるようにした。また、三角形の合同に係る論証の単元においても、分度器と定規を使って三角形を書かせ、実際の命題の内容を確認させるようにした。

仮説3	既習事項も含めて継続して問題解決にあたらせることで、学習の定着が図られるだろう。
-----	--

学習内容のスパイラルを意識し、小学校の学習内容も取り入れた小テスト(5問)を毎時間行った。また、宿題についても計画的に行っていることから、授業での小テストと家庭での宿題を軸にして継続した問題解決を行った。

3. 検証と考察

① 検証

検証 1	アンケートに「小学校や中 1 で習ったことを思い出しながら取り組んだ」と回答している生徒が増えていることから、既習事項を意識しながら問題解決に取り組めるようになった。
検証 2	アンケートに「分度器や定規で書くと図形のイメージがわかりやすい」と回答する生徒が増えるとともに、図形の性質等を説明ができる生徒が増えた。
検証 3	9 月と 11 月にテストを行ったところ、結果平均が 47.9 点から 69.3 点に向上した。

② 考察

成果

- ・ 9 月に実施した意識調査を再度 11 月に行ったところ、「数学が好き」と回答した生徒が 8 ポイント、「図形が得意」と回答した生徒が 14 ポイント上昇した。また、中 2 の図形は分かりやすいという生徒が増えるとともに、以前よりも手を上げる生徒が増えてきている。
- ・ 図形に関するテストを 9 月と 11 月に実施した結果を下に示す。(表 2)
これを見ると各項目とも平均正答率が上昇している。しかし、基礎的な問題を主として出題していることから、更なる平均正答率のアップが望まれるところである。

(表 2)

	9 月 [A]	11 月 [B]	B－A
三角形の角度問題	78.8 %	93.3 %	14.5
四角形の角度問題	75.8 %	93.3 %	17.5
∠を使った論証問題	15.2 %	63.3 %	48.1
// を使った論証問題	60.6 %	80.0 %	19.4
対応する点の問題	75.3 %	83.3 %	8.0
対頂角に関する問題	63.6 %	73.3 %	9.7
同位角に関する問題	63.6 %	70.0 %	6.4

※クラスの平均正答率

課題

- ・ 仮説に基づいた実践により一定の成果は認められるが、数学に対するマイナスイメージは払拭できていない。
- ・ 今回の実践においては教師側からの当たり前の指導を意識的に強調して行ったものであり、今後学習形態の工夫や I T 機器の活用などに取り組む必要があると考える。

4 アクション・リサーチ（チャート）

（実践事例 その1）

伝える力をつけるには、どのような活動・指導法が効果的か

対象クラス（学年、組等）： 1年1組 児童数 31名
 科目名 算数 授業時数 4 時間 使用教科書 東京書籍「あたらしいさんすう」
 クラスの様子・特徴
 子どもらしく活発で明るい。言われたことには素直に取り組むが、教師側の声かけがないと行動することが難しい。全体では、大きな声で音読することができる。

【問題発見】

単純な問いかけには積極的に答えるが、思考力を問う問いや、自分がどのように考えたかを説明することに対しては消極的である。

【事前調査】

A 観察と省察（1学期）	B アンケート（9月前半）	C 数量的データ（9月）
（児童） 単純な問いには積極的に答える。答えは分かっているが、理由を問うと答えられる児童は非常に少ない。正確に計算することにも個人差が大きい。	○ 算数が嫌い 6% ＊計算が苦手 20% ＊文章問題が苦手 26% ＊皆の前で自分の考えを説明することが苦手 43% ＊友だちの考えを聞くことが好き 100%	＊たし算・ひき算の計算（10までの数） 20点満点－20人 平均 19点 最高 20点 最低 15点
（教師） 繰り返し計算練習を行っている。児童が自ら考えるような発問にできていない。		

【リサーチ・クエスチョン】

自分の考えを説明することが苦手な子どもの多いクラスで、自分の考えやその理由を伝える力をつけるには、どのような活動・指導法が効果的か。

【仮説・計画の実践・検証】

仮説1 2人組で話し合う活動を多く取り入れれば、話すことに抵抗がなくなるだろう。	実践1 クラス全体で、自分の考えを発表する前に、隣同士で話し合う活動を行った。	検証1 「皆の前で自分の考えを説明することが好き」と回答する児童が57%から68%に増えた。
仮説2 ノートに自分の考えを絵や図などを使って書けば、思考が整理されるだろう。	実践2 ワークシートを用意し、自分の考えを図や文章で書く活動を行った。	検証2 図を書くことで、考え方が理解でき、テストでも高得点を取る児童が増えた。
仮説3 「話し方」のスキルを身につければ、語彙が増え、考えを伝えることができるだろう。	実践3 話し方の例を教室に掲示し、常に子どもの視界に入るようにした。	検証3 話し方の例を見て話す児童が増え、発表の内容に広がりが出てきた。

【成果】

児童の伝える力を身につけるには、自分の考えを整理することが重要である。自分の考えを図や文で表すには、方法を分かりやすく指導し、継続して取り組むことが効果的であると分かった。また、2人組で話す活動を取り入れることで、どの児童もスキルを身につけていくので、継続して取り組んでいくことが大切である。

【課題と今後の方向性】

自分の考えを伝えることができる児童は増えてきたが、考えを聞いて共感したり、反論したり、他人の意見に対して自分の考えを持つことまでには至らなかった。今後、絵・図や具体物の操作をもとに、友だちの考えを自分でイメージできるような発問や活動を設定していきたい。

文章問題の苦手意識をなくし、正答率を上げるためにはどうすればよいか

対象クラス（学年，組等）： 1年2組 児童数 32 名
 科目名 算数 授業時数 4 時間 使用教科書 東京書籍「あたらしいさんすう」
 クラスの様子・特徴
 全体的に学習への意欲は高く，積極的に学習に取り組む姿が見られる。

【問題発見】

文章問題を解くために，とりあえず問題に出てくる数字を並べて計算し答えを求めている。

【事前調査】

A 観察と省察（1学期） （児童） とりあえず問題に出てくる数字を並べて計算している。 （教師） 文章問題を繰り返し出しているが、絵や具体物を伴わずに出題している。	B アンケート（9月前半） ○算数は好きですか？ とても好き・好き……………94% きらい・とてもきらい… 6% ○文章問題は好きですか？ とても好き・好き……………78% きらい・とてもきらい… 22%	C 数量的データ（9月前半） 正答率(%) <table><tr><td></td><td>図</td><td>式</td><td>答え</td></tr><tr><td>足し算</td><td>75%</td><td>88%</td><td>81%</td></tr><tr><td>引き算</td><td>34%</td><td>84%</td><td>78%</td></tr><tr><td>情報過多</td><td>47%</td><td>63%</td><td>56%</td></tr></table> 図は誤答でも式が正答である傾向がみられた。		図	式	答え	足し算	75%	88%	81%	引き算	34%	84%	78%	情報過多	47%	63%	56%
	図	式	答え															
足し算	75%	88%	81%															
引き算	34%	84%	78%															
情報過多	47%	63%	56%															

【リサーチ・クエスチョン】

RQ1	文章問題への苦手意識をなくし，意欲を高めるにはどうすればよいか。
RQ2	文章の内容をイメージすることで意味を理解し，必要な情報を適切に選択できるようにするにはどうすればよいか。

【仮説・計画の実践・検証】

仮説1 絵から情報を抜き取ったり，絵を見てそれにあった文章を選ぶ活動を行うことで，言葉と絵を結ぶ力がつくだろう。	実践1 2枚の絵の間違い探しを行った。3つの文章から，絵と内容が一致するものを選んだり，1枚の絵からお話を作る活動を行った。	検証1 楽しんで取り組んでいた。絵を言葉で表現できるようになってきた。絵の中の人や物の数に注目するようになった。
仮説2 文章を読んで，それに合う絵を選ぶ活動により，問題を解くために大切な言葉に着目する力がつくだろう。	実践2 1つの文章を読んで，内容に合う絵を3つの中から選ぶ活動を行った。	検証2 文章に出てくる人や物の数だけでなく，それらがどのように変化するか，言葉に着目して理解するようになった。
仮説3 文章からイメージした内容を図に表すことで，正確に立式できるだろう。	実践2 文章を絵に表した後，簡易な図に表す活動を行った。その際，考えを出し合い，正しく表現できている図はどれか，話し合った。	検証3 簡潔に内容を表現するようになった。文章の内容を図で表せるようになってきた。

【成果】

A 観察と省察（2学期） （児童） 数だけでなく文章を理解して問題を解くようになった。	B アンケート（11月後半） ○算数は好きですか？ とても好き・好き……………94% きらい・とてもきらい… 6% ○文章問題は好きですか？ とても好き・好き……………85% きらい・とてもきらい…15%	C 数量的データ（11月後半） 正答率(%) <table><tr><td></td><td>図</td><td>式</td><td>答え</td></tr><tr><td>足し算</td><td>87%</td><td>90%</td><td>90%</td></tr><tr><td>引き算</td><td>79%</td><td>79%</td><td>79%</td></tr><tr><td>情報過多</td><td>84%</td><td>87%</td><td>84%</td></tr></table> 9月の頃に比べ、図の正答率が上がった。		図	式	答え	足し算	87%	90%	90%	引き算	79%	79%	79%	情報過多	84%	87%	84%
	図	式	答え															
足し算	87%	90%	90%															
引き算	79%	79%	79%															
情報過多	84%	87%	84%															

【課題と今後の方向性】

文章問題への意欲が高まったり，文章問題が好きになったりする児童が増えたが，依然苦手意識を持ったままの児童がいる。図の指導のとき，テープ図を使う学習につながるように，児童から出た図を統一するように話し合いで絞っていったが，もっと多様性を認めてもよかった。図を統一することでわかりにくくなってしまいう児童がいた。児童の思考に合わせられるように図の指導を工夫していきたい。

得点への欲求を上げさせるためには、どうすればよいか対象クラス(学年、組等): 4年1組 児童数 18 名科目名 算数 授業時数 5 時間 使用教科書 東京書籍「新しい算数 上・下」

クラスの様子・特徴

子どもらしく活発で明るい。言われたことには素直に取り組むが、教師側の声かけがないと行動することが難しい。全体では、大きな声で音読することができる。

【問題発見】

入学当初より、20人前後の少人数で指導を受けてきた。そのため、きめ細かな指導が行き届いており、子どもたちも自らの課題に応じて学習することができている。一方で、競争が少ないため学習面での序列化ができてきつつあり、子どもたちの中に向上心がみられない。

【事前調査】

A 観察と省察(4月～7月) 算数科の各単元開始時に、レディネステストを実施してきた。その結果、平均点を下げている要因は理解力の欠如ではなく、ケアレスミスの多さにあることが分かった。	B 取組と実情(6月～9月) 小テスト実施時にテストが終了しても全問正解するまでは採点を行わないという練習を行ってきた。9月に実施したアンケート調査では、成績を向上させたいと感じている子どもが増加傾向にある。	C 数量的データ(9月) 計算(わり算、小数の加減法) 正答率 86.9% 一学期のまとめ(文章題) 正答率 65.2% 誤答の主な理由 立式の順序(32%) 計算ミス(31.2%)
---	--	---

【リサーチ・クエスチョン】

算数科における得点への欲求を上げさせるためにはどうすればよいか？

到達目標 計算問題の正答率を90%以上にする。

文章題の正解率を80%以上にする。

判定方法 2学期のまとめのテストの成績にて判定する。

【仮説・計画の実践・検証】

仮説1 ノートを重要視し、「立式」「計算」「答え」を丁寧に書く習慣を身につければ、思考力が上がるだろう。	実践1 ・ノートで振り返りを行う。 ・言葉の式を書かせる。 ・筆算を丁寧に書く習慣をつける。	検証1 ノートを作成する過程で、「気づき」の記入など思考過程を重要視する児童が増えてきた。
仮説2 100点練習を継続的に実施すれば、初めて問題に取り組む時の集中力が上がるだろう。	実践2 全問正解を絶対条件とする文章題練習を継続的に実施することにより、思考力、技能力を向上させる。	検証2 観点別評価項目、まとめのテスト共に1学期と比べて大幅な学力向上がみられた。
仮説3 見直し方法をマニュアル化すれば実質的、効果的な確認ができ、ミスが減るだろう。	実践2 「設問と解答の整合性」「立式の確認」「検算」といった、見直しマニュアルを作成し、徹底させる。	検証3 ミスは減少しているが、解答時に時間をかけて丁寧に進める児童が増えていることから、見直しによる効果かどうかは不明である。

【成果】

児童の中に、「正解したい」という意欲が芽生え、そのために丁寧に時間をかけて設問に取り組む姿勢が浸透してきた。また、ケアレスミスが減り、指導する側も学習の理解度を把握しやすくなった。

【課題と今後の方向性】

結果や効果の客観的な検証がむずかしい。また、「美しいノート」を作ることに没頭してしまう児童が見られた。今後、数量関係以外の学習領域において同様の取り組みを行うためには、どのような方策が考えられるかについて、研究を進めていきたい。

図形領域において、記号や言葉を理解させ、学習の定着を図るにはどうすればよいか

対象クラス（学年、組等）： 2年7組 児童数 34名

科目名 数学 授業時数 3時間 使用教科書 東京書籍「新しい数学」

クラスの様子・特徴

自ら進んで学習する生徒、個別指導で理解が進む生徒、すぐに「できない」とあきらめる生徒、授業の用意をまったく行わない生徒など、様々なタイプの生徒が混在している。数学に対してはマイナスイメージを持つ生徒が多く、そのため基礎・基本が十分とはいえない。しかし、学習内容が理解できる場合には積極的な発言や質疑があり前向きに取り組むことができる。

【問題発見】

三角形や四角形の内角の和がわからない等、基本的事項が定着していない状況にある。積み上げを行う下地が形成されていないことから、学習における理解が不十分であるとともに、授業に対する取り組み姿勢も消極的なものとなっている。

【事前調査】

A 観察と省察（1学期） 学習内容が理解できる場合は発表など積極的に取り組むが、内容が難しくなると授業に集中できなくなる。	B アンケートやインタビュー [生徒による授業評価] 数学が好き 19% 図形が得意 13%	C 数量的データ（9月） 宿題テスト 平均47.2点 事前テスト 平均47.9点
---	--	---

【リサーチ・クエスチョン】

図形領域において、言葉や記号を理解させ、学習の定着を図るにはどうすればよいか。

【仮説・計画の実践・検証】

仮説1 振り返りや繰り返しに重点を置き言葉や記号の意味を何度も生徒に想起させることで、既習事項を意識するようになるだろう。	実践1 図形の内容が小学校、中1、中2と進むにつれてどのように積み上げられてきているのかを繰り返し反復して説明するようにした。	検証1 小学校や中1の既習事項を意識しながら問題解決する生徒が増加しており、徐々に積み上げの下地ができつつある。
仮説2 正確な図形を描かせることや作図等の操作活動を多く取り入れることで、図形に対するイメージがわかり理解の促進が図られるだろう。	実践2 定規・コンパスを使って正確に図形を描かせ、問題の内容を操作活動により確認してから問題の解決を行った。	検証2 「定規や分度器で書くと図形のイメージがわかりやすい」と回答する生徒が増えるとともに、図形の性質等を説明できる生徒が増えた。
仮説3 既習事項も含めて継続して問題解決にあたらせることで、学習の定着が図られるだろう。	実践2 小学校の学習内容も取り入れ、スパイラルを意識した小テストを毎時間実施した。	検証3 9月と11月にテストを行ったところ、結果平均が47.9点から69.3点に向上した。

【成果】

仮説実践の前後に意識調査を行ったところ、「数学が好き」と回答した生徒が8ポイント、「図形が得意」と回答した生徒が14ポイント上昇した。また、中2の図形は分かりやすいという生徒が増えるとともに、以前よりも授業において手を上げる生徒が増えてきている。

【課題と今後の方向性】

仮説に基づいた実践により一定の成果は認められるが、数学に対するマイナスイメージは払拭しきれていない。今回の実践においては教師側からの当たり前の指導を意識的に強調して行ったものであり、今後学習形態の工夫やIT機器の活用などに取り組む必要があると考える。

5 研究のまとめ

本研究の4つの実践事例を見ると、仮説に対する実践が概ね子どもたちの良好な変容と結びついている。実践に対する一定の成果はあるものの、「何でうまくいったのか」「なぜ失敗したのか」についての検証に脆弱さが認められる。なぜ、ある指導方法が有効であったのか、目的に照らし合わせて、客観的な視点で記録しておくことで、どの場合にどの方法が有効かを知ることができる。そうすれば、これまで「点」として行われていた日々の活動が、「線」となって一つの方向に向かっていくこととなる。

アクション・リサーチは一般的な真実を追究する科学研究ではないと指摘される側面があるかもしれない。しかし、教育現場では理論と実践にギャップがあるように思われる。だからこそ、実際に現場で指導している教員だからできるリサーチが非常に重要であり、このようなリサーチの積み重ねにより、自分の授業を見つめ直し、授業の質を高めていくことへ結びつけたい。

6 おわりに

これからの教員に求められるのは、「どのように教えるか」のモデルを情報や知識として知ることから出発し、そのやり方をどのような条件の場合にどのような原則や認識に基づいて採用すべきなのかを、自分の教室の現状の的確な把握に基づいて考えていける能力である。多様化していく学習者に対応して効果的な授業を行うためには、教員自身が自分の形で成長していくことが必要不可欠であり、アクション・リサーチはその実現へ向けての大きな力となる。実施したアクション・リサーチを校内研修の場で報告することやチャートを蓄積していくことを通じて、教員一人一人の自己成長に一つの枠組みを与え、授業改善の推進を可能とする。教員が「学び続ける教員」として進化し続けることは、子どもたちの可能性を引き出し、夢の実現につながるのである。

最後にアクション・リサーチに取り組んだ教員の感想を紹介する。「今までは、ただ漠然と『ここではこれを教えて、この活動を入れて』というように、授業で何をやるかということばかりに目がいきがちであったが、アクション・リサーチを行なうことで、どのような子どもを育てたいのか、最終ゴールは何かということを明確にしようと心がけるようになった。」

【引用・参考文献】

- ・『アクション・リサーチによる授業改善ガイドブック』
(神奈川県立総合教育センター 2006)
- ・『新訂 算数教育の理論と実際』(数学教育研究会 編 聖文新社 2010)
- ・『授業改善のためのアクション・リサーチ』(田中誠 長崎国際大学論叢 第7巻 2007)
- ・『授業コンサルティングの理論と実践的方法の開発に関する研究』
(藤江康彦 関西大学人間活動理論研究センター Technical Reports No.7)
- ・『教師の成長と教員養成におけるアクション・リサーチの潜在力に関する研究』
(小柳和喜雄 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 2004)
- ・『中学校での協同的アクションリサーチによる学力向上の取り組みの成果と課題』
(小柳和喜雄 日本教育工学会研究会 2010)

外国語活動研究

外国語活動におけるコミュニケーションを図る楽しさを味わう授業の研究 ー英語ノートを活用したプロジェクト型学習を通してー

指導主事 寺 田 忠 司
研究員 西 村 純 (園田南小)
" 中 村 美 紀 (潮 小)
" 藤 本 哲 也 (園田東小)

【内容の要約】

外国語活動の授業を実践するにあたり、英語ノートを活用しながら、学習指導要領の目標に迫るための効果的な方策について研究することとしてテーマを設定し、次の2点を重点課題として取り組む。

- 1 コミュニケーション能力の素地を養うためのプロジェクト型学習の単元及び教材を開発する中で英語ノートの効果的な活用を図る
- 2 授業実践を通してプロジェクト型学習の成果を確認する

児童の行動観察や自由記述から授業実践を振り返ったところ、活動に対する主体的な取り組みや積極的な評価が多数あった。プロジェクト型の単元構成や授業の構成を工夫することで、児童が目的意識をもって授業に取り組むことができた。

キーワード：プロジェクト型、英語ノート、授業実践、習得、活用

1	はじめに	1 7
2	研究内容	1 7
	(1) 研究テーマ	1 7
	(2) 研究テーマ設定について	1 7
	(3) 重点課題	1 8
	(4) 研究の取り組み	1 8
3	実践事例（公開授業指導案）	2 0
	○実践例 1	2 0
	○実践例 2	2 2
	○実践例 3	2 5
4	実践を振り返って	2 8
	○実践例 1	2 8
	○実践例 2	3 0
	○実践例 3	3 2
5	研究のまとめ	3 4
6	おわりに	3 6

1 はじめに

平成23年度より新学習指導要領全面実施に伴い、尼崎市では本年度、外国語活動について年間35時間（Assistant language Teacher〈以下ALT〉は10時間配当）実施し、指導内容を英語ノート1，2から抜粋することとした。これは、全面実施と同じ授業時数となり、昨年度（年間20時間）より増えた15時間については、担任をはじめとする教師が指導することとなる。また、英語ノート2については本年度からの導入となり、系統的な指導計画や単元構成及び教材開発が今後必要となる。

外国語活動研究部会では、昨年度「外国語活動におけるコミュニケーションを図る楽しさを味わう授業の研究」をテーマに①英語ノートを活用した教材開発、②担任主導型のあり方、③授業実践に取り組んだ。授業での行動観察や児童の振り返りカードからは、概ね好評価を得られたが、児童は与えられた活動をするだけで、目的意識に欠けるという課題もあった。

本年度は、外国語活動の目標を達成するために、これまでの取り組みを踏まえ、児童が目的意識をもって活動ができるよう、英語ノートを活用した効果的な指導について、授業実践を通して研究を進めることとした。

2 研究内容

（1）研究テーマ

「外国語活動におけるコミュニケーションを図る楽しさを味わう授業の研究」
ー英語ノートを活用したプロジェクト型学習を通してー

（2）研究テーマ設定について

学習指導要領における外国語活動の目標は、次のとおりである。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しめながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

外国語活動の目標は次の3つの柱から成り立っている。①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に親しませる。これらを踏まえた活動を統合的に体験することで、コミュニケーション能力の素地をつくらうとするものである。

コミュニケーション能力の素地を育成するためには、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度が重要である。

昨年度の取り組みでは、「自分の思いを伝えられてよかったと感じること」を体験できる授業を目指して英語ノートの単元構成を分析したり、場の工夫や教具の効果的な活用を目指した授業を行ったりした。振り返りカードの自己評価や自由記述からは、児童の積極

的な評価や好意的な感想が見られた。また、英語力を中心とする不安感をもつ教師についても英語を学ぼうとしたり、楽しんだりしようとする姿が児童にとってよいモデルを示すことになることが明らかになった。

昨年度の実践を踏まえ、児童が与えられる楽しさだけでなく、目的意識をもって授業に取り組むことができるよう、英語ノートを活用したさらなる単元構成及び教材開発を行い、「自分の思いを伝えられてよかったと感じること」を体験できる授業を研究することをテーマとした。

(3) 重点課題

研究テーマに迫るため、次の事項を重点課題として取り組むこととした。

- ① 英語ノートを活用したコミュニケーション能力の素地を養うためのプロジェクト型学習（トピック1）の単元及び教材を開発する
- ② 授業実践を行う

① 英語ノートを活用したコミュニケーション能力の素地を養うためのプロジェクト型学習の単元及び教材を開発する

英語ノートを活用したプロジェクト型学習の単元及び教材開発に伴い、プロジェクト型学習について、単元構成について、授業実践等について検討することとした。英語ノートは学習指導要領に則して編纂されたものであるが、児童の実態に応じて内容を検討する必要がある。また、年間35時間（1週に1時間程度）の授業で外国語に慣れ親しむ活動を効果的に展開するためには、児童が主体的かつ必然的に取り組むための工夫が重要となる。単に英語ノートの内容を教師が教え込むという指導ではなく、児童が課題を意識しながら活動に取り組み、課題を解決するために英語を活用する場面を設定し、必要に応じて英語ノートを活用しながら指導することを念頭に単元及び教材の開発を図った。

② 授業実践を行う

授業形態としては、①担任（担当）単独による授業、②担任（担当）とALTによるTTの授業、③担任（担当）及びJapanese Teacher of English（以下JTE）によるTTが挙げられる。本年度、尼崎市では外国語活動の授業を35時間実施（ALTの配当は10時間）することから、担任（担当）単独による授業が25時間となる。各校においては、担任（担当）単独による授業について参考となる事例や指導案等を整備することが急務となる。そこで、授業実践に際しては担任（担当）単独による授業形態に統一することとした。参考資料を提示し、成果や課題についても明確にすることが可能となり研究を深められると考えた。

(4) 研究の取り組み

① 英語ノートを活用したコミュニケーション能力の素地を養うためのプロジェクト型学習の単元及び教材を開発する

児童の興味・関心や発達に合わせた単元構成及び教材を開発するために、次の内容につ

いて共通理解を図りながら研究を進めた。

トピック1

○プロジェクト型学習について

週1時間程度実施される外国語活動で、児童が主体的かつ必然的に取り組むためには、課題を設定し、目標を明確にもつことが重要である。また、課題を解決するために英語を活用する場面を設定することで、英語を話そうとする必然性や興味の持続、創造的な活動が生まれると考える。東野、高島(2007)はプロジェクト型英語活動について、「与えられた（あるいは見つけた）課題、目標のゴール、共同の学び、貢献や発信のある活動を含む『単元』である。」と示している。また、東野、高島はプロジェクト型カリキュラムの授業の流れについて図1のように示し、「課題解決の過程で、児童たちは必要な活動を選択し決定していくため、必然的に主体的・創造的な学びが児童から生まれてくることになる。また、ゴールに向けての明確な目的意識があるために、活動が主体的・創造的なものになり、児童の興味は最後まで持続することとなる。」と示している。これらの内容は、学習指導要領の目標及び研究テーマに迫る取り組みとして合致すると考える。

そこで、プロジェクト型学習の単元を構成し、教材を開発することとした。

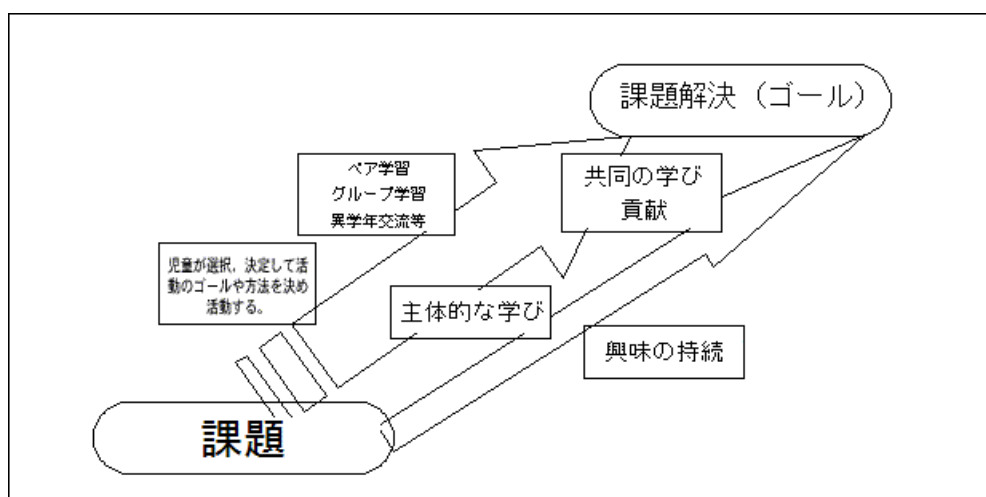


図1 プロジェクト型カリキュラムの授業の流れ

○単元構成について

単元構成にあたっては、次の4点に留意しながら検討した。

- ① 導入部でのゲーム、歌、チャンツ等のウォーミングアップでは、楽しく時間を過ごすだけでなく、主な活動で使用する語彙や話形を取り入れたものを選択する。
- ② 主な活動では、コミュニケーションの場（ゴール）を設定し、話すことに必然性をもたせる。また、相手意識をもち、理解しようとする、自分が伝えたいことを伝えようとする、自分の思いを伝えられてよかったと感じることを体験できるようにする。
- ③ 振り返りでは、目標に迫ることができたか、次の活動についての自己評価や、自分や友達のよさに気づくための他者評価をさせる。単に発表することが目標ではな

く、目標を達成するための英語の表現であり、評価の視点をもたせる。

- ④ ALT やゲストティーチャー等を活動場面で活用し、ネイティブの発音に慣れ親しませる。また、発話内容や文化的な内容等についての質問を事前に行い、内容を確認する。

② 授業実践を行う

昨年度の研究を踏まえ、授業の大まかな展開として「挨拶・導入（ウォーミングアップ）」「主な活動」「振り返り・挨拶」を設定した。また、それぞれの活動について次のように共通理解を図りながら研究を進めた。

○ 導入（ウォーミングアップ）について

英語ノートでは、児童が外国語に積極的に親しむことができるよう、各単元で段階的に Let's Listen・Let's Play・Let's Sing・Let's Chant があり、時間配分が設定されている。そこで、授業の導入部分では、主な活動で使用する語彙や表現を歌やゲーム、チャンツ等の活動に取り入れ、ウォーミングアップとして実施することとした。また、ウォーミングアップや主な活動を通じて「語彙の習得」「話形の習得」「話形の活用」と発展していくように配慮した。

○ 主な活動について

活動場面では、「ひとり活動」「ペア活動」「グループ活動」「集団活動」のように形態を発展させ、児童が自信をもって活動に臨めるようにした。また、デモンストレーションの提示や話形についての黒板表示をすること等で、児童の支援となるよう配慮した。

○ 振り返りについて

児童に振り返りの時間を設けてカードに記入し内省させることとした。また、カードを書かせることで、児童の実態を把握し今後の指導の参考となるとも考えた。振り返りカードには、活動に対する自己評価（３段階）や自由記述欄を設けた。さらに、友達のよかった所についても書くように助言し、評価の一助とした。

3 実践事例（公開授業指導案）

○実践例 1

園田東小学校 指導者 藤本 哲也 対象 2年1組児童28名

（「特色ある教育活動推進授業により全学年で外国語活動を実施」）

1. 単元名「ダンス大会をしよう」

2. 単元目標

- 学習した英語表現を使って、活動に意欲的に取り組む。
- 体をあらわす英単語を理解し、発音したり体を動かしたりする。
- ゲームなどの活動を通して、体をあらわす英単語を理解する。

3. 単元について

本単元では体をあらわす英単語を理解させることをねらいとしている。発音し、その部位を動かしながら“ The hokey pokey ”を楽しく踊ることを単元最後の活動としている。

英語を発音しながら体を動かすという活動は、子どもたちにとってとても楽しく、英語活動をより活発にさせるものと思われる。また、曲に合わせて行う動きやかけ声は、グループで工夫させ、オリジナル性をもたせることで、子どもたちはより積極的に取り組むことができる。クラスを4つのグループに分け、グループでのオリジナルの動きを発表し、見合い、感想をもつことで主体的に活動することをめらいとしている。

4. 単元計画（全4時間）

	目 標	主 な 活 動	扱う表現・主な語彙
1	・“The hokey pokey”を踊ることを知り、っている体の部位を考える。	①歌“ The hokey pokey”を聞き、体の部分を英語で表現する学習内容を知る。 ②体での英語で知っている部分を発表する。 ③歌“ Head and shoulder” ④歌“ The hokey pokey”	hand Head shoulder knee toe Eye ear mouth nose right left
2	・体の部分の英語表現を知る。	①歌“ Head and shoulder” ②ゲーム“ Simon says” ③体の部分の英語表現を知る。 ④歌“ The hokey pokey”	`touch your ~` Chest back waist leg
3	・グループで“ The hokey pokey”のダンス内容を考える。 	①歌“ Head and shoulder” ②ゲーム“ Simon says” ③体の部分の英語表現を知る。 ④4つのグループに分かれ、グループで“ The hokey pokey”の内容を考える。 ・オリジナル性が出るように、声を出したり、ポーズをとらせたりする。 ⑤歌“ The hokey pokey”	`touch your ~` `point your~` Stomach hip elbow neck
4 (本時)	・ダンス大会を楽しむ。	①歌“ Head and shoulder” ②ゲーム“ Simon says” ③ダンス大会をする ・グループで考えた内容を発表する	`touch your friend's ~`

5. 本時の目標

- 体を表す英語表現を体を動かしながら発音する。
- 他のグループのダンスを見て感想をもつ。

6. 展開

過程	児童の活動	教師 (HRT)・ALT の指導・支援 ◆評価
挨拶 Warm-up (10)	1, あいさつをする。 Hello. Hello, how are you? I ' m fine.	・ HRT のあいさつに答える活動を通して、外国語学習の始まりを意識させるとともに、外国語を話しやすい雰囲気を作り出す。 ・ 全体で一斉にあいさつした後、一人ずつ発表させるなど、繰り返し練習させる。 ◆大きな声で発音をしようとしている。
	2, 歌を歌う。 ♪ “ Head and shoulder ” ゲームをする。 ★ ” Simon says ”	・ head shoulder nee toe などの体の部分をあらかじめ確認して歌うようにする。 ・ 歌詞の体の部分は発音させるようにする。 ◆歌に出ている部位を理解してさわれている。 ・ 前時までの内容が定着しているか確認する。 ・ `touch your friend ' s ~ など、とる行動を増やしていく。 ◆指示を理解して適切な動きをとれている。
Activity (25)	3, 本時のめあてを確認する。	
	4, 全体で “ The hokey pokey ” を一度踊る。	・ 本番のために大きく体を動かさせる。 ・ できそうなときは発音させるようにする。
Closing (5)	5, グループでダンスの確認をし、発表会をする。	・ 4つのグループで1グループずつ発表していく。 ・ オリジナル性ができるように声を出したり、ポーズをとるようにさせる。 ◆みんなの意見を聞き合って取り組んでいる。 ◆他のグループの踊りを見て意見をもっている。
	6, 本時のまとめをする。 7, 次時の内容を確認し、終わりのあいさつをする。 Good bye! See you.	・ 授業を振り返って自分の踊った感想や、他の児童のダンスの感想などをワークシートに書かせ、発表させる。

○実践例 2

潮小学校 指導者 中村 美紀 対象 6年1組児童34名

1. 単元名「将来の夢を紹介しよう」

2. 単元目標

○学習した英語表現を使って、活動に意欲的に取り組む。

○動作を表す表現を理解し、発音する。

○自分の将来のことについて考え、相手に伝える。

3. 単元について

6年生にとって、自分の思いをたくさん伝えてみたいという意欲の高まっているこの機に本単元を取り上げることで、様々な人々とのコミュニケーション活動を通し、自分のことだけでなく、相手の言うことをよく聞きながらコミュニケーションを楽しむことができると考える。このことは、相手と互いの思いを伝え合い、積極的にコミュニケーションを図る楽しさを味わう子どもを育てる上からも意義深い。指導にあたっては、中学校に入ってからやってみたいことを想像し、その中でも児童の関心が高い部活動について考えさせ、相手に伝えられるようにする。ここでは、児童が部活動への興味・関心を高められるように、卒業生の生きたコメントや体験している活動内容を児童に伝えたい。そこでまず、今の自分がやってみたい部活動を決め、どのようなことがしたいのか、どんなことができるようになりたいのかを考えさせたい。次に将来の夢について相手に伝えることができるようにさせたい。そして、自分の将来の夢についてとその理由を相手に伝えることで、できた喜びや満足感を味わうことができるようにする。自分が入りたい部活や将来の夢について考え、友だちとの交流を通して他者への興味・関心を高め、交流できた喜びや達成感を味わうことができると考える。

4. 単元計画（全7時間）

	目 標	活 動	主な語彙・表現
1	「できること、できないこと」の表現を知ろう。	自分ができること、できないことの表現を理解する。	I can ～. I can ' t ～. swim,fly,sing,play,make, soccer,tabletennis,guitar piano,rice ball, miso soup
2	できることを紹介しよう。		
3	できるようになりたいことを伝えよう。		I want to ～. 前時で使った動詞
4	中学校生活について想像しよう。	①卒業生からのコメントを聞いて、部活動について考えよう。 ②カードを作って、スピーチの準備をしよう。	I want to join ～. 中学校の部活動の単語 soccer club, baseball club, volleyball club,
5 本 時	自分がやってみたい部活動について考え、相手に伝えよう。	③子どもどうしでインタビューし合い、同じ部活の友だちを見つめる。 ④同じ部活動を選んだ	kendo club, guitar club, track and field club, basketball club, softball club,

	留学生の方や友達に、自分が入りたい部活動について伝える。	tennis club, brass band club, art club, ESS club, shorinnji kenpo club Because I like ~. I can ~. I want to ~.
6 将来の夢を紹介しよう。 7	①さまざまな国の子どもたちの夢を聞いた り、さまざまな職業の英語の言い方を知 ったりする。 ② カードを作る。 ③ 友達や留学生の方 に将来の夢について (できるだけカード を見ないで)伝える。 ④ 夢文集を作る。	I want to ~. teacher, doctor, tennis player, cook, fire fighter, astronaut, singer, racing driver, nurse, farmer, baseball player, soccer player, pilot, police officer, scientist, engineer

5. 本時の目標

- 部活動について、やってみたいこと、できるようになりたいこと等を相手に伝える。
- 友だちの考えを積極的に聴こうとする。

6. 展開

	児 童 の 活 動	指導上の留意点 (○)、評価 (☆)
挨拶 導入 主 な 活 動	先生や友達と挨拶をする。 Hello, ○○. How are you? I ' m good/ sleepy/ hungry/ okay. 等 今までに学習した、部活動に関する単語を復習する。 ①留学生の方々の紹介を受ける。 ②前時に作ったスピーチカードの内容を確認する。 A; Hello,○○. B; Hello,○○. What club do you want to join? A; I want to join the ○○ club. What club do you want to join? B; I want to join the ○○ club. A; I see.	○インタビューの型をデモンストレーションする。

振り返り	Thank you. See you. B; Thank you. See you. ③留学生の方々，友だちにそれぞれインタビューをして回り，同じ部活動を選んだ人がいれば，同じグループになる。 ④グループで円になり， ○自分がやってみたい部活 ○どんなことがしたいのか ○どんなことができるようになりたいのか 等を伝え合う。 I want to join the ○○ club. Because I can ~ . I want to ~ . I like ~ .  本時の振り返りをする。わかった所，できた所等を発表する。	○インタビューをする時は，必ず1対1で行うよう確認する。 ○男女を問わず多くの友達・留学生の方々に自分の考えを伝えるようにはたらきかける。 ○話し方（場に応じた声の大きさ，「伝えたい」という気持ち）と聞き方（反応する，友だちの考えの相違点や共通点などを比べる）に気をつけるように指導する。 ☆積極的に自分の考えを伝える。（行動観察） ○うまく伝わらない時や，何と云っていいのかわからない時などは，「困ったカード」を使用し，何とか自分の力で伝えるように助言する。 ☆相手の言うことを積極的に聴こうとする。（行動観察） ○伝わりにくい時は，その場で思考した方法を使いながら伝えたことに気づかせ，次時への意欲をもたせる。 ☆積極的に自分の考えを伝えたり，相手の言うことを聴いたりしている。（振り返りカード，発言）
------	---	---

○実践例 3

園田南小学校 指導者 西村 純 対象 6年1組38名

1. 単元名「将来の夢を紹介しよう」

2. 単元目標

○様々な職業の言い方に興味をもつ。

○積極的に自分の将来の夢について，理由を含めて紹介したり，友達の夢を聞き取ったりする。

○どのような職業に就きたいかを尋ねたり，答えたりする表現に慣れ親しむ。

3. 単元について

本単元は，本単元が2年間外国語活動の最後にあたる単元のため，「学習のまとめ」で

あるとともに、卒業を迎えるにあたって、自分の将来について考えたり、自分の夢について考えることをできるように授業構成を行っている。目標は、理由を含めて自分が就きたい職業を紹介することである。ここでは、単に将来就きたい職業を言うだけでなく、理由を含めて表現することに注目したい。児童にただ職業名を暗記させるだけでなく、自分の将来をについて考え、就きたい職業やそこでどんなことを成し遂げたいのか、また、なぜその職業に就きたいのかなどを考えることで、職業名を表現する際にも言葉に意味が含まれてくるであろう。また、それをクラスで紹介し合うことで、未来に希望をもち、様々なことに前向きに取り組んでいく意欲を育てたい。中国からの留学生をゲストティーチャー（以下GT）として迎え、彼らの夢を詳しく聞くことで、級友の夢だけでなく世界にたくさんの人がいて、夢をもちながらがんばっていることを体験してほしい。多くの人と出会い、夢について交流することは自分の将来について考える絶好の機会と考える。

4. 単元計画（全4時間）

	目 標	活 動	主な語彙・表現
1	様々な職業の英語での言い方を知る。	Let ' s Play ・カードあてゲーム Let ' s Listen ・どの人の自己紹介か聞こう。 Let ' s Play 1 ・ビンゴゲーム	Teacher, doctor, racing driver, tennis player, cook, fire fighter, singer, nurse, astronaut, farmer, baseball player, soccer player, police officer, pilot, scientist, engineer
2	世界には、自分たちと同じように将来に夢を描いている子どもたちがいることを知るとともに、将来つきたい職業について話されていることを聞いて理解する。	Let ' s play ・カードあてゲーム Let ' s listen CD、留学生の話を聞いてわかったことを書こう Let ' s chant ・W hat do you want?	What do you want to be? I want to be a ○○. When I grow up~
3 本 時	将来就きたい職業について、尋ねたり答えたりする。	Let ' s play ・カードあてゲーム Let ' s chant ・What do you want to be? Activity ・インタビューしよう。 Activity ・スピーチメモを作成しよう。	What do you want to be? I want to be a ○○. Hi. Excuse me. Thank you. You ' re welcome. Good bye. See you.
4	スピーチメモをもとに、理由を含めて自分の夢を紹介する。	Let ' s Play ・カードゲーム Let ' s chant ・When I grow up	Hello. I want to be ○○. I want to ~. I like ~.

	Activity ・ 友達のスピーチを聞いて、 名前と夢を書こう	Thank you.
--	--	------------

5. 本時の目標

○将来に就きたい職業について、尋ねたり答えたりする。

6. 展開

	児童の活動	GT …㊤ HRT …㊦	指導の留意点 (○) 評価 (●)
挨拶	< はじめの挨拶 > Hello. How are you? I ' m fine. I ' m happy. I ' m hungry. I ' m sleepy.	㊦全体に挨拶をする。 ㊦㊤ HRT と GT であいさつする。 ㊦㊤ HRT, GT と児童で挨拶する。	
導入	< Let ' s Play > キーワードゲーム チェーンゲーム	㊦キーワードゲーム、チェーンゲームのやり方を説明する。	○ HRT と GT でデモンストレーションを児童に見せる。 ●意欲的に参加しようとしているか。
	< Let ' s chant > When I grow up~	㊦職業カードを見せながら一緒にチャンツを行う。	○児童が飽きないようにテンポよく行う。
主な活動 ①	< Activity 1 > ・ インタビューしよう A: Hello, What do you want to be? B: I want to be a soccer player. B: What do you want to be? A: I want to be a doctor. B: Thank you. A: Thank you. B: Bye bye. A: Bye bye. *英語ノート p.59Activity に名前と職業を書き込む。	㊦㊤インタビューのやり方を説明する。	○㊦㊤で、デモンストレーションして児童に見せる。 ●将来就きたい職業について相手に尋ねたり答えたりする。
主な活動	< Activity 2 > ・ スピーチメモを作成する *英語ノート p.60 に理由	㊦スピーチ・メモを作成することを告げる。	●将来に就きたい職業について理由を考えることができ



動	を書き込む。	①スピーチ・メモを作成する	ているか。
②		②理由を日本語・絵で描く。	
振 り 返 り	＜振り返り＞ 自分が頑張ったところ、友 達が頑張っていたところを 発表する。		○具体的に児童のよかった点 を評価するよう指導する。 ●自分のよい所、友達のよい 所を見つけることができた かどうか。
挨拶	＜終りの挨拶＞ Good bye. See you. So long.	㊤㊤挨拶をする。 Good bye. See you. So long.	

4 実践を振り返って

＜実践例 1＞（○…成果 ●…改善点及び課題）

（1）プロジェクト型学習について

- 本單元では、単元の始めに活動の課題を“ The hokey pokey ”でオリジナルのダンスを踊ろうと設定した。その結果「体の名称の英単語を知りたい」、「英語で体の名称を説明したい」と児童の興味が高まり、その課題の解決のためにグループやペアになって児童が主体的に活動することができた。
- 児童にとって体の部位はとても身近な教材で、学習に入る以前から耳にしたことのある英単語も多くあり、2年生にとって適している単元内容であった。言葉を知っている児童はそうでない児童に伝え、意味や発音を教え合う場面も多く見られた。また、単元のまとめとして“ The hokey pokey ”の創作ダンスを行ったが、理解させたい体の部位をリズムに合わせて動かすという活動は、児童の関心を高めるものになっており、とても効果的であった。
- 児童は体の部位の英単語を理解してダンスに取り組むことができ、外国語に対する興味を深めることができていた。また、ダンスをするために必要な right, left, in, out といった単語も児童の気づきの中から取り入れることができ、児童の発表の幅が広がった。
- 本單元では全部で17箇所の体の部位を取り扱ったが、チャンツやかかるた、並べ替えゲームを通して4時間に分けて取り組ませたので、児童が理解できないということはないかった。また、体の部位に手を当てさせながらジェスチャーを大きくして発音させると、効果的に児童の理解が深まることがわかった。
- 4時間で扱う単元の計画を立てたが、ダンスの構成をグループに深く考えさせるのであれば時間が少なく、時数をより多くとるべきであると感じた。

（2）授業について

- 毎時間取り組んだ“ Head and shoulder ”は、歌を歌いながらその体の部位に手を当てていくように行っただけで、“ The hokey pokey ”で行う活動と共通しており、一時間の活動の中で児童がスムーズに取り組むことができた。
- ゲーム“ Simon says ”は本来はキーワードに注意し、ひっかけをねらったゲームである。

しかし、本単元ではそのルールを変更し、教師の`touch your ～`や、`touch your friend` `s` `～`または、体の名称の単語を聞き取って指示に従うゲームにした。その結果、児童は内容をよく聞き取り、指示通りに動くことができていた。（●一つの指示で体の部位は一つしか扱わなかったため、2つの部位を and でつなぎ、少し複雑化させても児童は楽しむことができたのではないかとと思われる。）

○教師が児童一人ひとりと挨拶をすることで、どの児童も1時間の中で英語を話し、コミュニケーションをとることができた。また、毎時間行っていく中で児童が知りたい感情や健康状態を紹介することができ、児童の語彙が毎時間増やしていくことができた。

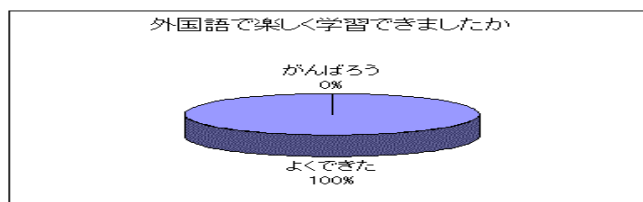
●1グループで披露するダンスは1回の予定であったが、2回披露することとした。ダンスを披露しているとき、見ている児童も真似をして踊らせたり、発音をさせたりする等、活動に参加できるよう配慮すればよかった。

(3) 振り返りカードからの考察

学習では振り返りカードを用意し、本時が終わった後で児童に記入させた。2択での質問と、自由記述での質問を行なった。

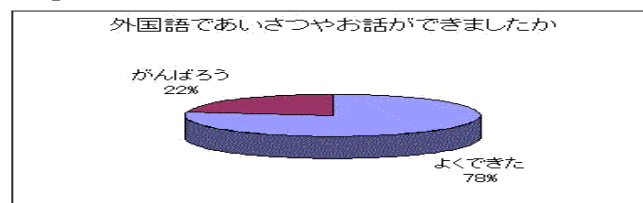
①「外国語で楽しく学習できましたか」

よくできた	27人	100%
がんばろう	0人	0%



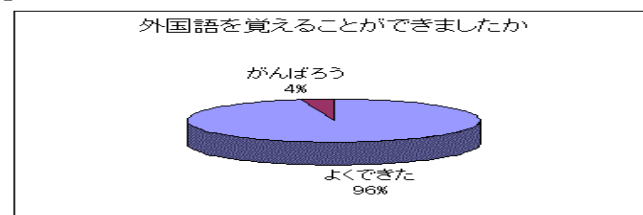
②「外国語であいさつやお話できましたか」

よくできた	21人	78%
がんばろう	6人	22%



③「外国語を覚えることができましたか」

よくできた	26人	96%
がんばろう	1人	4%



④「他のグループのダンスを見ての感想を書きましょう」(自由筆記)

・おもしろかった(21)・上手だった(6)・アイデアがよかった(6)・楽しそうにダンスをしていた(4)・自分も真似したい(1)・また見てみたい(1)

⑤「今回の学習(単元)を通しての感想を書きましょう」(自由記述)

・かるたや並び替えゲームが楽しかった(7)・ダンスが楽しかった(6)・ダンスが上手になった(4)・ダンスができたから楽しめた(2)・英語が楽しい(2)・また英語の活動をしたい(1)・英語の歌を歌うことをがんばった(2)・ダンスを考えることが難しかった(1)・ダンスを踊ることをがんばった(1)・“Simon says”がおもしろかった(1)

- ①の質問では「よくできた」と回答した児童は全員だったため、今回の単元に興味をもって取り組んでいたことがわかる。プロジェクト型のカリキュラムで最後の活動を“The hokey pokey”でオリジナルのダンスをしようと設定したことや、その課題解決の方法も適当であったと思われる。
- ②の質問では「よくできた」と回答した児童は78%であった。挨拶はどの児童もよく行なっていたが、英語でコミュニケーションをとる活動が少なかったため「がんばろう」と回答した児童がいたのではないかと思われる。しかし、プロジェクト型のカリキュラムで2年生という学年を考えると会話文ではなく、まず語彙を覚えるという計画を立てているため、コミュニケーション場面を設定することも検討する必要があると思われる。
- ③の質問では「よくできた」と回答した児童が96%でほぼ全員であった。体の部位を14個扱ったが、分けながら学習を進めた。児童は、チャンツやゲームでも楽しみながら活動に取り組むことができおり、ほぼ全員が語彙について理解していることから、語彙数をより多く設定してもよかったのではないかと思われる。また、児童の状況に合わせて最後の課題（ダンスの内容）をもう少し高く設定してもよいのではないかとと思われる。
- ④の回答からダンスをするだけでなく、他のグループのダンスを見ることにも児童の関心が高いことがわかった。
- ⑤の回答ではダンスに関する好評を回答した児童が多数いた。体の部位を英語で話すという活動を行なうのにあたって、ダンスを踊ろうという課題は適当であったと思われる。また、“Simon says”やかるた、並び替えゲームが楽しかったという回答もあり、理解を深めるための手立てが児童に適していたと思われる。

＜実践例2＞（○…成果 ●…改善点及び課題）

（1）プロジェクト型学習について

- 将来の夢を紹介するにあたり、就きたい職業を考えさせることは、多くの児童にとって唐突で選択しにくいことと考えた。そこで、まず身近な将来の事象として中学校でのクラブについて理由をつけて発表することにした。次に就きたい職業についても発表するとしてプロジェクト型学習の単元を構成した。中学校という近い将来のこと、中でも多くの児童が楽しみにしているクラブについては、大いに興味をもたせることができた。また、クラブについては、進学先の中学生にインタビューを行い、主な活動内容を用紙にまとめてもらった。クラブの種類や具体的な活動内容がわかり、効果的な動機付けになった。
- 自分が入りたいクラブについては、興味関心が持続し、内容を変更する児童が少なかった。また、理由についても素直な気持ちを英語で表現することができた。
- 自分の入りたいクラブを紹介する場面では、友達へのインタビュー、同じクラブ活動を選んだグループ、留学生（日本語が通じない相手）と段階的に様々な種類の相手に伝えさせることで、何とか伝えようという気持ちをもたせることができた。
- 友達がどのクラブを選んでいるか興味をもち、インタビュー前から友達の選んだクラブを把握している児童がいた。これでは意欲的インタビューしたり、聞く側になった時には新鮮みが無くなったりしてしまうので、互いに知らせないように助言すべきであった。

(2) 授業について

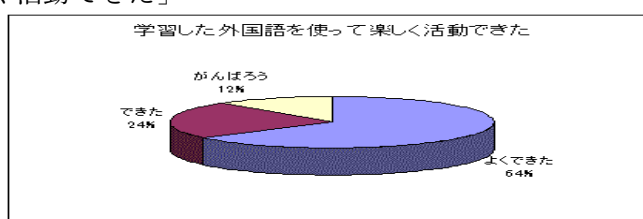
- 複数（9人）の留学生を招くことで、児童がネイティブの発音に触れ、コミュニケーションを図る場面を多く設定することができた。また、中国からの留学生であったが、中国語ではなく英語で話を進めたので、英語なら伝わりやすいということも体験することができた。
- クラブ名の語彙等については、教師が発音し児童が聞き取った通りにカタカナでメモを取らせた。教師がカタカナで表記するとカタカナを読んでしまうが、自分でメモをするので発音を想記しやすくなるようであった。

(3) 振り返りカードからの考察

授業の最後に振り返りカードを記入させた。3 択の質問と自由記述の内容とした。

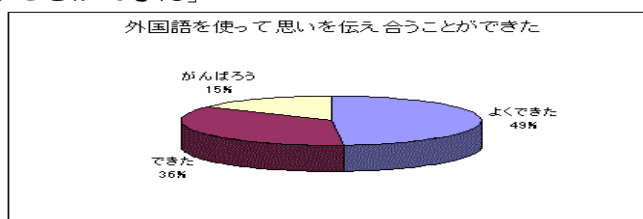
①「学習した外国語を使って楽しく活動できた」

よくできた	22人	64%
できた	8人	24%
がんばろう	4人	11%



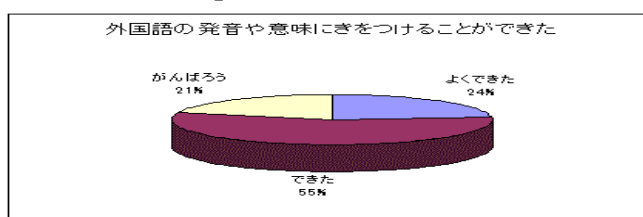
②「外国語を使って想いを伝え合うことができた」

よくできた	16人	49%
できた	12人	36%
がんばろう	5人	15%



③「外国語の発音や意味に気をつけることができた」

よくできた	8人	24%
できた	19人	56%
がんばろう	7人	20%



④ 自由記述

<積極的評価>

・留学生の方々とたくさん交流できて楽しかった。(12)・自分の考えが伝えられてよかった。(5)・留学生の方々に質問をされて、困ったが何とか答えることができてよかった。(3)・留学生の方々に質問をされて意味がわからなくて迷った。わかるようになりたい。(3)・英語力がついたと思う。(1)

<反省評価>

・留学生の方々に質問をされて、わからないことがあった。とまどった。(12)・緊張してしまい、難しく感じた。(2)・伝えたいことがうまく英語で言えなかった。(2)・英語で話すのが大変だった。(1)

- 友達や初対面の留学生の方々に自分の考えを言うという体験であるにも関わらず、楽しく活動できた児童が多かった。
- 「留学生から質問されてわからなかったけど、ジェスチャーでわかった。」「わからなかったからわかるようになりたい。」等、外国語に対して前向きな感想が多数あった。また、「日本語で言ってくれてほしかった。」等母国語の大切さにも気付くことができていた。
- 「留学生の言うことがよくわからなかった。」記述が多く見られたが、留学生からの質問が理解しにくかったと考えられる。児童があらかじめ用意した内容を答えられるような共通した質問をするよう依頼すべきであった。

＜実践例3＞（○…成果 ●…改善点及び課題）

（1）プロジェクト型学習について

- 本単元が外国語活動の最後にあたる単元のため、「将来の夢」を研究の題材として取り上げた。また、卒業を迎えるにあたって自分の将来について考えたり、自分の夢について考えることができるよう授業構成を行った。授業を始めてすぐは「夢がない。」「金持ちになりたい。」というような児童も多かったが、授業を進めていくにつれ「お金持ちになるのに何をしよう。」と考えるようになり、「働くとすれば…」と次第に将来について真剣に考えるようになった。また、自分の将来の夢だけでなく、友達の夢を聞くことで「みんな夢をもってこれからがんばるのだな」と考えるきっかけになった。
- プロジェクト型の単元構成を行い、最終的な活動として「将来の夢についてスピーチしよう」を設定したことは、その課題解決に必要な職業の語彙を増やしていく必然性をもたせることができた。
- チャンツやゲームの時間を十分に確保することで、楽しみながら必要な英単語やセンテンスに慣れ親しむことができた。また、長い話形も話すことができていた。さらに、デモンストレーションをGTとHRTで示したことで、「インタビューしよう」の活動をスムーズに取り組むことができた。
- 本時の活動の内容が盛りだくさんであったため、最後の「将来の夢について理由を紹介しようのメモ作成」は次時にすべきであった。インタビューゲームの活動に十分な時間を使えば、余裕をもって活動が行うことができたと思われる。
- 4時間で扱う単元の計画をしたが、将来の夢について考え、理由についても英語で表現できるように考えさせるのであれば、十分な時間を確保する必要があったと思われる。年間カリキュラムを作成するときに時間配分についても検討していくことが重要である。

（2）授業について

- “What do you want to be?”“I want to be ○○.”の話形は毎時間、チャンツやチェーンゲームで繰り返し行ったので、「インタビューしよう」では児童がスムーズに活動することができた。
- 様々な職業についてピクチャーカードを使い、毎日キーワードゲームやフラッシュカード、カードあてゲーム等で繰り返し声に出すことを行った。その結果、友達が英語で夢

を答えても、内容を聞き取って英語ノートに（日本語で）メモすることができていた。

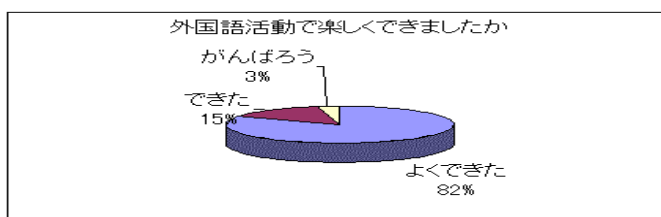
- インタビューゲームでは、2人組を交代しながら行うことを英語で伝えていたが、グループで固まって活動していた所があった。英語でわかりにくい所は日本語で伝え、相手と出会った時には最初に“Hello”最後に“Thank you”“Bye bye”と挨拶をすることを理解させるべきであった。教師が日本語で伝えることと英語やデモンストレーションで児童に伝えることを区別しながら授業を行った方が児童も迷いがなく、より積極的に授業が行えたのではないと思われる。
- インタビュー前の話形の練習を教師対児童の練習だけで活動に入ったが、教師対児童、児童対教師、児童対児童というように練習を発展させると活動がスムーズになると思われる。
- GTは、デモンストレーション、英語の発音、活動中の必要な補助等を行ったが、声をかける内容を決めたり、関わるグループの役割分担をしたりすることで、さらに有効活用することができると思われる。
- 教師が外国語を話す場合、児童にとって内容の理解を促すためにも意図的にジャスチャーをすることが重要である。

（３）振り返りカードからの考察

授業の最後に振り返りカードを記入させた。3 択の質問と自由記述の内容とした。

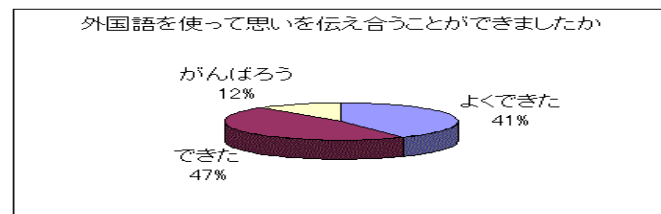
①「外国語活動を楽しくできましたか」

よくできた	28人	82%
できた	5人	15%
がんばろう	1人	3%



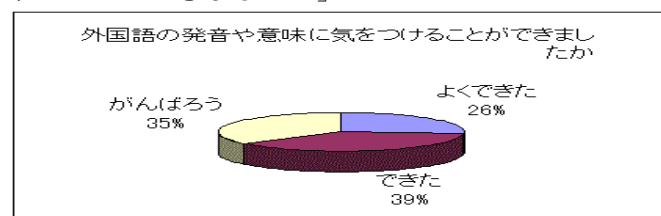
②「外国語を使って思いを伝え合うことができましたか」

よくできた	14人	41%
できた	16人	47%
がんばろう	4人	12%



③「外国語の発音や意味に気をつけることができましたか」

よくできた	9人	26%
できた	13人	39%
がんばろう	12人	35%



④自由記述

＜積極的評価＞

・英語のゲームが楽しかった。(14)・友達の夢が聞けて楽しかった。(5)・友達と将来の話が英語でできてよかった。(2)・英語が話せてよかった。(1)・みんなは夢のために

がんばるのかなと思った。(1)・もっと英語を勉強したい。(1)

＜反省評価＞

・英語の発音が難しかった。(9)

○①の質問で「よくできた」と答えた児童が28人、「できた」と答えた児童が5人と回答した。児童は「将来の夢を紹介しよう」の授業で、自分の将来や友達の将来に興味をもち、楽しんで活動できたことがわかる。また、ゲームを多く取り入れ、語彙の習得、語彙の活用を楽しんで活動できるようにしたことも適切であったと思われる。

○②の質問で「よくできた」と答えた児童が14人、「できた」と答えた児童が16人であった。人前で話したり、自分の意見を発表したりすることが苦手な児童が多いこのクラスにおいて、楽しみながらできるゲーム的な活動を通して「児童対児童」や「教師対児童」で会話を繰り返し学習したことは効果的であったと思われる。

●しかし、「もうすこし」と答えた児童が4人おり、語彙は覚えているものの、会話の場面では活動時間が不十分であった。児童の状況に合わせた時間配分や支援を検討する必要があると思われる。

●③の質問で「よくできた」と答えた児童が9人で、「できた」と答えた児童が13人であった。フラッシュカードを使った語彙の習得の際、日本語のプレイヤーと Player 等の発音の違いを楽しみながら活動を行ったものの、児童は～er, ～or,の日本語にない発音に苦労した。「もうすこし」と答えた児童が12人いたが、職業の語彙は～erの発音が多く出てくるので発音が難しいと感じている児童がいたのではないかとと思われる。

5 研究のまとめ

研究テーマ「外国語活動におけるコミュニケーションを図る楽しさを味わう授業の研究ー英語ノートを活用したプロジェクト型学習を通してー」に迫るため、「自分の思いを伝えられてよかった」と感じることを体験できる授業を研究してきた。英語ノートの単元をプロジェクト型に構成し、課題設定や効果的な授業展開について検討し、授業実践を行った。その結果、振り返りカードの自由記述から次のような感想が述べられていた。

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| ○ダンスが楽しかった。 | ○ダンスが上手になった。 |
| ○自分の考えが伝えられてよかった。 | ○たくさん交流できて楽しかった。 |
| ○友達の夢が聞けて楽しかった。 | ○友達と将来の話が英語でできてよかった。 |
| ○困ったが、何とか答えることができてよかった。 | ○ゲームが楽しかった。 |

どの実践例からも、多くの積極的評価や好意的な感想が述べられていた。児童の多くが活動内容だけではなく、いろいろな相手と交流することができたことについて楽しさを見出していたように思われる。また、簡単な会話だけでなく、自分の考えや工夫を練り上げたことを表現し、それを理解してもらえた喜びは、単に英語を表現できた喜びだけに留まらず、相互に意思疎通することができたという大きな充実感を味わうことができたと考えられる。

授業の展開について、「大まかな流れの設定」や「活動形態の工夫」、そして「習得から活用」というように段階的に場面を設定したことで、児童に負担を掛けるのではなく、

楽しみながら慣れ親しんでいくことができたと考える。

また、振り返りカードの自由記述では、次のような感想も述べられていた。

- | | |
|--------------------|-------------|
| ○ダンスを考えるのが難しかった。 | ○自分も真似をしたい。 |
| ○質問されてわからないことがあった。 | ○緊張して難しかった。 |
| ○英語の発音が難しかった。 | |

これらは、自分の思いをうまく英語で伝えることができなかったという反省と捉えることができる。身体表現や会話、緊張等については、経験や慣れ親しみによるところが大きいと思われる。今後も習得場面から活用場面での円滑な接続のための具体的な支援を検討することが必要であろう。

授業者からは、次のような感想が述べられた。

- | |
|--|
| ○プロジェクト型学習の効果は大きかった。子どもが意欲的に活動することができた。 |
| ○振り返りカードは、児童の実態を把握したり、今後の支援及び評価の参考として活用したりすることができ、有効であった。 |
| ○プログラム型（単発的な授業）と比べ、教材研究に時間がかかる。 |
| ○身振りをつけながら話すことは、英語の語彙の理解を促進するだけでなく、児童にとって日常の挨拶や会話にもいい影響が現れている。 |
| ○様々な人との交流場面があるので、発言の苦手な児童や関わりの少ない児童が活躍するよい機会となった。 |
| ○普段目立ちにくい児童が活躍する様子や熱心に取り組む児童の様子から、外国語活動に対する教師の苦手意識が「やってみよう」という意識に変容することもあった。 |

どの授業者からも児童が意欲的に活動し、コミュニケーションを図ろうとする姿が見られたと述べていた。また、教師が普段から簡単な英語を話すことや身振りをつけて話す姿は、児童にとってもよいモデルとなり、苦手意識をもつ児童にとっても英語に慣れ親しませるよい機会になると考える。さらに、外国語活動の授業を通して様々な学校生活の場面で影響を与えていることも再認識することができた。

これらのことから、外国語活動において児童に目標をもたせ、主体的に活動を進めさせるには、プロジェクト型の単元を構成することが有効であると考ええる。また、目標を達成するためには、活動に必然性が生まれ、最後まで積極的に取り組むことができると考える。さらに、このような体験を積み重ねていくことがコミュニケーション能力の素地を養う上で重要であると考ええる。

カリキュラム作成や教材研究において、相互交流を促進する要因が何かということについては今後の研究課題でもあるが、教師が個々に取り組むのではなく、研究の成果を共有し、それらを活用することができる環境を整備することが重要となる。

6 おわりに

本年度は、プロジェクト型の単元を構成し、英語ノートを活用しながら効果的にコミュニケーションを図る楽しさを味わう授業の研究に取り組んだ。授業展開や扱う内容については、課題に合わせて計画的に考案することができた。しかし、討議の中で困惑する事柄が出てきた時は、いつも子どもたちが目的意識をもって活動しているかということを確認

した。今後も児童に目的意識をもたせることができるよう「英語ノートを教えるのではなく、英語ノートで教える」教材研究を進めていくことが重要であると考え。

来年度より新学習指導要領の全面実施に伴い、全国で授業が行われることとなる。尼崎市では本年度と同じ授業時数ではあるものの、初めて実施される外国語活動は、注目される内容の1つである。外国語活動の趣旨について全教員が十分理解し、保護者へ理解を求めて行くことも重要となる。児童がいきいきとコミュニケーションを図りながら活動する授業を、効率的かつ効果的に行うことができるように今後も研究を進めていきたい。

<参考文献>

- 「小学校学習指導要領解説外国語活動編」文部科学省 2008
- 「英語ノート1」文部科学省 2009
- 「英語ノート2」文部科学省 2009
- 「英語ノート1 指導資料」文部科学省 2009
- 「英語ノート2 指導資料」文部科学省 2009
- 「『英語ノート1』完全対応指導ハンドブック1」英語ノート指導研究会 2009 開隆堂
- 「『英語ノート2』完全対応指導ハンドブック2」英語ノート指導研究会 2009 開隆堂
- 「小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価」東野 裕子・高島 英幸 2007 高陵社書店
- 「小学校英語教育の展開」樋口 忠彦（代表）2010 研究社
- 「小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編」兼重 昇・直山 木綿子 2008 明治図書

個別ドリルシステムの効果的な活用について

指導主事	田 中 東 吾
研 究 員	久 下 愛 美 (金楽寺小)
〃	合 内 瑠 美 (武庫の里小)
〃	眞 住 佳 那 (武庫の里小)
〃	宮 里 両 (立花西小)

【内容の要約】

平成19年度、児童の学力を向上させるために導入した「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」の効果的な活用法を研究する。今年は新たに漢字ぐんぐんを取り上げる。既習漢字の定着率が不十分の児童を数名抽出して、フラッシュカードを使って漢字の指導を行い、追跡してその変容を見ていく。様々な理由で漢字が苦手な子どもたちに、このシステムを活用した効果的な指導に取り組んだ。

キーワード：小学校，個別ドリル，漢字，フラッシュカード，学習効果

1	はじめに	37
2	研究の概要	37
3	効果的な活用実践	39
4	研究のまとめ	54
5	おわりに	54

1 はじめに

本市では、学力向上の取り組みの一つとして平成19年8月より「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を全小学校及び特別支援学校に導入した。これは計算や漢字の読み書きの力を習得するため、主に習熟度に応じた個別問題プリントを印刷して利用するものであった。

本年度は、H 2 1年度、すべての教室に50インチTVが設置されたことをふまえ、「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」の優れた系統性を利用し、高精度の残像が残せることで知識の習得の促進が図れるフラッシュカードを用いた実践に取り組む。

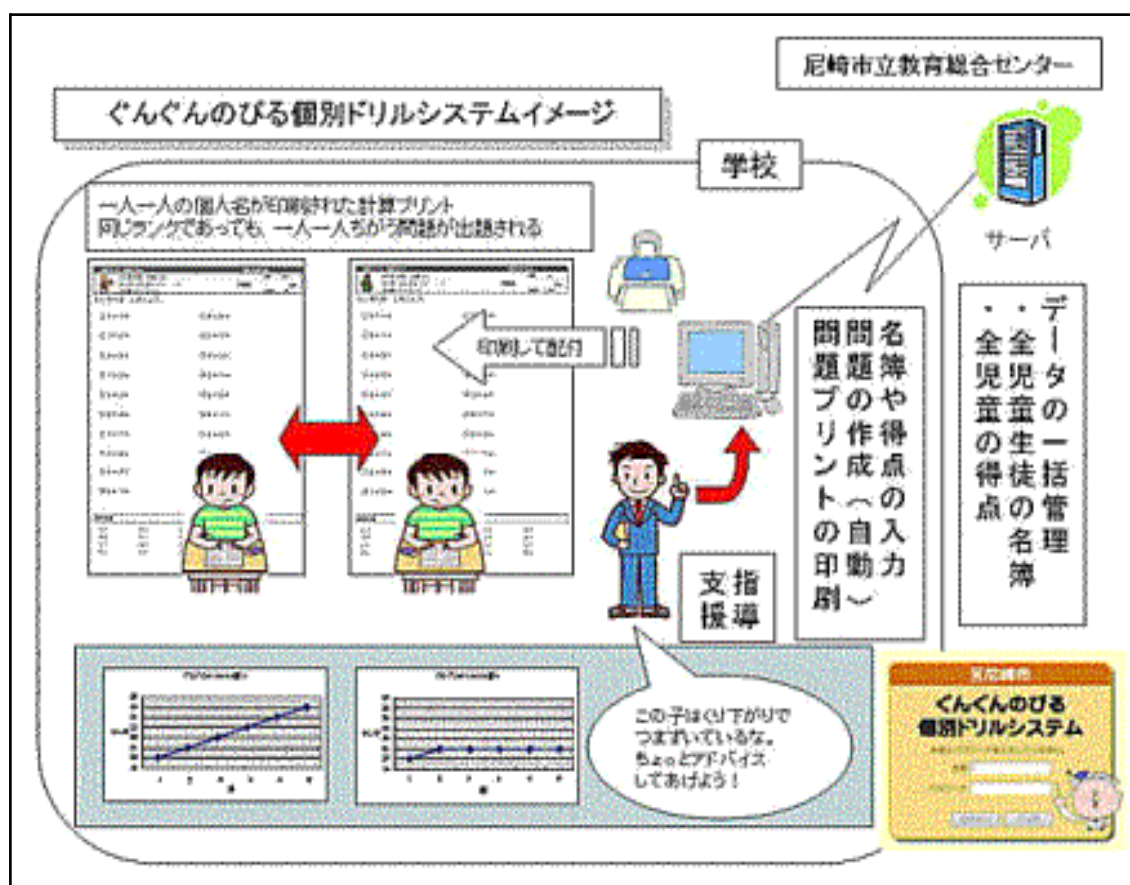
2 研究の概要

(1) 研究テーマ

「個別ドリルシステムの効果的な活用について」

(2) テーマ設定の理由

「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」(以下、「ぐんぐん」という。)は、個々の児童の習熟度に合わせて計算や漢字を繰り返し学習できるシステムである。授業進度に合わせて学習内容を定着させるために利用したり、個別指導のためのデータにしたり、繰り返し復習等に利用できる。(図1)



【 図1 「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」イメージ 】

一昨年度までの研究では、「ぐんぐん」の主たる機能である「個別問題プリントを印刷して利用する」ことについて、その効果的な活用方法を探ってきた。「ぐんぐん」を利用した児童・教員を対象にアンケート調査を行ったり、システムの初期設定の変更、学年や問題の難易度に対応する適切な実施時間の設定や実施問題数についての検討の他、「ぐんぐん」を実施した学級と実施しなかった学級において、同一の評価テストの結果による比較調査を行った。

比較調査の結果からは、児童の興味関心を持続しつつ、学習履歴を利用した、的確で、かつていねいな個別指導の実施が「ぐんぐん」をより効果的に活用する方法であることがわかった。

昨年度は、これまでの「個別問題プリントを印刷する」機能を利用した効果的な活用方法をさらに奥深く追求していくのではなく、この方法以外の機能を利用した効果的な活用について、「ぐんぐん」の活用の幅を広げるための研究を進めている。

今年度はこれまでとりあげてこなかった漢字領域での「ぐんぐん」の効果的な活用方法を探ることにした。漢字の習得率は計算と比較して個人差が大変大きいと感じる。例えば低学年で学習する加・減・乗法は、学年末にはほぼ全員がその計算法を身につけている。しかし、漢字の習得は、低学年でも得意不得意の差が見られ、漢字の意味をよく理解し読み書きともに定着している子と、漢字の意味はおろか、読み方すら修得できていなかったり、漢字をまったく使わず平仮名だけで表現しようとする児童も普通に見られる。このような違いは、計算の仕方を習得する算数と、意味、読み、書き取り、筆順など一つ一つすべての漢字について正確に記憶しなければならない言葉との本質的な違いに由来する。漢字の習得を苦手とする児童を学級集団から抽出・追跡し、ぐんぐんの漢字機能を使って効果的な指導法を研究する。あわせて、長期休業中の宿題プリント作成に、計算ぐんぐんの機能を使いその有効性を検証する。

(3) 研究の方法

- ① ア 学級集団の中から漢字の習得が不十分な児童を数名抽出し、各児童ごとにその学習傾向や定着率について調査する。
イ 「漢字ぐんぐん」のもつ機能を使い、研究部員がいろいろな方法で漢字の指導を一定期間継続して行う。
ウ 研究部員による学習指導を終えたあと、学習の前後を比較して、対象児童の変容の様子や漢字の定着率及び「ぐんぐん」による効果を明らかにする。
- ② システムの改善点を検討する。
ア 新教科書に合わせたランクの組み替え及び復習ランクの設定を行う。
イ システムの機能の改善を検討する。
- ③ 長期休業中の宿題プリント作成に、計算ぐんぐんの機能を使いその有効性を検証する。

3 効果的な活用実践

【実践事例1】 第4学年 国語科

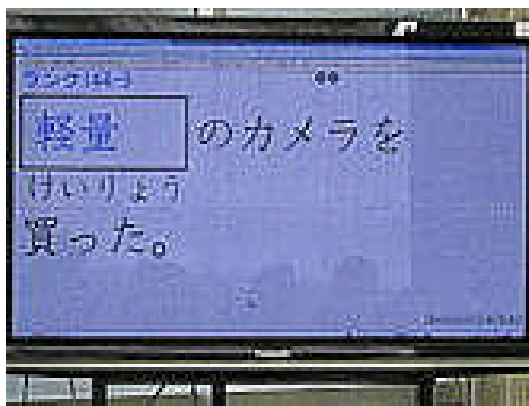
単元名:「すじ道を立てて考えよう」全7ランク（ランク138～150）

A 研究(調査)対象児童の抽出

- ・対象児童A…漢字に限らず、文字を読んだり書いたりすることに課題のある児童。真面目に宿題に取り組んでいるが、正しく視写することができない。平仮名ばかりで誤字脱字の多い文になる。音読は、拾い読み。漢字の定着率は10%程度。
- ・対象児童B…漢字の書き取りに課題のある児童。宿題に取り組んではいるが、適当に済ませることが多く、漢字を正しく書き取ることができない。誤字脱字の多い文を書く。漢字の定着率は40%程度。
- ・対象児童C…1学期は、正しく丁寧に書くことを面倒臭がり、宿題もきちんとできていないことが多かった。正しく漢字を読むことはできる。漢字の定着率は50%程度。

B ぐんぐんの活用方法について

- ・活用の期間…11月初旬から12月中旬
- ・活用の頻度…【調査対象児童】週3回 5分間
【クラス全員】週2回 7分間（書き取り練習）週1回（小テスト）
- ・活用方法
週2回朝学習と昼学習の時間に、クラス全員でフラッシュカードを使って漢字の書き取り練習を行う。練習する範囲は、その週にテストをするランクとする。フラッシュカードは、問題が出てから3秒後に答えが表示され、20秒後に次の問題が表示されるように設定した。書き取りを得意とする児童は、問題文を全て書き写し、苦手とする児童は問いの漢字や言葉だけを丁寧に書き写すよう指導した。担任がコンピュータの準備をしておけば、あとは学習係が操作して子どもたちだけで練習することができる。



【フラッシュカード 書き取り】



【クラス全員 書き取り】

調査対象児童を中心に休み時間に5分間、フラッシュカードによる練習を行う。書き取りの練習は全員で行っているのですが、ここではノートを使っている書き取り練習は行わず、漢字の読みを練習したり漢字を思い出すクイズのようにしたりして、児童の負担にならないようにした。



【フラッシュカード 休み時間の練習】

クラス全員で、練習したランクの漢字小テストを行う。4分間でテストを行い、3分間で答え合わせをした。フラッシュカードをテレビに映し、その場で子どもたちに答え合わせややり直しをさせた。

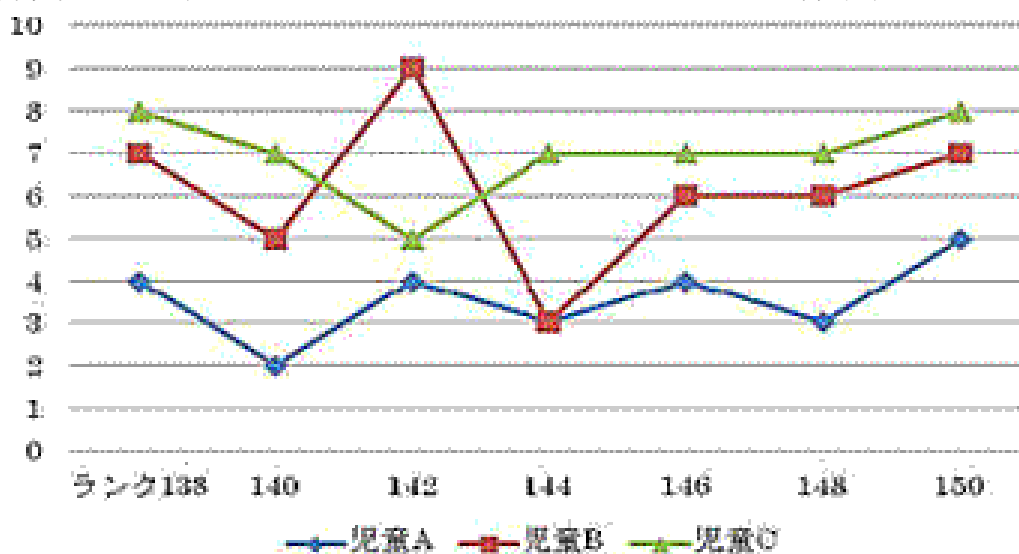


【漢字小テスト】

【漢字小テストの答え合わせの様子】

C 研究（調査）対象児童の変容

◆漢字小テスト（ランク138・140・142・144・146・148・150 計7回）



◆学期末50問テストの比較（1学期→2学期）

- | |
|---|
| ・対象児童 A … 14点 → 26点
・対象児童 B … 42点 → 56点
・対象児童 C … 50点 → 88点 |
|---|

漢字小テストの結果からは、あまり伸びを感じることができないが、対象児童の漢字の学習に取り組む姿勢は変わってきた。これまで漢字に興味を示すことはなかったが、休み時間に進んで「ぐんぐん」のフラッシュカードに取り組むようになった。テレビの前に椅子を並べて、解答するスピードを競ったり、答えをノートに書き写したりして練習していた。3人とも、宿題だけでは10問中5問正解するかどうかというところなので、対象児童BとCにとっては、「ぐんぐん」の効果があったと言えるだろう。

学期末の50問テストの結果は、対象児童全員の得点が上がっている。児童BとCは、小テスト同様「ぐんぐん」の効果があったと考えている。児童Aについては、「ぐんぐん」のフラッシュカードと小テストを活用して繰り返し取り組んだことで、少しずつ漢字を習得していったのではないかと考えている。

実践後、対象児童にアンケートを行ったところ、全員が「楽しく学習できた」「少し漢字が好きになった」と答えた。休み時間にフラッシュカードで練習をしている際には、対象になっていない児童も自主的に練習していることもあり、みんなで楽しく学ぶことができたようだ。「漢字を覚えることができたか」の質問に対しては、「少しだけ覚えることができた」と回答している。漢字に慣れ親しみ、楽しく学ぶことはできたが、漢字をきちんと習得させていくには、さらに取り組み方を工夫する必要がある。

（児童の感想）

対象児童

- ・画面の文字が大きく出たりして、とてもわかりやすかったです。休み時間に何回も漢字を読む練習ができてよかったです。
- ・ぼくは、漢字ドリルよりフラッシュカードの方が好きです。だんだん問題のスピードが速くなっていったけど、漢字を読むスピードが速くなったからです。
- ・ぼくは、休み時間に漢字の練習をしてドリルよりちょっとやりやすかった。遊びたかったけど、漢字を全然覚えてなかったからいい練習だと思った。

その他の児童

- ・テレビに漢字がうつるのがすごいと思い、自習の時に勝手に問題が出てくるから勉強に役立つと思いました。
- ・最初は、「おお、はやっ!」と思いました。でも、ずっとしていたらだんだん慣れてきて、わかるようになってきました。答えが出るスピードにも追いつけるようになってきました。
- ・テレビでやってよかったところは、何回か同じ漢字が出てくるし、わすれてた漢字などもでてくるから覚えることができた。
- ・フラッシュカードは、じゅくごが1つくらいしか出ないけど、漢字ドリルには5つ

- くらい出ているので、フラッシュカードももっとじゅくごをふやしてほしいです。
- ・フラッシュカードは、次々に問題が出てくるから、あせってしまって字がきたなくなってしまう。

D実践の考察

漢字を苦手とする児童の多くは、形を整えて正確に書くことに抵抗を持っている。そこで、休み時間の練習では漢字を書いて練習するのではなく、「ぐんぐん」のフラッシュカードを利用して「漢字を読む」ことから始めた。一人で黙々と漢字を書き写す学習ではなく、声を出して2、3人で楽しく学習したことで、対象児童の学習意欲を高めることができたのではないかと考えている。フラッシュカードで学習したことは、漢字小テストに出題される。そのため、ただ楽しむだけでなく進んで覚えようとする姿勢も見られるようになり、自分で紙を用意して苦手な漢字を書いて練習するようにもなってきた。フラッシュカードを利用することで、いつでも簡単に何度でも漢字を復習することができ、漢字を書くことに抵抗のある児童に大きな負担を掛けずに学習させることができた。

クラス全体で取り組んだフラッシュカードの書き取り練習については、初めのうちは次々と出てくる問題に戸惑う児童が見られた。漢字ドリルとは違い、自分のペースで取り組めないからだろう。しかし、回を重ねるごとに慣れてきて、問題を見逃さないように集中して取り組むことができるようになった。毎日少しずつ時間を決めて取り組むことができるので、簡単に漢字を復習することができたように思う。また、授業の始まりや終わりの5分間を利用して、漢字の読みの練習に取り組むこともできた。

E今後の課題

【ぐんぐんシステム自体の課題】

- ・学期ごとのまとめテストのようなものがあれば、定着を確かなものにすることができるのではないか。
- ・一つの漢字に対する言葉（問題）が少ないため、決まった言葉しか覚えることができない。いろいろな読み方や言葉を練習することで、日常的に漢字を使いこなせるようになるのではないだろうか。
- ・フラッシュカードの文字が細く、後ろの席の児童が見えにくそうにしていた。

【活用についての課題】

- ・教室でいつでもパソコンが使えるというわけではないので、個別ドリルを子どもたちに利用させることができない。
- ・個別ドリルのプリント学習に学校全体で取り組むとなるとパソコンやプリンタが足りないため、担任だけで対応することが難しい。基礎学力担当の先生などが中心となって推進していけば、無理なく取り組むことができるのではないか。

【実践事例2】 第4学年 国語科

单元名：「漢字辞典の引き方」全4ランク（ランク149～152）

「アジアの笑い話」全4ランク（ランク155～158）

A 研究（調査）対象児童の抽出

- ・対象児童A…宿題はしてくるが、漢字を書くことは苦手である。宿題で間違えた漢字を書いてくることも多い。ひらがなに関しても、「っ」や「を」の活用などが完全に定着しているとはいいがたい。漢字の意味についても理解は乏しい。漢字の定着率は10％程度
- ・対象児童B…宿題はほとんどしてこない。書くことが嫌いで、興味がない。宿題をしてきたときは丁寧な字を書くことができる。漢字の定着率は20％程度
- ・対象児童C…宿題はしてくるが、書くことに時間がかかる。丁寧な字を書くこともできる。時間をかけることで一時的に定着率はあがってくるが、忘れていくことも多い。漢字の定着率は40％程度
- ・対象児童D…家庭で宿題をする習慣がなく、毎朝学校で取り組んでいる。字を書くことが苦手であり、形や書き順に気を配ることができない。また、字を書くこと自体が嫌いである。漢字の定着率は40％程度
- ・対象児童E…宿題はほとんどしてこない。漢字の意味は理解しているが、興味を持って取り組まないために、漢字を書くことを苦手としている。漢字の定着率は50％程度

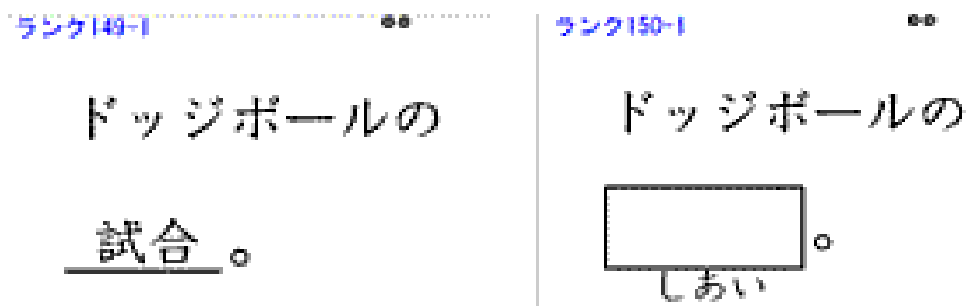
B ぐんぐんの活用方法について

活用期間 11月初旬から12月中旬

活用の頻度 週4回程度 5分間（授業の隙間時間）

使用方法

授業の始めか終わりの時間にフラッシュカードを使って漢字の視写を行う。練習するのは国語で学習中の単元のランクとする。フラッシュカードの出題更新間隔は15秒で自動的に次の問題に移るように設定する。答えの表示はしない。問題数は10問で、配布したプリントに問題文を全て視写する。全問終了後は回収して、答え合わせをして返却する。



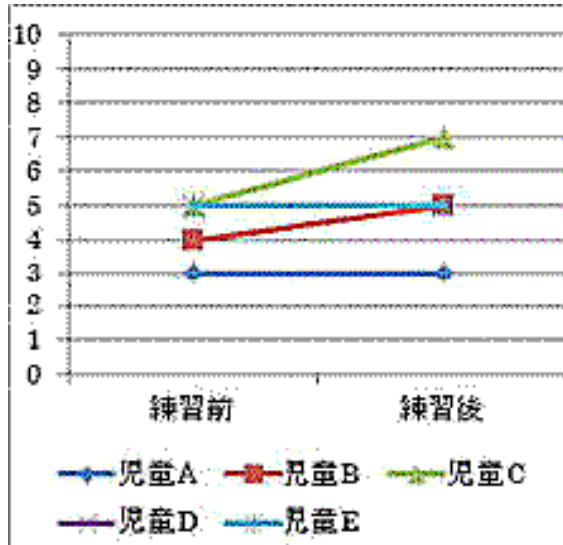
【読みの問題画面】

【書きの問題画面】

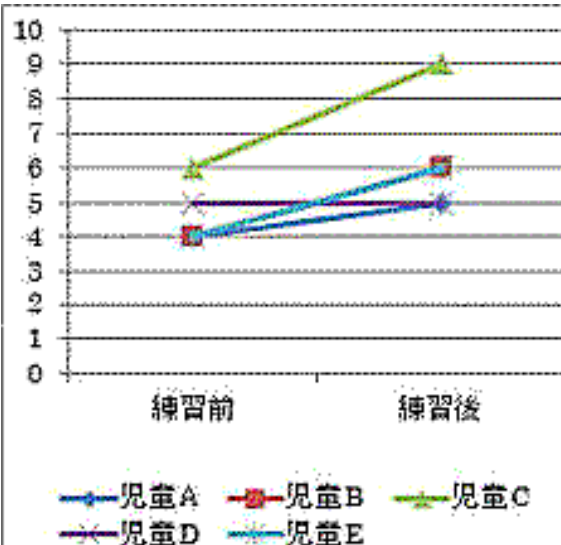
- ①単元の最初に書きの問題で実施をして、自分の現状を捉えさせた。
- ②読みの問題を週4回程度実施し、宿題をしてこない児童や書くことに興味を持たな

い児童に対して、正しい漢字を見て書く機会を増やすことで定着率をあげることを目的とした。返却時に間違いの多い箇所や、形の取りにくい箇所についての解説をおこなった。

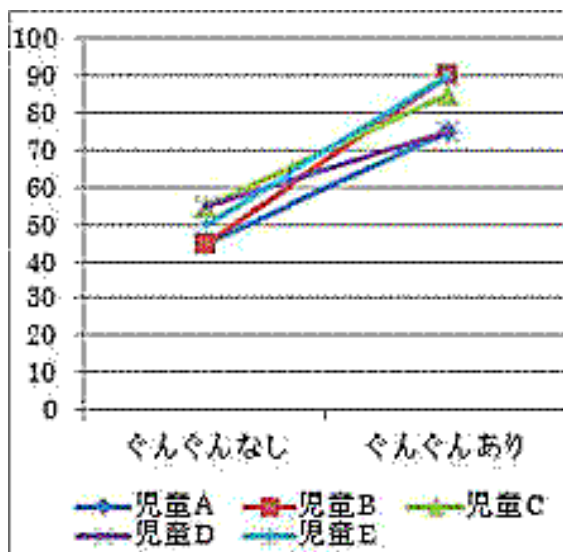
③単元の学習の終了時に書きの問題を実施した。



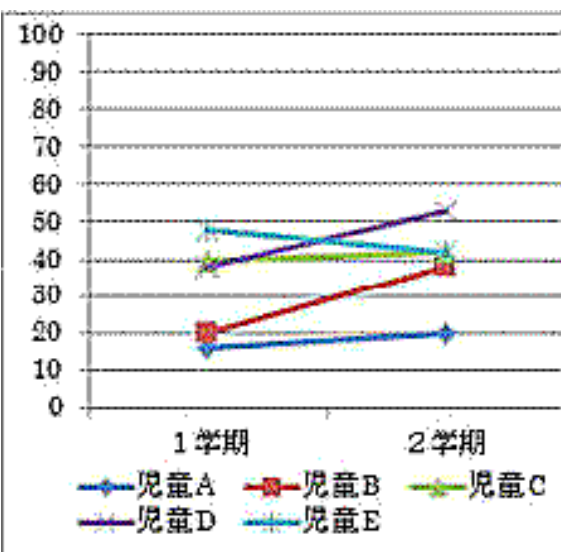
【ランク149～152の点数】



【ランク155～158の点数】



【単元の評価テスト2単元の合計点】



【学期のまとめのテストの点数】

C 児童の変容

フラッシュカードに取り組むまでは、宿題として漢字ドリルを使用した視写、学校での小テストが漢字学習の主な内容である。11月からは加えてフラッシュカードを実施した。

児童A

視写を繰り返しても点数には変化がないが、フラッシュカードの問題文の視写できる範囲が広がってきている。また、評価テストでは50点中45点、40点を取れるようになった。しかし、学期のまとめのテストでは大きな変化はなく、完全に定着してい

るとは言い難い。

児童 B

視写を繰り返すことによって点数はわずかであるが上昇している。また、単元の評価テストや、まとめのテストでも点数が上昇している。漢字の小テストも効果が見えつつあり、漢字を覚えようと、練習をするようになった。また、作文の中で漢字を使う量も増えてきている。

児童 C

視写を繰り返すことによって着実に点数が伸びつつあり、単元の評価テストや小テストの点数も上昇しつつある。学習している期間の漢字の定着率は上昇する。しかし、学期のまとめのテストにおいては変化が無く、覚えていた漢字も忘れてしまっている。

児童 D

視写を繰り返しても点数には変化がないが、フラッシュカードの問題文の視写できる範囲が広がってきている。評価テスト、まとめのテストでも点数が上昇しており、定着している漢字が増えてきている。漢字に興味を持ち始め、小テストで100点を取るための練習や、丁寧な字での書きとりができるようになりつつある。

児童 E

視写を繰り返し行うが、効果はあまり出ていない。評価テストでは点数が上昇している。しかし、学期末のまとめのテストでは点数が減少している。視写をすることによる効果はあまり見られなかった。



【フラッシュカードを取り組む様子】

(児童の感想より)

- ・何度も同じ字を書くことで、思い出すのが早くなってきた。
- ・最初は問題を書いている間に次の問題に移ってしまい、全部の問題をすることができ
- ・「議」のような難しい字は視写するのが難しかった。
- ・次々と問題が出てくるので、書くことに必死で覚えることができなかった。

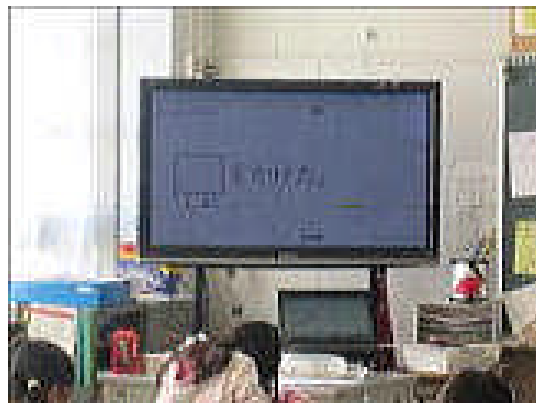
D 実践の考察

初めのうち子どもたちはフラッシュカードの問題を全て視写することができなかった。

回数を重ねることで書ける部分が多くなり、正確に視写できるようになってきた。また、正確に全てを視写するという目的が出てきたことで、さらに集中して取り組み続ける姿勢が見られるようになった。

また、視写をすることによって全員の単元の評価テストが上昇している。視写では時間が限られているが、評価テストでは思い出す時間がある。何度も同じ漢字を書き、集中してテレビに映る文字を見ていたために、定着率が上昇したと考える。

宿題をしてこない児童や、漢字に集中して取り組んでいない児童にとっては、集中して正しい漢字を見る時間が増える。こうした児童は学期のまとめのテストでも点数が上昇している。そのため、フラッシュカードの視写の効果が出やすいと考える。



【フラッシュカードに取り組む様子】

E 今後の課題

時間が限られた中では、漢字を思い出す間に次々と問題が進んでいく。また、全文を覚えて書くことは学力の低い児童にとっては難しく、形に気をつけるより、書くことに精一杯になってしまう。児童によっては視写する部分を限定するなどして、より正確な形を身につけさせるなどの方法を取るべきであったと思われる。

ぐんぐんシステムの課題

フラッシュカードでは問題のパターンが限られていて、一つの漢字に対して2, 3問程度しかパターンがない。見たことのある問題が多くなり、マンネリ化を感じている児童もいた。

学習している単元を視写をしている間はある程度覚えていた漢字を、次の単元に進むと忘れてしまう児童がいる。そのために計算ぐんぐんの練習ドリルにあるようなミックス機能を使用することで複数の単元の漢字を復習するために使うこともできるのではないかと考える。

【実戦事例3】 第1学年 国語科

单元名 : 「けんかした山」	全4ランク (ランク1から4)
「はたらくじどう車」	全6ランク (ランク5から10)
「うみへのながいたび」	全4ランク (ランク11から14)

A 研究(調査)対象児童の抽出

対象児童A

普段から字を雑に書き、特にひらがなが読みにくい。漢字ノートなどの宿題はしてくるが、学校で書く字よりも雑である。ゆっくりと丁寧に書こうとしない。そのため、「はらい」などの接筆もいい加減に書いていることが多い。「貝」と「見」など似た漢字を書くのが苦手である。同じ読みの問題が出ても、特定の読み方は何度も間違えている。数字の変化する読み方が苦手である。「四月」は「よんがつ」と読み何度も書き間違え、個別ドリルのランクがなかなか進まなかった。

対象児童B

文章を書くと「お」と「を」の使い方や「っ」を抜かして書くなどひらがなの書き間違いがある。習ってすぐはほとんど正しく漢字を書くことができるが、時間が経つと忘れていく。漢字学習への意欲はあり、夏休みに漢字を保護者と学習していた。しかし、なかなか定着しない。「見」は四画目を抜かして書いてしまう。数字の変化する読みが苦手である。「四角形」は「よんかくけい」と何度も読み間違えていた。

対象児童C

ひらがなを書くにも時間がかかる。文章を書くとひらがなの書き間違いもあるが、一文字ずつだと正しく書ける。宿題も毎日してくるが普段の漢字ミニテストやテストでは、書けないことが多い。丁寧に字を書くときもあれば雑なときもある。個別ドリルでは、読みの問題の同じランクを何回か不合格になり次のランクになかなか進まなかった。

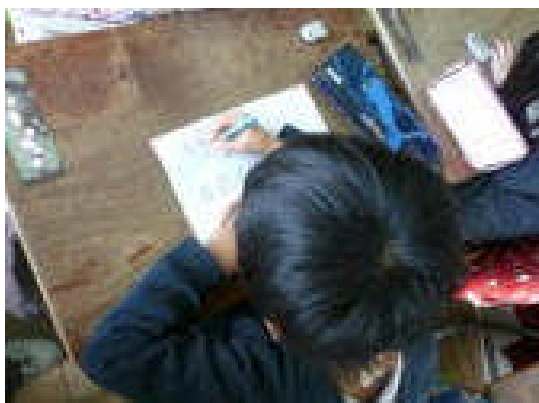
B ぐんぐんの活用方法について

- ・活用期間…10月下旬から12月中旬
- ・活用の頻度…【調査対象児童】週2日 10分
【クラス全員】 週2回 10分 (個別ドリルとフラッシュカード)

1年生は、漢字の学習は2学期から始まるので、個人がどれくらいのレベルか確かめるために、まず、印刷した個別ドリルを繰り返しさせて個人の定着を調べた。ほとんどの児童が一回で合格しランクを進めていったが、その結果同じランクにつまずいている児童を研究の対象とした。

対象児童たちは、休み時間にフラッシュカードを見て主に書き取りを学習した。フラッシュカードの出題更新間隔は児童の実態に合わせて手動で操作した。文を全て書かすには時間がかかるため、新出漢字のみ書かせた。

対象になっていない児童も新しく始まった漢字の学習に興味をもち、意欲的に学習していたのでクラス全体でもフラッシュカードを使い取り組むことにした。全員で文を声に出して読ませたり、一人ずつ指名して読ませたりして定着を確認した。また、フラッシュカードを見て書き取りもした。個別ドリルにも意欲的に取り組んでいたため継続して行った。



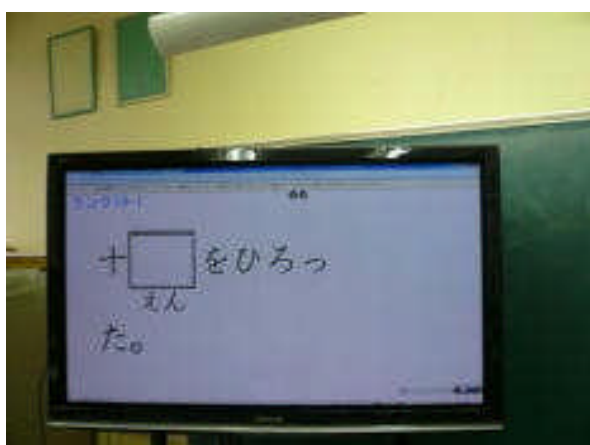
【休み時間の様子】

ランクトー

あ

あの山にのぼる。

【フラッシュカード 読み】



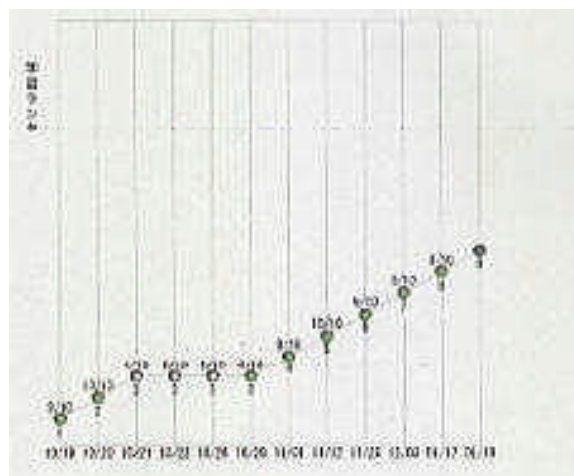
【フラッシュカード 書き取り】



【クラス全員 読み】

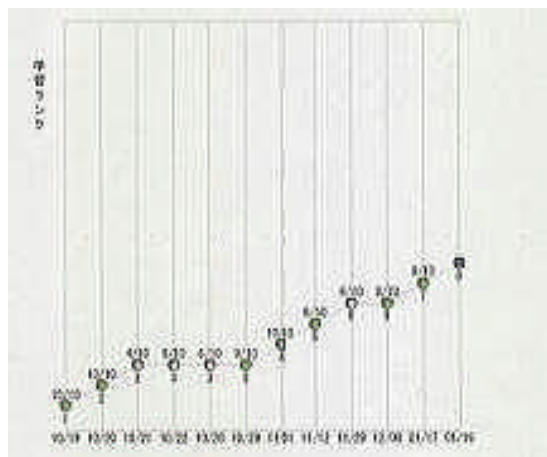
C 研究（調査）対象児童の変容
対象児童 A

個別ドリルを始めた頃に行った
ランク 3 の読みの問題が三回連続
不合格であるが、その後は不合格
が一度もなかった。ランク 5 の読
みは、満点合格であった。書きの
問題は、全て一回で合格している。
どちらも力をつけることができた。



対象児童 B

ランク3の読みの問題が三回連続不合格であるが、四回目では満点合格することができた。ランク5でも一回不合格になっているが、二回目で合格することができ不合格になる回数が減った。書きは全て一回で合格している。ランク6は満点合格であった。読み書きとも伸びている。



- ・漢字を書くときドキドキした。漢字をきれいにかけるようになりたい。

個別ドリルは、短時間で回答することができた。ランクを上げようと一生懸命粘り強く解くことができた。毎回一人ひとりに励ましのメッセージが印刷され、それを嬉しそうに読んでいた。友達とは違う励ましが書いてあることも嬉しそうであった。一年生でも読めるようにふりがなも書いてある。合格が続いているときと前回が不合格のときでは、励ましも異なっていた。

(合格が続いているとき)

- ・がんばってるね！
- ・次(つぎ)のステップめざしてがんばろう！
- ・ガンガンいこう！

(前回が不合格のとき)

- ・あわてない！あわてない！
- ・あせらなくていいよ！こつこつね！
- ・君(きみ)の実力(じつりょく)ならできるはずだ！

D 実践の考察

児童によっては、間違えて書く漢字はいつも同じであった。そのため、すぐに間違えた漢字を見直す必要がある。「漢字ぐんぐん」以外での学習でも支援していく必要がある。フラッシュカードは、答えを表示することもでき、今回はそれを使わなかったが児童に合わせて使っても良かったと感じた。

E 今後の課題

【ぐんぐんシステム自体の課題】

1年生が「漢字ぐんぐん」を使用できるのは漢字の学習が始まってからになってしまう。かたかなの「ぐんぐん」もあればさらに活用できるのではないと思われる。かたかなを正しく書くことは、かたかなを学習したばかりの1年生にとっては容易なことではない。フラッシュカードでかたかなで表す言葉をひらがなで表示し、それをかたかなで書くという学習が考えられる。また、フラッシュカードで読みの問題を作れば、かたかなを正しく読む学習にも役立つと考える。繰り返しかたかなの練習ができる。せっかくのシステムがあるので漢字以外の学習にも活用することができればと思う。

【実戦事例4】

「ぐんぐん」システムを活用した長期(夏季)休業中の課題(宿題)作成について

「ぐんぐん」システムは、個別ドリルシステムであるので、学級児童の個別の学習履歴や到達度等のデータを蓄積できる。このデータを利用して、学級児童の弱点等をとらえ、実態に合わせた休業中の課題(宿題)を作成することができる。以下その方法を紹介する。

システム利用の長所

- ・クラスや個人の実態に応じて簡単に問題を作ることができる。
- ・最大30問までできる。

- ・下学年の復習やレディネステスト、宿題としても使用することができる。
- ・目的に応じた問題の種類選択ができる。
- ・印刷の時に、一人一人違う問題にするか、文字の大きさをどうするかなど、詳細な設定をすることができる。

システム利用の短所

- ・問題の選択が一つの学年内ではできず、学年をまたがった問題は作成できない。
- ・問題を選択する際、上位のランクが画面上に出ず、選択できない所がある。(システム上の問題)

「ぐんぐん」システムを活用した長期（夏季）休業中の課題（宿題）作成方法
教師用の管理画面でログインする。



計算ぐんぐんか、漢字ぐんぐんかを選択した後、対象を決める。(今回は計算ぐんぐんを選択)

「ミックス」をクリックする。



問題の学年を決める。(例 1年生の問題を選択する場合は「1年」にする)



ランクと問題数を決める。各ランク毎に最大20問まで選択することができる。問題数の合計は30問。

練習ドリル

ランクおよび問題数を選択してください。

1年

ランク2: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク3: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク4: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク5: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク6: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク7: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク8: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク9: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク10: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク11: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク12: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク13: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク14: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク15: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク16: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク17: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク18: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク19: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク20: 1年生のたし算、この数が10まで

問題数

4問

8問

12問

16問

20問

24問

28問

32問

36問

40問

44問

48問

52問

56問

60問

64問

68問

72問

76問

80問

84問

88問

92問

96問

100問

合計30問まで

OK

練習ドリル

ランクおよび問題数を選択してください。

1年

ランク2: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク3: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク4: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク5: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク6: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク7: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク8: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク9: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク10: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク11: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク12: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク13: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク14: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク15: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク16: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク17: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク18: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク19: 1年生のたし算、この数が10まで

ランク20: 1年生のたし算、この数が10まで

問題数

4問

8問

12問

16問

20問

24問

28問

32問

36問

40問

44問

48問

52問

56問

60問

64問

68問

72問

76問

80問

84問

88問

92問

96問

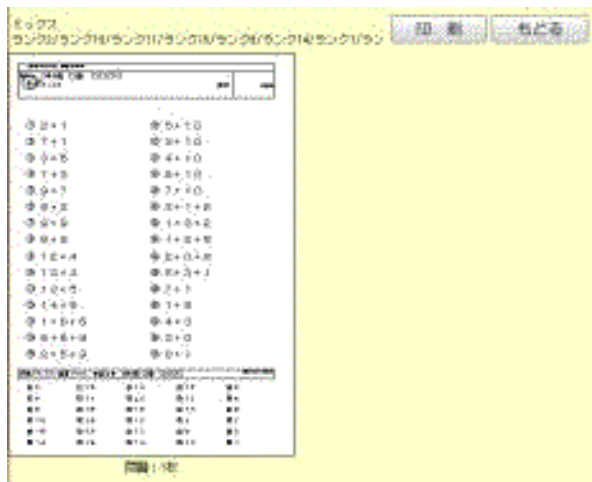
100問

合計30問まで

OK

印刷の形態を選択する。全て選択後、「印刷プレビュー」をクリックすると、どのように印刷されるか予め見ることができる。

- ・個別か、一斉か、1枚のみか（個別と、一斉は児童の名前入り）
 - ※個別、一斉の場合はどの児童を印刷するか、「印刷対象者」をクリックし、児童名の横の「する」「しない」をクリックして選択する。
- ・答えの有無、表示方法
- ・問題の列数
- ・文字の大きさ



印刷する。

※これは、1まいのみ印刷で、答え付き



4 研究のまとめ

今年度は高精度の残像が残せるフラッシュカードを活用した「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」の漢字学習機能を取り上げた。クラスの中から漢字学習が苦手な児童を数名抽出し、「ぐんぐん」の秀でた系統性を活用し、有効性を検証した。

漢字を苦手とする児童は、もともと書くことに抵抗があったり、ドリルを使ってこつこつ書き取りを繰り返したりするような単調な学習では、意欲を持続することが難しい。いくらがんばって漢字練習を繰り返しても、結果が出なかったり、ほめられなかったらモチベーションは下がっていく。その結果、漢字に苦手意識を持ち、やりたくないという気持ちが芽生え、やらない、またできないという負のスパイラルに陥ってしまっていた。その点「ぐんぐん」のフラッシュカード機能は、表示される画面が時間の経過とともに変化していくので、「次に表示される漢字は何か？」「書けるかな？」と常に漢字学習に対して新鮮に取り組み、児童の関心意欲を刺激することができる。漢字が不得意の児童の中で、特に文字を写したり文を書くことが負担になる児童には、表示されたフラッシュカードを大きな声を出して読ませるだけでも効果的であることがわかった。また、フラッシュカードで表示する時間に制限を加えることで、短時間に漢字を観察したり、視写したりする必要性がでてくるため、児童の集中力が高まってくる。更に、個別ドリルでは、テストの結果によって一人ひとり違った励ましの言葉があり、普通の漢字ドリルではできない支援を行うことができる。このような「ぐんぐん」固有の機能が、漢字を苦手とする児童に興味・関心や集中力を高め、その結果練習時間を増加させ、漢字の力を伸ばしていくと考えられる。

5 おわりに

本研究は、平成19年度から取り組みを継続して4年目となる。システムも少しずつ進化している。今年度の研究結果を追加してシステムを改善させるとともに、システムの利用を高める取り組みが必要である。また、フラッシュカードのDVDでは、絵と音声の同期、言葉のイントネーションやアクセント、児童の好みの音楽なども付加することができるため、児童にとってよりよい教材として開発する余地が残されている。今後の課題としたい。

小中の効果的な連携を図る

－小学校の外国語活動を土台にした中学校の英語科教育の指導の方法－

指導主事	兼 田 隆 男
研 究 員	松 田 年 正（武庫中）
〃	吉 木 摩 耶（小田北中）
〃	濱 田 智 子（大庄北中）
〃	平 井 優 子（園田中）

【内容の要約】

小中の効果的な連携を図るために

- 1 小学校の外国語活動の内容について知る。
- 2 小学校の外国語活動で養われたコミュニケーション能力の素地をどのように中学校1年生で伸ばしていけばよいかを探る。
- 3 これからの英語教育の充実に向けた小学校と中学校との連携の在り方を探る。

キーワード：小中連携、音声から文字へ、表現から文法へ、2技能から4技能へ、
出前授業、情報交換、入学時英語力把握試験、滑らかな接続

1 はじめに	55
2 研究テーマの設定理由	55
3 研究の内容	56
(1) 小学校の外国語活動	56
(2) 中学校1年生での指導の在り方	59
(3) 小中の連携の仕方	63
4 研究のまとめ	68
5 おわりに	69

1 はじめに

小学校では、平成23年度から新学習指導要領が全面実施される。その新学習指導要領で外国語活動も実施される。目標は「外国語活動を通じて、言語や文化について体験的な理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」である。中学校では、英語の音声や基本的な表現に親しんだ生徒を指導することになる。

中学校においては特に1年生の英語指導について、従来の指導内容、指導方法を見直す必要がある。そこで、本年度の英語科教育研究部会の柱を、①小学校の外国語活動の内容について知る、②小学校の外国語活動で養われたコミュニケーション能力の素地をどのように中学校1年生で伸ばしていけばよいかを探る、③これからの英語教育の充実に向けた小学校と中学校との連携の在り方を探ることの三つとした。

英語科教育においては、これから小中の連携を図り、子どもたちの英語力を伸ばしていくことが重要な課題になる。そのためにはまず中学校の英語教員が小学校の外国語活動でどのような内容が、どのような指導によって行われているのかを把握する必要がある。そのため外国語活動の授業を参観し、外国語活動に関する資料を収集することが大切である。次に、コミュニケーション能力の素地が養われた生徒を、その素地を土台にしてどのようにステップアップしていけばよいのかを探るため、外国語活動で養われた英語の素地を生かして、さらに英語力を伸ばしていくための授業改善について検討する。また、中学校に入学して、文法中心の授業だけになると、生徒の負担が大き過ぎることになるので、大きな負担がかからない滑らかな接続をめざした指導についての配慮が必要であると考えます。

小学校での外国語活動は始まったばかりで、小学校でも中学校でも戸惑いがあるのは事実である。その戸惑いを解消し、外国語活動、英語教育において大きな成果を生み出すためには、小中の連携が重要である。今後、どのようにして小学校と中学校が連携を図っていけばよいかを探ることは重要な課題である。

2. 研究テーマの設定理由

英語は中学校で初めて学習するものでしたが、現在では全国的に小学校から外国語活動として取り組むようになった。文部科学省で実施している「公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査」の平成21年度分において、外国語教育の推進に関する小中連携の状況を、「情報交換(指導方法などについての検討会、合同研修の実施)」「交流(授業参観、中学教員による小学校での授業)」「小中連携したカリキュラムの作成」の3つに分類した上で、平成20年度における各中学校区での取り組み状況を次のように報告している。このような小中連携を実施したと回答した校区は全体の46.7%であり、平成20年3月の新小学校学習指導要領告示によって小学校に外国語活動が導入されることが明らかとなった段階での状況であることを考えると、まだ小中連携の必要性の認識が低かったことがわかる。その平成20年3月に小学校指導要領と同時に公示された中学校学習指導要領(第9節「外国語」)では、「(第1学年における言語活動では、)小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としてコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ」て指導すると、小中の継続指導、連携が初めて明記さ

れた。児童・生徒に英語指導を行う場合、連続体として計画を立てる必要があるため、小学校において体験しておくべき内容を明らかにし、個人レベル以上の取り組みを組織化させる必要がある。市内の学校の英語科チームや、近隣の学校間、通学区内の小・中学校間での共同の取り組みが、効果的な連携を図るために必要になってくる。

3. 研究の内容

(1) 小学校の外国語活動

小中連携をスムーズにするために、まず現在の小学校英語活動の実情を探ることにした。1999年のケルン憲章で外国語教育の増進が謳われ、日本でも平成23年度から小学校での外国語活動の実施が決まった。それに先駆けて英語ノートを中心に、5年生時から外国語活動を取り入れている小学校が多い。また、それを見越してもっと早い時期から「総合的な学習の時間」として国際理解の教材を扱っている小学校もある。

1. 小学校外国語活動の状況

本市では年間10時間ほど全ての小学校にALTが派遣され、日本人教員とのチームティーチングを行っている。英語ノートを中心に授業を展開している学校がほとんどであるが、小学校によって外国語科専科の教員がいるところや、日本人教員2～3人体制で授業をしているところもある。導入として歌や踊りやゲームを取り入れたり、また英語ノートとは別に、色や月日など、1つのカテゴリの単語をイラストやチャンツを用いて指導したりしていることも見受けられる。

授業では、多くの小学校で、4年生時に学習したローマ字で自分の名前を書いた名札を使っていた。首にぶら下げたり、名札として机の上に置いたり、と用途は様々である。

そして“I want to go to ～.” “I want to eat～.”といった中学2年生で習う不定詞などの表現も、身近な会話表現として授業で取り上げられ、実際にALTと児童との会話が繰り広げられている。新学習指導要領に則り、英語の文字を書くという活動はないが、イラストと文字が一緒になったピクチャーカードを活用している。そのカードを見たり、あるいはカードを用いずとも、ALTの後に続いて音声練習を繰り返し、最終的には自分の意見を加えて発表するという指導計画になっていた。ALTは単語に体の動きをあわせて、児童が正しい英文を言えるように工夫し、子音の発音にも丁寧な指導を行っていた。英語ノートを用いた座学もあるが、友達へのインタビュー活動や学習した表現を用いての活動を授業の一部に取り入れていることが多い。外国人講師が中心となって指導している場面もあるが、日本人教員はそれにあわせて教材研究を行い、クラスルームイングリッシュを多用するよう心がけている。

また、中学校の英語科教員との夏季休業中の研修会など、授業改善に取り組む機会も多く設けられている。

平成22年度の阪神地区中学校教育研究会英語部会総会・研究大会（伊丹大会）では



黒板にはイラストやセンテンスカードがたくさん貼られている。

初めて、中学校の授業に加えて、小学校の外国語活動の公開授業が実施された。担任と英語指導員の2人体制で授業を行っており、参加者から大変注目をあびていた。協議会では、資料として伊丹市教育委員会による小学校外国語活動年間指導計画が配布された。

教室の中には四方にわたって、様々な英語に関するイラストやピクチャーカード、英語の絵本などが色鮮やかに飾られていた。また授業が始まる前から教材のCDが流されており、英語学習の雰囲気がより一層作り上げられていた。児童は全員、ローマ字で書かれた手作りの名札を首からぶら下げ、英語ノートを持参していた。

授業の導入はCD付きのチャンツが用いられ、日本語と英語の発音を比較して練習する方法が使われていた。この教材は単発的ではなく、継続的に普段から使用されている。授業は、話す、歌う、聞く、見る事が中心で、英語の文字を読むことや書くことは伊丹市でもあまり行われていない。英単語やフレーズなどは、教員がジェスチャーを多用して紹介し、児童はそれを推測して表現内容を理解していく。英語指導補助員が指示を出す時は、徹底的に英語を用いている。担任は、必要に応じて補助員のフォローをしたり、授業の進行を担当している。

今回の授業の単元は、インタビューシートを使って、1日の生活を紹介しようという内容だった。ワークシートにはイラストと共に、英語の文字も載っているが、子供たちが記入するのは、日本語や記号、あるいは数字などである。最初に全員で十分練習した後で、ペア練習、グループ練習と段階を踏んでから全員でインタビューし合うようになっていた。児童たちはその指示通りに、慣れた様子でインタビューを行い、参観していた外国人の先生にも躊躇せず話しかけていた。

全体として、教員は最初から最後までジェスチャーや踊りなどを行い、活力溢れんばかりの様子で50分間進めており、児童たちは「英語を学ぶ・教えてもらう」というより、むしろ歌や踊りや、その他数種類のアクティビティを使いながら「体全体で英語を楽しんでいる」という印象を受けた。

2. 小学校外国語活動の考察

全国的に広がっている小学校の外国語活動、主に英語活動における各取り組みを検証した結果、次のように特徴をまとめることができる。

第一に、全体を通して「勉強」という硬い空気ではなく、コミュニケーションをとるための手段として英語を使っているということが挙げられる。英語を実用性を抜きに学ぶのではなく、コミュニケーションを図る道具として

黒板の上には、世界遺産の写真



左が学級担任・右が指導補助員
黒板にはキーセンテンスのカードが貼ってある。



今までに英語の授業で自分の行きたい国について調べており、その発表の写真が飾られていた。



の意識を高くするという内容が多い。これは「英語だけを教えるのが目的ではない」と小学校新学習指導要領に明記しており、英語ノートもこれをもとに作成されていることから見て取れる。教材をもとに、他国の生活習慣や文化を知って国際感覚を養い、そのうえで自分の行きたい国について調べて発表したり、また逆に自国の文化や習慣を調べて比べてみたりと、英語を使った国際理解・自文化理解が授業の中心となっている。



次に、ALT、あるいは指導補助員の指導のもとで、CDなどの音声教材を使用して、英語の子音にもこだわった発音指導をしている。外国語活動には教員による評価が必要ではないため、児童たちも英語を恐れることなく使うことができる。音声活動では単に座って発音を聞いて復唱するだけではなく、体全体を使って練習したり、インタビューなど児童が英語を使って活動したりする工夫をしている。

全体的に外国語活動は、子供たちにとって学習ではなく「慣れ親しむ」時間となっている。そのため、中学校に入学してきた生徒は、ある程度の単語や文が、書けないが口頭では言える状態であり、外国事情に関しても今までの生徒よりは知識が高く、またそれを知ろうとする意欲も高いと考えられる。そのような生徒たちにどのように中学校の教科としての英語を学ばせていくかは、入学してくる生徒が変わっている以上、再考する必要がある。ただし、複数の小学校が集まる中学校では、小学校の時に何を覚え、どのように英語に慣れ親しんだかが異なることも考えられるので、しっかり生徒の学習状況を把握して指導にあたらねばならない。

私たちが調べた外国語活動の内容を整理する。

- 挨拶は英語で行っている。
- 英語の歌を、踊ったりしながら、学習している。
- 英語ノート1と2を活用して、英語表現に親しんでいる。
- 身近にある単語について学習している。
- 好きな物、持っている物などを英語で表現できる。
- 日常生活に関する簡単な表現を学習している。
- ALTの英語での話を聞くことに慣れている。
- インタビュー活動などの活動に慣れている。
- 国際理解に関する学習が行われている。
- ピクチャーカードなどを活用した学習を行っている。
- 児童が英語を使って表現する活動が多く行われている。
- 校舎内に英語の案内掲示が数多く掲示されている。
- チャンツを使った表現練習に慣れている。
- 音声教材やテレビ教材を使った学習に慣れている。
- 英語を聞くことによるゲームなどの活動を行っている。
- 文法的な正確さは求められていない。
- ゲームなどの活動を通して、楽しく英語を学習している。

○学級、小学校によって活動内容は様々である。

(2) 中学校1年生での指導の在り方

小学校で外国語活動が導入されてから数年たち、その指導を受けた子どもたちが中学校へ入学して英語を学んでいる。

英語を中学校で初めて学ぶ子どもたちと、小学校で英語活動を経験してきた子どもたちというように、子どもたちの方は大きな変化があるにもかかわらず、中学校で指導する側の教員の意識には大きな変化はない。

しかし、授業を受ける側の子どもたちが変わっている以上、指導する立場の教員も意識を変え、指導方法、指導内容を改善していく必要がある。また、そうすることでより効果的に英語を指導することができる。

ここでは、子どもの変化、小学校外国語活動と中学校英語との違いに着目しながら、より良い指導法を探り、提言したい。

1. 中学校での指導の留意点

研究のため小学校外国語活動の授業を参観し検証した。実際に参観することで、小学校での指導の様子がわかってきた。その内容は前章にある通りである。想像以上にレベルの高い文法や多くの単語を扱っている。その指導を中学校での指導につなげたいものである。小学校の指導内容や指導方法から、中学校での留意点を挙げる。

中学校で英語を学ぶ上で予想される利点と中学校での指導の在り方

- ・簡単な挨拶、天気や曜日の言い方、数の言い方などを学習している。
- ・教員が英語を話すのを聞くことに慣れており、意味がわからない言葉を聞くことに抵抗が少ない。
- ・Classroom English に慣れている。



→教員が英語を話すのが当たり前、というふうに授業の最初から英語で挨拶をし、細かい説明をする必要がないだろう。新しい表現を使ったときにも、あえて説明を加えずに授業をし、様子を見ながら、必要ならば易しい表現の英語やジェスチャーを用いて説明するなど、日本語での説明は最小限にしたい。

→外国語活動で子どもたちは、英語を聞き取ることにかかなり慣れてきているので、中学校英語教員はこれからは努めて英語で授業をしていきたい。高校でも英語による授業が行われるようになるので、それに向けた準備にもなる。

→話される英語の全てを聞き取り理解することができなくても、一部を聞き取ることで、相手の言いたい内容を類推する姿勢を育て



たい。

→中学校でも外国語活動を引き継いで、たくさんの英語を聞かせたい。その時に、絵を見せながら、英語を聞かせると効果的である。

・外国人英語指導助手に慣れている。

→なるべく早い段階から外国人英語指導助手にきてもらい、自然な形で生徒に慣れさせたい。

→ALTと事前に打ち合わせをしておき、なるべくALTと日本人教員が英語で会話をすることで、より自然な英語を多く聞かせたい。

・英語を使うことを楽しんでいる。

・人前で英語を話すことに慣れている。

→小学生の間はよく発表していたのに中学生になると、とたんに発表しなくなる生徒が多い。そうなる前に、英語の授業で発表したり、声を出したりすることが自然に続けられるように、意識して生徒に発表や発言、発声の機会を多く与えたい。

→中学校に入って、英語の授業が書くことや文法中心の授業になると、「英語は難しい」、「英語は嫌い」と言う生徒が増える可能性がある。小学校外国語活動で体験してきた活動も取り入れながら中学校英語教育への滑らかな橋渡しをすることが大事である。

→生徒は、英語を話すことには慣れているので、英語を話す活動を多く取り入れ、話す能力を評価することも積極的に行っていきたい。

→中学校では外国語活動をステップアップするために、知的発見ができるような授業をしていきたい。その為には、日々生徒の興味・関心について知る努力をし、授業の中で新しい知的発見があるように教材を工夫することが必要である。

・ゲームに熱中できる。

・英語の歌を歌ったり、踊ったりすることが自然にできている。



→英語の歌を大きな声で歌ったり、体を使ってチャンツをしたり元気よく参加する児童が多いので、中学校でも大いに取り入れたい。

→ゲームは中学生も好きである。小学校ではロールプレイング的な活動が多い。定型のセリフだけでなく、できるだけたくさんの発話が自然に出るように指導したい。

→中学校1年生では、特に楽しく英語を学習できるよう工夫をする必要がある。

・「英語ノート」には中学校で学習する多くの文法事項が紹介されている。

→小学校で、中学校2年生や3年生の教科書で学習するような表現がいくつも見られる。せっかく触れたことがある表現も、時間がたつと忘れてしまうであろうから、教科書に出てくるのを待たずに、1年生初めのうちから教員が意識を持って授業中に多く使いたい。

・多くの英語の単語、またその音を知っている。

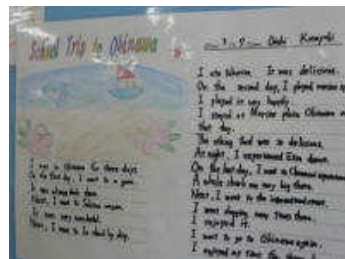
→これまで英語活動を小学校で受けてこなかった生徒に比べると、現在、小学校では子どもたちに非常に多くの英語に触れさせており、単語を教えている。その単語をベースにして、会話をバラエティに富んだものにしたい。

→音声と文字を結びつけるのに、知っている単語から扱っていき、場合によってはフォニックスを試みるのも良いだろう。音声面では多くの単語に触れているので、中学校1年生では工夫を凝らして、音声から文字へと指導をする必要がある。

→英語は音が命である。中学校では、可能な限り英語らしい発音をマスターさせてから文字を指導していきたい。

・小学校では英語の掲示物が充実している。

→英語教室を英語の掲示物などを掲示して英語学習環境作りをする。アルファベット、動物、身の回りの物、学校生活にある物、国旗など様々なポスターなどを教室に掲示して英語学習環境作りによって、英語の学習へのモチベーションを高めることができる。



→校舎内の案内などの掲示物を英語でも掲示することにより、学校全体を英語環境にすることができる。

・簡単な表現を話すことができる。

→中学校では書くことの指導をしなければならない。そこでAED（尼っ子英語辞典）を活用して書く力をつけることができる。

例：「好きなことをたくさん書きなさい」、「自分が持っている物をたくさん書きなさい」という課題を与えて、AEDを見ながら、たくさんの英語を書いていく。

1分間で何文書けるかに挑戦する活動などがある。

→理論より先に、実際に英語を使った活動を十分に行った後に、説明をするという順番が大事である。

中学校で英語を学ぶ上で心配される点と中学校での指導の在り方

- ・ speaking能力とwriting能力の乖離。
- ・ 「小学校では英語が楽しかったのに中学校は難しい。」

- はじめに生徒がつまずくのが単語の綴りだと思われる。発声するだけで良かったものを文字にしなければいけないということは、生徒にとっては大きなストレスとなりかねない。それをストレスと感じさせずに、ゲーム的な要素やフォニックスを取り入れるなどして、少しでも負担なく楽しく導入したい。
- 小学校ではspeakingに重点をおいて指導されているので、中学校では4技能をバランスよく伸ばすことができるように指導したい。
- 日記をつける、英文の丸暗記、スピーチ、文字のカードゲームなどを日常的に取り入れることで楽しく学習できる。
- スパイラルな指導を取り入れる。外国語活動では、英語ノートを使った活動も行っているため、授業の中でも英語ノートや外国語活動で親しんできた単語を使用するなどの工夫も大事である。生徒はそれらの学習で英語の授業に親近感を抱き、中学校の英語の授業を身近に感じることができる。

- ・ 「教科としての英語」への戸惑い。

- 小学校英語においては、伝えるということを重視しており、あまりに徹底した文法指導は、児童の学習意欲を削ぐ恐れがあるという配慮のもと、あまり細かい文法の間違ひは指摘しないことが多い。よく見られるのが、冠詞や三人称単数現在形のs、複数形、助動詞などの使い方の間違ひである。小学校段階では正確な文法を徹底させないとしても、中学校では正しい文法を指導しなければいけない。教員は難しい説明を多用するのではなく、生徒の興味を喚起したり、知的発見を与えるような工夫をして、モチベーションを下げることなく学習させたい。
- 文法用語は最小限にとどめるべきであるが、中学校卒業後の英語学習を考えると必要な文法用語は指導しなければならない。
- 小学校と違い、点数化された成績をつけなければならない。そこで英語が嫌いにならないように、評価も会話口頭試験、聞き取りテストや書き取りテストなどを工夫して取り入れ、英語の綴りを覚えたりすることが苦手な生徒も頑張れる仕組みを作りたい。

- ・ 学級、学校によって外国語活動の学習内容が異なることがある。

- 中学1年生時の4～5月に生徒の英語力を知るために授業中に観察することが大事である。生徒の英語力を把握し、進度、指導内容も調整を行い、以後の指導計

画を見直していくことも必要になる。

2. 中学校入学時の試験・アンケート

小学校により、学習内容が多少異なることがあると思われる。外国語活動の学習内容、英語力、英語への関心度を把握するために入学時に試験やアンケートをすることを提言したい。

その内容について留意点などを列挙する。

①試験

- ・アルファベットを聞いて、キーボードの文字に触れる、又は選択させる。
- ・英文を聞いて、表している絵を選ぶ。(物、表情、国、動作など色々できる)
- ・イラストを見て、聞いた単語と一致しているか○か×で答えさせる。
- ・ローマ字が読めるか。ひらがなで答えさせる。
- ・時間を英語で聞いて、時計を完成させる。(数字が聞き取れるか)
- ・数字を含む英語を聞き、その数字を日本語でメモする。
- ・英語の指示を聞いて、その通りに絵を描いてみる。
- ・教員の発音したとおりにリピートさせる。
- ・自己紹介の英語を聞き、その内容を日本語でメモする。
- ・英語で予定を聞き、重要な部分を日本語でメモする。
- ・英語の会話文を聞き、要点を日本語でメモする。
- ・T Tの授業で、片方の教員が授業を行い、もう片方の教員が生徒を一人ずつ抽出して英語で簡単な会話テストをする。ハーフクラスでも会話テストは実施しやすい。
- ・教卓に来させて、何種類か用意した日本語の表現カードを見せて、その内容を英語で言わせる。他の生徒はプリント学習をさせる。
- ・「先生に英語で聞いてみよう」。教卓で教員に先生のことを英語で聞かせる。他の生徒はプリント学習をさせる。
- ・自分の名前をローマ字で書かせる。

(留意点)

基本的には、文字を読んだり、書いたりする試験はしないこと。

②アンケート

- ・英語に関して、何でもいいから知っていることを書かせる。
- ・外国のことで、何でもいいから知っていることを書かせる。
- ・小学校の外国語活動で学習してきたことを書かせる。
- ・中学校で英語の授業で学びたいことや望むことを書かせる。

(3) 小中の連携の仕方

1. 実践事例の紹介(他地区の実践内容)

①事例1(宮城県七ヶ浜町の「七ヶ浜ジョイント5」)

平成21年度の「英語教育改善のための調査研究事業」(文部科学省)において調査研究を行い、さらに今年度により「研究開発学校」(同上)の指定を受けて引き続き

研究に取り組んでいるのが宮城県七ヶ浜町である。町内には、亦楽・松ヶ浜・汐見の3小学校と、七ヶ浜・向洋の2中学校があるが、「外国語活動会議」というものがあり、小中で連携して協議する習慣が継続的に行われている。

このように小学校における外国語活動から中学校の英語科へのスムーズな接続を図るための環境が、この町独自の取り組みである「七ヶ浜ジョイント5」の中である程度形成されている。小中連携に欠かせないのが「情報交換・意見交換」であり、それを通じ、互いの指導内容や指導方法について知ることができる。小学校で扱った話題、言語材料(表現・語彙)などの一覧の資料があれば中学校に提供するとよい。また、国が提供した『英語ノート』、教員用指導資料などを小・中学校で検討し、カリキュラム作成などにおいて連携を図ることも大切である。

七ヶ浜町のように、中学校区において情報交換や意見交換レベルでの小中連携を図るために、自治体・市区町村教育委員会がいかに支援すべきか、といった点が参考になる。小中連携での情報交換は、個人レベル以上の取り組みを組織化する必要がある。

②事例2（山口県防府市立富海小学校・同富海中学校の取り組み）

両校は平成21年度の「英語教育改善のための調査研究事業」（文部科学省）において調査研究を行い、さらに今年度により「研究開発学校」（同上）の指定を受け、小学校から中学校への滑らかな移行を図るための研究や、発達段階に即した指導法の工夫などに取り組んでいる。両校では、小中連携教育の意義として、「小・中学校の教職員の連携を深めることにより、学校間の指導の段差を解消し、子どもの負担を軽減することができる」「小・中学校の子どもたちが交流することにより、子どもたちの成長に必要な異年齢の人たちとのかかわりが体験でき、尊敬や思いやりの心などの豊かな心をはぐくむことができる」といったことを掲げている。実際に公開授業では相互に参観し、週1回程度の外国語の担当者同士が打ち合わせを行い、折にふれてTTによる外国語活動の指導に中学校の教員が加わるといった「フットワークの軽さ」が特徴である。中学校の支援を受けやすいように、小学校の外国語活動のカリキュラムを工夫したり、時間割を変更したりと、相互の都合を考慮したシステム作りをしている。また、富海小で取り組む英語劇に富海中の英語教員が発音指導などで協力し、今年度からは中学生がその劇を鑑賞するといった取り組みがある。授業とは別の場面でも交流を行っている。

「小中交流」をすることにより、児童生徒の活動状況を実際に目の当たりにし、外国語活動と英語科との「接点」と「違い」について認識を新たにできる。また、実際に互いに授業参観などを行って、理解を深めることができる。市町村によっては、中学校の教員を小学校に専科教員として1～2年程度配置し、小学校での外国語活動を実際に体験させる機会を与えているところもある。形態は様々であるが、小学校にとっては英語教育の専門家がスタッフに加わることは心強いことであり、中学校教員にとっても小学校ならではの児童掌握技術など多くのことを学び、英語教育に対する意識も変わってくることもある。

人事交流は教育委員会レベルでの定期的な検証と指導が不可欠である。例えば、沖縄県那覇市では、全市で中学校英語教員を小学校に3年間赴任させ、卒業する児童を連れて中学校に戻るというシステムを構築している。

③事例3（京都府中丹教育局で実践されている「つないでシート」）

文部科学省で昨年度開催した「平成21年度小学校及び中学校教育課程協議会」において、京都府から報告された取り組みとして「つないでシート」というものがある。これには、一定の指針やモデル例を示すとともに、各中学校区の実態を踏まえて独自の「つないでシート」を作成し活用すること、指導計画、指導方法、教材・教具の効果的な活用など、様々な視点で小中連携を推進することを呼びかけているものである。各学校で「つないでシート」を作成するにあたり、まずつながりを一覧にし、單元ごとに指導計画を作成し、そして入門期指導計画を作成するという手順を踏むことになる。その3つ目の入門期指導計画の中に、「伝える」というキーワードがあげられる。

「外国語活動で頑張ってきたことが、中学校の授業にどうつながるかを分かりやすく伝える」ための、小学校から中学校にあがるにつれて、円滑な接続を目的とした事例がある。小学6年生最後の4時間の単元に、将来の夢について理由を含め紹介したり、友達の夢を聞き取ったりする活動と、自己紹介カードを春休みの課題として与えるといった内容がある。それを最初の授業で活用し、外国語活動で頑張ってきたことが、中学校の授業にどうつながるかを分かりやすく伝えることができる。

小学校の外国語活動の目標であるコミュニケーションに対する積極的な態度や言語や文化についての体験的な理解などを中学校段階で一層伸ばすために、頻繁にコミュニケーション活動や自己表現活動に取り組ませることが必要になってくる。今回の事例では、中学校の英語の授業に対する期待感の高まる課題を設定することがポイントになっていると同時に、外国語活動との連続性やその有効性を生徒に感じさせるように「伝える」工夫が教員には求められている。小中連携したカリキュラム作成のポイントについて、「繰り返し指導する内容を踏まえること」とした上で、年間指導計画に外国語活動との関連を明確にすることや、外国語活動と英語科との系統性を児童生徒に具体的に示すことが、学ぶ意義や学習意欲の持続につながることを強調している。

小学校段階では、音声中心で活動が進められるため、語彙や文法などを中心に指導されていない。そのため、中学校段階では、外国語活動で養ったコミュニケーション能力の素地を生かし、しっかりと語彙や文法の定着を図るために、十分な言語活動が行われなければならない。しかし、小学校での外国語活動の成果を生かすためには、従来のような日本語による説明中心の授業では、生徒は戸惑ってしまう。そこで、小学校でよく使われる表現を含む文を例に挙げながら、音声による活動で十分に復習し、次に読み書きの活動に進み、語順などを簡潔に整理するなどの工夫が必要になる。文法などの学習は、音声による学習を十分にした後であれば、生徒が内容を理解しやすくなり、学習の定着を図ることになる。また、小学校では「聞くこと」「話すこと」に重点をおいているが、英語学習は更に「読むこと」「書くこと」の活動が増え、4領域がバランスよく伸びていくことが望ましい。中学校では小学校の外国語活動をより発展させた活動として、4領域がより高度に関連した活動を工夫しなくてはならない。そして、小学校で扱われた言語材料・話題を十分把握し、中学校での教科書の扱い方に工夫をする必要がある。実践であげられていた自己紹介も、中学校でも同じような扱いでは、生徒は退屈するので、生徒の興味・関心に合った内容、手法の選択が重要である。

④事例④（横浜市教育委員会が推進している「横浜市型小中一貫教育」）

横浜市では小中9年間での英語教育の実践として「横浜市型小中一貫教育」に取り組んでいる。9年間の「ベースカリキュラム」は各教科におけるカリキュラムの基本形として作成されたもので、各校での教育課程編成の基盤となる。この指導内容については、小学校を「コミュニケーション能力の素地を育成する時期(基礎づくり)」、中学校を「コミュニケーション能力の基礎を育成する時期(基礎がため)」とそれぞれ位置付けた上で、系統表を作成している。

「ベースカリキュラム」では9年間を通した単元間のつながりを俯瞰できる系統表が整理されており、中学校外国科の教員にとって、校区内の小学校で慣れ親しんできた表現や語句などを把握し、計画的に言語活動に生かしていく上で大いに参考となる。

小学校・中学校それぞれで身につけさせたいものを明確にし、両者の接点と違いを生かして継続性を重視した指導法を工夫する必要がある。

2. 小中の連携についての取り組み例

①小中合同研修会

小学校での外国語活動はスタートしたところである。英語教育を充実させるために、英語科で小中連携を図ることが大事となる。中学校区の小学校と合同で研修会を持つことが一つの連携として考えられる。

研修会の内容であるが、授業内容、子どもたちの様子、困っていること、教材の工夫、年間の連携計画など多くの議題を上げることができる。まずは、両者が交流できる場を持つことに意義があると思う。

②小中連携システムの構築

学校には年間行事計画があると思う。その年間計画の中に、次のような内容を入れることが考えられる。例えば、小中英語科研修会、小中英語科交流会、小中英語科授業参観、小中英語科出前授業などである。

年間行事計画に組み入れることによって、定期的に小中英語科で交流を持ち、連携を図り、その連携を充実させることが可能となる。

③小中合同ワークショップ

小中連携には、教員の連携だけでなく児童・生徒の交流も考えられる。児童は中学生と触れ合うことができ、中学校入学時の先輩との人間関係の負担軽減にもなり、中学生にとっては自信につながる取り組みになるであろう。

交流例：

～大型紙芝居～

絵本などの題材を用い、模造紙大の紙に、その内容（絵）を拡大転写、彩色したものを作る。その後、ページごとに物干しざおなどに固定。めくり形式。ストーリー（台本）は、小学生向けに簡易化した英文にする。原文が英語で書かれている場合も同様。中学生がその英語を読む。

～劇／人形（パペット）劇／ペープサート～

人が演じる劇の場合は、英語祭で実施されているような形態のもの。紙芝居と違い、ある程度の表現力、演技力が必要となる。台詞も英語で覚える。かなりの準備と練習が必要なため、E S Sなどのクラブ活動向け。衣装、小道具、効果音など可。

それ以外のものについては、教室前方に、教卓や生徒の机、黒い布などを用いて「簡易舞台」を作り、英語の台本を読む生徒、パペットやペープを動かす生徒と、役割分担をしながら見せる事ができる。

～歌～

小学生が知っているような、簡単な英語の歌から、やや高度なものまで、数曲用意しておく。ジャンルは不問。英語の歌詞はすべて覚えておく事。楽器などもOK。また、一緒に歌える部分だけを全員で歌うなどの「観客（小学生）参加型」の形態をとってもよいだろう。

～上記の組み合わせ～

ミュージカル（もちろん英語の曲）のようにしたり、パペットと人が共演したり、アイデア次第で組み合わせは色々できる。

④出前授業

中学校英語教員が小学校で英語の出前授業をすることを提案する。それは小学校教員、小学校児童、中学校教員の三者にとっても意義がある。

指導形態にも中学校教員一人、小学校教員と中学校教員二人、中学校教員とALT二人、小学校教員と中学校教員とALT三人などいくつかの形態が可能である。

小学校教員は、中学校英語教員の授業を見ることにより、指導方法について学ぶことができる。児童は、英語を専門にする教員から英語の授業を受け、体験することができると同時に中学校の英語教員と触れ合うことができ、中1ギャップの軽減につながる。中学校教員は、入学前に児童の様子を把握することができ、入学後の指導の参考になる。

⑤小中英語教育のねらいを明確に理解、区別する

平成23年度から小学校で外国語活動が全面実施される。小学校と中学校を通して英語の力をつけていく視点が大事なのであるが、それぞれの校種におけるねらい、目標を明確に理解、把握、区別して指導にあたることも大事である。基本は「学習指導要領」である。少なくとも小学校教員は中学校の学習指導要領（外国語活動）、中学校教員は小学校の学習指導要領（外国語活動）に目を通して、目標、内容などを理解しておくことが必要である。

そして、それぞれがそれぞれの学習指導要領の目標を達成するために不断の授業改善を図りながら、授業を進めることが大事である。

⑥英語教育の意識改革

効果的な連携を図るために、中学校英語科教員の意識改革も必要である。これまでの学校教育において英語教育は中学校から始まった。これからは、英語教育は小学校段階から始まるという意識改革が必要である。これからの英語教育や英語力向上を考える時に小学校の外国語活動も視野に入れて考えていくことが大切である。

中学校は、生徒たちを高校に送るので、中学校英語教員が英語教育を考える時は、小学校を含めた小中高の連携を意識していかなければならない。三校種それぞれの目標、課題をしっかりと把握し、小中高が連携・協力のもと英語教育の充実を図ることが大事である。

⑦アンケート調査

中学校英語教員は生徒が小学校外国語活動でどのようなことを身につけ、どのようなことに興味を持つようになったのかを把握する必要がある。中学校区内に複数の小学校がある場合は、学習内容に違いがあると思われるので、個々の生徒の英語学習状況を知り、指導内容を検討することも大事である。生徒の学習状況を知ることができれば、自ずと指導内容も見えてくる。

⑧授業参観

小・中学校お互いに英語の授業を参観することは小中連携の基本であると考えられる。普段の授業を参観することが大事である。授業の内容、進め方、教材、子どもたちの反応など様々な情報を得ることができる。授業を参観することによって小・中学校の教員共に学ぶことが多いと思います。

⑨小学校・中学校の教員が持っている資料の提供・交換

小中連携の一つにお互いが使っている教材などの資料提供・交換が考えられる。資料の中には次の3つが考えられる、①教材、②年間指導計画、③試験問題である。

普段の授業で使用している教材の交換によって、子どもがどのような内容を学習しているのかが把握できる。またそれを応用した教材も作成ができるようになる。

年間指導計画の資料交換により、年間を通しての英語指導内容が把握できる。

小学校教員が中学校の試験問題を知ることにより、試験内容を理解でき、外国語活動でどのような準備をしていけば良いかが見えてくる。

⑩小学校卒業後の春休み英語宿題

高校入学時にはよく行われているが、小学校卒業時に英語の宿題を出すことも考えられる。もちろん児童にとって負担のない内容にすべきである。例えば、ローマ字を写す練習、アルファベットを写す練習、名前をローマ字で書く練習、国や身近な単語などを書く練習などができる。宿題の作成は中学校英語教員がする。

それらの宿題を中学校で回収し、点検する。英語教員も生徒の英語への意欲などが把握できる。

⑪学習指導案を小中の教員で考える

小学校外国語活動の学習指導案を小・中学校の教員で一緒に作成することも連携の一つとして考えられる。中学校教員は英語の専門家としてのアイデアを提案でき、小学校教員は授業を楽しく盛り上げるアイデアを提案できる。両者がお互いの持ち味を生かすことが可能であり、お互いに学ぶことがある。年に1回からでよい。

4 研究のまとめ

いよいよ英語教育が小学校から本格的にスタートする。児童・生徒の英語力を総合的に伸ばしていくためには、小中の連携指導が不可欠です。そのために、小中の効果的な連携の在り方について研究してきた。

小学校外国語活動では、児童は様々な活動を通して英語に慣れ親しんでいます。中学校英語教員は、児童が外国語活動を通してどのようなことを知り、どのような力がついてきたかを知る必要がある。そして、児童のコミュニケーション能力の素地を生かして、中学校英語教員は1年生の段階では、学習内容が急に難しくならないように配慮しながら、英

語の授業作りをしていくことが大切である。また、出前授業、小中合同研修会などを実施し、小中連携を図ることが必要である。

まずは、小・中学校の英語担当者同士がお互いの名前と顔を知ることから始めれば良いのではないだろうか。両者が気軽に授業を見せ合い、相談し合い、協力していくことが大切なことだと考える。最初から大きな取り組みを考えるのではなく、小さな取り組みからスタートすれば良いのではないか。そして試行錯誤を繰り返しながら、英語教育における小中連携の構築を図ることを提案する。

5 おわりに

国際化が進むにつれて外国語学習の必要性が益々高まり、小学校でも授業に取り入れられるようになった。評価の必要がない小学校の段階で、外国語を含め異文化への理解と親しみをもつことは、児童・生徒の国際感覚や多文化理解の精神を育むことにつながると考えられる。

また中学校としても、入学してくる生徒の英語への関心が以前と異なるため、小学校の外国語活動の内容を把握してから、教科としての英語の指導にあたる必要がある。今回の報告が参考になり、英語教育が小中連携のもと充実していくことを願う。

参考資料

尼崎市中学校英語教育研究会アンケート結果（抜粋）

1 小学校との連携について

①	している	5
	していない	12

② 交流の内容について

ア 中学校が小学校の英語活動を参観する	2
イ 小学校が中学校の英語の授業を参観する	2
ウ 交互に参観する	0

小学校に出前授業を行っている。

1

小学校の英語活動の内容等について情報交換を行っている。

2

③ 今年度中に交流の予定が

ある	3
ない	8

[ある]

[ない]

小学校の授業参観。2 引き継ぎの時に、英語活動の内容のヒアリングを実施。	交流の希望はあるが、時間調整が難しい。2 校区内の小学校3校との協力など無理である。 現在交渉中である。
---	--

2 今年の中学校1年生の英語の学習状況について

① 昨年度までの1年生に比べて 英語の口頭表現が…

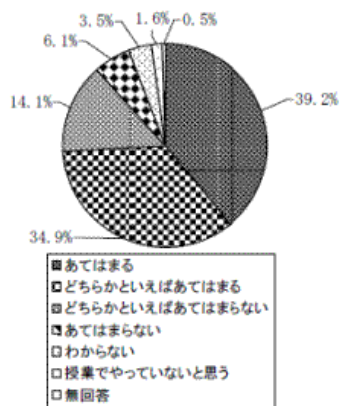
ア よくできる	7
イ あまり変わらない	9
ウ できない	0

② 昨年度までの1年生に比べて 英語に対する…

ア 興味・関心が高い	6
イ あまり変わらない	10
ウ 低い	0

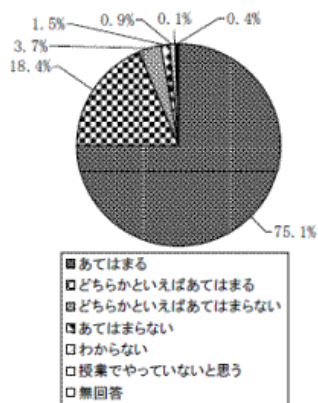
文部科学省「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査」(児童用)

Q4. 英語の授業で楽しいと思うこと
ア. 英語の歌を歌うこと



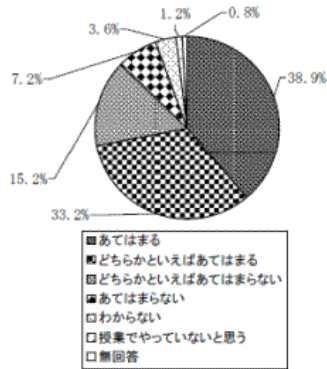
	件数	構成比(%)
調査数	31,914	100.0%
あてはまる	12,512	39.2%
どちらかといえばあてはまる	11,142	34.9%
どちらかといえばあてはまらない	4,507	14.1%
あてはまらない	1,934	6.1%
わからない	1,123	3.5%
授業でやっていないと思う	524	1.6%
無回答	172	0.5%

Q4. 英語の授業で楽しいと思うこと
イ. 英語のゲームをすること



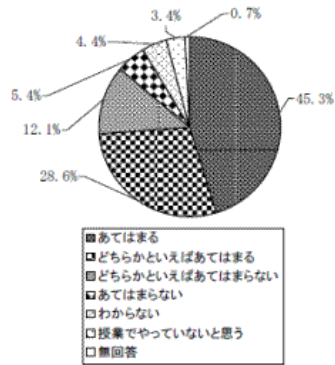
	件数	構成比(%)
調査数	31,914	100.0%
あてはまる	23,968	75.1%
どちらかといえばあてはまる	5,864	18.4%
どちらかといえばあてはまらない	1,166	3.7%
あてはまらない	473	1.5%
わからない	288	0.9%
授業でやっていないと思う	42	0.1%
無回答	113	0.4%

Q4. 英語の授業で楽しいと思うこと
エ. 英語で友達と会話すること



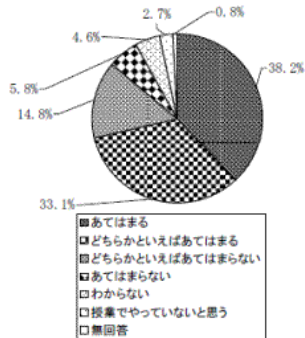
	件数	構成比(%)
調査数	31,914	100.0%
あてはまる	12,399	38.9%
どちらかといえばあてはまる	10,588	33.2%
どちらかといえばあてはまらない	4,851	15.2%
あてはまらない	2,286	7.2%
わからない	1,158	3.6%
授業でやっていないと思う	387	1.2%
無回答	245	0.8%

Q4. 英語の授業で楽しいと思うこと
カ. 外国のことについて学ぶこと



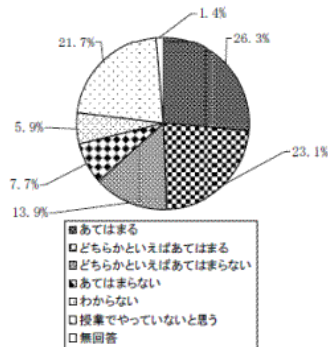
	件数	構成比(%)
調査数	31,914	100.0%
あてはまる	14,461	45.3%
どちらかといえばあてはまる	9,135	28.6%
どちらかといえばあてはまらない	3,869	12.1%
あてはまらない	1,726	5.4%
わからない	1,414	4.4%
授業でやっていないと思う	1,077	3.4%
無回答	232	0.7%

Q4. 英語の授業で楽しいと思うこと
キ. 日本語と英語の違いを知ること



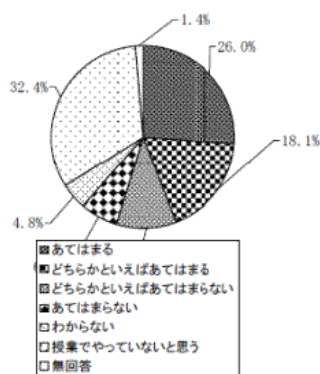
	件数	構成比(%)
調査数	27,883	100.0%
あてはまる	10,648	38.2%
どちらかといえばあてはまる	9,221	33.1%
どちらかといえばあてはまらない	4,127	14.8%
あてはまらない	1,625	5.8%
わからない	1,295	4.6%
授業でやっていないと思う	743	2.7%
無回答	224	0.8%

Q4. 英語の授業で楽しいと思うこと
サ. 英語の文字や単語を読むこと



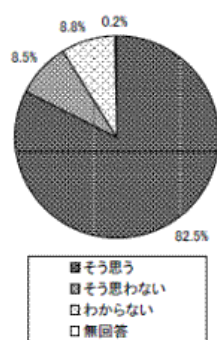
	件数	構成比(%)
調査数	31,914	100.0%
あてはまる	8,394	26.3%
どちらかといえばあてはまる	7,372	23.1%
どちらかといえばあてはまらない	4,424	13.9%
あてはまらない	2,467	7.7%
わからない	1,891	5.9%
授業でやっていないと思う	6,934	21.7%
無回答	432	1.4%

Q4. 英語の授業で楽しいと思うこと
シ. 英語の文字や単語を書くこと



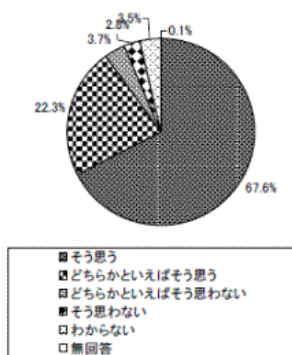
	件数	構成比(%)
調査数	31,914	100.0%
あてはまる	8,308	26.0%
どちらかといえばあてはまる	5,770	18.1%
どちらかといえばあてはまらない	3,397	10.6%
あてはまらない	2,127	6.7%
わからない	1,522	4.8%
授業でやっていないと思う	10,356	32.4%
無回答	434	1.4%

Q6. 英語が使えるようになりたいですか？



	件数	構成比
調査数	27,883	100.0%
そう思う	23,017	82.5%
そう思わない	2,367	8.5%
わからない	2,441	8.8%
無回答	58	0.2%

Q7. 英語が大切だと思いますか？



	件数	構成比
調査数	27,883	100.0%
そう思う	18,857	67.6%
どちらかといえばそう思う	6,204	22.3%
どちらかといえばそう思わない	1,028	3.7%
そう思わない	775	2.8%
わからない	987	3.5%
無回答	32	0.1%

参考文献

- 『平成21年度 七ヶ浜町の教育』（七ヶ浜町教育委員会、2009年）
『平成21年度 富海小中連携教育推進計画』（防府市立富海小中学校、2009年）
『「つないでシート」活用ハンドブック』（京都府中丹教育局、2008年）
『横浜版学習指導要領 YICA、外国語科編』（横浜市教育委員会、2009年）
『中等教育資料』（文部科学省、平成22年8月号、10月号、11月号、12月号）
『小学校学習指導要領 外国語活動』（文部科学省 平成20年3月）
『尼崎市中学校英語教育研究会アンケート結果』（尼崎市中学校英語教育研究会 平成22年）
『英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査』（文部科学省 平成22年10月）

個や集団の質を高める要因に関する研究

指導主事	吉 田 幸 嗣
研 究 員	福 田 達 也 (立花南小)
〃	笠 井 美 香 (武庫東小)
〃	溝 口 みどり (立 花 中)
〃	小 玉 多 恵 (園 田 中)

【内容の要約】

今年度は、「保護者との連携」、「自尊感情」、「共感的人間関係」の3点を大切にしながら、個や集団の質を高めることをめざして研究した。

まず、Q-Uアンケートやストレス調査、保護者アンケートを行い、個や学級集団の現状を客観的に捉え、児童生徒への手立て・支援を考えた。

「授業での児童・生徒の目標と教師の支援を明確にする」「日々、保護者との連携を深める」、「自分の考えや思ったことを仲間に関示する実践」を通して、個々の児童生徒が互いにつながる喜びを感じ始めることがわかってきた。

本年度の実践から、個が高まるにはきめ細やかな支援、継続的な実践、仲間の共感的な関わりが重要であるということを認識した。

キーワード：成功体験、自尊感情、心の居場所、Q-Uアンケート、ピアヘルピング、くらしのカード、ストレス調査

1	はじめに	7 3
2	研究の内容	7 3
3	実践事例	7 5
	(1) 特別支援学級 成功体験と保護者との連携によって自尊感情を高める	7 5
	(2) 中学2年生 グループ学習を通して、個や集団の力を高める	7 8
	(3) 小学4年生 対人関係を結ぶ力を高める	8 5
	(4) 中学1年生 友好的な人間関係を築く力を高める	9 0
4	研究のまとめ	9 6
5	おわりに	9 6

1 はじめに

2010年初め、『NHKスペシャル 無縁社会』が企画放送された。放映後の反響は大きく現代日本の世情を表す「無縁社会」という言葉が日本全国に広まった。その後、ユーキャン新語流行語大賞トップテンにもノミネートされた。地縁血縁社会が崩壊し、核家族化社会が急速に進行している。それと共に家族や社会とのコミュニケーションが出来ない、したくない大人は急増し、加速度的に人と人とのつながりが希薄な社会へ移行してきている。

人は人とつながることで自分の居場所を見つけ、そこで自分を語り、悩みを相談する。また、他者の役に立つことに喜びを感じ、自尊感情を高めながら、日々生活している。そして、新たなもの、未知の世界に挑戦するエネルギーを獲得するのである。

しかし、「無縁社会」という言葉が取り上げられる今、児童生徒の中にも、人とつながることを避けたり、逃げたりし、人間関係を結ぶ力の未熟さが指摘されている。学校に居場所がなく、チャレンジする気持ちが減少し、不適応行動に至る姿も見られる。児童生徒に必要な「心の居場所」とは、安心、リラックスできる場所であり、仲間に受け入れられ、自分の考えや感情が大切にされている場所である。また、そこで生活する中で充実感を味わい、自分の能力に対する自信を持って何かを達成できたと感じる場ではないだろうか。児童生徒が日々生活する学級が「心の居場所」となるためには、どのようなかかわりを行えばよいのかということを様々な取り組みから検証する。

2 研究の内容

「個と集団の質を高める」というテーマのもとに4人の研究部員は、今年度担当の学年・学級（集団）において、児童・生徒一人一人（個）の育ちや学習の基盤となる「心の居場所」をいかに作っていくかという教育実践を推進することとした。

特別支援学級では、児童個人の力に合わせて、様々な学校行事に参加し、その中で得た経験を通して自尊感情を高めることに取り組む。あわせて、保護者からの支援も重要となるので、効果的な連携方法についても探る。

中学校の数学抽出授業においては、個々の存在意義を高めるためにリーダーを育て、教える生徒も教えられる生徒も、どちらの生徒もが意欲を向上させるグループ学習の在り方について研究する。

また、小学校と中学校の学級担任は、一学期にQ-Uアンケートを実施して学級の実態を把握する。それによって明らかになった学級の課題解決に向けて活動計画を立て、児童・生徒の変容につながる授業作りを進めていく。

(1) 実践事例1 特別支援学級 成功体験と保護者との連携によって自尊感情を高める

1. 児童の実態

本校の特別支援学級（肢体不自由）には、3名の児童が在籍している。本研究では、3名のうちA児に焦点をおくことにした。

A児は病気の進行によってできることが年々減少しており、自分に自信を持ちにくいため、自尊感情や自己効力感^{*1}が低く、学習活動に消極的になってしまう面がある。具体的な例を挙げると、自分の気持ちの表現や人前での発表、体育的行事への参加である。また、学校では見せないが、家では「なんで俺だけ病気なん！」「～が、できへんかって嫌やった！」と保護者に不満をぶつける時もあるそうだ。

A児の不満は、裏を返せば「みんなと同じようにしたい。」「できるようになりたい。」という気持ちの表れである。しかし、A児は病気の進行により参加が難しい活動が年々多くなる。そのため、『みんなと同じようには出来ないけど、工夫すれば出来ることはある。』という成功体験をA児にさせることが大切だと考えた。そうした成功体験や、その過程で他の児童と共に活動する経験（共体験）は、将来的にもA児の自尊感情や自己効力感を高めることにつながると考えた。

しかし、成功体験をするまでの過程は、A児にとって努力を要することがあり、負担になってしまう可能性がある。より効果的な支援を行うためには、保護者と連携を高め、協力して支援をしていくことが必要だと考えた。またそれは、A児の自尊感情や自己効力感を高めることにもつながることだと考え、2つの実践を並行して行っていくことにした。

*1 外界に対し、自分が何らかの働きかけをすることが可能であるという感覚。自分に対する信頼感や有能感。

2. 実践

①成功体験を通して、自尊感情や自己効力感を高める。

(ア)音楽の学習での取り組み

A児は、楽譜を読むことやリズムを取ることはできる。しかし、自信が持てないため、人前で歌唱や演奏することに抵抗があり、進んで取り組むことが出来なかった。また、病気の進行によって指の力が衰えているため、リコーダーや、鍵盤ハーモニカの代わりに使用している電子ピアノの指づかいにも難があった。

そこで、リコーダーはA児が吹き、指づかいは教師が代わりに行う。電子ピアノは教師が隣から、弾く鍵盤を指さして教えるという取り組みを行い、自信が持てないことから生まれる演奏への抵抗を和らげようと考えた。しかし、歌唱は方法を見いだせず、無理にうながさずに軽く声かけをする指導にとどまった。

こうした取り組みをするなかで、A児の演奏への抵抗は徐々に減少し、みんなと音を合わせることへの自信や、それを楽しむ気持ちが高まってきた。また、自信や気持ちの高まりは、A児の音楽への意欲を変化させた。

7月頃に行った音楽会の演奏の練習では、電子ピアノを自分一人で弾こうとし始めた。また、音楽会での立ち位置を決める際、以前は列の端でないと演奏できなかったA児が、「(クラスの) みんなと同じ場所でやってみる。」と列の中央で演奏ができるようになった。(電子ピアノは設置場所の都合等により端で演奏した。) また、それにともない、それまでは歌っていなかった歌もしっかりと歌うようになり、A

兄のなかで自分の努力を認め、人前で堂々と表現する気持ちが高まったと感じた。

(イ) 体育大会での取り組み

それまで体育大会は欠席していたが、昨年度初めて参加した。今年度は当初から参加の意思を表わして、家庭の協力もあり意欲は高かった。しかし、昨年に比べると体力が落ちており、参加が難しい演技も増えている。

そこで、練習時間を区切る、外で練習する際は時間を見つけて日陰に入る、ストレッチの頻度を高めるなど、体調に配慮しながら練習を行った。また、それぞれの演技への取り組み方として、ソーラン節はA児の出来る範囲の動きをする、ソーラン節の鳴子は軽量化した物を持たせる、騎馬戦の団体戦では応援をする、個人戦では審判をする、100m走は安全面を検討した上で走るという参加を目指した。参加の仕方を他の児童に近づけ、一緒に練習することで『みんなと同じようには出来ないけど、工夫すれば出来ることはある。』という経験や、友達と一緒にやり遂げたという達成感を味わわせようと考えた。

こうした取り組みによって、暑い時期の練習だったが、A児は体調を崩さず、意欲的に練習に参加することができた。一方、保護者との話し合いの結果、途中から参加の仕方にも変化があり、100m走はゴール付近で応援するという参加になった。それにともない、A児の応援への意欲を高め、『競技には参加出来ないけど、応援も頑張れば立派に参加したことになる。』という価値づけをしていく取り組みを行った。最初は応援にやや消極的だったA児だが、友達に「頑張れ。」と声かけをすることから認めていき、家庭とも歩調を合わせて価値づけの言葉かけを行ったことで、次第に大きな声で応援することが出来るようになった。

当日を迎え、ソーラン節はみんなと一緒に精一杯やりきることができた。退場後も多くの人に称賛の言葉をかけてもらい、とても達成感に満ちた嬉しそうな表情をしていた。また、100m走も大きな声で最後まで応援することができた。退場後は「ぼく、応援頑張ったなあ。」と話していて、応援の価値が根付き始めたように感じた。ただ、騎馬戦での審判が副審だったため、「意味ないやん。」と話していたようで、A児がやりがいを感じられる参加方法を、今後は更に考えていきたい。

(ウ) 人前で発表することへの取り組み

A児は、簡単な問題の答えなど自信があれば発表できる。また、学級に慣れると音読の発表もできるようになる。しかし、人前で発表することは基本的に苦手としている。具体的には、発表できるようにうながしながら待っていても黙ったままの状態だったり、感想の発表などで文を書いているにもかかわらず発表できない状態だった。昨年度末の総合的な学習の時間の発表の時に、友達と2人で説明を読む練習を行い、発表することができた。

そこで、考えをまとめたり発表ができるまで待つ時間を区切る、教師や友達がそばに寄り添い励ましやうながしの言葉かけをしながら一緒に発表する、分からない時も「分かりません。」と言うなど、言葉での表現をうながすという取り組みを行い、昨年度の成果や今年度の流れを生かしながら、スモールステップでA児が自分の課題に向き合えるように考えた。また、交流学級の担任とも意識の共有を行い、共同歩調で支援をしていった。

こうした取り組みのなかで、A児の様子を見ながら、全て一緒に発表するのではなく最初だけ一緒に発表する、短い文を自分一人で発表するなど、取り組みを少しずつステップアップしていった。A児はそのたびに、「言えた。」と嬉しそうにしており、少しずつではあるが自信をつけてきているようだった。

そして、1学期末に行った総合的な学習の発表会では、事前に練習を繰り返すことで、少し長い文を一人で発表することができるようになり、以前は出来なかった朝の会などの司会や、朝のスピーチも、一人で頑張ろうとするようになってきた。自分の課題に向き合い、自ら課題を克服しようとする気持ちが少しずつではあるが高まってきたように感じた。

②保護者との連携を高め、より効果的な支援を行うことで、自尊感情や自己効力感を高める。

(ア)日常的な連絡や面談

A児の登下校の際（保護者が送迎をしている）や連絡帳で、A児の様子や成長、参加が難しい学習活動やその支援の仕方、参加が難しかった学習活動の後の家庭での様子などを共通理解した。

それによって学校では、A児の体調、負担や不満のある学習活動、病気の進行による支援の変化などを知ることができ、それらに応じた支援に繋がった。また、学校での成長を伝え、参加が難しい学習活動について相談することで、家庭でも励ましや称賛をしてもらい、学習活動に取り組みやすいように支援をしてもらうことができた。

また、参加が難しい学習活動のなかでも、配慮が特に必要な場合や、意識の共有が必要な場合は、事前に面談を行い支援の仕方について相談をした。その具体事例を以下に記す。

○体育大会

今年度は保護者も参加に協力的で、家庭でもよく励ましているようだった。各演技への参加の仕方も概ね了承を得ていたが、100m走に関しては応援を頑張してほしいとのことで、こちらの考えと異なったため、面談を行った。

教師の意見

- ・徒競走も参加させ、友達と共にする経験を増やしたい。

保護者の意見

- ・怪我への不安がある。
- ・運動はできなくなる一方なので、応援をすることを頑張らせたい。

話し合いの結果、今後のことも考え、応援という参加方法の価値づけをすることが、必要性の高い支援だということでも共通理解ができ、ゴール付近で応援するという参加になった。

応援を頑張ることが、競技に参加することと同じになるという考えは、児童にとって定着しにくい考えである。しかし、年々参加が難しくなるA児にとって、『みんなと同じようには出来ないけど、工夫すれば出来ることはある。』と前向きに取り組むためには、この考えが必要だった。この話し合いによって、それまで気付かなかった応援の価値を高めることの重要性を知りA児の応援への意欲を高める指導につながった。

○音楽会

保護者は、A児が大勢の人前で活動する事に消極的で、以前に、障害のある身体に産んでしまった事への自責の念が強く、人前に並んでいる様子を直視できないという話を聞いた。音楽会でも、あまり目立たない場所で演奏することを望んでいたが、A児が列の中央でする事を望み、意見が異なったので面談を行った。

保護者の意見

- ・目立たない場所で演奏してほしい。
- ・演奏ができるか不安。
- ・本人の希望が強いので、それも尊重したい。

話し合いの結果、練習の様子を一度参観して考えるとのことだった。その後、参観を行い考えた結果、A児の頑張りを認めてもらえ、了承を得ることができた。

「列の中央でしたい。」という気持ちは、A児の自尊感情が高まった表れである。この話し合いによって、保護者にも協力を得ることができ、A児の気持ちをより高めることができた。

(イ)学期末のアンケート調査と個人懇談

保護者アンケート	
このアンケートでは、保護者の方が考える児童の課題・課題に対しての家庭での取り組み・児童への希望や現在の目標・学校への要望などを各項目に合わせて記入して頂き、学校と家庭が連携した取り組みをしていくための材料にしたいと考えています。 記入できる範囲で構いませんので協力お願いします。	
①日常生活（健康面・身体面・食事・衣服の着脱・排泄・整頓・生活リズム等）	
②学習（国語・算数などの教科・音楽・図工・体育・特別活動・行事・進路など）	
③対人関係（コミュニケーション・社会性・情緒面・集団参加・意思表示など）	
④その他	
懇談日時の順までお願いします。 名前（ ）	

(資料 1) 保護者アンケート

学期末に保護者へのアンケート調査を行い、それをもとに個人懇談を行った。

事前にアンケートをすることによって、保護者が持っているA児への願いや迷い、学校への要望を把握し、懇談で丁寧に保護者の思いを聞きとれるよう、準備をすることができた。

懇談では、アンケートに基づいて保護者の思いにしっかりと耳を傾けながら、今学期の取り組みの感想や課題、来学期の取り組みなどについて話し合った。

また、アンケートや懇談で話し合ったことから、来学期の支援を検討し、個別の指導計画の作成に役立てた。

この取り組みは、A児への願いや迷いを保護者と共有することで、より効果的な支援を行うための土台を作ることができた。

3. 実践の成果と考察・課題

これらの取り組みを通して、A児は参加が難しそうな学習活動に対しても「(みんなと同じことは) できへんけど、できることもあるもんな。」と言って挑戦しようとする事が、少しずつではあるが増えてきた。これは、ありのままの自分を尊重し、受け入れるという

気持ち（＝自尊感情）や、自分もやればできるという気持ち（＝自己効力感）が高まってきた言葉だと感じた。

A児のこのような変容から、困難を克服することができるという経験を積み重ねることが、自尊感情や自己効力感を高めることに効果的だったと考えられる。また、保護者はもちろん、交流学級の担任や児童など、連携を高め、より効果的な支援をしていくことも、A児の自尊感情や自己効力感を高めることに効果的だったと考えられる。

しかし、色々な取り組みに対する課題はまだ残されている。A児が課題を克服しようとする意欲を高めるために、保護者との共通理解のもと今後もA児の変化や成長を見逃さず、励ましや称賛、価値づけの言葉をかけ続けながら、支援をしていくことが必要である。

(2)実践事例2 中学校3年生 グループ学習を通して、個や集団の力を高める

1.生徒の実態

本校では、昨年度2年で行っていた数学抽出授業を、今年度は3年で行っている。3年5学級から各学級10名前後、計47名が対象である。週4時間、数学の時間だけ学級から抜き出しの生徒で構成する抽出授業では、お互いのつながりが希薄である。そこで、人間関係の絆をより強いものにすることにより学力も向上するのではないかと考え、お互いに協力して学び、高め合う態度を育成した。

担当する数学抽出授業は希望制である。数学が苦手だがやる気のある生徒が多い一方、3年にもなると内容が理解できず、静かに授業を受けることだけが目標の生徒も少なくない。二極化した実態の中で、お互い、どのように理解・協力し、高め合えるかが課題である。そこで、「ピアヘルピング」の手法を取り入れたグループ学習の形態で、授業を進めた。それに伴い、ロールプレイ等でヘルピングスキルの上達を図った。指導の一助とするために、平成22年8月、園田中学校で行われた「Q-U分析後のSGE、SSTの実践に関する研修」(※1)を受講した。(※1)講師 環太平洋大学次世代教育学部住本克彦教授

2.実践の概要

①「ピアヘルピング」によるグループ学習の活用

生徒の学習意欲向上のため、昨年度よりグループ学習を活用してきた。しかし、昨年度のグループ学習では、感情交流はあったがリーダーの活躍の場がなく、グループがうまく機能しなかった。そこで今年度は、仲間同士の支え合いを目的とした「ピアヘルピング」という手法を使った。人間関係作りを通して、学力を向上させる為、心に焦点を当てた「ピアヘルピング」によるグループ学習を行った。ピアヘルパーというリーダーを育て、その生徒にはリーダーシップを発揮できるよう、以下の指導を行った。

- (ア)リーダーとして
- ・ 班員全員に目を向け、分け隔てなく接する。
 - ・ わかりやすく話す。
 - ・ 表情や言葉で、頷きながら聞く。

- (イ)班のまとめ方
- ・ 班のルールを決める。

- ・話し合いが進むよう指示をする。
- ・班員が理解・納得しているか、注意を払う。

(ウ)「ピアヘルピング」の技法(話の仕方・手伝い方)

- ・意欲を持って取り組めるように声かけをする。
- ・できるだけ相手が自分の力でできるようにアドバイスする。
- ・教えてほしい、見守ってほしい等、相手の気持ちを判断する。
- ・相手が頼りすぎないように注意する。

更にリーダーには毎時、次の手順で指示をし、グループ学習を行った。

(エ)事前に各グループリーダーを集め、打ち合わせをする。

- ・本時の予定・流れを伝える。
- ・説明の仕方を指導する。

(オ)各グループに戻り、教えあう。

②グループ学習の上達

(ア)相談の練習(上手な話し方)

レゴの伝達(出典)「ソーシャルスキルトレーニング」

(ルール) ペアになり、間についたてを立て、向い合わせに座る。伝える人が見本となるレゴの構成を言葉だけで伝え、作る人がそれを聞き、レゴで同じ構成を組み立てる。

(写真1)



(ねらい) ・相手の視点に立つ。

- ・協力する。
- ・わかりやすく伝える。
- ・イライラを我慢する。

日常でも人に何かを伝える時には、相手の視点を考えながら、わかりやすく伝えることが大切である。今後のグループ学習では、相手の視点だけでなく、気持ち・考えなども気付かせる。

(イ)相談の練習(上手な聞き方)

無反応の対話(出典)「子どものソーシャルスキルを育てる理論と実践」渡辺弥生 先生(法政大学教授)

ペアになり、頷いたり・あいづちを打ったりせずに、無反応で相手の話を聞く。交替して体験した後、感想をまとめる。

(ねらい) 聞き手の姿勢や態度が話し手の気持ちにどのように影響するかを体験し、望ましい話の聞き方の大切さに気付かせる。

③授業自己チェック表

生徒個人による、毎時の感想・反省を書かせる。各自が1時間の授業を振り返ることで、友達の良い点・また自分の反省や目標が見えてくる。その上で、主体的に学習に取り組む態度の育成に努める。またその内容を、生徒とのやり取りにも利用する。

授業自己チェック表			3年 組 番 氏名
日 時	評 価	ひ と 言	
月 日() 時間目			
月 日() 時間目			
月 日() 時間目			

(資料2)授業自己チェック表

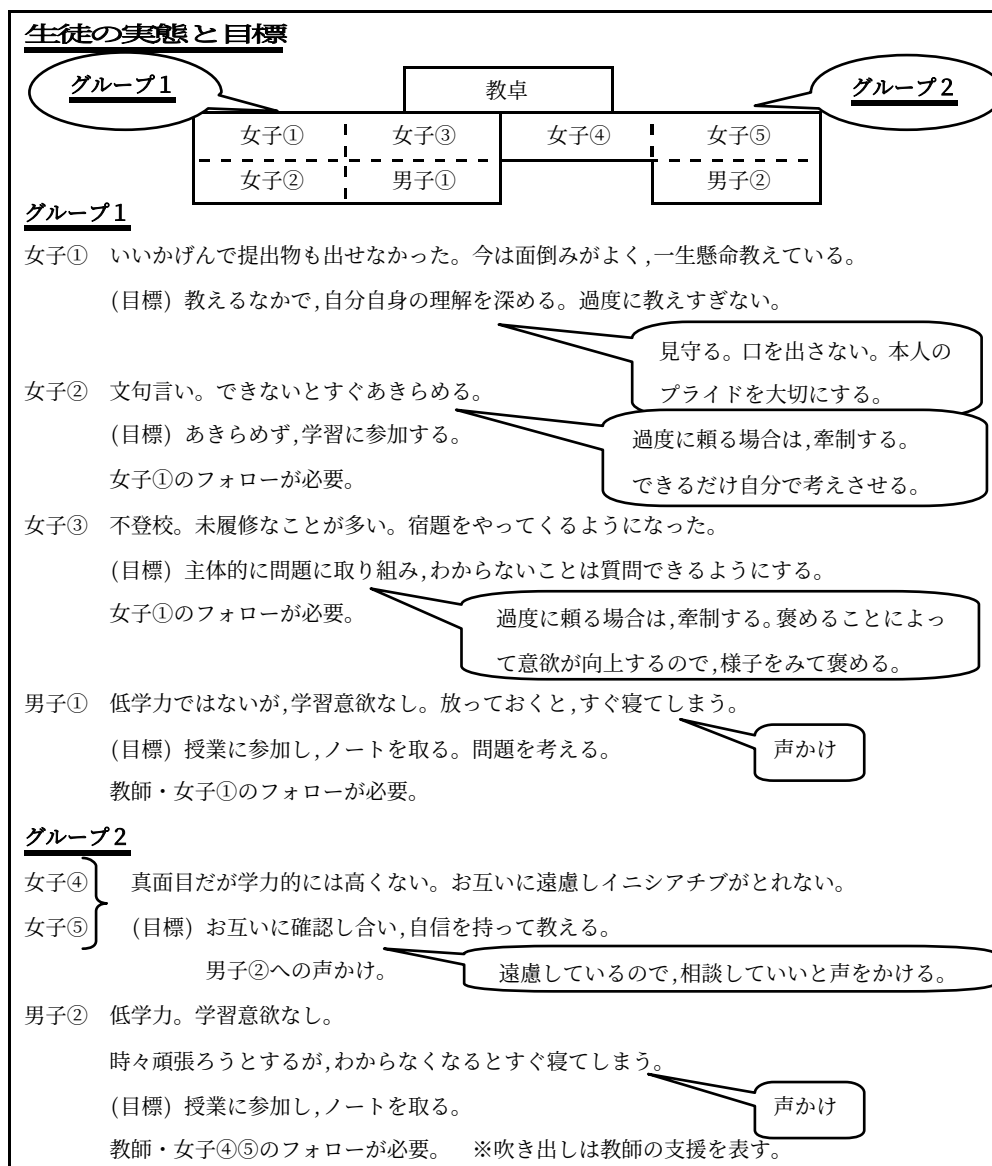
④研究授業

1. 単元名	相似な図形 (全15時間 本時14時間目)		
2. 生徒観	女子5名は学習に意欲的に取り組んでいるが、男子2名は苦手意識を持っており消極的である。生徒と相談して男女混合の班にし、相談し合うことで、互いに高め合わせたい。		
3. ねらい	平行線と比の定理を理解し、これを利用することができる。		
4. 展開			
	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導 入	三角形と比の復習	三角形と比の性質を思い出す。	
展開①	平行線と比の定理を理解し、これを利用して線分の長さを求める。	平行線と比の定理を理解する。 (班) 線分の長さを求める。 (プリント)	三角形と比の定理から辺を平行に移動していることを理解させる。 話し合わせることで、各自の理解を深めさせる。
展開②	平行線と比の性質を利用して、線分を等分する。	線分の等分の作図を理解する。 (班) 線分を三等分する作図をする。 (班) 線分を3:2に分ける点を作図する。	平行線を引くことで、簡単に線分の等分ができることを理解させる。 コンパス(等分)、三角定規(平行線)を正しく使えるよう、指導する。 話し合わせることで、各自の理解を深めさせる。
まとめ	本時の授業内容を確認する。	本時を振り返る。 自己チェック表の記入をする。	課題プリントを配布し、①と②の内容を思いださせる。 次回の予告をする。
5. 視点	どのように相談しているのか。		

(指導のポイント)

グループ学習を活用するにあたって、大切なのは小集団の中の生徒同士の関わりである。どのように教え合い、どのように関わり合っているのかをポイントに、授業を進めている。生徒には聞いたり尋ねたりする時のルールや節度を守らせ、話し合いやすい雰囲気作りを大切にしている。

小集団の中で、生徒達が自分の言葉で発表する体験を増やすことによって自信をつけ、力をつけてくると考えている。生徒同士がどのように教え合うことで、「わかり」「自信がつき」「前に出て発表してみよう」という気になるのかに視点を当てている。



(資料3)研究授業補助資料

3.実践の結果と考察

①グループ学習の活用より

(ア)グループ分け

班長に指名された生徒は意欲的であった。周りの生徒も納得していた。中には、「(このメンバーでは)話し合いになれへんやろ…」と心配する生徒もいたが、「でも(班長)がんばるわ」と前向きに考えていた。

クラスによっては、「(毎時間、寝ている男子2名について)どう思う?」

「あかんと思う。」「別々に班に入れて、(勉強)させよう。」「どう分けたらいいと思う?」など、グループ分けについて生徒が積極的に参加する場面も見られた。

(イ)グループ活動中

リーダーは、写してばかりの生徒に「考えて」と、頼りすぎないように牽制したり、「そうそう」「うん、あってる」など、自信をもたせるような対応ができていた。

家庭学習に消極的であった生徒が、授業中教えてもらったことで自信を持ち、「先生(宿題)やってきた。昨日、上手に描けたからママに自慢してん！」と得意げに話してきた。

②グループ学習の上達より

「こっちこっち」「もうちょいちゃんとなるように…」「ちゃうって～」

「おれ、〇〇と仲悪くなりそうや」「気持ち通じてるから、同じものできる」など、気持ちを表す声もあった。

(話す時)

- (聞く時)

- ### ③授業自己チェックカード

(表1)

評価	ひと言
B	最後までノートがまはらなかつた
A	黒田と黒のおおけと間違えてつけた
B	ノートを黒く塗るのをやめた
A	質問に答えた
A	ノートをキレイに直した
B	休んだ。せいと先生の話をきいた
B	宿題を、やめた。...、きいた
A	きいた。...、
A	ノートを、キレイに直した
B	休んで宿題をきいてきた
A	同形1番に終われてアラン1番
C	宿題をきいた...、きいた
A	おえとせらと間違えた。きいた
A	ノートをきいてきた

④研究授業より(授業中の会話より)

女子①(リーダー)

- ・(「できてるやんな。」と言われて)「ちょっと違うな…。」
- ・「これで絶対あってる。」「何で割る?」「分数でいいやんな。」「そやな。」
「次は?」「そうそう。」(あいづちを打つことのよさを理解している)
- ・(教えていて自分の間違いに気付き)「私、また間違ってる…。」

女子⑤(リーダー)

- ・「長さ測って。何(cm)でもいいから。ちょっとでいい。2cmぐらい。」
「コンパス使った?それなら大丈夫。」

男子①・「間違っとしても大丈夫?」…「やっぱりできへん。分数できへん。」

- ・「口出したらあかんで。」「これでいけるやろ。」「絶対これでできてる。」
- ・「間違ってると思ったけど、答えわからん。」「だいぶ賢なったわ。」
- ・「同じ長さ?」「長さはどんなんでもいいの?」
- ・「待って、(答え、言わんといて)いけるいける!」「5等分!」

⑤学習意欲・学力との相関

(写真2)

(ア)ワーク提出…期限に提出できた人数

6月	31名 (66.0%)
10月	28名 (59.6%)
11月	33名 (70.2%)
12月	34名 (72.3%)



(イ)定期テスト・実力テストの平均点(100点満点)

	抽出平均	学年平均	割合(抽出平均÷学年平均)
6/08 実力①	16.9	37.3	0.453
6/25 1学期末	26.7	52.2	0.511
9/06 実力②	28.4	51.2	0.555
10/01 2学期中間	32.5	58.6	0.555
11/10 実力③	19.1	43.8	0.436
11/29 2学期末	26.0	52.5	0.495

(ウ)1学期→2学期の評価の推移

評価(5段階)	上がった人数 19名(2段階上がった人数 3名) 下がった人数 5名
数学への関心・意欲・態度(ABC)	上がった人数 13名(2段階上がった人数 1名) 下がった人数 7名
数学的な見方や考え方(ABC)	上がった人数 9名 下がった人数 0名
数学的な表現処理(ABC)	上がった人数 8名 下がった人数 3名
数量、図形などについての知識理解(ABC)	上がった人数 11名 下がった人数 2名

(エ) アンケート

グループ学習の成果をみるため、9月と1月に生徒アンケートを実施した。

		はい	まあまあ	いいえ
1 授業中	①集中して話を聞いている。	23→25	12→11	6→5
	②ノートを取っている。	33→33	3→4	5→4
	③出された問題をやっている。	18→22	17→11	6→8
	④わからないことは質問している。	8→11	13→16	20→14
2 家庭で	①宿題をしている。	11→16	19→15	11→10
	②復習をしている。	3→2	17→24	21→15
	③試験勉強をしている。	17→12	11→21	13→8
3 授業中気 をつけて いること	①みんなに迷惑をかけないよう静かにする	31→32	8→8	2→1
	②集中していない人には、注意をする。	3→3	5→11	33→27
	③わからない人には、教えてあげる。	5→9	16→14	20→18
	④友達と相談するとよくわかる。	13→22	18→14	10→5
4 抽出に ついて	①抽出の方が質問しやすい。	22→26	16→13	3→2
	②抽出の方が友達と相談しやすい。	18→25	17→14	6→2
	③抽出の方が集中できる。	24→31	13→6	4→4
	④抽出の方が数学の勉強時間が増えた。	14→13	16→20	11→8
	⑤抽出の方がよくわかるようになった。	26→29	12→9	3→3
	⑥抽出の人と前より仲良くなった。	17→21	17→17	7→3

(資料4) 抽出授業に関するアンケート(41名)

注： →の左は9月、右は1月のアンケートの人数

■は、プラスの変化がみられた人数が増加した箇所

⑥まとめ

グループ学習を取り入れた昨年度の抽出授業では、周りの生徒に配慮をしたり、無気力だった生徒が授業に参加するなどの効果が見られた。説明中は静かにしたり、質問しやすいなど、授業の雰囲気も良くなった。一方、生徒の意識の変化は見られたが、学力の向上に関しては目立った成果は見られなかった。

今年度は、宿題や個々のテスト結果では、出題範囲も違うため顕著な成果は見られなかったが、1学期と2学期の評価を比較すると、明らかにプラスの変化が見られる。これは、「ピアヘルピング」を活用したグループ学習により、お互いに理解・協力し合う態度の育成が図れ、相談したり教え合ったりすることが、学力の向上につながったと思われる。提出物も総数としては不十分だが、徐々に増加しており、学習の意欲が向上している。(資料4の3、4)では、お互いの感情の交流がみられた。また、授業中のみならず家庭学習でも、プラスの変化がみられる。

抽出授業は数学が苦手な生徒の集団であり、グループ学習は難しいと思われたが、「ピアヘルピング」の活用により、スムーズに活動できるようになった。今後、さらにリーダーを育て、学力の向上につなげたい。

(3) 実践事例3 小学校4年生 対人関係を結ぶ力を高める

1. 児童の実態

本学級の児童は、男子は元気で活発であり、女子は、真面目で、落ち着いている。学級内には、成績はよいが、自己中心的に行動するA児と、気持ちにむらがあり落ち着いて行動できないB児がいる。彼らの発言や行動は、他の児童からは身勝手にわがままと思われるところもある。例えば、その発言で、授業の流れが大きく影響を受け授業が沈みがちになったり、休み時間には遊んでいても故意にゲームを邪魔をしたりすることもある。多くの児童はA児とB児の行動や心ない発言に不満や疑問を持ちながらも、勇気を出せず、自分の思いを伝えることができずにいた。また、トラブルが起きると、担任に解決を依頼し、自力で解決しようとしなかった。この二人の発言や行動には、成長過程や生活環境、自尊感情の高まりの欠如などが大きく影響していると思われるが、学校内においては、他者と関わる体験の少なさも起因しているのではないかと考えた。また、他の児童に関しては、苦手な相手を避け、葛藤を感じることなく、生活していくといった真の仲間づくり、対人関係を結ぶ力の欠如を感じた。

そこで、児童の傾向を客観的に把握するために、7月初めにQ-Uアンケート（※1）を実施した。傾向としては、学級生活満足群18人（58%）非承認群5人（16%）侵害行為認知群6人（19%）学級生活不満足群2人（6%）という結果であった。この中で自己中心的に行動するA児が学級生活満足群に属すること、真面目に努力しているC児が、侵害行為認知群に属していることには日常の観察とは違いのある結果であった。しかし、このアンケート結果は対人関係を結ぶ力の育成に力を注ぐことの必要性を示唆するものであった。

対人関係を結ぶための意図的な体験活動の繰り返しや保護者との連携を密にした取り組みの連続が、先に述べた人間関係を結ぶ力を高めることができるのではないかと考えた。また、これらの取り組みの効果を客観的に把握するために12月に2回目のQ-Uアンケートも行い、1回目との対比を行った。

※1 Q-U アンケート

Q-U (QUESTIONNAIRE-UTILITIES) とは、『楽しい学校生活を送るためのアンケート』という標準化された心理検査の一つ。子ども達の学級生活での満足度と意欲、学習集団の状態を質問紙によって測定するもの。

2. 実践の概要

児童の対人関係を結ぶ力を高めるために、道徳や特別活動、朝の会、終わりの会の時間の中で、ソーシャルスキルトレーニング（※2）、構成的グループエンカウンター（※3）を使ってトレーニングを行った。その内容は、意図的に仲間と関わる場を設定し、相手の気持ちを考える実践や、協力して完成させる実践、定期的によさを認めあう時間をもつ活動、毎日、自分を振り返る活動などを取り入れていきたいと考えた。

※2 ソーシャルスキルトレーニング

人とかかわり、集団に参加していくための知識と技術を学習とトレーニングによって習得し、向上させていくことをねらいとしたエクササイズ。

※3 構成的グループエンカウンター

条件が設定された体験を通して、自分や他者との出会い、ふれあいのある人間関係づくりと自己理解・他者理解をねらいとしているエクササイズ。

①授業を通しての取り組み

(ア) 指導計画 (全16時間)

時	学習内容	学習のねらい	成果と考察
1	人とうまく つきあうコツ (ソーシャルスキル)	ソーシャルスキル指導への動機づけをする。	3 パターンの行動キャラクターをパペットを用いて表現したことでソーシャルスキルの意味やそれを学ぶ利点を伝えた。児童は自分と照らし合わせて、意欲的に学習していた。
2	「うれしい言葉 ビンゴ」 (尼崎市立教育総合センター 平成 19 年度研究紀要より)	何気なく使っている言葉の中には、人を「いやな気持ち」にさせるものや、「うれしい気持ち」にさせるものがあることを確認する。	Q-U テストの所属群の結果との関連性があることを感じた。クラス内の様子を知ることができた。
3	上手な聴き方 「そうだねゲーム」 (ソーシャルスキルトレーニング)	受容的に話を聴いてもらう心地よさを体験し、その大切さを理解する。	児童は自分の話を受容的に聴いてもらうことに心地よさを感じた。
4	上手な聴き方 「元気の出る聴き方」 (ソーシャルスキルトレーニング)	3つのルールを明確化して、体験し、あらためて聴き方を身につける。	聴き方がよいと、話し手も話しやすくなり、会話がうまく成立することに気付いた。
5	わかりやすく伝えよう 「レゴの伝達」 (ソーシャルスキルトレーニング)	相手の視点にたち、わかりやすく伝える	言語表現の苦手な児童や、相手の立場を理解しにくい児童にとって、必要なスキル学習のひとつであると感じた。
6 8 10 12 14	いいとこみつけ (9・10・11・12・1月) (構成的グループエンカウンター)	互いのよさを認め合い、信頼と好意に満ちたあたたかな学級風土を作る	学級内のあたたかい雰囲気づくりにも役立ち、個々の自尊感情を高めることのできる実践である。席替え直前に毎回行うとより効果的であった。
7 9 11	むごんゲーム (図1) (10・11・12月) (構成的グループエンカウンター)	無言の共同作業を通して、お互いの理解を深め、協力しあう人間関係を育てる	席替え後に行うとよい。隣同士のリレーションを高めることに効果を発揮した。
13	無人島 SOS (ソーシャルスキル)	自分の考えを伝え、仲間の考えを大切にして話し合うことができるスキルを身につける	相手の意見を尊重しながら、話し合いで決める。尊重するとはどういう態度でどういう言葉があるのかを学んだ。
15 16	誰のことかな (2・3月)	互いのよさを認め合い、信頼と好意に満ちたあたたかな学級風土を作る	

参考文献 『ソーシャルスキルマニュアル』上田一彦・岡田智編著 明治図書

『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校』國分康孝監修 小林正幸・相川充編著 図書文化

『構成的グループエンカウンターエクササイズ 50 選』八巻寛治著 明治図書

(イ) 研究授業

- 大事な意見は？「無人島SOS」（ソーシャルスキル）
- 単元目標
 - ・自分の考えを伝えることができる。
 - ・相手の意見を尊重しながら、話し合いで決めることができる。
- 展開（20分＋45分）

学習活動	指導上の留意点（○）と支援（◎）
1. 『無人島SOS』をする ・個人の考えを書く 2. 前時を振り返る 3. 本時のめあてを確認する	◎場面を想像して書くようにさせる ○『無言ゲーム』の感想を思い出させる
自分の考えを伝え、仲間の考えを大切にしながら決めよう	
4. 『無人島SOS』をする ・グループで話し合い アイテムを3つ決める（15分） ・司会者 ・書記 ・発表者 ・黒板に書く ・グループごとに発表する（5分）	○途中で自分の考えを書き換えないようにさせる ○話題がそれていないか確認する ◎進行がうまくいかないところは司会の方法を確認させる ○相手の意見を尊重した言い方や態度を見つけ、後の指導の参考とする ・「～どう？」・「なるほどねえ」 ・「それいいかも！」・「それもそうやなあ」 ・「～さんの言いたいこともわかるけど」 ・拍手 ・うなずき ・相手を見ながら ・表情
5. 感想を書く・発表する	○理由をつけて話させる ○めあてにそって考えさせる ○3つ目の決まり方を振りかえらせる ○時間内に決めることができた原因・理由を考えさせる
6. まとめを聞く	◎班での話し合いの様子を思い出させる ・まほうの言葉・まほうの態度

○ 授業の考察

互いに自分の意見を主張するのであるから、決定するためには、互いの意見を尊重することが必要となる。話し合いでは、誰もが納得して決定することが必要である。そこで、話し合いを円滑にするような態度や言葉が必要となる。『無人島 SOS』の終了後、児童は、その授業の話し合いの様子を想起した。その時の話し合いがお互いに相手を受容し合うような雰囲気を感じ合っていたからこそ、相手の意見を尊重する話し方や相手を受容する態度を見つけ出すことが出来た。

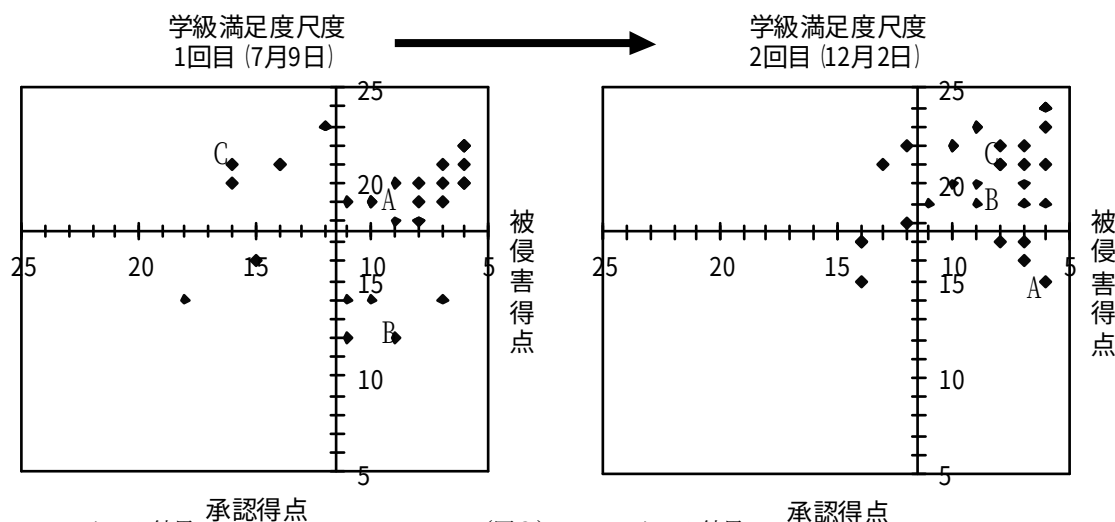
②日常的な取り組みと考察

内容	ねらい	考察
くらしのカード (資料1)	自分の一日を振り返り,仲間に伝えることで,明日の自分への希望と期待を持つ。	児童自身の振り返りができる。また,教師側からの個への対応と保護者との連携が深まった。
朝の会 (係活動の充実)	係ごとの企画を行うことで,クラスのリレーションを高め,個々の力を発揮する場,リーダーとしての役割を果たす場として行う。	各係の児童がアイデアを出し,個々が活躍し,リーダーとしての役割も果たす。楽しいクラスの雰囲気づくりにつながり,皆が楽しむことができた。
終わりの会	・心すっきりタイム・ほめほめタイムの時間を共有することで,仲間の気持ちやよいところを知る。 ・一分間スピーチやサイコロトークの実施で自分を表現する場をもつ	・心の中の思いを皆に伝える時間となった。心すっきりタイムに関しては,学級の様子を観察しながら,慎重に行う必要があった。 ・児童が一番楽しみにしている時間であり,聞く態度や言語表現の上達にもつながった。また,互いを知り,児童相互の関係も密になった。
班の木もち (班目標)	班の実態に合わせた目標を設定することで,毎日,目標にむけて班で努力し,その振り返りを行う	小集団でのがんばり目標を持つことで,相互に励ましあい,力を引き上げることが可能になった。
クラス遊びの日	毎週木曜日の昼休みは,クラス全員で遊び,リレーションを高める	学級会係を中心に,各係からの提案などで週1回の楽しみな時間となった。めあての「思いやりと笑顔」が明確であったため,みな積極的に参加し楽しむことができた。

毎日,終わりの会で行う。紙面左側は,①目標②学習③生活の領域にわけ,達成したら○,達成できなければ赤でぬりつぶすことにした。右側は,3行日記の形をとり,保護者からのひとこと,担任からのひとことを書いた。児童への励ましを書くことを保護者にも伝えた。

(資料5) くらしのカード

3. 実践の結果と考察

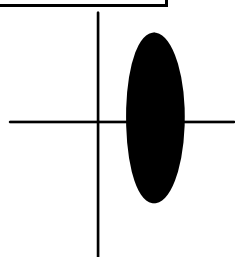


(図1) Q-U アンケート結果

(図2) Q-U アンケート結果

Q-Uアンケートの結果の見方 (集団について)

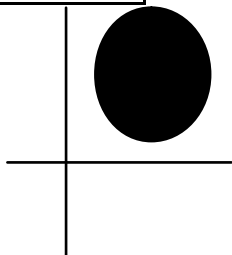
1回目 7月9日



リレーションの確立がやや低い学級集団⇒SGEを活用する

子ども達の承認感にばらつきがある。この温度差を減らすために、評価の視点を多様化させ、子ども同士が様々な視点で認め合えるような場を設定し、人間関係を深める対応が求められる。特に、承認得点の低い子どもに対して、認める行動、がんばりを促す言葉かけを、まず、教師に求められる。このタイプの学級集団に対して、ほとんどの教師が叱責、叱咤で行動させようとしているが、逆効果である。

2回目 12月2日



ルールとリレーションが同時に確立している学級集団

子ども達の相互作用を拡大するよりも、質を深めることに重点をおく。ルールやリレーションが確立している状態なので、子ども達主体の活動を多く取り入れ、教師は委任的なリーダーシップを取ることを心がける。

12月初め、2回目のQ-Uアンケートを行った。約7割の児童が学級生活満足群に属する結果となった。個々に見ると、自己中心的な行動をするA児が学級生活満足群から非承認群へ属している。これは、A児が自分自身を客観的に見ることができるようになった成長とみている。児童全体がA児に振り回されることなく行動できるようになったことから、A児への見方や行動も変容した。その中で、A児を理解する仲間が増え、A児自身が自己の修正すべき生活態度についての理解につながったと考えている。非承認群にいたB児、侵害行為認知群にいたC児は、学級生活満足群へと移動した。B児へは、保護者との連携を密にした「くらしのカード」への励ましの言葉の継続が、本人の自信にもつながったと考える。C児は、係活動による自己開示の場の設定が効果をもたらしたと考える。個々の児童とアンケートに見るクラスの実態から、日常的な取り組みと指導計画に基づいた取り組みが、自尊感情を育てる手だてとなり、個と集団の力を相互に高めあっていくことに効果的であったと考えられる。

(4) 実践事例4 中学校1年生 友好的な人間関係を築く力を高める

1. 生徒の実態

本学級は明朗活発な生徒が多く、元気のある学級集団である。「学校が楽しい」と感じている生徒が比較的多い。しかし、自分の気持ちを適切な言葉で表現できなかったり、相手の気持ちを考えず一方的に自分の感情を押し付けたりするので、他者とトラブルを起こす生徒もいる。例えば、係決めの際、グループの和が崩れることを嫌がり、既に係が決まっている生徒が困惑しているのに交代することを無理強いする場面があった。中でも生徒Aは、学習意欲は高いが被害者意識が強く、自分の言動を客観的に見つめることができにくい傾向にあるため、他者との揉め事が絶えず、学級内での居心地の悪さを感じているようであった。

そこで生徒の実態を客観的に把握するために、6月に第1回目のQ-Uアンケートを実施したところ、学級生活満足群24人(59%)、非承認群7人(17%)、侵害行為認知群3人(7%)、学級生活不満足群7人(17%)という結果であった。学級内のルールや行動規範は定着しつつあるが、承認感の低い生徒が多く、「かたさのある学級集団」と判定された。そこで、生徒が自己理解し、活躍を承認される場面や機会を意識的に設けることで、生徒同士の友好的な人間関係を形成させようと考えた。

2. 実践の概要

「一人一人が学級集団を形成する大切な存在である」という実感を体感させるために、道徳や特別活動、英語の時間の中で構成的グループエンカウンターを使った活動を実践した。また、毎日自分を振り返る活動として、班毎に教師と交換ノートを実施したり、ストレス調査に基づいた面談を行ったりした。

①「ふわふわ言葉とちくちく言葉」(道徳1学期)

(ア) ねらい

- ・言われて嬉しい言葉と嫌な言葉を考え、自分の使う言葉が他者に与える影響の大きさを知る。

(イ) 展開

学習内容	指導の留意点
○教師の体験談「言って欲しかった一言」を聞く。	○学級内で起こった具体的な場面を取り上げる。
○自分が言われて「嬉しい気持ち」になる言葉を考え記入する。 ○自分が言われて「嫌な気持ち」になる言葉を考え記入する。	○十分な時間を与え、自分の経験を思い出しながら用紙に記入させる。
○自分が記入した言葉を発表する。	○生徒の言葉を黒板に板書し、グルーピングする。
○自分が記入した用紙を見て、それぞれの言葉に対する感想を記入し、交流する。	○言葉の与える力を感じさせながら記入させる。

(ウ) 生徒の感想

- ・書くとなるとなかなか思いつかなくて苦労した。
- ・嬉しい言葉と言われると嬉しくなる。

- ・良い言葉をたくさん使える人になりたいと思う。
- ・言ったことは無いけれど、言われると凄く良い気分になる言葉がたくさんあることを知ることができて良かった。
- ・「嫌な気持ち」になる言葉を使っている人は、相手がどれほど悲しい気持ちになっているのか気がついているのだろうか。
- ・相手を傷つけてしまう言葉を何気なく使ってしまった自分に気がついた。

(エ) 授業の考察

多くの生徒は「キモい」や「死ね」という言葉は、言われると嫌な気持ちになると実感しているが、何の気なしに使うことが日常化している。この機会に、他者を不快にさせる言葉を軽々しく使っていた自分に気づき、反省することができたように思われる。

嫌しい言葉

・ありがとう、サンキュー
・強さね
・すごいな
・うまいな
・隣りになる
・花嫁してるよ
・ナイス、OK
・ドンマイ
・よくやったな
・やるなあ
・あともう少し
・何とかなるって
・大丈夫？

・おもしろいね
・強いなあ
・カッコいい
・綺麗だね
・優しいね
・話しやすい
・頭、運動神経いいね
・速い
・よろしくね
・また明日
・仲良いわ
・期待してるよ
・おめでとう

②「友だち紹介」(英語科 2 学期)

(ア) ねらい

- ・ペア活動を通し、協力して課題を解決しようとする姿勢を養う。
- ・英語を使って自分のことを知ってもらい、相手のことも知る。

嫌な言葉

・死ね、殺すぞ
・ウザイ
・気持ち悪い、キモい
・目障り
・ダルイ
・興味ない
・黙れ、しゃべるな
・近寄らんとして

・ムカつく
・邪魔
・弱虫
・嫌い
・汚まる
・クズ、カス
・バカ、アホ
・「話の後に」で

(イ) 生徒について

「英語が好きである」と答える生徒が多く、音読練習ではしっかりと声を出して取り組む姿勢が見える。特にリズム読みを得意とし、教科書本文の暗唱に挑戦しようとする生徒もいる。しかし、英語が苦手教科だと感じる生徒もいる。聞いて発音できるが自発的に読んだり書いたりすることが困難であるといった課題がある。だから、生徒間で目標達成度に差が生じ始めている。

- ・生徒 A(女)・・・学習意欲・能力ともに高いが、自分本位であるため、他者と上手く人間関係が築けずトラブルを起こしがちである。(学級生活不満足群)

支援→できたことを褒め、相手にも教えてあげるように促す。

- ・生徒 B(男)・・・教科によって学習の斑があり、意欲は高くない。仲間意識が強く、反社会的行為に対する興味が強い。(侵害行為認知群)

支援→活動への参加意欲を高め、協力して一つでも課題を解決できることを目標にさせる。

- ・生徒 C(女)・・・学力・理解力が低く、自分の気持ちを言葉で表現することが苦手であるため、話すことを避ける傾向にある。(要支援群)

支援→教えて欲しいという気持ちを言葉で相手に伝え、力を借りながら、「できた」という達成感を感じさせるようサポートする。

(ウ) 展開

学習内容	生徒の活動	指導の留意点と評価
○挨拶と簡単な質問	○大きな声で挨拶をする。 ○英語で質問に答える。	○大きな声を出させる。
○テレパシー・ゲーム	○一般動詞を答え、列挙された一般動詞を大きな声で発音し、意味を確認する。 ○前後でペアになり、数ある一般動詞の中から自分が選んだものを相手に念じる。	○一般動詞を板書し、発音と意味を確認させる。 ○相手の表情の変化に注目させる。

	○念じた一般動詞が相手に伝わっているか確認する。	
○ワークシートの作成 (一人称と二人称の疑問文) ○インタビュー活動 ○ワークシートの作成 (三人称) ○発表	○自分のことを英語で表現する。 (I like ~.) ○友だちにたずねる英文を作る。 (Do you like ~? や How many ~?) ○英語で自分のことを伝えてから相手に質問し、ワークシートに答えを書き込む。 ○友だちにインタビューした内容を第三者に伝える英文を作る。 (He / She likes ~.) ○クラス全体に、友だちのことを三人称単数現在形を含む英文で紹介する。	○分からない単語や文法は、辞書を使用するなどしてペアで解決させる ○ペアで異なる英文を作らせる ○相手に対する気遣いの態度やプラスになる言葉を見つける ・「～どう？」 ・「これでいいのかな？」など ○英語で相手に伝えたり質問したりする達成感を感じさせる。 ○主語に応じて動詞の形を変化することを理解させ、三単現形を正しく作らせる。 ○英文をできるだけ暗唱さ、大きな声で発表させる。
○評価と感想	○目標達成度を自己評価する。	○ペア活動を通して感じたことを記入させる。

(エ) 生徒の感想

- ・自分のことを相手に上手く伝えられて良かったし、楽しかった。
- ・友達と協力して難しい英文に挑戦できた。
- ・ペアで授業をすると楽しい。
- ・友達と英語で会話するのは難しかったけど、またやってみたい。
- ・もっと英語を勉強して友達と英語で会話をしてみたい。

評価 今日の活動を振り返って自己評価をしよう。 A できた B ずいぶん C できなかった

1. 積極的に英語を使うことができた。	A	B	C
2. 分からないことは友達や先生に質問して解決することができた。	A	B	C
3. 自分のことを英語で正確に相手に伝えることができた。	A	B	C
4. 英語を聞いて、相手のことを正確に理解できた。	A	B	C
5. 人柄によって動詞の形を変化させることができた。	A	B	C

感想

友達のことを英語で知ることができて良かったです。 もっと英語を勉強して、使えようと思っています。

(オ) 授業の考察

(資料5) 自己評価カード

テレパシー・ゲームでは、普段はじっくり見ることのない他者の表情を観察させることで、互いに自ずと笑顔がこぼれ、リラックスした雰囲気をつくることができた。そのため、ペアで協力して徐々に問題解決に取り組むようになり、相手を承認する声も聞かれるようになった。生徒 A は自力で課題に取り組んでいたのが協力するように促すと、ペアの相手である生徒 C に対して、「こうするんじゃないかな。」と声をかけ、生徒 C は嬉しそうな表情をし、「ありがとう。」と言った。普段はノートを取ることもしない生徒 B は、相手の活動を気遣い、「どうしたらいいの。」と聞きながら活動に取り組めた。さらに、発表を聞いて喚起の声と拍手が沸きあがり、他者の発表を賞賛する光景が見られたことは大きな収穫であった。

③「交換ノート」

(ア) ねらい

- ・日々感じていることや、担任以外の授業中に起こった出来事などを記入することで、

1日の振り返りをする。

- ・自分の思いを適切な言葉を使用して表現することを練習する。

(イ) 展開

班(6名)毎にノートを1冊用意し、毎日一人ずつ記入させる。ただ事実を羅列するのではなく、その日に感じたことや思ったことをできるだけ長い文章で記入させる。また、それに対し、教師は褒めたり励ましたりするようなコメントを記入する。

(ウ) 生徒の感想

合唱コンクールについて

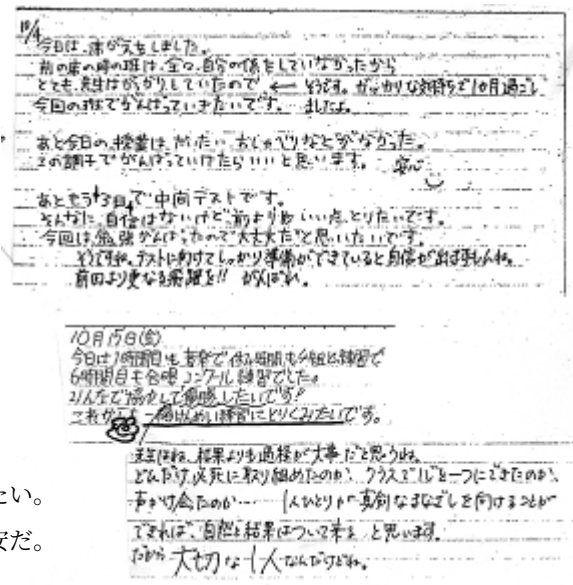
- ・今日の合唱練習は男子がちゃんとしてくれなかったけど、本番では、一生懸命歌っているRさん(肢体不自由)のためにも頑張りたい。
- ・聴いている人の心に届く歌を歌いたい。
- ・銅賞だったので残念だった。欠席したEさんのために金賞を取って、もう一度全員で歌いたかった。

試験について

- ・自信は無いけど、前回より良い点を取りたい。
- ・緊張してきた。頑張りたいけどすごく不安だ。

授業と係の仕事の様子について

- ・みんな授業に静かに取り組めていて良かった。
- ・今日は先生がしんどそうだった。何かあったのかな。
- ・係りの仕事がちゃんとできていなかった人がいるので、しっかりやってもらいたい。



(エ) 考察

女子は、書いて気持ちを表現することを楽しんでおり、積極的に取り組んでいる。一方、男子は書くことを苦手とする生徒が多く、その日に起こった事実を羅列するだけのノートが目立った。しかし、自分の番が回ってくると、他者が記入した内容や教師のコメントに興味深そうに読んでいた生徒が多く、徐々に事実に基づく気持ちを表現するようになってきた。「今日は楽しい1日だった。」と書いた生徒に対し、「何が楽しかったのか聞きたいな。次はもう少し具体的に書いてくれることを待ってるよ。」とコメントすると、「〇〇君が面白いことを言ったからいっぱい笑った。平和な1日だった。」というように、少しずつではあるが、具体的な内容に変化した。また、「〇〇さんの日記はカラフルで、読んでいて楽しくなるよ。」とコメントすると、それを読んだ生徒の日記がカラフルになり、「頑張って書きました。」ということもあった。このことから、生徒の日記に教師がコメントを入れることで、生徒は自分の思いを表現し始め、さらに承認されたいと願うようになってきたことが窺える。また、他者の良い書き方を参考にして自分の気持ちを書ける生徒も増えてきた。

④ 「ストレス調査に基づく面談」

学期末に2回(7月と12月)のストレス調査を実施した。調査後、全員と一人ずつ面談をした。特に、ストレス度の高い生徒には時間をかけ、非指示的・受容的な態度で

話を聞くことを心掛けた。生徒の実態や状況を考慮し、必要があると判断した場合には、問題解決のために有効だと思われる選択肢を与えたり、達成しやすい目標を共に考えたりした。

努力家で学力も高く、何事にも決して手を抜かない生徒が、親からの過度なプレッシャーに耐え切れないという悩みを涙ながらに訴えることもあった。また、他者に流されやすく、物事を笑ってごまかす傾向にある生徒が、これまで行動を共にしてきた仲間から距離を置きたいという胸の内を吐露することもあった。中でも、1学期からトラブルが耐えない生徒 A は、思い込みが激しく、被害者意識が強い生徒であった。そのため、繰り返し面談を行った。言葉で表現させることを心掛け、時間をかけて事実や思いを一つずつ確認しながら面談を進めていった。また、思いを全て話させて、生徒 A のとるべき道を共に考えるようにした。

生徒 A との面談の様子

<1学期>	
・ 係の仕事をしていない	他生徒からの反感に対して、「やっている。何でそんなこと言われるのか分からない。先生はみんなの言うことを信じるでしょ。ムカつく。」と言って泣く。「自分ではやっているつもりでも、みんなから見たらちゃんとできていないみたい。頑張ろう。」と言うが、教師に対する不信感を抱く。
・ 持ち物の紛失	「絶対に誰かに取られた。」と言う。「もう一度一緒に探してみよう。」と提案するが、「何回も探した。あるわけない。」と言い張る。しかし、教師が探すとロッカーから出てくる。「何で？探したのに。」というばかりなので、「人を疑ったり決めつけたりせず、あらゆる可能性を考えてみよう。」と助言する。
<2学期>	
・ 自分の絵を捨てる	「どうして自分が描いた絵を捨てたの？」とたずねると、「気に入らなかったから破って捨てた。」と言う。「先生から見たらとっても上手に描けてたけどな。捨てるんだったら先生欲しかったわ。」と言うと、 <u>「あれはあかんわ。他の絵はまあまあ描けてるんだけどな。」</u> ※と言う。
・ 合唱コンクールの練習をちゃんとしない	他の生徒からの意見に対して、「分かった。」と前向きな発言をする。交換ノートに「みんなのために自分では頑張って歌ったつもり。でも、銅賞で悔しかった。」と書いていたので、翌日、 <u>「みんなのためにありがとう。」</u> と本人に声をかけると笑っていた。※
・ 持ち物の紛失	生徒 C に預けていた物がなくなったと他の教師に言ったところ、自分を非難されたと受け取り、「いつも私が怒られる。私は悪くないのに。何でなん？」と言って壁に頭をぶつけながら泣く。落ち着かせてから、「何があったのか最初からゆっくり聞かせてくれる？」と言うと、所々感情的になりながらも話をする。「C さんからも話を聞いてみるね。でもお互いに言葉が足りなかったところもあったかな。」と言うと、 <u>「私も気を付けないといけないところはあった。」</u> ※と言う。

面談を繰り返すうちに、生徒 A は自己の行動を振り返り、トラブルの原因が自分にもあることを認識していった。「いつも私が悪者になる。」と言うことも減ってきた。教師の姿勢にも変化があった。生徒 A を何とかしてやりたいとの思いを強く持ち過ぎ、「～

しないと駄目よ。～でしょ？」と一方的に考えを押し付けてしまうこともあったが、まず本人を受容し、できることを一つずつ積み重ねることで達成感を感じさせようと努めた。その結果、教師が褒める度に表情が明るく素直になり、教師との関係も改善されつつある。また、1学期末の懇談では、保護者は子どもの発言を鵜呑みにし、教師に対して非常に攻撃的であった。本人は保護者の様子を見て笑っており、教師とのやり取りを楽しんでいるように見えた。しかし、2学期末の懇談では保護者の様子が変わり、本人の様子や変化を聞いて、「いつも気にかけてもらってありがとうございます。」と感謝の言葉を聞くことができた。※面接の様子で本人に変化があったと感じられる特徴的な事に下線を引いた。

ストレス調査質問項目

1. 眠れない 2. 嫌な夢や怖い夢を見る 3. 気分が沈む 4. 小さな音にでもビクッとする 5. 人と話す気にならない 6. いらいらしやすい 7. 何もする気にならない 8. 自分は悪い人間だと思うことがある 9. 思い出したくないのに嫌なことを思い出す 10. 身体から力がわいてこない 11. 食欲がない
12. 遊びや勉強に集中できない 13. 頭やお腹が痛い 14. 何か緊張してしまう 15. 何か不安だ
※当てはまる…3点、かなり当てはまる…2点、少し当てはまる…1点、当てはまらない…0点

※採点結果

合計が 14 点以下…心の状態は元気
合計が 15 から 19 点…心の状態は少し疲れ気味
合計が 20 点以上…心の状態はとても疲労

(表 2) ストレス調査結果 (全体)

	第 1 回	第 2 回
14 点以下	32 人	33 人 A
15 点～19 点	7 人 A	3 人
20 点以上	1 人	4 人

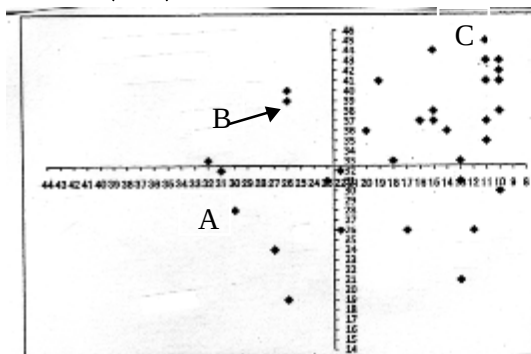
(表 3) ストレス調査結果 (生徒 A)

第 1 回	第 2 回
19 点	11 点

3 実践の考察

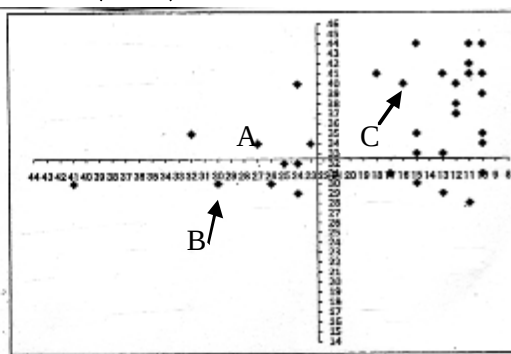
Q-U アンケート

1 回目(6月)



(図 3) Q-U アンケート結果

2 回目(12月)



(図 4) Q-U アンケート結果

12 月に実施した第 2 回目の Q-U アンケートでは、学級生活満足群 21 人(51%)、非承認群 8 人(20%)、侵害行為認知群 5 人(12%)、学級生活不満足群 7 人(17%)という結果であった。これは、個々にばらつきのあった第 1 回目の結果に比べると、全体的に学級生活満足群に近づいた形になってきたことが分かる。特に、生徒 A に関しては、承認得点(50 点)は 28 点から 34 点になり、被侵害得点(50 点)は 30 点から 27 点に変化した。また、学級との関わりに関する項目(20 点)では、9 点から 12 点になり、1 学期に比べると学級内での居心地が良

くなったと感じていることが分かる。さらに、ストレス調査の結果では、ストレス数値が減少した。これは、継続的な面談が起因する部分が大きいと思われる。

「一人一人は学級集団を形成する大切な存在なのだ」ということを実感するために、自己を認識し、相手を思いやる豊かな心の持ち主に成長してもらいたいとの思いで今年度の研究を進めてきた。構成的グループエンカウンターを用いた学級全体に対する活動と、交換ノートや面談などの個々に対する活動を並行して実践するうちに、次第に個々が自己を認識し、集団内で自我と折り合いを付けながら他者と共存する兆しが見え始めてきた。このような生徒の変容から、Q-U アンケートの結果に基づき、構成的グループエンカウンターを使った活動を実践し、効果の再現性を確認できた。今後とも継続して個々の生徒を支援し、学級集団の質を高めるような実践的な活動を取り入れていきたいと考える。

4 研究のまとめ

今年度は、「個や集団の質を高める」ことをテーマに、4人の研究部員が実践研究に取り組む中、次のことを確信した。

- 教師の主観による児童生徒に対する見方は、独りよがりになったり、思い込みが強くなったりすることがあった。しかし、客観的な資料（Q-Uアンケートやストレス調査等）を併用することにより、新たな視点から個々の児童生徒を見ることが出来た。
 - 客観的な資料を併用することにより、その学級集団の特徴が明確になった。そして、年間計画を作成する際にその特徴を反映させることが出来た。その特徴から反映させた課題を克服するために年間を通して長期的な見通しをもって学級集団を見ることが出来た。
 - 授業において個々の児童生徒が目指すべき目標を設定し、その目標達成に向けてどのような支援を行えばよいのかを考えることは重要である。特に、自分の考えていることを話し、同じグループの仲間の意見を共感的に聞く態度が必要な話し合いの場面では、ちょっとした助言によって児童生徒が自信を持って学習に臨めるようになる。適切な助言は、日々のきめ細やかな個々の児童生徒の観察から生まれる。
- そして、4つの実践から次のことを検証した。
- 何か問題が生じてそれに対処するために授業をしたり、個別に対応したりするのではなく、学級集団の課題を把握し、長期的視野を持った年間計画を立て目標に向かって実践することが、クラスを「心の居場所」に作りあげることへつながる。
 - 個々の児童生徒のよりよい成長を願っての保護者との面談、授業満足度を日々自己評価したことに対してコメントを書き続けた「授業自己チェック表」、担任から児童へ向けての一言や保護者からの励ましの言葉を継続して行った「くらしのカード」、ストレス調査に基づいて何度も繰り返した生徒との面談等、日々のきめ細やかな継続した取り組みによって児童生徒が自信を持ち、共感的な理解のある仲間の関わりによって、新たなことに挑戦するエネルギーが生まれてくる。

5 おわりに

「人が人と結びつくことで自信を持ち、新たなことにチャレンジできる」クラスを作ることを目標にして取り組んだ。しかし、実践の考察から見えた課題からがスタートであると考え、今後も実践を積み重ねたい。

確かな言葉の力を育てる指導の研究

－理解・評価しながら読む力の育成をめざして－

指導主事	樋口 博子	
研究員	坂本 肇	(下坂部小)
〃	青木 優樹恵	(潮小)
〃	吉田 大	(長洲小)
〃	鈴木 佳世	(水堂小)
〃	糸賀 美和	(園田北小)

【内容の要約】

国語科においては、書かれたテキストを利用し、理解し、熟考する能力が重要であると考えられる。本年度は、PISA型読解力に着眼し、理解・評価しながら読む力を高めるための授業実践に取り組む。

ディベート教材に取り組むことで、子どもたちの主張には意見とそれを支える根拠、そして、なぜ、それが根拠となりうるかという思いが込められるようになり、テキストを理解・評価しながら読む力の獲得の萌芽的段階を示していた。

キーワード：PISA型読解力、ディベート、テキストの理解・評価、萌芽的段階

1	はじめに	97
2	研究の内容	97
3	実践	
	(1) 実践例1(6年)	100
	(2) 実践例2(6年)	107
	(3) 実践例3(1年)	113
	(4) 実践例4(4年)	118
	(5) 実践例5(5年)	122
4	研究のまとめと課題	126
5	おわりに	126

1 はじめに

昨年度の研究では、基礎・基本を大切に、国語科3領域の学習を対話活動として捉えることで、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」が系統的に関連し、相互に影響を及ぼし合うことが授業実践から分かった。また、それぞれの領域が異なる教材・方法を用いながら本質的には同じ「対話する力」＝「伝え合う力」であることを追求することができた。また、国語科の年間計画を立て、目的意識を持って学習することで「伝え合う力」の向上、「対話・話し合い活動」の充実にも繋がった。本年度は、これらの成果をさらに深化させるとともに、話し合い活動の基礎となる、教材を読み取る力「読解力」に着眼し、以下の研究を深めたい。

- (1) 年間計画を作成して、目的意識を持って学習計画を立て取り組み、学びの個人差を克服するため、個に応じた指導法の開発をする。
- (2) 対話活動を主とした教材分析を行い、伝え合う内容「何を伝えようとしているのか」を整理し、伝え合う技能・技術(スキル)の定着を図る。
- (3) 生きて働く力につなげるために、日常生活の中で、伝え合う力の「言語意識」「言語環境」を工夫をする。
- (4) PISA型読解力に着眼した「読解力」の育成をおこなう。

2 研究内容

- (1) 研究のテーマ

「確かな言葉の力を育てる指導の研究」

－伝え合う力の育成をめざして－

- (2) 研究テーマ設定について

学習指導要領の国語科の目標の中に「国語を適切に表現し、正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに思考力や創造力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」とし伝え合う力の指導を重視している。

「伝え合う力」とは人間と人間の関係の中で互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり、正確に理解したりする力である。また、情報化・国際化の社会で生きて働く国語の力であり、人間形成に資する国語科の重要な内容となる。言葉で伝え合う力を育むためには確かな言葉の学びのが必要となる。本研究では、言葉の素晴らしさや豊かさを実感させるために、言葉を大切にし自らの言葉を磨き活用することを目指し「確かな言葉の力を育てる指導の研究」として上記のテーマを設定した。

- (3) 重点課題

研究テーマに迫るため本年度は「3つの重点目標」を設定し、取り組むことにした。

＜PISA型読解力に着眼した「読解力」を高める3つの重点目標＞

目標1 テキストを理解・評価しながら読む力

- ・目的に応じて理解し、解釈する能力の育成
- ・評価しながら読む能力の育成
- ・課題に即応した読む能力の育成

目標2 テキストに基づいて自分の考えを書く力

- ・テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成
- ・日常的・実用的な言語活動にいかす能力の育成

目標3 様々な文章や資料を読んだり、自分の意見を述べたり書いたりする力

- ・多様なテキストに対応した読む能力の育成
- ・自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

< 3つの重点目標の具体的内容 >

	重点目標	重点目標の具体的内容
目標1	テキストを理解・評価しながら読む力を高める	・本文と挿絵，写真との関連や対応を重視した読みを位置づける。 ・内容と関連した図書から自分の読みたい本を探して読む活動を取り入れる。 ・発表や表現活動を目的にし，要点をまとめたり，引用したりするなど読みに慣れる学習を位置づける。 ・テキストの内容，形式や表現，信頼性や客観性，引用や数値の正確性と関連づけて建設的に批判したりするような読み（クリティカル・リーディング）を充実する。
目標2	テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める	・テキストの内容を要約・紹介したり，再構成したり，自分の知識と関連付け・意味づけたり，自分の意見を書いたり，論じたりする機会を設ける。 ・短時間で，字数制限をして（例：100字以内程度，200字程度等）テキストの内容や自分の考えを書きまとめる。 ・テキストを読んで理解することで得られた知識などについて，実生活や行動と関連づけて書く力を高めるとともに，書いたものをさらに深めることを通じて読む力を高める。 ・考える力を中核として，読む力，書く力を総合的に高めていくプロセスを確立する。
目標3	様々な文章や資料を読む機会や自分の意見を述べたり書いたりする	・朝の読書の推進を詩，読書活動を推進する。 ・表現の特徴をつかむために，様式の違う文章と比べたり，既習のテキストと比べたりする。 ・中核教材（教科書の物語文や説明文）に関連させ，新聞や雑誌記事，パンフレットや図表などを読む。 ・自分の意見を支える根拠をしっかりと提示するために，複数箇所を引用しながら自分の考えを書いたり述べたする。 ・決められた場所や時間の中で説明したり，報告したり，紹介したりする。

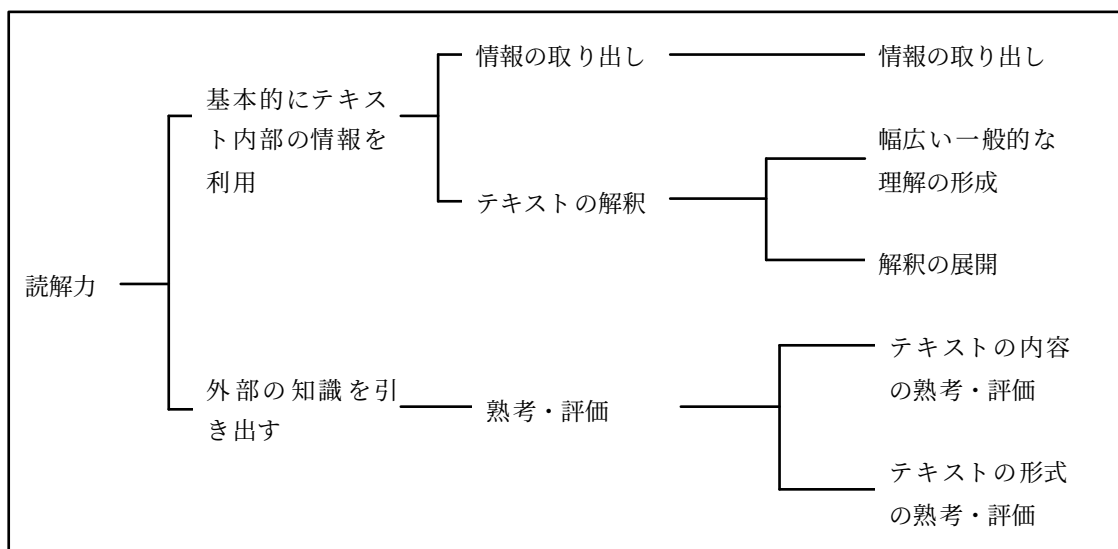
< P I S A型読解力>

「自らの目標を達成し，自らの知識と可能性を発達させ，効果的に社会に参加するために

書かれたテキストを理解し，利用し，熟考する能力

【情報の取り出し】テキストに書かれている情報を正確に取り出す。
 【解 釈】書かれた情報がどのような意味を持つのか理解・推論する。
 【熟考・評価】テキストに書かれていることと知識・考え方・経験等との関連との結びつけができる。

図 読解力の枠組みとプロセス（側面）の下位尺度との関係



（国立教育政策研究所監訳『PISA2006年調査 評価の枠組み』ぎょうせい，2007年）

< P I S Aに対応できる教材と読解指導>

P I S Aに対応できる読解指導	各学年における学習教材
子どもたちひとり一人のユニークな読みを表現させる。	「おおきなかぶ」「けんかした山」 「ずっと，ずっと大すきだ」 1年
書かれている確かな証拠を根拠にして意見を発表させる。	「人類よ宇宙人になれ」 6年
具体的な根拠をあげて，本の内容や文章表現が効果的かどうか評価したり，批判したりさせる。	「日本語について考える」－新聞学習－ 「アーチ橋の仕組み」「アーチ橋の進歩」 4・5年
子どもが主導し，グループ学習で子ども同士が討論して課題を解決する協同的な読解をさせる。	「人類よ宇宙人になれ」 6年
本・雑誌・インターネット・新聞・テレビ・漫画等多様なメディアを活用する。	「日本語について考える」－新聞学習－ 「人類よ宇宙人になれ」5・6年 「情報をもと考えをまとめて伝えよう」 6年

3 実践

(1) 実践例1 (6年)

尼崎市立水堂小学校 鈴木佳世

年間指導計画

月	単元	対話的活動	つけたい力
4	●声に出して伝え合おう	リリーススピーチ	・はっきりとした声を出して話す。
5	●自分の考えをはっきりさせて	話し合い 鉛筆対談	・自分なりの物の見方や考え方をもち、伝えたいことを明確に話す。 (実物や資料による説明)
6	●情報をもとに考えをまとめて伝えよう	意見文・新聞作りによる発表会	・社会問題に関心を持ち、必要な情報を集め、まとめ、出し合い話し合う。 (引用・抜粋・事例による説明)
9	●「スピーチにぴったりの題を」夏休みに体験したことをまとめ、発表し、内容に合った題を考える	発表会 話し合い	・話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる。(分類する)
	●「言葉の意味と使い方」取り上げた語句を使って文章を作成し、まとめ、語句に合った文章を考える	資料をもとにした話し合い グループトーク	・資料を作成し、提示しながら説明し、それを聞いて助言や提案をする。 (選択する)
10	●パネルディスカッションをしよう	パネルディスカッション	・聞き手の反応を予想しながら幅広く調べたことやまとめたことについて根拠を明らかにして話しあう。
	●ディベートをしよう (NIE 学習)	ディベート	・自分の立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合う。
11	●人類よ宇宙人になれ 伝えたいことをはっきりと	クラストーク プレゼンテーション ディベート	・論点を整理して話し合う。 ・相手の意見の根拠を聞き取る。 ・場に応じた適切な言葉遣いで話す。
2	●生活を振り返って	発表会	・知らせたいことを選び、事柄の順序を考えて相手に分かるように話す。
3	●卒業論文発表会をしよう	卒業論文発表会	・話の構成を考え、自分の思いをはっきり話す。

単元「人類よ、宇宙人になれ」

単元目標

- ・ 目的や意図に応じ、考えたことや伝えたいことなどについての的確に話すことや、相手の意図をつかみながら聞くことができるとともに、計画的に話し合おうとすることができる。
(話・聞)
- ・ 目的や意図に応じ、考えたことなどを文章全体の構成の効果を考えて、文章に書くことができる。(書)
- ・ 目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読むことができるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとするすることができる。(読)

指導にあたって

2009年7月、国際宇宙ステーション（ISS）日本実験棟「きぼう」が完成した。同年9月、日本の宇宙技術を結集した無人補給機「HTV」がISSに食料や観測機器を届けた。2010年6月には、小惑星イトカワ探査機「はやぶさ」が7年ぶりに地球に帰還し、世界で初めて、月より遠い天体に着陸し、地球に戻ってきた。人類が月以外の天体で初めて直接物質を採取した可能性もある。今後ますます日本の宇宙開発は進み、その様子が新聞やテレビなどで次々と報道される現在、児童の課題意識や興味・関心を高めるために、新聞や映像を積極的に取り入れる授業展開を行った。

教材「人類よ、宇宙人になれ」は、筆者の遠大な考えに驚きながらも、ぐんぐんその趣旨に引き寄せられる。地球の生命環境が非常に崩れやすい状態にあることに驚き、自分たちの住む宇宙船「地球号」が死滅する前に、人類は宇宙人として生き残れる道を求めるべきだという筆者の意見に共感する。それとともに、今の地球の自然破壊を少しでもくい止め、地球環境を整えていくべきであるという考えにも及ぶ。

教材文の読み取りでは、小見出しを手がかりに、事実と筆者の意見を区別し、写真や図と文や段落と照応させながら、読み取ったことをワークシートにまとめさせる。その際、常に筆者の意見に対する自分の意見を持たせ、宇宙人となる道を選ぶか、地球環境を整える道を選ぶか選択させ、その理由を書かせた。＜表1＞

次に、児童の興味・関心を課題とした調べ学習を行い、自分の考えを書きまとめ、選んだ資料や作成した図や表を大型テレビに提示しながら伝え合う学習を行い、宇宙に対する自分の考えを深めさせた。さらに、ディベート学習を組み込み「調べる→発表する→討論する」の実践を行うことで、自分の意見に対する根拠を明確に指し示す姿勢を評価し、調べたことを根拠にして発表することで、より相手に説得力をもって意見を伝えられることを実感させる。その際、「批判的な思考」を指導していく視野に入れる。ここで言う批判とは、個人（相手）に対する批判ではなく、相手の「意見」を批判することであって、建設的な議論をしていく上で必要な力となる。また、文章だけでなく図や表、グラフなどを含む様々な文字情報を教材として授業に取り入れ、広い読解力を養いたい。「読解力」に関しては、テキストの内容を理解するだけに終わらせず、意見を述べたり、表現したりする力が重要であると考え、①比べる力②調べる力③要約する力④引用する力⑤図読・図解する力⑥発表する力⑦評価する力、の7つの読解力を指導に組み込んだ。

単元構成＜国語 1 4 時間+総合 6 時間＞

第一次 出会う	第二次 深める	第三次 広げる
●宇宙について語ろう (1+1) ・イメージマップ＜資料1＞をもとに、宇宙について話し合う。 ・クラストーク ・新聞記事の利用 ・ビデオ視聴 「はやぶさ帰還」NHK ●文章の構成を考えよう(1) ・形式段落、意味段落をおさえ、文章構成を把握する。 ・難語句の意味を調べる。 ●筆者の論点をつかもう(5) ・筆者の考えに傍線を引き論点をまとめ構成図を書く。 ・筆者と自分の考えを比較し、自分の考えを持つ。 ・クラストーク ・ビデオ視聴 「未知への大紀行『もう一つの地球を探せ』『火星へのはるかな旅』などNHK	●宇宙を探検しよう(2+2) ・宇宙について課題を持ち、調べまとめる。 ・新聞の切り抜きやインターネットを使い、宇宙の情報を調べる。 ●宇宙を紹介しよう(1+3) ・プレゼンテーションを行う。 ・資料の選び方や提示の仕方について評価し合う。	●考えを深めよう(2) ・ディベートを行う(本時) ＜資料2：授業風景＞ 「論題：宇宙に進出か地球環境の見直しか」 ・話し合いのルール説明 ・資料の確保 ・効果的な話し合い ・グループトーク ＜資料3＞ ●考えを伝えよう(2) ・宇宙新聞を作成し、他学年や家族へ向けて発信する。 ・学習の振り返りをする。 ・新聞学習

＜資料1 イメージマップ＞

キーワード(=宇宙)からイメージすることを書き、言葉を通して自己のイメージを広げることができた。言葉がつながっていくことで空白を埋めようと、意欲的に書き続ける児童も出てきた。



<資料2 ディベート授業風景>

今回のディベートでは、大型テレビを2台用いて、資料の提示を行った。情報を取り出して資料を作成し、それを伝える方法として、大型テレビを活用した。これによって、ディベーターや審判、参加者にもわかりやすいインパクトのある提示を行うことができた。



<資料3 審判の判定>

審判は9名で、全員が判定理由（＝根拠）を明確にして発言した。

判定メモをとりながら聞くことで、より明確な理由を述べることができた。



実践の考察

<表1 あなたはどっち？意見の変容>

現在進められている宇宙進出計画のDVD視聴後、宇宙進出が多数派に入れ替わった。次に過酷な宇宙の現実を知るDVDを視聴したところ、地球環境派が多数を占めた。教材文を読んだだけでは理解するのが難しく、映像を与えることで理解が深まった。

	学習活動	宇宙進出	地球環境
1	初発の感想	14 人	17 人
2	第二段落学習	10 人	21 人
3	第三段落学習, NHK「はやぶさ帰還」視聴	7 人	23 人
4	第四段落学習, DVD 未知への大紀行「もう一つの地球を探せ」「火星へのはるかな旅」視聴	25 人	6 人
5	第五段落学習, DVD 国際宇宙ステーション「過酷な宇宙」視聴	13 人	18 人
6	NHK「今がチャンス日本の宇宙開発」視聴	9 人	22 人

ディベート学習では、①相手の主張を（事実と理論に基づいて）攻撃することとそれにきちんと応えることである。②A・B二つの意見が対立した場合、どちらが正しいか、という枠組みの中で議論し、中間の立場は許されない。真っ向から対立しなければならない。そのためには、まず③相手の話をよく聞き正確に理解する。その上でその内容や論点の運びを批判的に検討する。そして、④相手の考えの不十分なところや矛盾点を追究しなければならない。今回の論題「宇宙に進出するべきか、地球環境の見直しか。」では、ディベート論題には少し無理があったが、討論の楽しさ、面白さを味わうことができた。

（１）相手の主張（事実と論理に基づいて）の追究

相手の話を聞いて、論理的におかしいという感覚を持った聞き手がいれば、話者は「なぜなら」と懸命に筋道を立てて応えよう（＝伝達しよう）とする。

C1 立花隆さんが言うように「人類は、太陽なしで生きる技術を開発して、太陽系の外へと生きる場を延ばしていく必要がある」ということから、宇宙へ進出して「はやぶさ」をつくった日本の科学技術力を生かせば、人類の死をまぬがれ人類の生存を存続することができます。

C2 「宇宙には、空気もなければ水もない、重力もない。人間が安定して暮らしていける条件は、何もない。」と立花隆さんも言っているように、そんな厳しい環境の中で、赤ちゃんや老人が暮らせないので、宇宙進出に反対です。

（２）A・B二つの意見の対立

（情意）対立することを恐れず、納得するまで議論しようとする。

子どもたちの中には、「どっちでもいい」と応える子が多い。しかしディベート学習では、二者択一のためどちらかを決定しなければならない。中間意見がないところで論争することで、自分の意見の信憑性を必死で考える子どもが出てきた。また、異なる考えを交流することで、視野が広がり、物の見方が深まる。その知的わくわく感を味わうことで討論に対して意欲・関心が増し、話者の意見をしっかり聴くことができる。

また、反論するべきところは必ず引用し、引用していない部分については反論しないという原則を徹底させる。そうすることで、相手の発言を勝手に言いかえることを慎むという議論における公正さと一般的な議論ではなく具体的な議論を行う効果が期待されるからである。

C1 開発されたら一人一千万円かかるって言ってたけれど、開発されるまでにお金がかかるんじゃないですか。

C2 開発されるまでにお金がかかるのはしょうがないことだけど、宇宙往還機が開発されたら、一人一千万円ほどになって、開発されたら生活費も安くなると思います。

C3 どれくらいの時間で開発されるのですか。（納得するまで問い返す）

C1 （１）さんが大きな木を火星にもっていったらいいと言っていたけど、そんなにも木をとったら余計に地球の環境が悪くなるし、火星全体の二酸化炭素をなくすぐらいの植物があるのだったら、今、地球でその植物をつかえば地球温暖化もおおると思います。

（対立を恐れず、論理的に話し合うことの価値を理解する。）

C1 蚕は肉じゃないから筋肉もつかないと思うし、唐揚げは、野菜じゃなくて肉もいるんじゃないですか。

C2 肉は宇宙に行って生活が落ち着いてから持ってくればいいし、筋肉がつかないって言ってたけど、蚕にはたんぱく質が多く含まれているから筋肉には問題ないと思います。
(自分の意見に対する批判を冷静に受けとめる)

(3) 内容や論点の運びを批判的に検討

(認知) 多様な考えの存在、異なる意見との交流の意義を理解する。

相手の話をよく聴いて正確に理解する。そして、双方が意見を交わすことで真実や問題の本質が浮かび上がってくる。

C 借金が増え続けるって言っていたけれど、それは日本の問題で、宇宙に進出するのは世界の国々が協力するから、協力すればお金の問題もなくなると思います。
(物事の成り立つ条件をとらえる)

C1 もし、宇宙に進出するんだったら、火星にも二酸化炭素があるし、それはどうやって克服するんですか。

C2 地球にも星にも寿命があって、太陽の寿命をもとにすると、太陽の四分の一の重さの星だと寿命は二千億年もあって、地球よりもっと軽い星を見つければ、人類の生存がもっと長くなるから宇宙に進出した方がいいと思います。(仮定推理によって判断する)

C1 宇宙ごみが増えているって言ってたけど、きのう見たテレビで、今、アメリカの NASA や大学で、宇宙エレベーターというものが開発されていて、その費用は、1.2兆円もかかるけど、それをつくれば、宇宙ごみを減らせるし、何回もロケットを飛ばさなくてもいいと思いました。
(仮説を立て、それを証明する)

C (1) さんが、インターネットのヤフーで質問したと言ってたけど答えてくれた人は、ほんまに宇宙に行った人か、宇宙のことをめっちゃ知ってる人かどうかわからないからそれは確実じゃないと思います。
(情報の妥当性について批判的に考える)

(4) 相手の考えの不十分なところや矛盾点の追究

(技能) 相手の意見を批判的に聞いた上で、自分の考えを論理的に主張する。

相手の話をしっかり聴くことで、これまで何気なく聞いていることを、問題意識を持ち、学習に取り組むことができる。

C1 5%って、だいたい何人ですか。
(相手の発言内容の曖昧な点を指摘)

C 「経済的」っていうのを辞書で調べたら、あまり費用がかからないってのっていたから、宇宙進出するのと地球環境を見直すのと比べたら、地球環境を見直す方がお金がかからないと思います。
(重要な概念は、定義して話す)

C1 (1) さんは、部屋の明かりを消すなど小さなことで地球温暖化が防止できると言っていたけど、日本は、工場も多いから、工場から出る煙などで地球温暖化は進むと思います。
(話の内容を深めるように話そうとする)

また、ディベーターだけでなく、審判や参加者も二つの意見を比較・検討しながら聞いた上で自分の考えを論理的に主張しなければならない。今回、特にこだわったのは、全員がディベートに参加しているという意識を持たせることである。

C1 私は、 <u>地球側を選んだ理由は</u> 、反論1のところ、 <u>作戦タイムの時に（辞書で）調べてすぐ次の反論2に返せるのはすごい</u> と思ったし、その（3）さんの、 <u>火星に酸素を作るぐらいの植物があるんだったら、地球温暖化を直すぐらいの植物もある</u> という意見に納得しました。 （内容や根拠、「結論を生み出す過程」を吟味して聞く）
C（1）さんの意見は、 <u>あくまで自分の意見で、あまり説得力がなかった</u> なと思います。 （事実と意見を区別して聞く）
C（1）さんは、 <u>宇宙進出側が反論している時とかにしゃべっていたので、言葉遣いが適切じゃなかった</u> と思いました。 （評価しながら聞く）
C1 今日の試合は、 <u>今までに見たことのない壮絶な試合</u> でした。 C2 司会の（1）さんの <u>声が大きくて後ろまで聞こえていてよかった</u> と思いました。ディベーターの地球環境側は、 <u>地球温暖化のメリットもあってわかりやすかった</u> し、（2）さんは <u>審判にアピールをしていて、エコをやってみて下さいと言っていたのがよかった</u> と思います。 <u>宇宙側は質問をいっぱいしていたし、資料を最終弁論でも使っていてよかった</u> と思います。 （聞きながら自分の意見がまとめられる。）

今回の授業展開では、ディベート学習を話し合いの方法として組み込むことで、子どもたちは、論じ合うことの面白さを存分に味わうことができた。また、ディベーターだけでなく、審判や参加者にも自分の意見を主張することを求めたため、学級全員が高い関心・意欲をもってディベートに臨むことができた。さらに論題が身近なテーマでないため、テキストに書かれた言葉や図・表をそのまま用いるのではなく、相手にわかるように考えて資料を提示したり、話したりすることを求めたため、意見が出やすく、わかりやすい内容となった。

PISA 型読解力の「3つの観点」に照らし合わせてみると、

観点①「情報の取り出し」については、「立論」において、膨大な資料の中から事実を切り取り、相手意識を持って言語化したり図式化したりすることができていた。

観点②「テキストの解釈」については、教材「人類よ、宇宙人になれ」で筆者の意図を理解し自分の考えと「比較」して読んだ上で、様々な資料を「比較」して読み、相手側の「立論」で出た資料について「推論」し、「比較」して質問したり反論したりすることが概ねできていた。

観点③「熟考・評価」については、書かれた内容だけを読んで推論する「解釈」と違って、本文と自分の知識や経験と結びつけて建設的に相手を批判することが要求される。反論において、お互いに意見は活発に言えていたが根拠が弱く、どの資料のどの部分から引用したのかを言える児童は少なかった。論題が児童の身近な問題ではなかったため、知識や体験と結びつけて考えることが難しかったといえる。自分の体験と結びつけて発言した児童もいたが、資料を使うなどして根拠を提示することができなかったため、審判には説得力がないと判定された。

C 私は冷蔵庫の開け閉めや電気をむだに使わないことでおると信じているので、みなさんも、地球温暖化を防ぐためにやってみて下さい。

この場合、明確な資料（データ・図・グラフ・表）を使って説明していれば、審判を説得することもできたであろう。この実践を通じて、全ての教科で思考力を高める言語活動を行う必要性を実感した。

単元 「人類よ宇宙人になれ」

単元目標

- ・自分の意見を主張しようとする態度を養うとともに、様々な意見交流の形式に意欲的に取り組むことができる。(関・意・態)
- ・考えたことや伝えたいことなどを的確に話すことができるとともに、相手の意図をつかみながら聞くことができる。(話・聞)
- ・書かれている内容について事実と意見の関係をおさえ、自分の考えを明確にしながら読むとともに、サブテキストと比較させながら自分の考えを深めることができる。(読)
- ・目的に応じて、自分の意見を筋道立てて、文章に表現することができる。(書)

指導にあたって

OECD が 2000 年、03 年に行った生徒の「学習到達度調査 (PISA)」では、日本の生徒の読解力の低下が浮き彫りになった。そこで、今回は PISA 型読解力を身につけさせるためにはどうすればいいのかと言うことで研究を進めてきた。これからの社会に求められ国語力 (=PISA 型読解力) とは、①根拠を指し示す姿勢、②自分の意見を言わせる工夫、③批判的読み、批判的思考の指導、④「調べる→発表する→討論する」の実践、⑤図や表などさまざまな文字情報を学習に取り入れることである。このような国語力を養うためには、ディベート学習が適していると考え、ディベート学習に取り組んだ。

本単元「人類よ宇宙人になれ」は、筆者の遠大な考え方に驚きながらも、その趣旨に引き寄せられ筆者の意見に共感する児童や、逆に反対の立場をとる児童など、筆者の意見の展開がはっきり書かれていることによって自分の意見を持ちやすく、論理的思考も学べると考えた。筆者の意見の展開を学ぶ方法として、事実と意見を区別させワークシートに構図としてまとめさせた。そして、常に筆者に対する自分の意見を持たせ、宇宙人となる道を選ぶのか、地球環境を整える道を選ぶのかを考えさせその理由も書かせた。

本教材の読み取りの後で事実しか書かれていないサブテキスト「地球の未来」を読ませた。本教材とサブテキストを比較させることにより、事実と意見の関係がより明らかになり、本文に書かれている筆者の論述の手法に気づかせ、自分の意見を組み立てる上での参考とさせた。

ディベート学習に向けては、本単元以外にも新聞記事を使った学習などを通して、常に自分の意見を意識させ、さらにその理由を考えさせ、ディベート学習へとつながるよう取り組んだ。ディベート学習では、上に挙げた 5 つの PISA 型読解力を意識しながら指導した。今回は大型テレビを使い、自分の意見の根拠となる表やデータを映して、指し示しながら自分たちの論を展開させ、より説得力を持たせるようにした。また、ルールに則って意見を言い合うことの楽しさを味わわせ、様々な意見を聞くことによって自分の意見をさらに深め、色々な視点から物事が考えられる児童を目指して指導してきた。

単元構成《国語1 3時間+総合4時間》

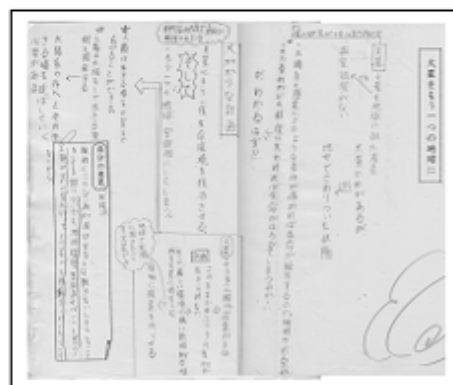
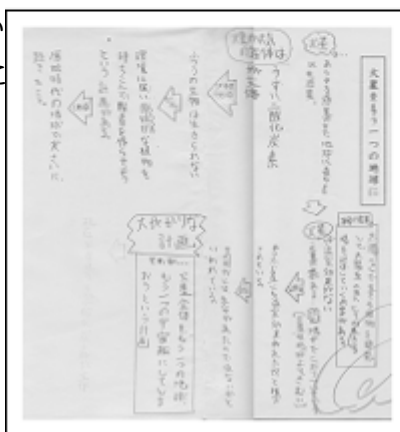
第 一 次	第 二 次	第 三 次
●宇宙について興味を持とう（1+1） ・DVDやテキストを読み、感想を持つ。 ・「イメージマップ」を書く。 ・題名について話し合う。 ●文章構成を考えよう（2） ・筆者の意見と事実を分けて読み取る。 ●論点をつかもう（4） ・小見出しごとに作者の論点の展開にそって構造図を作成する。 ・小見出しごとに筆者と自分の意見を比較し自分の意見を考える。	●比較しよう（1） ・サブテキスト「地球の未来」と教科書教材を比較しながら読む。 ●ディベートをしよう（2+2） ・ディベートを行う（本時）「論題：地球環境を見直すべきか【地球人】それとも、宇宙に進出するべきか【宇宙人】」 ・ディベートのルール説明 ・監査基準の説明 ・資料の収集 ・発表原稿の作成 ・効果的な話し合い	●調べたことを発信しよう（4+1） ・宇宙について課題をもちインターネットや新聞を使って調べる。 ・報告文の形式でまとめ、みんなに向けて発信する。

資料 ワークシート（構造図）

- ◆図やイラストを効果的に入れている。右側の児童は、右から左へ配置してするのではなく、中央か広がるように配置している。



- ◆図やイラストは用いていないが、矢印を効果的に使っている。



実践の考察

本教材をより深く読むためにサブテキスト「地球の未来」を取り入れた。2つのテキストを比較し共通点と相違点を見つけさせた。本教材とは反対の内容のことも書かれていて混乱した児童もいたようであるが、より詳しく事実だけを書いているので、新しい情報を子どもたちに提示し、地球が減びていく様子がよりわかったという点では効果的であったと考える。比較読みの後、【地球人派】と【宇宙人派】の多数派が入れ替わっていることから、地球が減びることをより危機的な状況ととらえられたようである。（下の表を参照）しかし、サブテキスト自体が難しく初めて読んでしっかり理解できた児童は多くはなく、常日頃から色んなテキストを読むことに慣れさせる必要があると考える。

児童の意見の変容

	初発	一場面	二場面	三場面	四場面	五場面	サブテキスト	最終
地球人派	21人	21人	20人	18人	17人	16人	11人	11人
宇宙人派	7人	7人	8人	10人	11人	12人	17人	17人

ディベート学習では、①相手の主張を（事実と理論に基づいて）攻撃することとそれにきちんと応えることである。②A・B二つの意見が対立した場合、どちらが正しいか、という枠組みの中で議論し、中間の立場は許されない。真っ向から対立しなければならない。そのためには、まず③相手の話をよく聞き正確に理解する。その上でその内容や論点の運びを批判的に検討する。そして、④相手の考えの不十分なところや矛盾点を追及しなければならない。今回の論題「地球環境を見直すべきか【地球人】それとも、宇宙に進出するべきか【宇宙人】」では、ディベート論題には難しかった。

（１）相手の主張（事実と理論に基づいて）の追及

相手の話を聞いて、論理的におかしいという感覚を持った聞き手がいれば、話者は、「なぜなら」と懸命に筋道を立てて応えよう（伝達しよう）とする。

C1：フランス通信社によると宇宙食の一日分の費用は約40000円です。地球での食費が一日に約1000円です。前にも言いましたが、火星に行って戻ってくるまでに3年間かかるので、火星に行くだけで一人4380万円かかることになります。それが大人数になると、宇宙開発費を上回るくらいになってしまうかもしれません。

C2：この図の見方を説明します。この緑色の部分は各国で穀物の生産の量が増産するところで、赤いところは穀物の生産が減産するところを示しています。これをみればわかるとおり2度上がれば穀物を増産できるところが圧倒的に多いことがわかります。なので、僕たちは地球温暖化をとめ地球に残るべきだと思います。

(2) A・B二つの意見の対立

(情意) 対立することを恐れず、納得するまで議論しようとする。

子どもたちの中には、「どっちでもいい」と応える子が多い。しかし、ディベート学習では、二者択一のためどちらかを決定しなければならない。中間意見がないところで論争することで、自分の意見の信憑性を必死で考える子どもが出てきた。また、異なる考えを交流することで、視野が広がり、物の見方が深まる。その知的ワクワク感を味わうことで討論に対して意欲・関心が増し、話者の意見をしっかり聴くことができる。

C 1：僕が見た限りさっきロシアの所が緑色（収穫量が増産するところ）になっていましたが、ロシアには人が住めない地域もたくさんあって、住んでいない可能性もあるんじゃないですか。

C 2：これを見てください。これは NASA が出しているお金です。これは JAXA が出しているお金です。(1) さんが宇宙エレベーターを作るのにかかる費用は2兆円だ
といっていましたが、NASA でも1兆5000億しかだしていないのに、お金がたりなくなるんじゃないですか。
(納得するまで問い返す)

C 1：ぼくたちはさっきいったように環境対策をした場合でも温度はあがるので、だからこそ宇宙エレベーターをつくって、宇宙の開発に取り組むんだと思います。

C 2：今は、日本とかアメリカとかでも地球温暖化の対策をしているのに温度が上がっているので、効果はほとんどないと思います。

(対立を恐れず、論理的に話し合うことの価値を理解する。)

C 1：全体からみたら緑のほう（収穫量が増産するところ）が多いけど、スーパーなどのそうことに関しては物価が上がったりはしないんですか。国産が減ったりするとか、そういうのはないんですか。

C 2：減産するところよりも増産する場所のほうが多いので、たとえば輸入などをして
買い取ればいいと思うので物価は上がらないと思います。

(自分の意見に対する批判を冷静に受けとめる。)

(3) 内容や論点の運びを批判的に検討

(認知) 多様な考えの存在、異なる意見との交流の意義を理解する。

相手の話をよく聴いて正確に理解する。そして、双方が意見を交わすことで真実や問題の本質が浮かび上がってくる。

C 1：もし宇宙で宇宙船が故障した場合、一生地球には帰ってこれないので、僕たちはそれよりかは地球温暖化をなおしたほうがいいと思います。

C 2：宇宙エレベーターが作れる技術があれば、宇宙に進出する方が人類の生き残れる可能性があるといます。

C 3：今、宇宙エレベーターなどに他にもかけているお金をかけたら、これらの問題を解決できなくなるとは思うのですが、どうですか。
(仮定推理によって判断する。)

C1：それにたいして、今、宇宙に行くのにお金をかけていて、それを他の国とかが全部宇宙エレベーターを作るのにお金をかけると、宇宙ステーションとかに運んでいるものとかを運ぶお金とかがなくなるから、他のことにお金をかけられなくなるので無理です。
(仮説を立て、それを証明する。)

C1：環境問題というのは約48こあるのに、それに今からもっと増えていく可能性もあるのに、地球温暖化のことばかり言っていて、残りの47個の解決方法がわからないのに、約150年で4分の3の環境問題が解決するといわれても根拠も本
当にあるのかなと思うし、信用もできないからです。

C2：CO2を回収するコストと47の問題を解決するコストがほぼ同じという根拠はど
こにあるんですか。
(情報の妥当性について批判的に考える)

(4) 相手の考えの不十分なところや矛盾点の追及

(技能) 相手の意見を批判的に聞いた上で、自分の考えを論理的に主張する。

相手の話をしっかり聴くことで、これまで何気なく聞いていることを問題意識を持ち学習に取り組むことができる。

C1：宇宙エレベーターはひもをたらすって言っていたけど、ひもだけで安全性は大丈夫
なんですか。

C2：僕たちが聞いているのは48個の問題で、それは地球温暖化は48分の1の問題なので、あとの47の問題はどうするんですか。

(相手の発言内容の曖昧な点を指摘)

C：宇宙エレベーターの素材にはカーボンナノチューブというものを使います。カーボンナノチューブは日本で開発された素材で、鋼鉄の180倍のかたさがあります。さらに柔軟性ももっていてとてもすごい素材です。

(重要な概念は、定義して話す)

C：今の宇宙船がたえられる人数が1000人だといっています。将来の技術を予測すると5000人程度はたえられると思いますが、どんどん世界の人口は増えて
いっています。今は世界の人口は70億人ですが、70億わる5000をすると
140万。140万台の宇宙船が必要になります。140万台の宇宙船に400
人の宇宙飛行士をひとりひとり派遣するには無理があると思います。

(話の内容を深めるように話す)

ディベーター同士では理解し合い、ルールに則って意見を言い合うことの楽しさを味わうことはできたが、審査や監査の児童たちにとっては難解な説明も多く一度では理解できないところも多く、全員が参加できたディベートとは言えなかった。PISA型読解力の3つの観点に照らし合わせてみると、「情報の取り出し」は図や表を使いながらできていたが、「テキストの解釈」では理解があまかったり、「熟考・評価」においては、反駁の際に事実に基づいた反論というものがほとんどできていなかった。この実践を通じて、ディベートに必要な力は国語だけで養えるものではなく、どの教科においても常にPISA型読解力を意識した授業を行っていかなければならないと感じた。

6年生の2つの事例からの考察

3つの重点目標の具体的内容と照らし合わせて

成果

- ・教科書を読み取る際に読みの助けとし、ワークシートにまとめた。まとめるときに挿絵を活用して書く児童もいた。
- ・近隣の図書館で約50冊の宇宙関係の図書を借り1週間教室においておき総合の時間などを活用して読む活動を取り入れた。
- ・新聞学習を通して要点をまとめたり、引用したりするなど、読みに慣れる学習を位置づけた。
- ・ワークシートを活用して、自分なりにまとめ要約、再構成しさらに自分の意見を書いたり、ディベートを通して論じたりする機会をもうけた。
- ・制限時間を設けて立論原稿を書いた。
- ・考える力を中核として、読む力、書く力を総合的に高めていく単元構成を考えた。
- ・朝の読書の推進及び、読書活動の推進をした。
- ・表現の特徴をつかむためにサブテキストを使って本教材「人類よ宇宙人になれ」と比較して読んだ。
- ・本教材に関連させて、新聞や雑誌、パンフレット、記事、図表などを読んだ。
- ・立論の際には、自分の意見を支える根拠をしっかりと提示するために複数個所を引用しながら考えを述べることができた。
- ・宇宙について課題を持ち調べまとめたことを紹介しあった。

課題

- ・テキストの内容、形式や表現、信頼性や客観性、引用や数値の正確性と関連づけて建設的に批判したりするような読み（クリティカルリーディング）ができなかった。
（例）いつのデータなのか etc
- ・話し方や書き方の表現方法としては実際の授業でもきちんと根拠をあげて話したり、書いたりすることができているが、テキストを読んで理解することで得られた知識などを実生活や行動に関連づけることは、できていない。なぜなら、テキストの内容が子どもの実生活がかけはなれていたからである。
- ・立論の際にはできたが、反論の際には複数個所を引用しながら説得力のある資料を提示することはできなかったため根拠の弱い反論となった。

2つの実践の相違点

《A 小学校》

ディベーターだけでなく、審判や参加者にも判定メモを書かせて、判定理由を言わせた。
全員がいつでもディベーターとして発言できるように育てた。

《B 小学校》

ディベーター中心の授業を展開し、大型テレビとパソコンを使い効果的に資料を提示し、図や表を指し示しながらよりインパクトのある発表ができた。

(3) 実践例3 (1年)

尼崎市立潮小学校 青木 優樹恵

相手の考えをよく聞いて、自分の考えを話せる子の育成を目指すためには、実生活に活かせる読解力を身につけさせることが必要であると考え、昨年度に引き続き、読解力を身につけさせる指導法を研究した。

1. 実践の概要

昨年度は、取り組みの1年目ということもあり、PISA 型読解力を身につけさせるためにはどんなことに気をつけて指導すればいいのかを学ぶことから始めた。そのため、PISA 型読解力を意識した教材開発は、学期に一つが精一杯であった。

しかし、今年度は2年目であり、担当も同じ1年ということで、最初から PISA 型読解力を意識した指導を行うことができた。指導計画においても、見通しを持って計画を立て、説明文・物語文それぞれに1学期からどのように積み重ねて指導していくかを明確にした。また、2学期には、光村図書の『じどう車くらべ』と『ずうっと、ずっと大すきだよ』にも取り組んだ。

2. 実践の考察

1クラス22名と少ないからか、入学当初から静かに話を聞くことができた。その反面、声の小さい子が多かった。そこで、話す機会を多く取り入れた。日番のスピーチや学級会にも5月から取り組んだ。質問したときは、相手の質問に対する答えに、「そうですか。私は・・・です。」と応える形を定着させた。また、「・・・です。なぜなら・・・だからです。」と、根拠を基に意見を言う指導も行った。

主な教材の重点指導項目

教 材 名	重点的に指導したこと
ぶんをつくってみましょう	・連続した絵を見て考えること ・根拠を基に文を作ること
なにが、かくれているのでしょうか	・本文と写真を結びつけて考えること ・相違点、類似点に気づく比べ読み ・写真を見て、文を作ること
おおきなかぶ	・登場人物の行動を中心に、場面の様子を読み取ること ・登場人物になって、自分ならどう行動するか考えること

けんかした山	・挿し絵と本文を結びつけて考えること ・自分と友だちの考えを比べること
じどう車くらべ	・挿し絵と本文を結びつけて考えること ・相違点，類似点に気づく比べ読み ・絵を見て，説明文を作ること
ずうっと，ずっと大すきだよ	・登場人物の気持ちを考えること ・登場人物と自分を比べ，自分ならどう行動するか考えること

『ぶんをつくってみましょう』

この単元のねらいは主語と述語を押さえて初めて文を作ることであるが，連続した4枚の絵を関連づけて3枚目の絵を見て文を作ることにより，根拠を基に文を作るといふより高度な活動に結びつけた。この活動が，これから説明文や物語文を読んでいくときにも基本となる。例えば，3枚目の絵を見て，「うさぎがあせってはしっています。」と，「うさぎががんばってはしっています。」という意見が出た。その理由は，「2枚目で，かめがうさぎを追い抜かしたから」「3枚目のうさぎにあせのような絵が描いてあるから」であった。これに対して，どちらも表現は違っていても理由と結びついているからあっているということを実感することができた。



PISA 型読解力を身につけさせるために重要なことは，根拠を基に考えること，そして，根拠に基づいていれば答えは一つではないことに気づき，友だちの意見を認めることができることである。そういった点において，この単元を通して基礎的な指導ができたと考える。

『なにが，かくれているのでしょう』

初めての説明文である。ここでは，しゃくとりむしとこのはちょうの文を提示し，同じところや違うところを見つける比べ読みを取り入れた。また，文と写真を結びつける活動も行った。そして，学んだことを活かして，写真を見て自分で文を作り，発表し合った。例えば，しょうりょうばったの写真から，「はのなかに，なにかいます。・・・はのいろとそっくりにして，きにみつからないようにしているのです。」や，「くさのうえに，なにかいます。・・・しょうりょうばったがくさにそっくりにみえます。」などが発表された。そして，同じ虫について書いていても，人によって表現の仕方が違うことに気づくことができた。

また，この単元で学んだ比べ読みを，2学期の『じどう車くらべ』，3学期の『み

ぶりでつたえる』に活かしていく。

このように、説明文がどのような文章構成になっているのか、どのように読み進めていくのか1年から学ばせ、積み重ねることによって、論理的思考が育つと考える。

『おおきなかぶ』

初めての物語文である。物語文の場合、自分ならどうするかを考えながら読み進めていけるようになることをねらって指導していく。

ここでは、「かぶを抜く順番を変えてもいいのか」と、「あなたならどんな抜き方をするか」、そして、お話の続きを考えさせた。

「かぶを抜く順番を変えてもいいのか」

●変える（13人）

力は合わせると同じだから

「あなたならどんな抜き方をするか」

●同じ抜き方（8人）

お話の通りにしたら抜けるから

お話の通りの抜き方が好きだから

スコップで抜いたらかぶを傷つけてし

もうかもしれないから同じ抜き方がいい

「お話の続きを考えよう」

「みんなでパーティーをしました。」が大半であったが、中には、「おじいさんはもう1回かぶのたねをまきました。またねがいをこめて作ったかぶは大きかったです。」や、「おじいさんはこれから大きなかぶを作りました。」というように、物語の流れからこれから大きなかぶができると考える子もいた。

物語文を読んで自分ならどうするかを考えるのは初めてであったが、考えるのは難しかったけれど楽しかったと答える子が多かった。また、自分の考えを聞いて（認めて）もらってうれしかった、自分と違う考えがあって楽しかったという感想もあった。

『けんかした山』

この単元では、次に学習する物語教材『ずうっと、ずっと大すきだよ』で指導したいことを意識して、ワークシートを作成した。

『ずうっと、ずっと大すきだよ』では、自分の考えを書いたあとで意見の交流を行い、友だちの考えのよいところを取り入れながら自分の考えを加減修正させたいと考えている。そこで、その前段階として、ワークシートに、始めに自分の考えを書かせ、次に意見交流のあと一番いいと思った友だちの意見を書かせ、最後に授業の振り返りを書かせた。

「火を噴き出した両方の山に何と言ってあげたいか」という問いに、読解力が身についてきたA児は、「どうぶつたちがこまっているから火をとめてください。火をとめないとうどうぶつのすみかがなくなってしまいます。」と答え、B児は、「けんかをやめてなかよくしてください。どうぶつたちがこわがっていますから。」と書いた。また、1学期は文を書くことが苦手は何を書いたらいいのかわからず困っていたC児

も自分で考え、「けんかをやめて、火をはやくきえてください。」と、短い文ではあるが書くことができた。振り返りにも、「きくたびにいいのがあって、たのしかった。」と書いており、意見交流する中で聞く力がついてきて、文を書く力にもつながったのではないかと思われる。

『ずうっと、ずっと大好きだよ』

この物語は、エルフの紹介、主人公「ぼく」とエルフの心の交流、エルフの老いと死、エルフの死後の「ぼく」の気持ちの四つの場面から構成されている。また、主人公「ぼく」が愛犬エルフをいかに愛していたかが、回想の形で展開されている物語である。1年生は、生き物に興味・関心があり、実際に生き物の世話をしたことのある子も多い。そのため、主人公「ぼく」に同化しながら読むことのできる教材であると同時に、身近な生き物の「生と死」は子どもたちの心を強く揺さぶるであろうと考え、投げ込み教材として取り上げた。

ここでは、子犬をもらわなかった「ぼく」の気持ちと、自分なら子犬をもらうか、そして、エルフの使っていたバスケットをあげた「ぼく」の気持ちと、自分ならバスケットをあげるかについて深く考えさせ、意見交流をした。

「子犬をもらわなかった‘ぼく’の気持ち」

- ・ いないよ。きみも犬をあげたら、ぼくみたいにかぞくがいなくなったように感じるからね。
- ・ きみのたいせつな犬だから、いないよ。
- ・ きみのかぞくだから、いないよ。

★エルフがかわいそうだからいないという意見が出たら、本文の「もらっても、エルフはきにしないってわかっていたけど」に気づかせ、考えさせようと思っていたが、それまでの段階で深く読み取れていたので、そのような考えは出なかった。

「自分なら子犬をもらうか」

●子犬をもらう（8人）

もらわないと隣の子に悪いから
家族が増えるから

エルフにはずうっとずっと大好きだ

よって言ってあげるからもらう

●子犬をもらわない（14人）

かわいいけど、きみがさみしいよ
子犬はきみの家族だから

★自分は子犬をもらうという考えなのに、「ぼく」になりきって気持ちを考えるのは難しかったという意見があった。自分とは違う立場で考える経験から、相手の立場に立って考えられるようになり、コミュニケーション能力も高まるであろう。

「エルフの使っていたバスケットをあげた‘ぼく’の気持ち」

- ・ きみのほうが犬がおおくてはこぶのもたいへんだからあげるね。エルフはバスケットがなくてもきにしないからね。
- ・ エルフはしんでしまってかなしいけど、こころの中でおぼえているからあげるね。
- ・ さみしいけどおもいでがいっぱいあるからあげるね。

「自分ならバスケットをあげるか」

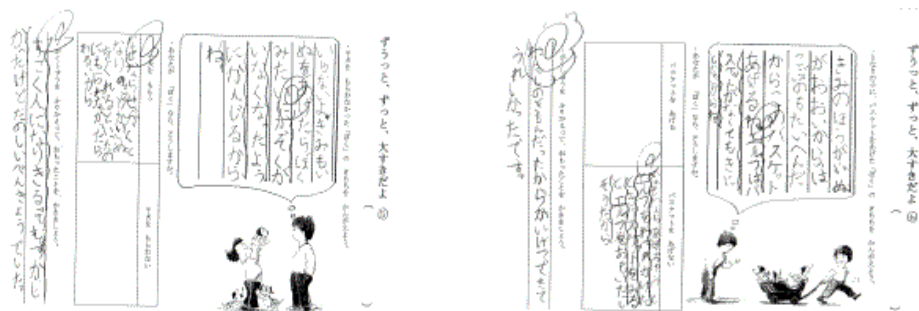
●バスケットをあげる（14人）

●バスケットをあげない（8人）

思い出は心の中にあるから
子犬がたくさんいたいへんそう
エルフは気にしないから

思い出があるから
エルフのことを思い出すから
思い出を残していたい

★初発感想で、なぜバスケットをあげたのか疑問に思っていた子は、学習後、疑問が解決できてうれしかったと振り返りに書いていた



この教材を通して、主人公（他者）の気持ちや、自分ならどうするかを考えることによって、考え方は一つではないことに気づくことができた。また、教材の中から考えの根拠となるとところを見つけさせ、より相手を納得させる意見に高めさせた。その結果、自分の考えを自信を持って発表することができるようになった。

3. 今後の課題

読解力を育てることを目標にして、教材の指導方法を工夫し、継続的に取り組んできた。また、意見交流の前にはじっくり一人で考える時間を確保し、必ず自分の考えを文章化させた。そのために、ワークシートを工夫したり、ノート指導を丁寧に行ったりした。

書くことを苦手とする子も二人いたが、繰り返し考えたことを書く活動をするうちに助言なしに短い文ではあるが書けるようになってきた。考えて書くという活動は、苦手な子にとっては苦痛ではないかと思ったが、決してそうではなく、意欲的で、少しずつできるようになったことが次の自信につながったようである。

また、説明文で学んだ比べることを通して、二者の類似点や相違点に目を向けることができるようになり、生活科の学習にも活かされている。物語文では、常に自分ならどうするかを考えさせることにより、物語に書かれている言葉にこだわって内容を読み取った上で、自分の考えが持てるようになってきた。

子どもたちは、じっくり考え、友だちの意見を聞き、また自分の考えを深める授業が大好きで、楽しいと感じている。自分の考えを伝えるときには、その根拠となる理由も伝えることによってより相手を納得させることができるということも実感し、考え方は一つではなく多様な考え方があることにも気づいた。また、意見交流を重ねるうちに、相手を認めるようになると同時に、相手に認められるという体験をし、クラスのまとまりもできた。「・・・です。なぜなら、・・・だからです。」や、「そうですね。わたしは、・・・です。」も習慣化し、自然と使えるようになってきている。

以上のことから、読解力を高めることは、人間関係を円滑に築くためにも重要であると感じ、今後も継続して研究し、指導していきたい。

(4) 実践例4 (4年)

尼崎市立長洲小学校 吉田 大

本学級の児童に、国語に関する意識調査を実施したところ、国語の学習が「好き」と回答した児童は12名(46%)「きらい」と回答した児童は13名(50%)であった。

その理由を分析すると、調べ学習には、意欲的に取り組んでいるものの、構成を考えながら文章を書くことができる児童は38%と少なかった。また、漢字の学習に意欲的に取り組んでいる児童がいる一方で、日常の書く活動の中で既習の漢字を使う児童があまり見られなかった。

そこで、自分の伝えたいことが伝わるように、構成を考えながら書いたり、既習の漢字を進んで使って文章を書いたりできる力をつけさせたいと考えた。

1. 実践の概要

①新聞記事を使った実践

1学期の書くことの単元の学習では、調べる対象の資料から、自分の調べたいことについての記述をピックアップできない児童も少なくなかった。そこで、新聞記事から、自分が不思議に思ったことや、初めて知ったこと、興味をもったことを見つけるという活動を行った。

右のように、新聞記事の下に罫線を引いたワークシートを用意した。

【資料1】

まず、上の記事を読み、自分が不思議に思ったり、初めて知ったり、興味をもったりしたところに、傍線を引かせた。

次に、傍線に番号を振り、それぞれの傍線部分を読んだときに、自分が感じたことや考えたことを、下に書かせるようにした。

この活動を継続して行うことで、資料から情報を収集し、自分の考えをもつことができるようになってきた。

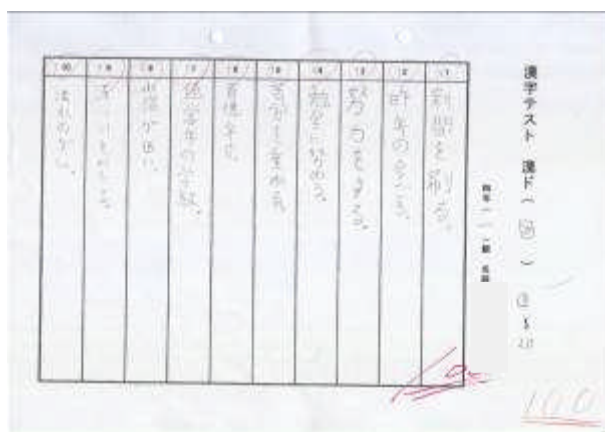


【資料1】

②漢字テストの工夫

書く学習活動の中で、既習の漢字を使わないのは、漢字の使い方がしっかりと定着していないことが原因だと考えた。

そのため、漢字を正しく文中で使えるように、漢字テストを工夫した。従来は、問題の傍線部を漢字に直して記述する形式【資料2】だったが、新たに漢字を使って短文作りをする問題を設定した。【資料3】



【資料2】

8	7	6	5	4	3	2	1	漢字テスト (一)
「帯」を使って文を作ります。	「機」を使って文を作ります。	「船」を使って文を作ります。	ひこうきに乗る。	せんそうはしない。	実験がせいこうする。	種がはつがする。	木が芽が出る。	名前 ()
包帯を巻く。	机が壊れる。	船が沈む。	飛行機に乗る。	戦争はしない。	実験が成功する。	種が芽を出す。	木が芽が出る。	

【資料3】

③授業実践 「すじ道を立てて考えよう」(教材名「アーチ橋の仕組み」「実験したことをもとに」)

本単元は、説明文教材である「アーチ橋の仕組み」と実験の記録文を書く「実験したことをもとに」で構成されている。「アーチ橋の仕組み」は、大きく分けると3つの段落からなる説明文である。重いものを支えるのに適しているアーチの仕組み、石づくりのアーチ橋の作り方、アーチ橋の歴史について書かれている。「実験したことをもとに」では、簡単な実験を記録文に書く学習が設定されている。

構成を考えながら文章を書くことができるようにするために、次のような手立てを考えた。

まず、「アーチ橋の仕組み」と「アーチ橋の進歩」の比べ読みを取り入れることである。「アーチ橋の進歩」は、「アーチ橋の仕組み」と同じ筆者が、平成23年度からの新教科書に掲載している説明文である。内容には類似点が多く見られるが、題名に「進歩」とあるように、アーチの仕組みの良さを変えることなく進歩してきたアーチ橋の歴史が、よりはっきりするように書かれている。

この2つの説明文を比較しながら読むことによって、文章構成の役割やその効果についての理解が深まると考えた。

結果としては、アーチ橋についてより多くのことを知る、アーチ橋の歴史がより詳しく分かったというように、内容的な比較をすることはできた。しかし、構成の面での比較をすることができた児童は少なかった。

次に、記録文を書く前に、実験メモに自分の実験内容を記録し、そのメモをもとに記録文を書かせるようにした。実験メモには、「調べること」「用意するもの」「実験方法」「わかったこと・考えたこと」という項目を設けることで、記録文に書くときに、段落を分けて書くことができるようにした。

そうすることで、今まで段落を分けて書くことを意識できていなかった児童も、段落を分けて書けるようになってきた。

2. 実践の考察

①新聞記事を使った実践

年度当初、作文を書かせたり、学習の感想を書かせたりした時に、「何を書いていいのか分からない」「特に感想がない」という児童が多かった。

そこで、読んだ内容について、自分の感想や考えを持つことができる子を育てたいと考えた。

実践をはじめた当初は、内容が理解できずに書くことができなかったり、興味や関心が低く意欲的に取り組めなかったりした。

そこで、スポーツ、ゲーム、食べものなど、子どもが興味関心を持ちやすい記事を選ぶことや、比較的短く平易な言葉で書かれている記事を取り上げるようにした。

すると、だんだんと子どもたちの関心が高まり、記事を読んで自分の考えたことを書くことができるようになってきた。

②漢字テストの工夫

実践をはじめた当初は、短文づくりに抵抗を示す児童もいたが、継続して取り組むことで抵抗感は薄れてきた。

また、書き取りのテストよりも、解答に幅があり、自由に記述できることで、テストに対する意欲も高まってきた。普段の漢字学習で使用している漢字学習ノートの短文を書く欄にも、例文を写すだけでなく、自分で考えた文を書けるようになってきた。

③授業実践について

使用した「アーチ橋の仕組み」と「アーチ橋の進歩」には、大段落のつながり方に違いが見られる。

2つの教材は、共通して大きく3つの段落から構成されているが、「アーチ橋の仕組み」では、各大段落の間には余白があいているが、「アーチ橋の進歩」では、「アーチ

下に挙げた2つの作文は、同じ児童が1学期に書いたものと2学期に書いたものである。【資料4】【資料5】この2つを見ると、1学期に書いた【資料4】よりも、2学期に書いた【資料5】の方が、より段落を意識して書けていることがわかる。

【資料 4】

【資料5】

3. 今後の課題

2つ目は、読んだことに対する自分の考えを持ち、表現できる力をつけることである。そのために、新聞記事の中でも、筆者の意見が述べられている記事を使用することで、筆者の意見に対する自分の意見を書くことができるように取り組んでいきたい。

（５）実践例５（５年）

尼崎市立園田北小学校 糸賀 美和

新聞の投書欄の読み取り

１． 実践の概要

本学級の児童は、簡単な読み取りはできるが、作者の意図は何なのかと問うと、答えられない児童が多い。また、書かれてある文章を読み取れても、それに対して意見が持てない児童も多い。

そこで、目的に応じて文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読むことができる力をつけたいと考えた。また、様々な文章を読んで、自分の意見を述べたり書いたりすることができる力もつけたいと考えた。これらの力を育てることで、思考力・判断力・表現力が育成されるのではないかと考えた。

そのために実践したことは、新聞の投書欄の読み取りである。初めは、新聞の記事を読み取らせていたが、難しい言葉が多く、苦手意識を逆に植え付けてしまった。

そこで、もっと文が短く、書かれてある内容が読み取りやすいものから始め、読み取りに対する苦手意識をなくすことから始めようと考えた。

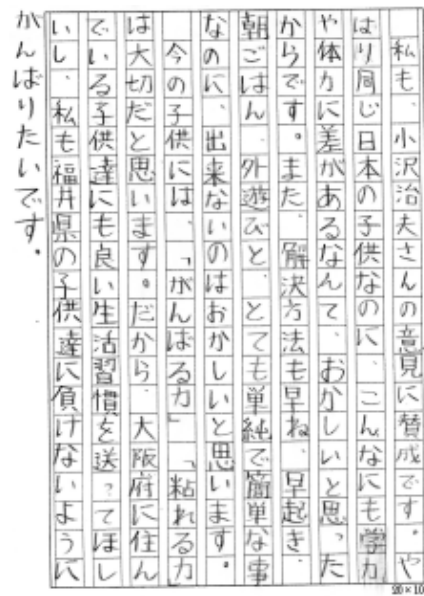
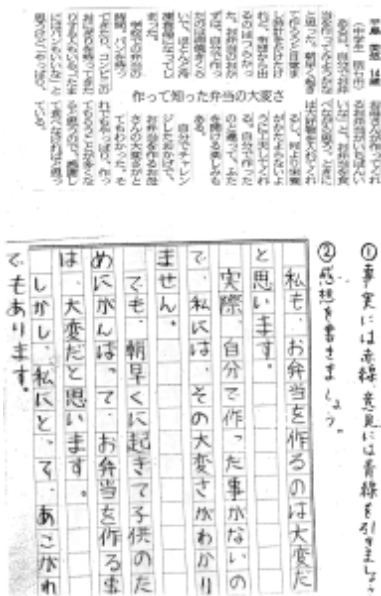
まずは、新聞の投書欄の記事を読み、事実には赤線、意見には青線を引かせた。事実と意見を区別して読み取らせることにより、頭の中で整理しながら、内容を読み取ることができるからである。

次に、内容に関して感想を書かせた。自分の体験を交えながら書かせたり、自分の知識を生かして書かせたりした。書かせる文字数は１３５字程度とし、たくさんかけなくてもよいとした。たくさん書くことよりも、まずはほんの少しでも自分の意見を持つことが大切だと考えたからである。

読み取って書かせる時間は、約１０分程度とした。１３５字埋まらなくても、時間がきたら、終わりとした。

文章を書くことが大変苦手であるＡ児は、初めは何も書けなかった。しかし、回数を重ねていく毎に、１３５字程度感想を書くことができるようになった。また、書くことが好きなＢ児は、１３５字では足らず、裏にまでびっしりと書くようになった。





B 児のワークシート（10月） → （12月）



A 児のワークシート（10月） → （12月）

（資料1 ワークシート）

2. 実践の考察

児童に、10月と12月に同じアンケートを実施した。

① 新聞の投書欄の読み取りは好きですか？

10月は、大好きが8%だったのに対し、12月は56%と、かなり上昇した。そして、10月はきらいが40%だったのに対し、12月は0%と、かなり減少した。

この二つの理由としては、

- ・初めは何が書かれてあるのかよくわからなかったが、続けていくうちに書かれてある内容が読み取れるようになったから。
- ・事実と意見を区別して読み取っていくことで、書かれてある内容をとらえることができるようになったから。
- ・新聞の記事を、児童にとって身近なことや生活に基づいた話題にすることによって、興味をもつようになったから。
- ・意見を書かせる際に、自分の体験と比較させて書かせるなど、書くパターンを指導したことによって、書けるようになってきたから。

② 作文を書いたり、文章を読んで自分の考えを書いたりすることは好きですか？

10月は、大好きが8％、好きは20％だったのに対し、12月は、大好きが48％、好きは32％と上昇した。そして、10月は、きらいが32％だったのに対し、12月はきらいが0％となった。

この理由としては、

- ・作文の書き方を指導したことにより、作文が苦手な児童が書けるようになってきたから。
- ・新聞の読み取りで、自分の考えを書く習慣をつけたことによって、書けるようになってきたから。
- ・以前よりも書く量を増やすことによって、書き慣れてきたから。
- ・自分の考えを書いて、友達に聞いてもらうことが楽しくなったから。

であると考えられる。

事実と意見を区別して文章を読み取ってきたことで、作文や自分の意見を書くときに、事実と意見を意識して書くようになった。すると、書きたいことが頭の中で整理しやすくなり、書きやすくなったのではないだろうか。

また、作文を書くだけにとどまらず、書いた文章を友達に伝え、それに対する感想をもらうという活動を取り入れた。自分の意見を聞いてもらうことは、とても嬉しいようで、そのことも作文が好きになった要因であると考えられる。

③ 説明文の学習は、好きですか？

10月は、大好きが12％、好きは20％だったのに対し、12月は、大好きが36％、好きは44％と上昇した。そして、10月は、きらいが28％だったのに対し、12月は0％と減少した。

その理由としては、

- ・事実と意見を区別して読むことによって、書かれてある内容を頭の中で整理しながら読めるようになったから。
- ・説明文には、作者の意見とそれに基づく根拠（事実）が書かれていることがわかり、説明文を読むことが楽しくなってきたから。

であると考えられる。

作文の時と同様、読み取ったことやそれに対する意見を隣の児童と交流する時間を多く取り入れた。自分の意見を聞いてもらえる喜びを感じることで興味がわいてきたようだ。また、他の児童の意見を聞くことで、さらに理解が深まり、学習に対する意欲が増してきたようだ。

3. 実践の課題

課題は二つある。一つ目は、事実と感想、意見などとの関係を押さえながら読むことはできるようになってきたが、文章の内容を的確に押さえて、要旨をとらえることが難しいことである。

二つ目は、長い文章や複雑な文章になると、自分の意見を述べたり書いたりすることが難しいことである。

三つ目は、書かれてあることに共感して読む児童が多く、批判的な物の見方をする児童がほとんどいないことである。

そこでまずは、新聞の投書欄を読んで意見を書かせるだけではなく、要旨をとらえる練習も入れていきたいと考える。文を読んでいくつかのキーワードを拾い、それをつなげて文章にするなどの方法を取り入れていきたい。新聞の読み取り同様、書き方をパターン化させることで、要旨を捉えられるよう指導していきたい。

次に、今までは新聞の投書欄が多かったが、これからは新聞記事の読み取りを増やしていきたいと考える。児童は、新聞を読み取るということに抵抗がなくなったので、少しずつ読み取る文章を複雑化させて、取り組ませていきたい。月に1、2回程度時間をしっかりと確保し、じっくり取り組ませたい。新聞に出てくる言葉は児童にとって難しい言葉が多い。まずは、辞書を使ってわからない言葉を調べてから読み取らせたい。

それから、自分の意見を書かせる文字数を増やしていきたいと考える。文字数を増やしていくことで、作文を書く力も育てていきたいからである。

そして、批判的な読み方も出てくるような新聞記事を取り上げていきたい。今までは子供が興味・関心を引くような、共感できる記事を多く取り上げてきた。それでは批判的に書くことが困難であったので、記事の選び方も考えていかなければならないと考える。

以上のことを継続して
続けていくことで、思考力・判断力・表現力をさらに育成し、生きる力を高めていきたい。

4 研究のまとめと課題

本年度の研究では、『対話・話し合い』を充実させるためには、問題解決に必要な情報を収集、抽出、選択、その情報から筋道を立てて考えたり判断したり、解決・評価したり、さらに自分の考えが相手に伝わるよう表現していく力が必要であると考えた。そこで、『PISA 型読解力』に着眼し授業実践に取り組むことにした。

研究にあたっては「3つの重点目標」を設定し、具体的な内容を示し研究を進めた。

また各学年重点教材を設定することで PISA に対応できる読解指導を行った。

その結果、テキストに書かれている情報を正確に取り出したり、本で調べた資料をもとに話し合うことはできていた。また情報機器を上手にいかし、話題提示をしたり、図表やデータをわかりやすく説明できるようにもなった。

しかし、テキスト解釈やテキストに書かれている知識から、自己の考え方や経験と関連づけながら話し合うまでには至っていない。その原因のひとつに話し合う内容が児童の身近な問題でなかったことがあげられる。

子どもたちが同じ土俵で話し合いを行うには、話し合う内容の吟味が必要であることがわかった。また、他教科とのリンクや読書指導等、全教科の中で言語活動を充実させていかなければならないと考える。

5 おわりに

社会は大きく変わり、日本も国際競走を生き抜くためには、議論を重ねて新しいものを生み出したり、論理的に相手を説得したりする必要が出てきた。そんな背景から、国語教育でも、『自分の意見を述べる力』がもとめられるようになってきている。こうした新しい時代に求められる『国語力』をつけるには、日々の授業で子どもたちに、発言・議論させる時間をきちんと確保すること、そして発言内容の知識的な正確さではなく『根拠』を指し示す姿勢こそ大切である。意見には根拠があってこそ議論を深め、聞き手を説得することが出来る。子どもが自分の意見を言う場を増やすと同時に『なぜそう思うのか』と尋ねることが大切である。様々な活動を通し、子どもの変容がみられるようになってきた。しかし、「確かな力」には至っていない。次年度では、さらに「対話能力」の向上、「話し合い活動」の充実に向けた取り組みを研究したいと考えている。

【参考文献】

- 村松賢一 編 『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習』(明治図書 2001 年)
- 有元秀文 著 『PISA 型読解力が必ず育つ 10 の鉄則』(明治図書 2008 年)
- 有元秀文 著 『PISA 型読解力』の弱点を克服する
- 有元秀文 著 『国際的な読解力を育てるための PISA 型問題開発の理論と方法』
- 有元秀文 著 『教科書教材で出来る PISA 型読解力の授業プラン集』明治図書
- 池内 清 著 『小学校ディベート授業が楽々できるワークシート』(学事出版)
- 佐久間順子 著 『シリーズ教室ディベート 2 小学生でもできる教室ディベート』(学事出版)
- 国立教育政策研究所監訳 『PISA 2006 年調査 評価の枠組み』ぎょうせい 2007
- 文部科学省 『読解力向上プログラム』(2005, 12)

理科の基礎学力向上をめざして

－ 小中連携をふまえた効果的な学習展開を支える関連図の作成 －

指導主事	藤 井 健三郎
研 究 員	角 田 孝 美 (難 波 小)
//	上 条 善 男 (立花北小)
//	堀 祐 輔 (大 庄 小)
//	小寺山 道 久 (大 庄 中)
//	小 畑 志 保 (武 庫 中)
//	是 澤 健 治 (園 田 中)

【内容の要約】

学習指導要領において、小学校理科は「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」の領域に、中学校校は第1分野と第2分野に整理されている。そこで、小中連携をふまえた効果的な指導につながる授業改善に結びつけることができないかと考え、そのときに活用できる小学校と中学校の内容を見通せる「小中連携 理科の学習のつながり」を作成した。

キーワード：小中連携，学力向上，理科

1 はじめに	127
2 研究について	128
3 実践	129
4 まとめ	131
5 おわりに	131
「小中連携 理科の学習のつながり」	133

1 はじめに

本市の理科の学力が全国平均より下回っているということから、昨年度、「理科の基礎学力向上をめざして 小中連携をふまえた効果的な指導方法についての研究」*¹というテーマで、次のことに注目して研究を行った。平成20年3月に告示された現行の学習指導要領は小学校と中学校の接続を意識しており、このことは小学校と中学校の学習指導要領解説に共通して掲載されている『小学校・中学校理科の「エネルギー」「粒子」を柱とした内容の構成』(図1)*²『小学校・中学校理科の「生命」「地球」を柱とした内容の構成』(図2)*²の図に顕著に現れている。これは、従来の小学校の理科が「生物とその環境」、「物質とエネルギー」、「地球と宇宙」の三つの領域の構成になっていたものを、「物質・エネルギー」、「生命・地球」という二つの領域構成に変更し、中学校の「第1分野」と「第2分野」との整合性がとられたことにより、小学校と中学校の理科を系統的に見るようになったものである。

今年度もこのことに注目し、引き続き研究を行うことにした。

図1 小学校・中学校理科の「エネルギー」「粒子」を柱とした内容の構成

注記は、新課程、旧課程、移行課程、合併は、選択から必須とする項目。

学 年	小学校	中学校
第1学年	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり
第2学年	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり
第3学年	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり
第4学年	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり
第5学年	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり
第6学年	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり	エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり ・エネルギーの伝わり

【図1 小学校・中学校理科の「エネルギー」「粒子」を柱とした内容の構成】*²

図2 小学校・中学校理科の「生命」「地球」を柱とした内容の構成

注記は、新課程、旧課程、移行課程、合併は、選択から必須とする項目。

学 年	小学校	中学校
第1学年	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境
第2学年	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境
第3学年	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境
第4学年	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境
第5学年	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境
第6学年	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境	生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境 ・生命の多様性と環境

【図2 小学校・中学校理科の「生命」「地球」を柱とした内容の構成】*²

2 研究について

(1) 研究テーマ

理科の基礎学力向上をめざして

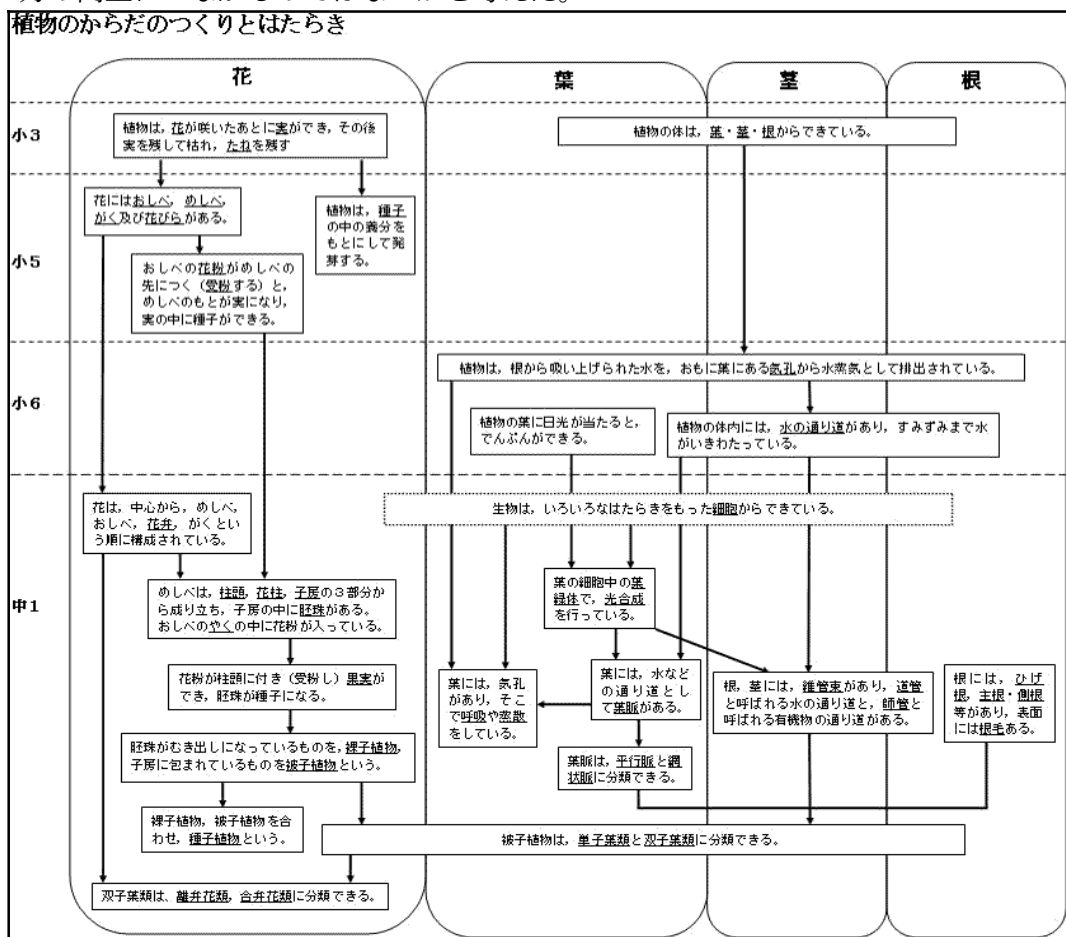
— 小中連携をふまえた効果的な学習展開を支える関連図の作成 —

(2) 研究内容

昨年度、研究を進める中で、小学校の教師は中学校の学習内容を、中学校の教師は小学校の学習内容をあまり理解していないことがあるということがわかった。

図3は、「植物とからだのつくりとはたらき」について『小学校・中学校理科の「生命」「地球」を柱とした内容の構成』を元に小3～中1までの関連性を調べ、花・葉・茎・根のカテゴリーに分けて整理した関連図を、昨年度の研究の過程で作成したものである。^{*3}

この関連図が作成できたのは、新しい学習指導要領によって小学校と中学校の学習内容を系統的に見ることができるようになったためであるが、この関連図を用いることで、小学校の教師は中学校の学習内容を、中学校の教師は小学校の学習内容をあまり理解していないという問題を解決する手助けになるのではないかと考えた。



【図3 昨年度作成した関連図】^{*3}

(3) 研究の方法

1. 「小中連携 理科の学習のつながり」の検討と作成

次の手順で検討し、「小中連携 理科の学習のつながり」を作成する。

- ① 小学校と中学校の学習内容を系統的にみるために、どのようなことがわかればよいか検討し、必要な項目を決定する。
- ② 「物質」「エネルギー」「生命」「地球」から、作成する領域を決定する。
- ③ 「小中連携 理科の学習のつながり」を作成する。

2. 「小中連携 理科の学習のつながり」の検証

数値的な検証が難しいため、小学校の教師と中学校の理科教師に「小中連携 理科の学習のつながり」を配布し、ファーストインプレッションと感想をまとめ、検証する。

3 実践

(1) 「小中連携 理科の学習のつながり」の検討と作成

1. 「小中連携 理科の学習のつながり」の検討と必要な項目

小学校と中学校の理科の学習内容のつながりを考えたとき、実験・観察を柱にすることにし、必要な項目として図4のようにした。

学年	学 年 小学3年
単元名	単元名 物と重さ
実験・観察	ア 物は、形が変わっても重さは変わらないこと 「物は形が変わったら重さも変わるのだろうか。」
実験・観察名	
実験・観察写真	
実験・観察写真 説明	左右にそれぞれおもり（ねん土）をのせ、つりあわせる ねん土の形を変え、つり合うかどうかたしかめる ものは形が変わっても、重さは変わらない

【図4 検討した項目とそれに基づいて作成した例】

2. 領域の決定

各研究部員の所属している学年を考慮して、「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」の中から「粒子」を、さらに「粒子の保存性」の領域で「小中連携 理科の学習のつながり」を作成することを決定した。

3. 「小中連携 理科の学習のつながり」の作成

「小中連携 理科の学習のつながり」を作成するにあたり、昨年度の研究結果を参考にした。『問題を作成する中で、問題となったのはどのような言葉で児童生徒に教えているかということであった。例えば、メスシリンダーをどのような場所で使用するかという問いで、小学校では「まっすぐな所」「たいらな所」でも可であるが、中学校では不足で、「水平な所」のような言葉が求められる。学習内容だけでなく、小学校では中学校でどのような言葉で教えられていき、中学校では小学校ではどのような

言葉で教えられてきたのかを意識することが重要である。』*⁴とあるように、学習における言語活動が重要であることを指摘した。

そこで、「小中連携 理科の学習のつながり」を作成するにあたって、各学年の教科書で使われている言葉をできるだけそのまま用いることにした。

また、観察・実験を説明するための図については、実際に使われている器具やその使用方法などがわかるように、観察・実験している様子を写真に撮ることとした。このことによって、図表の著作権上の問題も解決することができる。

(2) 「小中連携 理科の学習のつながり」の検証

小学校の教師と中学校の理科教師に、「小中連携 理科の学習のつながり」を配布し、ファーストインプレッションと感想をまとめた結果、次のような結果となった。なお、(小)は小学校教師から、(中)は中学校理科教師から得られた結果である。

【理科の授業を行う上での意見】

- ・中学校で教えていることを知ることができるのでよい。(小)
- ・小学校で学習した内容がわかってよい。(中)
- ・上の学年になるにつれて、これを見れば既習事項がよくわかるので、指導しやすい。(小)
- ・小学校の学習内容がわかるので、導入が変わってくる。(中)
- ・「小学校の時にやったよね」と言って授業の導入ができるので、小学校の学習とつなげやすい(中)
- ・このように学習の系統性をまとめたものがあれば、便利である。(小)
- ・今までは自分の小学校の時の記憶をたよりに思い出していた。こういうものがあると助かる。(中)
- ・授業で小学校で学習したことを生徒に確認しながら授業をしているので、便利である。(中)
- ・小学校教師にとっては、指導する教科の1つでしかない理科なので、余裕や興味のない教師にとっては、活用しないのではないか。(小)
- ・小学校での内容が定着しておらず、中学校でもう一度きちんと学習させる必要があるので、特に授業に変化はない。(中)

【「小中連携 理科の学習のつながり」の内容等についての意見】

- ・単元内の1つ1つの学習内容が、どの学年の学習内容につながっているのかを明確にしてほしい。(小)
- ・実験の過程を見てもわかりにくいことが多いので、「テスト」など具体的に習った「知識」がわかる形がいいのではないか。(中)
- ・中学の学習内容が難しいので分かりやすくしてほしい。(理科にあまり興味がなかったり、不得意とする小学校教師だったら分かりにくい)(小)
- ・「めあて」「まとめ」は必要ない。指導要領の文言だけでよい。(小)

- ・結論とかまとめとかが一目で分かった方がよい。例えば「発問」「まとめ」などの言葉があれば見やすい。(中)
- ・重要語句があればよい。(中)
- ・小学校から中学校，中学校から小学校に伝えたい内容がわかりにくい。(中)

【「小中連携 理科の学習のつながり」のデザイン等についての意見】

- ・写真はとてもわかりやすい(小)
- ・写真の下の説明がとてもよい。(小)
- ・各ページごとに形式が違うので，見にくい。(小)
- ・写真の中に説明(固体のろう etc)を書いて，写真だけ見ても実験内容がわかるようにしてほしい。(小)
- ・写真の下についている説明が図の説明かわかりにくい。フォントの大きさを変えるとか工夫がほしい。(中)
- ・すっきりとしているとなおよい。(小)
- ・冊子になっている方が使いやすい。(中)
- ・レイアウト的な統一感がないので，実験ごとに枠を使ってみるとかあれば見やすい。(中)

4 まとめ

小学校の教師と中学校の理科教師の「小中連携 理科の学習のつながり」のファーストインプレッションと使用感をまとめると，概ね好意的に受け入れられており，小学校は中学校の学習内容を，中学校は小学校の学習内容を知ることが重要であると考えられており，この「小中連携 理科の学習のつながり」が役に立つものであると認識されたようである。また，授業を行う上での意見，内容やデザインに関して多くの意見が寄せられたのは，その裏返しではないかと考えている。

また，感想の中に「「テスト」など具体的に習った「知識」がわかる形がいいのではないか。」という意見があった。これは昨年度作成した，小学校ではまとめ問題として中学校では確認問題として使用することのできる「共通問題」がこれにあたるのではないかと考える。昨年度の「共通問題」と今年度の「小中連携 理科の学習のつながり」を併用することで，より効果的な指導ができるのではないかと期待している。

5 おわりに

「平成22年度 学力・生活実態調査報告」^{*5}によると，『児童生徒の発達段階を考慮し校種の独自性も踏まえた上で，互いの実情を理解し，義務教育9年間の学びと育ちとともに，めざす児童生徒像を共有することが重要である。そのためには，小学校と中学校の教員の意識格差を是正する取組を推進するとともに，カリキュラムを系統的連続的なもの

に編成していくことが必要である。』*⁶とあり、小中連携が重要なポイントであることが示されている。このことは、研究部会内の話し合いの中でも認識されており、「小学校は中学校の内容を、中学校は小学校の内容を知ることが大切である」「中学教師と小学教師のそれぞれの理科授業のイメージがちがう」「小学校には中学校の教科書が、中学校には小学校の教科書があるといい」などの意見がみられた。

また、学力に関して、小学校では『中学校まで見据えた科学的な思考や表現力を伸ばすため、予想や仮説を立てた実験・観察を行い、結果を表やグラフに処理した上で、それらを活用しつつ、科学的な用語や概念を使用して自分なりの考えを文章で表現させたり、発表させたりするなど、このような学習活動がグループや学級全体の話し合いの中で行われるよう指導することが重要』*⁷、中学校では『基礎基本的な内容をできるだけ早い機会に繰り返し学習することによって定着させることが大切である。また、科学的な思考力を伸ばすには、予想や仮説を立てた上で実験・観察を行い、得られた結果を表やグラフを用いて処理し、科学的な用語や概念を使用して、自分なりの考えを文章で書かせていくことが必要』*⁸とある。これらのことを念頭において各校種において授業改善をしていく必要がある。

今後、小中連携を行いつつ、各校種での問題を克服していく必要があるだろう。その中で「小中連携 理科の学習のつながり」のように、小学校と中学校の理科の内容をお互いに理解する努力が必要になるであろう。

【参考資料】

- * 1 『研究報告書 紀要47号』
 尼崎市立教育総合センター 平成22年3月
- * 2 『小学校学習指導要領解説 理科編』 p.14 p.15 p.16 p.17
 文部科学省 大日本図書 平成20年8月31日
 『中学校学習指導要領解説 理科編』 p.12 p.13 p.14 p.15
 文部科学省 大日本図書 平成20年9月25日
- * 3 『研究報告書 紀要47号』 p.104
 尼崎市立教育総合センター 平成22年3月
- * 4 『研究報告書 紀要47号』 p.116
 尼崎市立教育総合センター 平成22年3月
- * 5 『平成22年度 学力・生活実態調査報告 尼崎市立小・中学校』
 尼崎市教育委員会 平成22年12月
- * 6 『平成22年度 学力・生活実態調査報告 尼崎市立小・中学校』 p.47
 尼崎市教育委員会 平成22年12月
- * 7 『平成22年度 学力・生活実態調査報告 尼崎市立小・中学校』 p.19
 尼崎市教育委員会 平成22年12月
- * 8 『平成22年度 学力・生活実態調査報告 尼崎市立小・中学校』 p.19
 尼崎市教育委員会 平成22年12月

小中連携 理科の学習のつながり

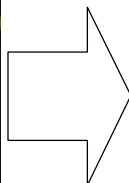
	粒 子			
	粒子の存在	粒子の結合	粒子の保存性	粒子のもつエネルギー
小3			物と重さ ・形と重さ ・体積と重さ	
小4				
小5			物の溶け方 ・物が水に溶ける量の限度 ・物が水に溶ける量の変化 ・重さの保存	
小6		水溶液の性質 ・酸性、アルカリ性、中性 ・気体が溶けている水溶液 ・金属を変化させる水溶液		
中1			水溶液 ・物質の溶解 ・溶解度と再結晶	状態変化 ・状態変化と熱 ・物質の融点と沸点
中2		化学変化 ・化合 ・酸化と還元（中3から移行）		
		化学変化と物質の質量 ・化学変化と質量の保存 ・質量変化の規則性		
中3		酸・アルカリとイオン ・酸・アルカリ（中1から移行） ・中和と塩（中1から移行）		

学 年 小学3年

単元名 物と重さ

ア 物は、形が変わっても重さは変わらないこと

「物は形が変わったら重さも変わるのだろうか。」



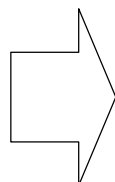
左右にそれぞれおもり（ねん土）を
のせ、つりあわせる

ねん土の形を変え、つり合うか
どうかたしかめる

ものは形が変わっても、重さは変わらない

イ 物は、体積が同じでも重さは違うことがあること。

「物は体積が同じだったら、重さも同じだろうか。」



左右におもり・木片をのせる

同じ体積の木片を次々とのせて
つり合うかどうかたしかめる

ものは体積が同じでも重さがちがうことがある

学 年 小学5年

単元名 もののとけ方

ア 物が水に溶ける量には限度があること。

「ものが水にとける量には、限りがあるのだろうか。」

食塩を溶け残りが出るまで溶かし、確認する。

一定量の水にとけるものの量には限界があり、とかすものによって、その量は決まっている。水の量を増やすと、ものが溶ける量も増える。



イ 物が水に溶ける量は水の温度や量、溶ける物によって違うこと。また、この性質を利用して、溶けている物を取り出すことができること。

「水の量を変えずに、とけ残ったものをとかすには、どうすればよいのだろうか。」

食塩・ミョウバンで、水温を変えて溶ける量が変化するか確認する。

ミョウバンは、水の温度を上げると、溶ける量が増える。

食塩は、水の温度を上げて、溶ける量が変化しない。



「とかしたものは、水よう液から取り出せるのだろうか。」



ミョウバン水溶液・食塩水を、蒸発させたり、氷水で冷やしたりして、取り出せるか確認する。

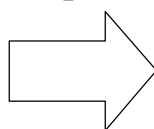
ミョウバンも食塩も、水をじょう発させると、とけているものを取り出せる。

ミョウバンは、水の温度を下げると、つぶを取り出せるが、食塩は、水の温度によってとける量にほとんど差がないので、温度を下げてでも取り出せない。

ウ 物が水に溶けても、水と物とを合わせた重さは変わらないこと。

「ものが水にとける量には、限りがあるのだろうか。」

「水にとけたものの重さはどうなるのだろうか。」



食塩を溶かす前後で重さが変化するか確認する。



水にとけたものは、目に見えなくても、水よう液の中にあり、水よう液の重さは、「水の重さ」＋「とけたものの重さ」＝「水よう液の重さ」と、かくことができる。

学 年 小学6年

単元名 水溶液の性質

ア 金属を変化させる水溶液があること

「金属に水溶液を加えるとどうなるの
だろうか」



水溶液には金属を変化させるものがある。
そしてどの金属を変化させるかは水溶液
によってちがう。

「水溶液にとけた金属はどうなったの
だろうか」



アルミニウムをうすい塩酸にとかし、
蒸発皿に取り、加熱する。残ったもの
をアルミニウムの性質と比べる。

イ 気体をとけている水溶液があること

炭酸水には何がとけているのだろう

＜水にとける気体＞

二酸化炭素が水にとけるかどうか、たしかめよう

- ・炭酸水から出る気体を集気びんに集める
- ・水溶液には気体をとけているものがある
- ・気体をとけた水溶液から水を蒸発させると気体も空気中に出ていき、後には何も残らない



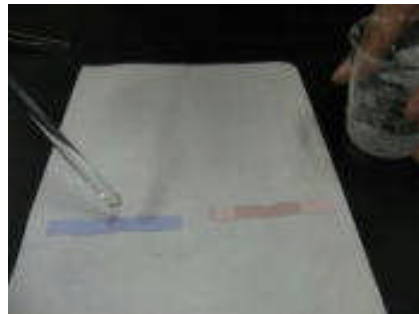
炭酸水から二酸化炭素を発生させて
いる

ウ 水溶液には、酸性・中性・アルカリ性があること

水溶液は、どんな仲間にわけられるのだろうか

・赤色と青色のリトマス紙をそれぞれに調べる水溶液
をつけて色の変化を観察する。

・水溶液はリトマス紙の色の変化によって、酸性・中
性・アルカリ性の3つの仲間分けをすることができる。



学 年 中学1年

単元名 水溶液

ア 物質の溶解

物質が水に溶ける様子の観察を行い、水溶液の中では均一に分散していることを見出すこと。

実験 水に溶ける物質のようすを調べよう



物質が水に溶けるとどの部分も濃さは同じになる

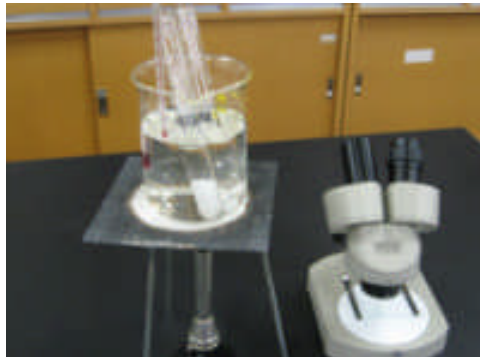
コーヒーシュガーやデンプンを水に溶かし、ろ過してとけた物質がなくなってしまったかどうか調べる

イ 溶解度と再結晶

水溶液から溶質を取り出す実験を行い、その結果を溶解度と関連づけてとらえること。

実験 水にとけた物質をとり出そう

溶解度は物質によって決まっている。溶解度の差を利用して、再び結晶としてとり出すことを再結晶という。



食塩や硝酸カリウムを水にとかし、水の温度を上げてから、もう一度下げているところ



試験管の底にたまっている物質を実体顕微鏡で観察しているところ

学 年 中1

単元名 状態変化

ア 状態変化と熱

「物質の状態変化についての観察・実験を行い，状態変化によって物質の体積は変化するが質量は変化しないことを見いだすこと。」

実験 ロウが状態変化するときの体積や質量の変化を調べよう



物質が状態変化するとき

- ・体積は変化する
- ・質量は変化しない

液体のロウの質量をはかった後，氷水で冷やし，
固体のロウの質量をはかっているところ

イ 物質の融点と沸点

「物質の状態が変化するときの温度の測定を行い，物質は融点や沸点を境に状態が変化することや沸点の違いによって物質の分離ができることを見いだすこと。」

実験 エタノールが沸騰するときの温度を調べよう



エタノールをあたため，
温度をはかっているところ

物質が状態変化するときの
温度は決まっている。

実験 エタノールと水の混合物を熱して，
出てくる物質を調べよう



エタノールと水の混合物を，枝付き
フラスコに入れて熱しているところ

沸点の異なる液体の混合物は蒸留によって分ける
ことができる

学 年 中学2年

単元名 化学変化と物質の質量

ア 化学変化と質量の保存

「化学変化の前後における物質の質量を測定する実験を行い，反応物の質量の総和と生成物の質量の総和が等しいことを見いだすこと。」

実験 物質が化学変化する前とあとの質量を比べよう



化学変化の前後で物質全体の質量は変わらない



質量保存の法則

石灰石とうすい塩酸を混ぜ合わせる前後の質量をはかっているところ

イ 質量変化の規則

「化学変化に関係する物質の質量を測定する実験を行い反応する物質の間には一定の関係があることを見いだすこと。」

実験 金属を熱したときの質量の変化を調べよう



2種類の物質が化合するとき，
一定の質量の割合で化合する

マグネシウムの粉末を熱して，質量をはかっているところ

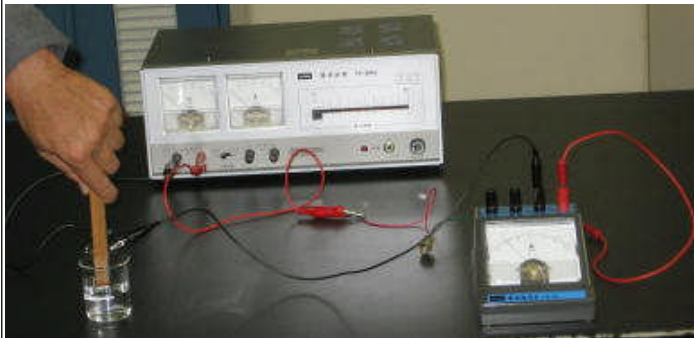
学 年 中学3年

単元名 化学変化とイオン

化学変化についての観察、実験を通して、水溶液の電気伝導性や中和反応について理解させるとともに、これらの事物・現象をイオンのモデルと関連付けてみる見方や考え方を養う。

ア 水溶液とイオン

(ア) 水溶液の伝導性…水溶液には電流が流れるものと流れないものがある



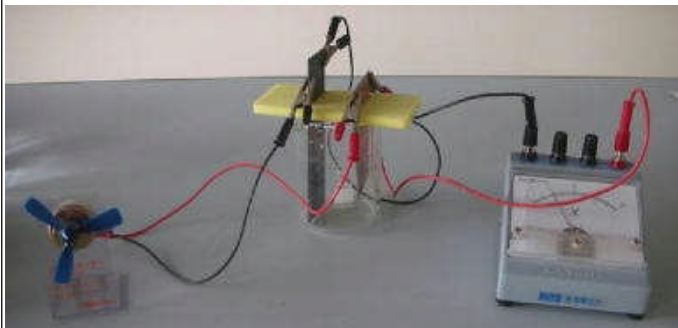
重要語句
電解質水溶液
非電解質水溶液

様々な水溶液にステンレス電極をつけて、電流が流れるかどうか調べる

電流が流れる水溶液と流れない水溶液がある

(イ) 原子の成り立ちとイオン…イオンの存在を知る

(ウ) 化学変化と電池…電解質水溶液と2種類の金属から電流が取り出せる



塩酸などの電解質水溶液に2枚の金属板をつけて、電圧が生じるか調べる

電解質水溶液を異なる2種類の金属で電圧を生じる

イ 酸・アルカリとイオン

(ア) 酸・アルカリ … 酸とアルカリのそれぞれの特性は水素イオンと水酸化物イオンによる

(イ) 中和と塩 … 酸とアルカリを混ぜると水と塩（えん）が生成する

デジタルコンテンツを活用した効果的な指導方法

ーデジタルコンテンツの開発と評価ー

指導主事	大 濱 洋 治
研 究 員	浅 田 宗 良 (大 島 小)
〃	西 野 貴美子 (上坂部小)
〃	兒 玉 崇 (園 田 小)
〃	山 本 宣 忠 (小 園 小)

【内容の要約】

昨年度に引き続き、尼崎市小学校中学年社会科副読本「わたしたちの尼崎」をベースにしたデジタルコンテンツの作成に取り組むこととした。この副教材の元の電子データを活用しながら新たに地域データを加えるなどして、使い方が簡単で、授業設計における自由度も高くし、誰でもICT機器を活用した効果的な地域教材についての社会科学習が実現できるようなコンテンツとしたい。さらに作成したコンテンツについて、その利用の効果に客観的な評価をし考察する。

キーワード：デジタルコンテンツ 実践授業 調査アンケート
デジタルコンテンツ評価

1	はじめに	141
2	研究の概要	141
3	デジタルコンテンツの開発と授業実践	143
4	デジタルコンテンツの評価と考察	163
5	おわりに	164

1 はじめに

昨年度に引き続き、尼崎市小学校中学年社会科副読本「わたしたちの尼崎」（以下、「わたあま」とする。）をベースにしたデジタルコンテンツの作成に取り組んだ。この副教材は、新学習指導要領の完全実施に併せて、来年度より資料集としての位置づけとなるようではあるが、その資料集についても、デジタル化の動きがある。

そこで、本部会ではこのデジタル化に向けた活動の参考となるような、また、一人でも多くの教員に実際の授業で使ってもらえるような、「使い方が簡単」で、「授業設計における自由度」を高くした、効果的なデジタルコンテンツを開発する。

さらに、作成したコンテンツについては当該学年での実践授業で使用し、児童によるコンテンツ評価から、その効果について検証する。

2 研究の概要

(1) 研究テーマ

デジタルコンテンツを活用した効果的な指導方法

(2) サブテーマ

デジタルコンテンツの開発と評価

(3) テーマ・サブテーマ設定の理由

今年度は昨年度の研究をさらに絞り込み、開発するすべてのコンテンツが、「わたあま」をベースにしたデジタルコンテンツとする。副読本「わたあま」の原本電子データを活用しながら、新たに地域データを加えるなどして、使い方が簡単で、授業設計における使い方の自由度も高くする。つまり、誰でもがICT機器を活用した効果的な地域教材についての社会科学習が実現できるようなコンテンツ作成を目指す。さらに作成したコンテンツは、授業実践で活用し、授業を直接受けた児童から客観的なコンテンツ評価を得ることで、そのコンテンツ利用の効果について検証していくこととし、これらのことからテーマ及びサブテーマを設定する。

(4) 研究の方法

今年度は社会科教育研究会において、「わたあま」の大きな改訂が実施され、副読本から資料集へと様変わりした。作成された資料集については、平成23年度より各校の中学年児童へ製本され配布される予定ではあるが、もとのデジタルデータについても現場で活用できるよう検討されている。さらに、小学校情報教育研究会では、このデジタルデータをもとにしてデジタル資料としても活用できるようデータの再構成に取り組んでいる。

そこで、本研究部会では改訂された資料集のデジタルデータをもとに、さらに有効なデジタルコンテンツの開発を進めていくため、次のような手順でデジタルコンテンツ作成に取り組んでいく。ここでは作成したコンテンツの活用実践だけで終わるのではなく、利用コンテンツの児童による評価を実施することにより、より有効なコンテンツの条件について考察する。

1. 副教材におけるデジタル教材化が効果的な内容の抽出
2. デジタルコンテンツの作成
3. 授業案の検討
4. デジタルコンテンツの評価方法の検討
5. 授業実践、デジタルコンテンツの評価の実施

(5) デジタルコンテンツの評価の方法

作成したデジタルコンテンツが効果的に利用できるものかどうかという判断には、客観的な評価が必要である。そこで、今回は、作成したコンテンツを実際に授業で使

用し、授業後すぐに、授業を受けた児童から評価アンケートを取ることでそれぞれのコンテンツの評価をしていく方法にした。

評価アンケートの項目については、その有効性が認められているものを利用するため先行研究を調査したところ、「技術科教育におけるデジタルコンテンツに対する教材評価尺度の構成」（兵庫教育大学大学院）という論文にある、「webページ上に提供されるデジタルコンテンツに対する教材評価尺度」の構成項目が利用できると考えた。図0-1の「教材評価尺度」は、「生徒を対象とした質問項目作成のための自由記述による一次調査の実施」により得た回答をもとに尺度項目を作成し、それを5件法で回答する「生徒を対象とした質問紙法による二次調査の実施」により得た結果の分析を行った後、再編されたものである。

これら項目を参考に、問いかけている内容は変更しないで、小学校中学年でも回

再編した教材評価尺度

- 1 文字の色使いは適切である
- 2 箇条書きや表などを用いた情報の整理の仕方は適切である
- 3 文字の大きさはちょうど良いと思う
- 4 文章の中で、要点がうまく整理されている
- 5 画面の色使いや背景色、壁紙など、見た目の印象は良い
- 6 文字やイラスト、写真、図表などのレイアウト（配置）は見やすい
- 7 双方向性のあるゲームやクイズができて良かった
- 8 動画（ビデオ、アニメ）や画像（写真、絵、図）の画質は十分である
- 9 簡単に動画（ビデオアニメ）や画像（写真、絵、図）を表示させることができる
- 10 画像（写真、絵、図）の大きさは適切である
- 11 音の効果は適切である
- 12 説明の中で、写真、アニメーション、動画、絵、音声、図表、などがうまく使い分けられている
- 13 この教材の学習内容のレベルはちょうど良い
- 14 この教材の学習内容に関連する資料の豊富さは十分である
- 15 この教材の学習内容の区切り方や関連づけは適切である
- 16 この教材の中で見たいページや知りたい情報にすぐにたどり着くことができる
- 17 この教材のメニューの構成は、よく整理されている

図 0-1 教材評価尺度（兵庫教育大学大学院）

答できるような平易な言葉に変更し、今回作成したデジタルコンテンツの評価に即したものとなるよう図0-2の項目に絞り込んだ。また、評価の回答は、「そう思う・少し思う・少し思わない・そう思わない」の4段階とし、プラス評価、マイナス評価がはっきり現れるようにした。さらに自由記述欄を設け、授業で使用したコンテンツについて、率直な意見を求めるようにした。

画面で見せる学習資料についてのアンケート

番号 ↓再編した教材評価尺度の番号

（7は自由記述）

- 1 3 文字の大きさはちょうどよかった。
 - 2 10 写真や絵などの大きさはちょうどよかった。
 - 3 1 文字の色は見やすかった。
 - 4 5 画面の色は見やすかった。
 - 5 8 写真や絵などはきれいだった。
 - 6 13 画面に映された資料で勉強したことがよくわかった。
- ※回答選択項目【そう思う・少し思う・少し思わない・そう思わない】
- 7 先生が画面で見せた資料について思ったことや感じたことを自由に書きましょう。

図 0-2 デジタルコンテンツ評価アンケート項目

3 デジタルコンテンツの開発と授業実践

(1) 実践事例1

第3学年 社会科地域教材 単元「市の人たちの仕事」

○実践場面

工場見学前の課題づくり

○作成・利用デジタルコンテンツ名

「何のためにあるのかな？」（お菓子工場の福利厚生施設写真）

1. コンテンツ開発の意図

3年生の社会科の単元「市の人たちの仕事 はたらく人たちの思いを知ろう」においてデジタルコンテンツを用いた授業を実践した。児童は、単元の導入の授業で「森永工場のことで知りたいこと」を書き出すことで多くの課題を挙げている。また、本時の授業までにお菓子作りの仕組み、働いている人たちの工夫（衛生面・安全面）について学習をしている。

ここでは、お菓子作りに直接的には関係のない施設などは、工場で働く人たちが少しでも働きやすくなるように考えられて設置されているということを学習する。それが働く人たちの思いから生まれた、工場側の工夫であることに気付かせていく。

導入部分で、施設を確認するために、「わたあま」の資料にある施設ごとの写真をパワーポイントでまとめ、スライドショーで一つ一つ表示できるコンテンツを用いる。50インチ大型テレビによって、写真が大きく表示できるのは情報の共有という点で効果的だと考えた。そして、スライドショーの最後に図1-1を表示し、「このようなお菓子作りに関係ないような施設は何のためにあるのだろう？」という質問を投げかける。子どもたちが工場で働く人になったつもりで、施設を利用する時の思いを想像しながら、施設の必要性に気付かせたいと考えた。さらに児童の意見に合わせて、自由に施設の様子を再確認できるようにした。



図1-1 コンテンツ最終ページ

授業展開の中で「誰でも使えるデジタルコンテンツ」ということを重視し、デジタルコンテンツを中心に授業を進めるのではなく、デジタルコンテンツが子どもの思考の手助けの一つになるように心がけた。

2. 授業実践

*目標

- ・働いている人のための施設の必要性について知ることができる。
- ・働いている人の思いを考え、工場見学に向けて感想や疑問を持つことができる。

*準備物

パソコン 大型テレビ

お菓子工場の福利厚生施設写真のデジタルコンテンツ ワークシート

＊展開

学習活動	指導上の留意点・支援	評価
1. 前時までの学習を振り返りながら、課題を確認する。	○これまで学習してきた内容を振り返る。	○意欲的に発表することができる (関心・意欲・態度)
2. 施設の写真を見ながら、工場にある施設を知る。	○写真を見て、何の施設なのか質問しながら確認する。	
これらのしせつは何のためにあるのかな		
3. 働いている人のための施設の必要性について考える。	○施設にはどんな役割があるのか、ワークシートに書きこませる。	○理由づけをして考えることができる (思考・判断)
4. 自分の考えを発表する。	○隣の友達と自分の考えを発表する時間をとる。 ○他の人の考えが自分の考えと同じなのか、違うのかを意識させる。	○自分の考えを意欲的に発表することができる (関心・意欲・態度) ○他の人の考えを自分の考えと比べながら聞くことができる。 (思考・判断)
5. 働いている人のための施設についてまとめる。	○働いている人が安心とを安らぎを感じることができる工夫であることを確認する。	○働いている人のための施設の必要性を理解する。 (知識・理解)
6. 工場見学に向けて、課題・疑問を持つ。	○「本当に働いている人のための施設はあるのか」「他に働いている人のための施設はないか」など、工場見学に向けて課題を持たせる。	

デジタルコンテンツは、学習活動「2 施設の写真を見ながら、工場にある施設を知る」の場面で使用した。まずは施設の写真だけを提示し、「ここは何の施設でしょうか」と児童に問いかけ、いくつかの意見が出た後で施設の名前を表示した。その際、その根拠があれば写真に映っている物を見ながら全体で確認をした。

例えば、図1-2の医務室（保健室）のスライドからは、「看護師さんのように白い服を着た人がある」という意見を確認しながら進めた。また、そこから歯科医院のイスなどのように、医務室（保健室）だと断定できる物が他にあることも取り上げた。子どもたちの視線は大型テレビに集まり、クラス全体で各施設を確認できた。

全ての施設を確認した後、先ほどの図1-1を表示



図1-2 施設の確認

して「これらの施設ではお菓子を作っている訳ではないよね。では、なぜこれらの施設はお菓子工場にあるのでしょうか。」と質問を投げかけることで子どもたちが課題に対して興味を持ち始めた。「工場で働いている時にケガをしてもすぐに手当てができるように医務室がある」「工場で事故が起きて火事になったときにすぐに消火できるように消防車がある」「休憩時間に運動ができるように、また、地域の人がスポーツなどを通して工場に対して親近感を抱いてくれるようにグラウンドなどのスポーツ施設がある」など多くの意見が出てきた。施設の様子を全体で確認できたことで、施設を使っている人の思いを想像しているのを強く感じた。

3. コンテンツ評価

コンテンツについてのアンケート結果（2クラス 計54人）を図1-3に示す。

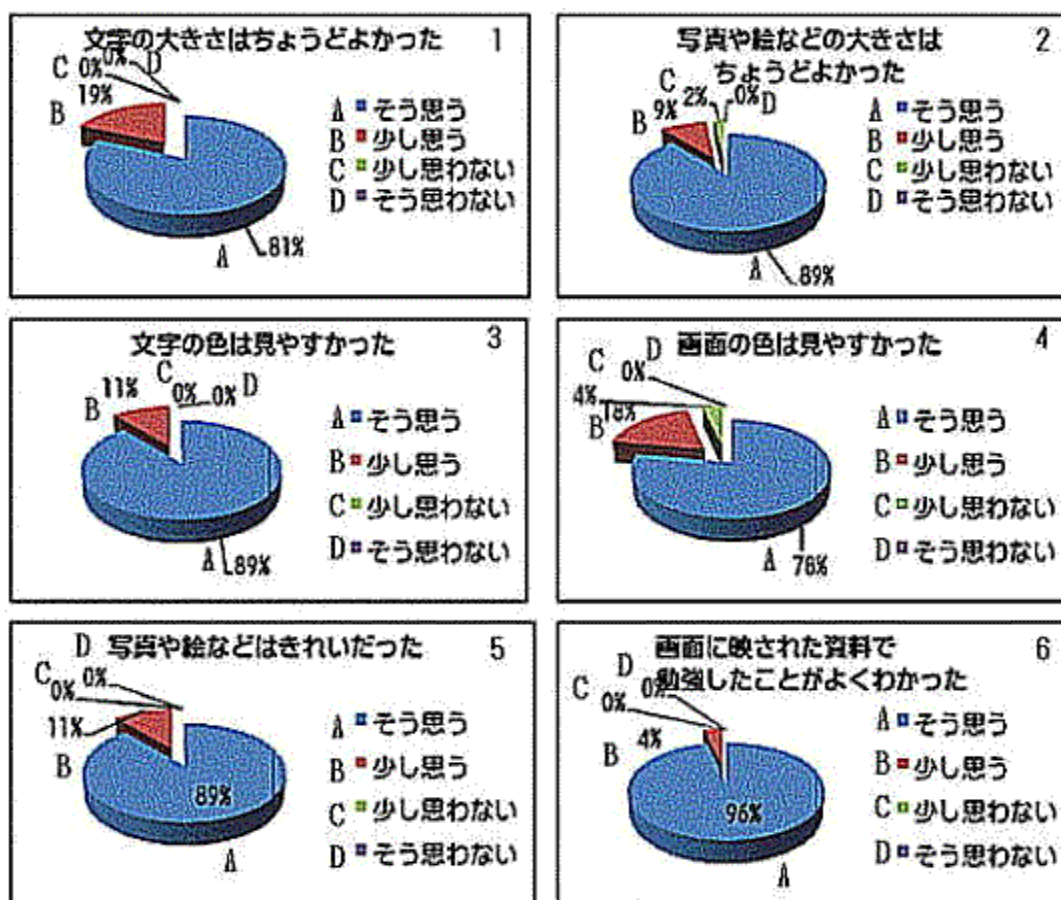


図1-3 3年生 アンケート結果

自由感想としては、次のようなことが回答されていた。○がプラス評価，●がマイナス評価である。

○テレビで勉強するととても楽しかった。○色のはっきりして見やすかった。

○「わたあま」の写真よりきれいで見やすかった。○字が大きくて見やすかった。

●画面が光って見にくいときがあった。

いずれの結果も「そう思う」「少し思う」を合わせると90%を越え、高い評価であった。しかし、「写真の大きさが好ましくない」「画面の色が見にくい」と感じる児

写真を大型テレビで表示したとはいえ、細かい所までは見にくいようであった。また席が後ろの方の児童の中には「写真が小さい」と感じた児童もいた。画面の色については、正面から見ればとても鮮明に見ることができるが、少し見る角度が変わるだけで、光の映り込みによって見にくく感じた児童がいたことが図1-4からわかる。



4. 実践を振り返って

しかし、本時の授業のポイントである学習活動3の課題に対して考える場面では、コンテンツ自体は止まったままで用いることがなかった。ここで子どもたちの思考の手助けにするためには、写真をスライドショーなどで一定時間ごとに自動的に移り変わる形でコンテンツを表示するなどの工夫が必要であったと感じる。また、施設を使っている様子がわかる動画や使っている人たちのインタビューなどの素材を集め、加えておくにより児童の思考を深めるコンテンツになったように思う。コンテンツの表示の面からはコンテンツ評価の部分でも触れたが、見る角度によって光の映り込みがあったり、画面が見にくくなることは十分に配慮しなければならない。

今回作ったデジタルコンテンツは、副読本「わたしたちの尼崎」に掲載されている写真をパワーポイントに貼り付け、大型テレビに順番に映し出すというシンプルなものである。このような形は、教科書で児童それぞれで見るとよりも視線を一つに集めることができ、教師の話も聞きやすい。そのことが課題への興味を引き出すきっかけや新しい気付きにもつながる。今回の反省を生かして、これからコンテンツの作成・活用を進めていきたい。



3年1組 絵画

(食堂) 食事をするところです。
ダイニングホール

(医室) 怪我をした時、あてをしてくれるところです。
クリニック

(売店) あつたあつた時、何かを買って来れるところです。
コンベンション

(消防車) 火事やケガをした時、消せるところです。
ファイアー

(図書室) 本を読むところです。
ライブラリー

(音楽室) 音楽を聴いたり、歌ったりするところです。
ミュージック

(バスルーム) 入浴するところです。
バスルーム

(トイレ) 用を足すところです。
トイレ

146

(2) 実践事例2

第3学年 社会科地域教材 単元「商店の仕事の工夫をさぐろう」

○実践場面

尼崎市公設地方卸売市場について学習する

○作成・利用デジタルコンテンツ名

「尼崎市公設地方卸売市場について知ろう！」

1. コンテンツ開発の意図

本教材は、買い物調べや商店の見学などを行った後、品物がそれぞれどのように店にやってくるのかを学習するために使用したいと考えた。尼崎市には公設卸売市場があり、「わたしたちの尼崎」にも掲載されている。しかし、来年度のものからはかなり削減されていることや、見学に行ってもなかなか実際に仕事をしているところが時間的に見ることができないことがあり、仕組みを理解することが難しい場所である。

そこで、仕事の内容・どのような人が働いているか・どのような仕組みで品物が集められるのか・値段の決め方などを写真や図、動画を用いて説明できるようなコンテンツにしたいと考えた。

2. 授業実践

*目標

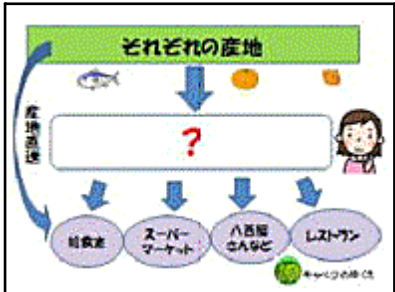
公設地方卸売市場の施設や、仕組み・働きなどについて知る。

*準備物

パソコン 大型テレビ ワークシート

尼崎市公設地方卸売市場のデジタルコンテンツ

*展開

学習活動	支援と留意点	評価
1. 各地方で作られた野菜や果物はどうやって自分達の食卓や給食にやってくるのかを考える。  図 2-1 コンテンツはじめのページ	・前時に学んだ、野菜や果物はいろいろな産地からわたしたちの食卓に集まってきていることを思い出せるようにする。	・野菜や果物がいろいろな産地からわたしたちの食卓に集まってきていることを理解できている。
尼崎市公設地方卸売市場について知ろう！		

2. 公設地方卸売市場の存在を知り、どのような施設があるのかを知る。

- ・大きな冷蔵庫
- ・バナナ倉庫
- ・食堂
- ・信用金庫
- ・卸売場

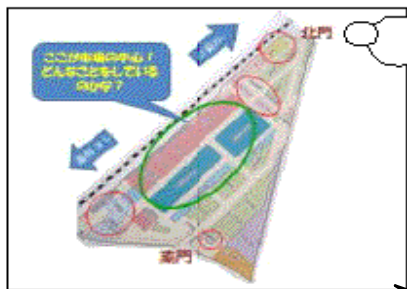


図2-2 卸売市場の地図

・それぞれの施設の利用方法を理解し、働いている人々にとって必要な施設であることを知ることができるようにする

・それぞれの施設の利用方法や必要性を理解することができる。



図2-3

円を押すと写真が出るよ！

3. 2枚の写真を見比べ、違う点を考える。



図2-4 比べる写真

・卸売業者と仲卸業者の仕事の内容の違いに気づくことができるようにする。

・2枚の写真比べ、相違点を考え、見つけることができる。

それぞれの場所を押すと、写真や動画を見ることができます。

4. 卸売市場の仕組み、働きについて理解する。

《3つの働き》

- ・品物を集める
- ・値段を決める
- ・品物をひつようなところへ

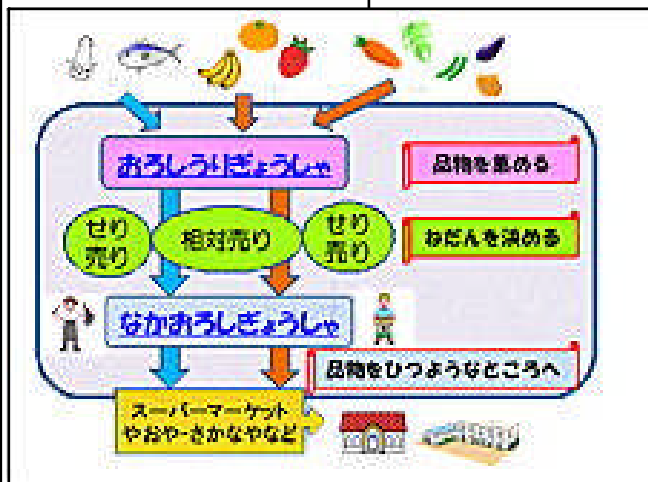


図2-5 ワークシートと同じ図



図2-6 画面をみて書き込む

・それぞれの働きについて、デジタルコンテンツなどを用い、視覚にうたえられるようにする。

・3つの働きについて理解し、卸売市場で働いている人たちの仕事や工夫していることに興味を持つことができる。

5. 今日の授業の振り返り、まとめ。

・わかったことや興味をもったこと、もっと知りたいことなどをワークシートに書かせる

・今日学習したことのまとめやさらに知りたいことを進んでワークシートに書くことができる。



図 2-7 ワークシートに書く

「卸売市場」を見学しているようなデジタルコンテンツにし、「わたあま」はまとめとして各自で最後に読むものとして使用した。学習の中心となるのは図2-8である。いろいろな品物が卸売市場に集まり、卸売業者→せり売り・相対売り→仲卸業者、そしてスーパーマーケットと流通していく様子を教師の説明に合わせて、文字を表示していった。そして、卸売・仲卸業者の店の写真やせり売りをしている動画をこの画面からリンクして見るようにした。



図2-8 学習の中心のスライド

また、理解を深めるためにこの図と同じワークシートを作成し、文字が出る場所と同じ所に書き込んでいけるよう工夫した。

3年生には卸売市場の仕組みを知ることは難しく、少しでも関心をもってこの図を見ることができるように、大型テレビで表示した卸売業者と仲卸業者の店の写真を比べ、違いを見つけて発表させた。一つの写真や図を学級で共有することにより、机の上の教科書や資料集を見るよりも、教師やほかの児童の顔や様子をしっかりと見ることができるので、子どもの思考や理解にはとても役立つと感じた。

3. コンテンツ評価

コンテンツについてのアンケート結果（3クラス91人）を図2-8に示す。いずれの結果も「そう思う」「少し思う」をあわせると90%を超え、高い評価であった。

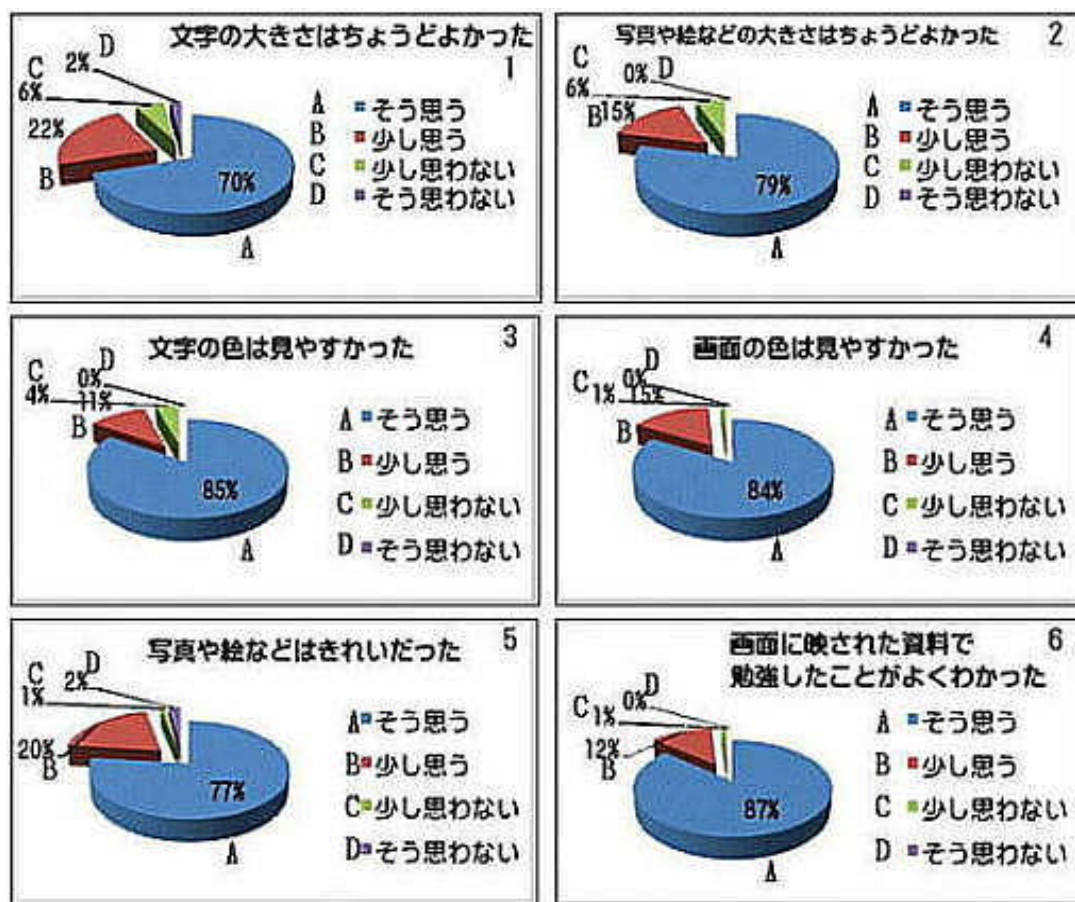


図2-9 3年生 アンケート結果

自由感想としては、次のようなことが回答されていた。○がプラス評価、●がマイナス評価である。

- 写真が多くて、「わたあま」よりわかりやすい。
- せりの様子が映像で見られてよくわかった。
- テレビを使って授業ができて楽しかった。
- 文字が小さいところがあって、少し見にくかった。
- 写真がもっと大きくてもいいな、と思った。

アンケート結果から、カラーで写真や図、動画を見ることにより、授業が理解できたという満足感が得られることがわかる。特に、「聞く」ことが大部分を占める内容であるため、最後まで興味をもって聞くことができるか、という不安があったがコンテンツが大きな働きをしたことがわかった。

しかし、卸売市場の働きをわかりやすくするために1枚のスライドにまとめたため(図2-8)文字が小さくなってしまい、後ろの方に座っている児童には見えにくくなってしまった。なるべくシンプルなるものを心がけたが、より精選した内容にすることが大事だと感じた。

4. 実践を振り返って

「尼崎公設地方卸売市場」を見学に行かなくても学習することができる内容のコンテンツを目指し、実践を行ってきた。幸いなことに、今年度の担任している学級に家が仲卸業を営んでいる児童がおり、写真を撮りに行ったり、せりの見学・撮影を行ったりすることがスムーズにできた。卸売市場はもちろん見学に行くことは可能であるが、本格的に動いている時間は午前1時～5時ごろのため、児童は「広い」「たくさん荷物がある」等の感想をもつことはできるが、仕事の内容や仕組みを理解するのは難しい。そのため、コンテンツを見てもらった先生方には「行くよりもよくわかった」という感想をいただくことができた。しかし、実際の施設を見学することも大切であり、「本物」と「写真」をうまく使っていくことでより理解が深まると感じた。

今回作成したコンテンツは児童の意見交換のきっかけや考えを深める手助けということよりも、新しい知識を得ることに重点を置いた内容だった。来年度より、新しい学習指導要領が完全実施され、学習する内容も増える。限られた時間の中で児童に実感を持たせ、知識を確実に増やしていくことに、今回のようなコンテンツも役だっていくのではないかと感じた。今後もさまざまな学習場面に対応したコンテンツを活用していきたい。

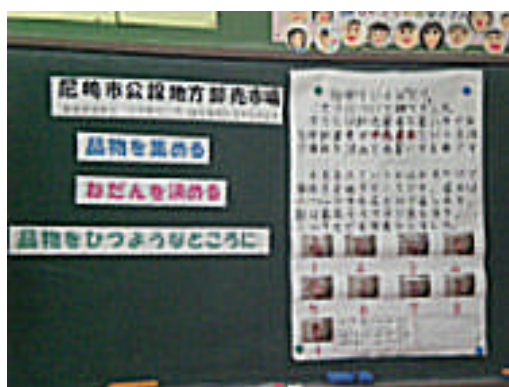


図2-10 板書の一部



コンテンツの最後のスライド

(3) 実践事例3

第3学年 社会科地域素材 単元「おいしい野菜を作る工夫はなあに」

○実践場面

農場見学前の課題作り

○作成・利用デジタルコンテンツ名

「おいしい野菜を作る工夫はなあに」(尼崎市で作られている農作物)

1. コンテンツ開発の意図

3年生「おいしい野菜を作るひみつはなあに」において、デジタルコンテンツを用いた授業を実践した。子どもたちは、スーパーマーケットの見学をしたとき、自分たちの住む尼崎で作られている野菜が売られていることを学習している。ここで作成したデジタルコンテンツは、家や学校の近くでつくられているほうれん草を中心とした農作物の生産に関心を持ち、調べてみようという意欲を持たせることをねらいとしている。

学習に当たっては、地域で生産活動をしている人々のようすを見学したり調査したりすることを重視する。ただし、すべての子がすべてのことを調べ上げるのは難しい。そこで見学、調査の補助的な役目としてデジタルコンテンツを用意する。このコンテンツは、図3-1のスライドがトップページである。そしてトップページからは、この単元で学べる教材のコンテンツにリンクしている。各コンテンツの内容は、尼崎市の農業の様子や農家の数をグラフで表したり、野菜の行方を簡単な図に表したりと、それぞれがデジタル教科書のイメージになるように作成した。ただしデジタルコンテンツを中心に授業を進めるのではなく、このデジタルコンテンツが子どもの思考の手助けとなれればと考えている。

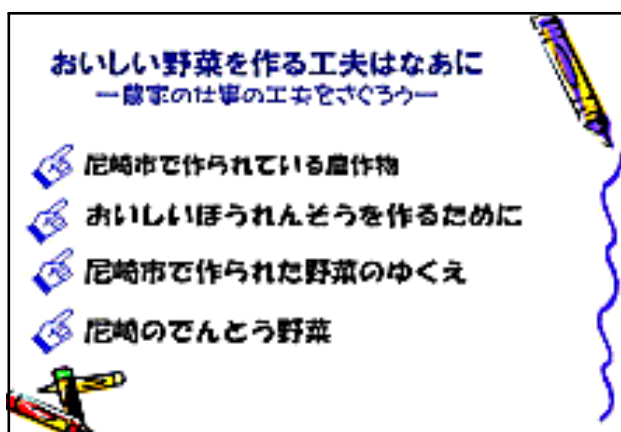


図3-1 コンテンツトップページ

2. 授業実践

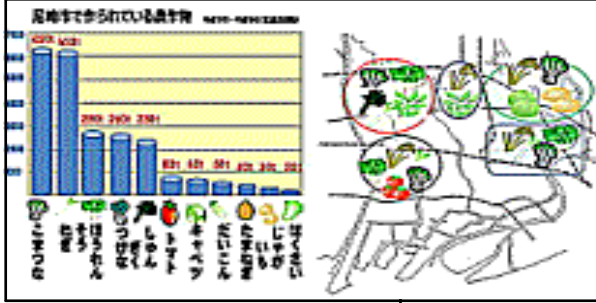
*目標

- ・尼崎市で生産している野菜について関心を持ち、これから調べていく疑問点を見つけてことができる

*準備物

パソコン 大型テレビ おいしい野菜を作る工夫はなあにのデジタルコンテンツ
ワークシート

＊展開

学 習 活 動 と 内 容	指導の留意点（教師の支援）	備 考（評 価）
1. 学習課題を確認する		
尼崎市の農家ではどんなものを作っているのだろう		
2. 尼崎市でつくられている農作物について話し合う ・米，こまつな，ねぎ，ほうれん草など ・尼崎市のどの辺りでどんなものを生産しているのだろう  図3-2 学校近くの畑	・畑に植わっているものを予想させ これからの学習に期待を持たせる ・尼崎市内にも農作物を作っているところがあることを気づかせるため，写真やグラフ，農業マップを提示する 学校の近くの畑では，何を作っているのだろう 	・尼崎市で生産されている農産物に関心を持ち，進んで話し合いに参加している （興味・関心・意欲）
 図3-3 尼崎市で作られている農作物	・グラフや農業マップを見て気がついたことを話し合わせる ・どんなささいなことでもいいので調べてみたいことが見つけれられるように励ます ・幾つか紹介し書き方がわからない	グラフや地図からわかることは何だろう  ・グラフや農業マップから尼崎市の農業の特色に気づくことができる （思考）
3. おいしい野菜を作る秘密についての工夫は何かを考え，プリントに書く（調べたいこと，知りたいこと等） ・野菜をどうやって作っているのかな ・たくさん作るために広い畑が		

あるのかな ・たくさん作るために機械を使っているのだろう ・おいしく作るために肥料をやっているのだろう ・水を毎日やっているのだろう ・雑草も一生懸命抜いているのだろう 4. 自分の調べたいことを発表し農家の見学に関心を持たせる	児童へのヒントとなるようにする ・子どもたちが抱いている疑問については「見て調べること」「聞いて調べること」に分けて整理する	・自分が調べたいことを整理し、まとめることができる（技能・表現）
---	---	--

デジタルコンテンツを使って学習するのは、学習活動「2 尼崎市でつくられている農作物について話し合う」場面である。ここで主になるコンテンツは図3-4と図3-5である。図3-4のグラフは、そのまま提示し、気がついたとを発表させることも可能であるが、今回の授業では、子どもたちにスーパーマーケットや八百屋でみつけた野菜や自分が知っている野菜から尼崎で作っている野菜を予想させるというクイズ形式で行った。子どもたちは自分が予想した野菜が、尼崎市でどのくらいつくられているのか、また第何位なのか興味を持って学習できたようだ。次に図3-5の地図を使い、尼崎市のどのあたりでつくられているか確認をした。大島小学校の近辺では、ほうれん草や小松菜、米などいろいろな物がつくられていることや市の北部でも農作物がたくさんつくられていることが理解できた。その時に使ったワークシートは図3-6である。これらのコンテンツを大型テレビに映し出すことで、また動きのあるコンテンツを使うことで、子どもの思考や表現に大いに役立つことがわかった。



図3-4 農作物のグラフ



図3-5 尼崎市の農業マップ

3年 組 名前()

1. 尼崎に住んでいる人、はどんな野菜を作っているのかな。

大根、白菜、もやし、かぼちゃ、うり
いんげん、もやし

2. グラフや地図マップを見て、気がついたことを書こう。

あまりナスはあまり少ない
と思っていたけど思っていたよりも
とても多くて、こまつなが一番多かった
野菜を作っているところはだいたいかたまり
で作っていた。北のおかきのほうが
しいほうで作っていた。お米としょうがも
同じかきだった。

3. 「やさしい」づくりについて調べたことは何かかな？

ほうれんそうはビニールハウ
スを使ったほうがそだちやす
いのが使わないほうがそだちや
すいのな

4. 今日の学習でわかったことをまとめてみよう

やさしいの中でどれが一番多く育つ
かわかったり、やさしいはここ
育つのかかわかった。

図3-6 授業で使ったワークシート

3. コンテンツ評価

コンテンツについてのアンケート結果（4クラス 計98人）を図3-7に示す。

いずれの結果も「そう思う」「少し思う」をあわせると90%を超え、高い評価であった。ただ、文字の色、画面の色については8%、7%が「少し思わない」であった。タイトル文字を濃い色にする、囲み線を太くする、イラストを見やすい色づかいにするなどの工夫が必要である。

自由感想としては、次のようなことが回答されていた。○がプラス評価、●がマイナス評価である。

- グラフが動いてわかりやすかった。
- 写真があって、「わたあま」よりわかりやすい。
- グラフが詳しくてよかった。
- グラフがあると尼崎市でどの野菜がどれくらいとれるかわかってよかった。
- グラフや地図で勉強できて楽しかった。
- グラフの野菜の絵を大きくしてほしい。
- 画面が光って、少し見えにくかったのが残念だ。

アンケート結果や子どもたちの感想から、グラフや地図は思考力を高めるために有

効であることがわかる。また、グラフなどを動きのあるコンテンツにすることで、子どもたちが興味や関心を持って授業に取り組めることがわかった。その上、大型テレビに映すことで資料が大きく提示でき、子どもたちの思考や理解に役立つことがわかった。

しかし、グラフを表示するスライドは、1ページの中に、数字、文字、絵などの情報量が多すぎたため、見にくくなった。野菜の名前だけにするか絵だけにするなど、シンプルなグラフにすることが大切である。また、画面が光って見えにくいという意見もあった。このことから、カーテンやテレビの位置などの配慮が必要であると感じた。

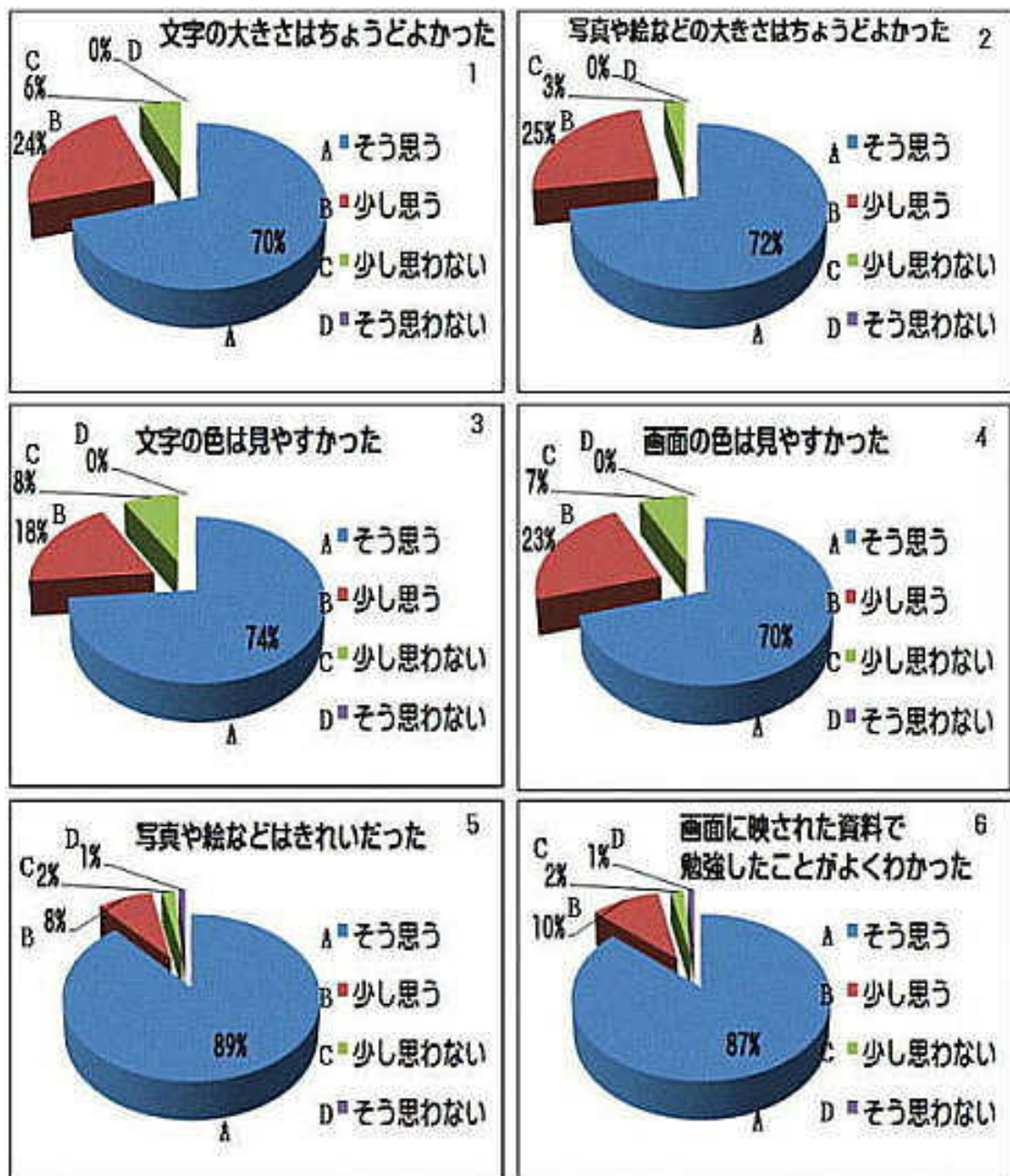


図3-7 3年生アンケート結果

4. 実践を振り返って

今回は、「おいしい野菜を作るひみつはなあに」の導入の場面を中心にコンテンツを作成し実践を行ってきた。授業の最初に尼崎市で作られた野菜を見せることで、「尼崎市で作った野菜がスーパーマーケットや八百屋に売っているんだ。」と興味を持って、この授業に取り組むことができた。そこからクイズ形式で、尼崎市内で作られている野菜を知り、また、自分たちの家や学校の近くで実際に作っている農家があることを知ることで、これからの学習に興味を持つことができた。授業の後半では、この時間で学んだことをもとに、ほうれん草を作っている農家に聞いてみたいことが数多く出てきた。この後、実際に農家の人に聞き取りをしたり、近所の田や畑を見学したりすることで、自分たちの住んでいる地域の産業に関心を持って学習できると考える。

実践事例3でのデジタルコンテンツは、農地等を見学できない場合でも利用できるよう、教科書や副教材である「わたしたちの尼崎」を補助する形で作成した。例えば図3-9のコンテンツである。農家で作った野菜がどのような流れで、私たちの家庭へ運ばれるのか、アニメーションを利用した図で表している。また、現在各学校に導入されている社会科デジタル掛け図も、地域を学習する上で大いに役立つと思うので、今後は、自作コンテンツに社会科デジタル掛け図を組み合わせた実践を進めていきたい。



図3-8 授業のようす



図3-9 とれた野菜のゆくえ

(4) 実践事例4

第4学年 社会科地域教材 単元「私たちの市と県」

○実践場面

兵庫県の概要を学習

○作成・利用デジタルコンテンツ名

「兵庫県と尼崎の位置，子午線，5地域」「八方位」

1. コンテンツ開発の意図

本単元は小学校指導要領の内容に見られる，

(6) 県(都，道，府)の様子について，次のことを資料を活用したり白地図にまとめたりして調べ，県(都，道，府)の特色を考えるようにする。

ア 県(都，道，府)内における自分たちの市(区，町，村)の地理的位置

イ 県(都，道，府)全体の地形や主な産業の概要，交通網の様子や主な都市の位置

ウ 産業や地形条件から見て県(都，道，府)内の特色ある地域の人々の生活

エ 人々の生活や産業と国内の他地域や外国とのかかわり

という件を地域教材として網羅している。児童は，この単元で初めて県を単位とした規模の視野で学習を進めていくことになる。

これまで児童は，自分の生活圏内での身近なことから，自らを取り巻く社会とは如何なる仕組みであるかを学習してきた。従って児童が，学習をするにあたり以下の点がこれまでと異なってくる。第一に分布的な見方が要求されること。第二に体験から離れた学習が多くなること。それに伴い第三には，図表を中心とした学習が多くなることである。

第一においては，児童も第4学年になるとほかの市町村へ出かけた経験の積み重ねがかなりの数になると予想できる。しかし，出かけた場所がどこにあるのかを地図上で説明することはできず，またどの方角にあるかという見方・捉え方もできない。即ち出かけた経験に基づく場所の理解は，点での理解でしかなく，分布的に把握していない。

第二においては，県単位の学習では共通の体験をしにくい。県の広さ，地図での特徴等何れも県の概要を総括的に知ろうとするならば，直接的体験よりは情報媒体から情報を得るしかない。よって，児童が全体で共通した体験に基づくものではなく，他の情報媒体から情報を得ることになる。

第三においては，これら情報媒体として児童に与えられるものは，教科書，地図帳等の紙媒体と，コンピュータによる電磁媒体になる。情報の内容は，ほとんどの児童にとって未知のものである。また，地図や図表も多く，これらを読み解く能力が必要不可欠である。更には，難語の類も多く存在し既出の事柄が少なくなってくる。

本単元を学習していく上で地図を読む能力は不可欠であり，更には図・表を読み解く能力も必要にさらされる。よってその指導の為に児童が行う活動として，地図を読み取る活動（地図帳の利用）と，連動した白地図に書き込む活動（白地図の利用）を取り入れた。

これらの児童の活動を支援する為にデジタルコンテンツを使用する。よって次の点

に留意した。まず、地図上の情報量を最小限にすること。（地図帳と白地図の間くらいの情報量）色、大きさ等の変化により、地図に動きをもたせること。（視覚からの支援）その上で本時の授業で新しい知識を獲得したことの喜びを感じてほしい。（新しい知識を獲得したことを喜べる授業）

一方で、授業者が本単元を構築するに当たって、臨機に使えるよう配慮した。つまり、指導者にとって如何に使い勝手がいいかということである。1時間の授業そのものを支配するような内容ではなく、ある一部分について使用の可否が選択できるようにすることで、コンテンツそのものに幅ができることであろう。今後訪れる教育の情報化に際し、現段階で如何に向き合い試行錯誤していくかの一実験として本コンテンツを評価していくとともに、デジタルコンテンツのフレキシビリティを高めていきたい。

2. 授業実践

＊本時の目標

- ・県内の他の地域や、県全体の様子に関心を持つ。
- ・兵庫県の白地図に工夫して書き込むことができる。
- ・東西南北に北東、北西、南東、南西を加えた八方位がわかる。
- ・兵庫県の位置、尼崎市の位置、子午線や兵庫県の地域のことがわかる。

＊準備物

兵庫県拡大白地図 ワークシート（兵庫県の白地図、八方位）

兵庫県と尼崎の位置・子午線・5地域、八方位のデジタルコンテンツ

＊展開（指導の留意点の「※」はコンテンツ活用場面）

学習活動と内容	指導の留意点（教師の支援）	備考（評価）
1. 「私たちの尼崎」185 ページを音読する。	・兵庫県についてあまり紹介できないことを知る。 ・無理に発表させない。	
2. 本時の課題を確認する。	兵庫県の特長を知ろう。	
3. 地図帳とデジタルコンテンツを見ながら兵庫県がどこにあるのかを話し合う。	・先に地図帳で探させる。 ※日本地図の中で兵庫県が変色し、位置が分かるよう図示する。	・地図帳の日本地図の中で兵庫県の指示できる。 ・白地図に書き込むことができる。
4. 地図帳とデジタルコンテンツを見ながら尼崎市がどこにあるのかを話し合う。	・先に地図帳で探させる。 ※兵庫県の中で尼崎市が変色し位置が分かるよう図示する。 ・兵庫県の白地図に彩色させる。	・地図帳の兵庫県地図の中で尼崎市が指示できる。 ・白地図に書き込むことができる。

5. 八方位について学習し、 尼崎市が兵庫県の中でどの 方位にあるかを知る。	※八方位を図示する。 ・ 東西南北四方位を基本と して考えさせる。 ・ 八方位ワークシートを兵 庫県の地図の真ん中に置か せる	・ ワークシートに書き込む ことができる。 ・ 八方位が指示できる。
6. 子午線について知る。	※兵庫県の地図で図示する。	・ 白地図に書き込むことが できる。
7. 兵庫県が5地域に分か れることを知り、次時の活 動を知る。	※兵庫県の地図で図示する。 ・ 5地域は更に10地区に分 かれることを示し、次時 からは各地区について詳し く学習することを予告する。	

本時の授業でデジタルコンテンツを見る場面は、日本の中で兵庫県がどこにあるかを確認するところ、兵庫県の中でどこに尼崎市があるかを確認するところ、八方位を学習するところ、子午線を学習するところ、兵庫県が5地域に分かれることを学習するところである。

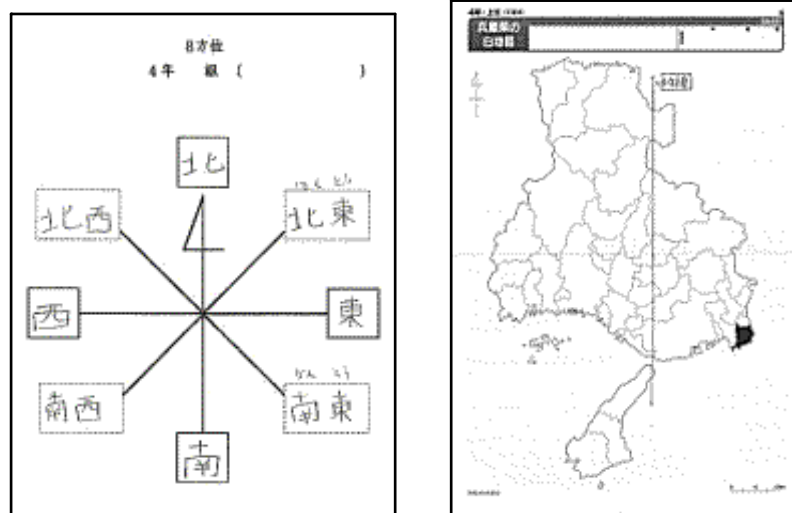
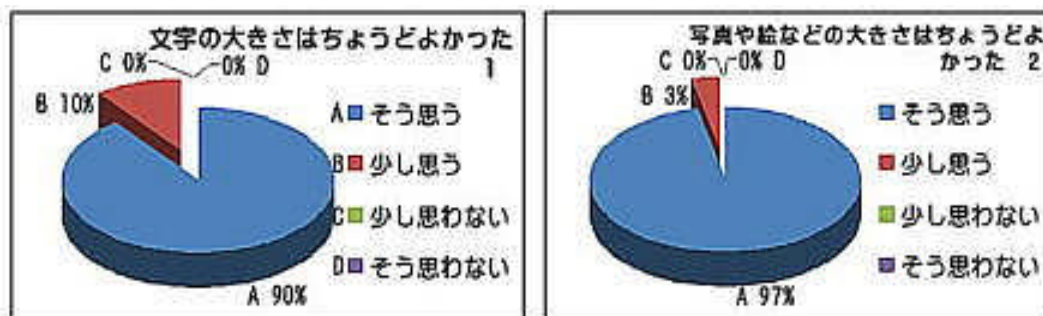


図4-1 授業で用いたワークシートと白地図

3. コンテンツ評価

児童に対して行ったアンケート結果（1クラス 計29名）は以下の通りである。



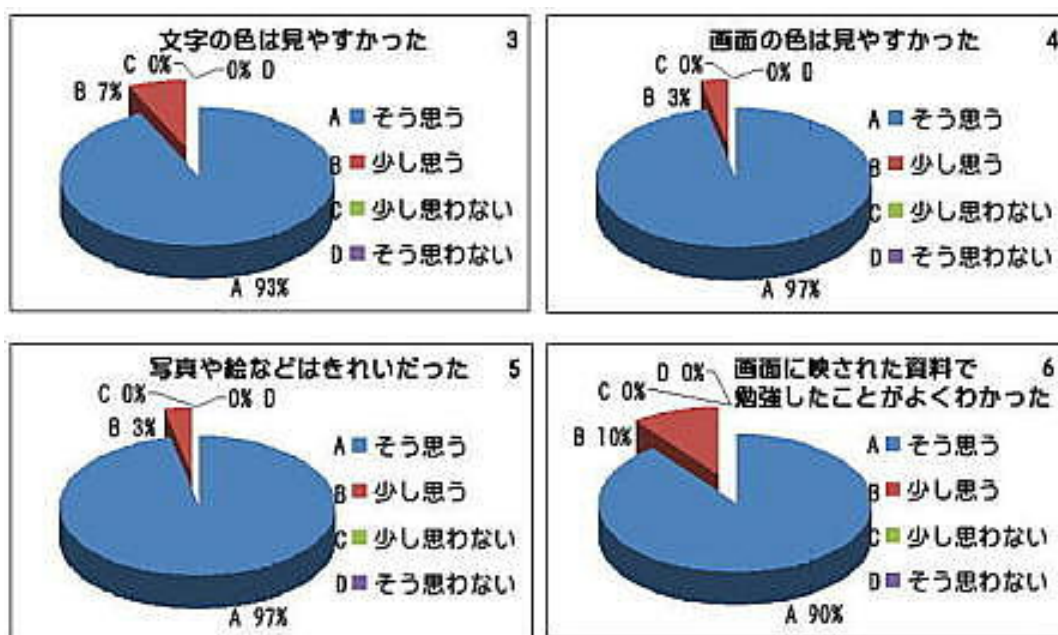


図 4-2 第 4 学年 4 組 アンケート結果

アンケート結果が 1 学級の児童数 29 人のみとなり、分母があまりに少ないことから信憑性の低さは否めないが、本学級におけるアンケート結果は「少し思わない」「そう思わない」が 0% であり、数値的には好評価であったといえる。しかし、この評価をこのまま捉えるのには疑問が残る。

実は、私は過去に当該学年の学級担任経験があり、本授業における児童の中にも、およそ 5 分の 1 が担任したことのある児童であった。また、他の児童も私のことはよく知っている。これらが総合的に何らかのアドバンテージを与えたのではないのかという懸念がある。と言うのも、今回の授業の構成はその根源で児童の興味・関心を惹くようなものではなかったのかという反省があるからだ。推論に推論を重ねても結論は出ないが、そうでなければ、デジタルコンテンツの使用によって、授業の稚拙さが、ある程度カバーできるのかという疑問が生じてしまわないだろうか。

これに対してある結論の一助たりえるのが以下の自由感想である。まず、デジタルコンテンツに関する評価が見られるものは以下の通りである。

○あれ (TV&PC) をつかったら、赤いところがだんだん見えてきてわかりやすかった。

○尼崎市や兵庫県等に赤く色がついたりして見やすかった。

○5つの地方が色分けされていてわかりやすかった。

地図において児童に注目させたい場所が彩色されたり、ズームしたりすることで、地図に変化が現れる。即ち、元来静止画である地図が彩色程度とはいえ動画化することは、児童にとって印象のあるものであり、端的に記憶に残ったのではないか。情報量をあえて削減することと、動画化することは有効であると判断できる。

また、

○兵庫県は瀬戸内海と日本海につながっているのは、兵庫県だけなのがあった。

○兵庫県のどこに尼崎市があるのかとかがよくわかった。

という感想が見られた。このように「～がよくわかった」とする旨の記述は多く見られた。これらの文章からは、児童にとって「わかったこと」がデジタルコンテンツの効果でよくわかったのか、授業の内容としてよくわかったのかが判断しかねる。しかし、本時の授業で初めて知ったことに対し、児童が喜んでいる様を感じることはできた。

4. 実践を振り返って

本時に用いたデジタルコンテンツについての反省点は、以下の通りである。

- ・コンテンツで使う地図は、児童が使う副教材と同じものがよい。
- ・兵庫県の地図は、隣県も入れた方がよい。
- ・日本地図が傾いていた。

地図をデジタルコンテンツ化するにあたり、著作権フリーの白地図をベースに作成したのだが、児童が持つ白地図とのずれがあった。デジタルコンテンツを書き込むための支援として用いるならば、児童の持つ、白地図と同じものであったほうがよい。また、日本地図も最大拡大で画面に全域を収めようとするあまり、傾けて表示したため、真上が真北にならず、方位を学習した本時には不向きなものとなってしまった。この2点により、子午線が傾いたり、ずれてしまったりした。板書に白地図も用いていたため、二つの基準が存在し、児童を混乱させてしまった。

また、日本と兵庫県の間として兵庫県の隣県を入れた地図をいれるほうが分かりやすいだろう。

今回のデジタルコンテンツが、「地図」と「八方位」という単純なものであったため、それなりのフレキシビリティは確保できた。一方で、フレキシビリティの高いデジタルコンテンツほど授業者の授業力が問われるという結果となった。今回の授業にあたり、作成者であるはずの授業者がデジタルコンテンツを使いこなせていなかった点は否めない。即ち効果的な見せ方、使い方という授業の技術が授業者に必要であり、デジタルコンテンツの目的に合わせ討議しなければいけない課題である。

また、指導計画にも問題があった。本授業がコンテンツを基に、教えるという側面が強く、児童の課題作りを軽視したものであったことが、結果として思考の場面の減少につながり、社会科としての興味・関心を惹きだし切れていなかった。同じデジタルコンテンツを用いて、更なる授業設計を検討していかなければならない。

とは言え、児童の新しい知識を得たことに対しての喜びがあり、デジタルコンテンツがその一助たり得たことは実証できたと思う。今後は、デジタルコンテンツそのものの開発・検討のみならず、それらを活用していく上での単元設計等も検討していきたい。

4 デジタルコンテンツの評価と考察

実践事例4のコンテンツの一つは、日本の中での尼崎の位置を理解させるため、副教材「わたあま」における地図データを日本全土の白地図から兵庫県、そして尼崎市へと、色と効果的な拡大表示という、単純な表示方法で作成した。兵庫県の各地域に関しては、はっきりした色分けと動的に分割した表示により、わかりやすいものとなった。そして、4方位と8方位を理解させるコンテンツについても、「児童の発言に合わせて8方位のどれからでも表示できる」工夫はしてあるが、補色（白のバックに黒の使用）にすることで、とても単純な表示にした。これらは、実践事例4のコンテンツ評価結果においては、最も調査人数が少ないものの全項目で100%の児童がプラス評価をしていることから、高く評価できる。

実践事例1のコンテンツにおいては、「わたあま」における写真データを効果的に並べ表示するという、これも単純な方法で作成したものとなった。技術的に工夫を加えたのが「児童の発言に合わせて写真を自由に拡大表示できる」部分である。写真が主体となり文字情報が少ないこのコンテンツも、すべての項目において評価が高い。視覚情報を感覚的につかめるものばかりにする利点が生かされたように考える。ただ実践事例1の評価結果における「写真や絵などの大きさ」や「画面の色」の若干のマイナス評価については、もともと解像度が低い写真を、さらに大きく見せるために拡大したことにより、内容の細部について鮮明でない部分が画面に近い児童と遠い児童の見え方の差につながったと思われる。このことから、写真は拡大してもある程度鮮明に見える解像度のものを利用する方が良いことがわかる。

実践事例2のコンテンツにおいては、評価結果としては高いが、事例1・4のコンテンツより全体の情報量がかなり多く、スライドによっては、難しい内容をできるだけわかりやすく表現したため、若干、文字や絵の情報が小さめで、児童の座席位置によっては見にくいところがあったと思われる。しかし、「わたあま」の情報ではわからない、商品の段ボールに書かれた産地や商品名、商品の並べ方、また、たとえ見学に行ったとしても見ることでできない、競り売り（動画）、相対売り（静止画）の様子など、現地事前調査によって得ることができた貴重なデータにより、児童の理解の大きな助けになったことは実践事例2における「勉強したことがよくわかったか」の評価結果である99%のプラス評価からも、自由記述の感想からも明らかである。

実践事例3のコンテンツは、すべて90%以上の高い評価を得ているものの、今回作成した中では最も低い評価であった。「文字の大きさ」「文字の色」「画面の色」に関して、「少し思わない」というマイナス評価が6～8%あった。特にグラフページでは、児童の興味・関心を引きつけるよう動きを持たせ、児童の発言に合わせて、どの作物からでも表示ができるよう工夫したが、情報量が多く、50インチ大型テレビでも一つ一つが小さな表示になってしまった。その上、作物のイラストのうち、ねぎ、ほうれん草、だいこんの白い部分がはっきりせず見にくかったようだ。自由記述の感想では、グラフについてプラス評価だけでなく、マイナスの評価があることからわかる。このように、小さく色がはっきりしないイラスト等は、輪郭をはっきりさせる工夫が必要であった。その方法として考えられることは、イラストそのものを再編集し、輪郭を太くはっきりさせることや、バック

に色を付け白い部分をはっきりさせることである。

以上、4つの実践事例について考察してきたが、使い方が簡単で、授業設計における使い方の自由度も高く、どの教室にもある50インチテレビを利用して効果的に授業が行えるようなデジタルコンテンツの条件として、概ね次の7点が明らかになった。

- ・ 1枚のスライドに表示する情報を精選する。
- ・ 絵や写真は大きく、文字は大きく太く表示する。(文字は24ポイント以上太字)
- ・ 小さめのイラスト等は輪郭をはっきりさせる。
- ・ スライドのバックと文字や絵の色合いに気をつける。
- ・ 注目させたい部分は拡大表示したり、動きを持たせたりする。
- ・ 写真はできるだけ鮮明なものを利用する。
- ・ 順番が固定された表示ではなく、どれからクリックしてもいいようにする。

5 おわりに

今年度は一人でも多くの教員に実際の授業で使ってもらえるようなデジタルコンテンツを開発するため、作成したデジタルコンテンツを使った実践授業に加え、児童のコンテンツ評価という新しい視点を取り入れた。これは実際に授業を受けた側の素直な意見を生かすための貴重なデータとなった。もちろん、授業設計の善し悪しや授業技術にも左右されるところはあるが、今回実施した授業においては、作成したコンテンツ利用が「効果的」だったことは評価結果が表している。しかも、どの実践例も指導者が担任する学級ではなく、担当する学年でもない、いわゆる「飛び込み」の授業で、担任ほどの関わりのない学級での実践授業であったことは、「使いやすいコンテンツ」という評価にも値するのではないだろうか。

しかし、授業者が単元全体を通して指導するというものではなかったということも併せて考えると、当該校の校長先生はじめ、該当学年の先生方の理解と協力がなければ、本研究は実施できていない。よって、本研究に協力くださった方々にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

ICT環境が整いつつある中、本市でも、身近なデジタル素材を活用し、デジタルコンテンツを自作する教員が増えているように感じる。それらは共有できるようになると、市としての大きな財産にもなる。本部会の研究成果が、少しでも有効な財産の構築に役立つことを願いたい。

(参考文献)

- ・ 技術科教育におけるデジタルコンテンツに対する教材評価尺度の構成
兵庫教育大学大学院 市原靖士氏・森山潤氏・松浦正史氏 (Web公開)

(参考資料) 作成したデジタルコンテンツ

(1) 実践事例1

○「何のためにあるのかな？」

森なが工場にある
いろいろなしせつを
見てみよう！



食堂 (しょくどう)



医務室 (いむしつ)



売店 (ばいてん)



テニスコート
卓球場 (たつきゅうじょう)



消防車 (しょうぼうしゃ)



グラウンド

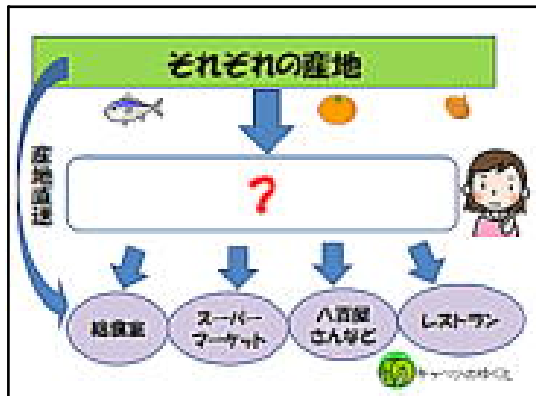


ゴルフの練習場
(れんしゅうじょう)



(2) 実践事例2

○「尼崎市公設地方卸売市場について知ろう！」(主となるものの抜粋)

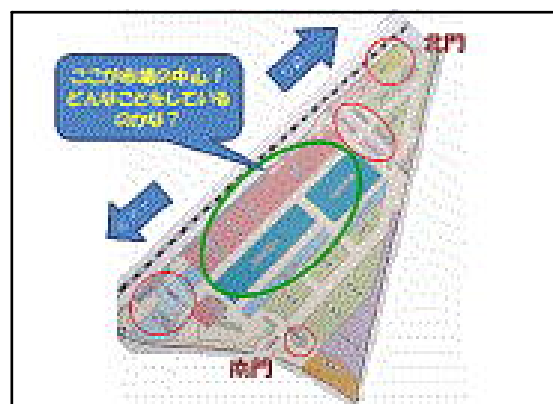


どんなことをする場所なのかな?

尼崎市公設地方卸売市場

(あまがさきしこうせつちほうおろしうりしじょう)

写真や地図で勉強して、こう!



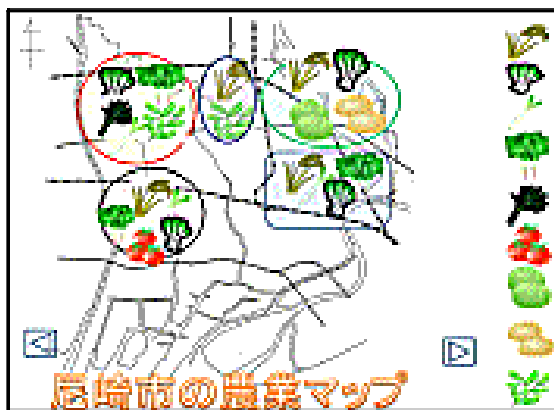
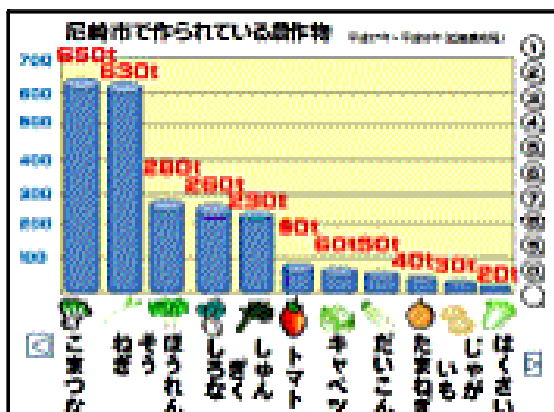
分かったこと、きょうみをもったこと、もっと知りたいと思ったことなど、たくさん書いてね!

?をおすと、もっとわしいことがわかるかも!!

おろしうり市場のこと、わかったかな?

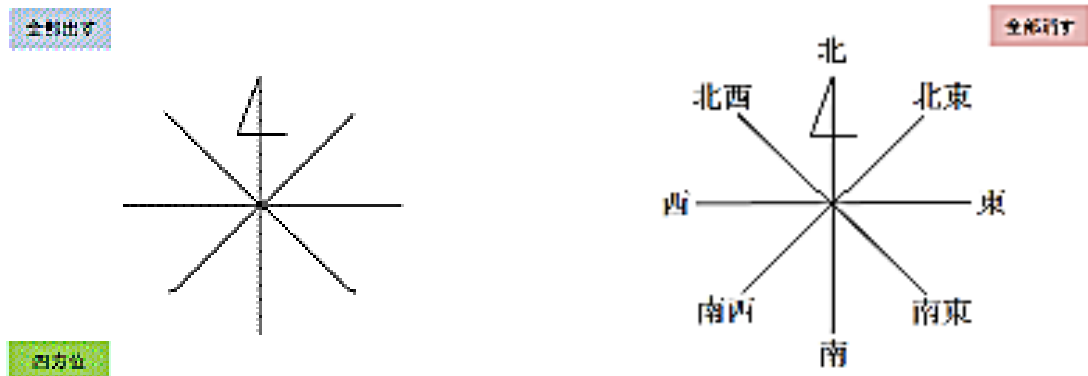
(3) 実践事例3

○「おいしい野菜をつくるひみつはなかに」

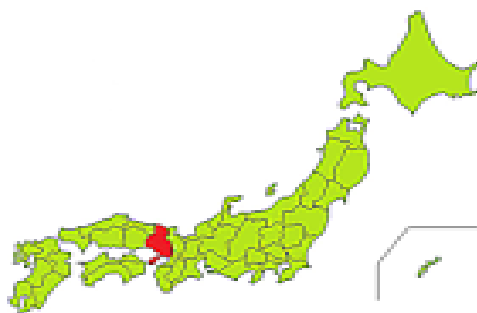


(4) 実践事例4

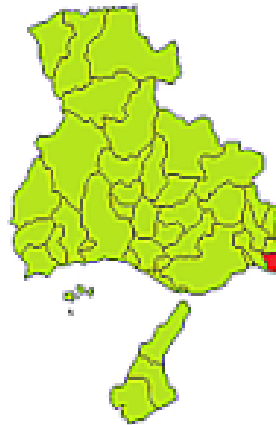
○「八方位」



○「兵庫県の位置」



○「尼崎市の位置」



○「子午線」



○「兵庫県の5地域」

